
蒼天の真竜

逢河 奏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天の真竜

【Nコード】

N6335J

【作者名】

逢河 奏

【あらすじ】

ある時ある森の中で。

出逢ったのは意味を見出だせない鍛冶師見習いと、孤独過ぎて何もわからないまっさらな少年だった。

それから四年後くらいのこと。

自称ドラゴンな少年シンは、家の前で暴れる小さな狼少年を見かける。家を守るため戦おうとするシンの前に立ちはだかるのは、その家の主にして間の抜けた鍛冶師の青年。

「……何？」

「空気読めええええ！」

そして動き出す物語。

それはホームコメディ？ 未来ファンタジー？ それとも自分探しの大冒険？

さてここに始まるのはそんな闇鍋みたいに目的の読めない見えないそんな話。

守りたかったり大切なんだと叫んでみたり、泣いて喚いて果ては拐われちゃったり。ドタバタ右往左往する彼らはそれでも何かのために泣いて笑って戦って。一生懸命生きている。

これはそんな頑張ってる人達のお話。

000 森の中で【紫蘭】（前書き）

興味を持って下さり、ありがとうございます。これは逢河奏という名前で初めて書いた話です。四話までで一区切りになるので折角ならそこまでは読んで欲しかったりします。拙い部分ばかりですが、良かったらお付き合い下さい。

タイトルは読み方はちゃんと決まっていますが、出来たら『蒼天の真竜』の真竜はドラゴンと読んで欲しかったり……。ネーミングセンスなくてすいません。中身くらいはまともになるよう努力するのでよろしく願います。

では二人の出会いの場面を序章として、物語を始めましょうか。

000 森の中で【紫蘭】

俺は不思議な気持ちだった。

人のあまり踏み込まないような薄暗い、森の中。か細い木漏れ日がそこに踞る少年をぼんやりと、どこか幻想的に浮かび上がらせていた。

本来こんな森の中に、人間が居るはずもないのに、不思議と彼には違和感がなかった。まるで森の一部のようだった。

だからだろう。

現実味や、人間らしさに欠けたその場面を見下ろしていた俺は、気が付けば問いを発していた。

「お前は人か？」

その声で漸く気付いたように、少年は顔を上げ、俺を見た。

赤い、褐色の光。

薄暗くて髪色も黒っぽいとしか判別出来ないのに、その強い光を湛えた瞳の色ははっきりと見えた。

「……ひい、とか……？」

驚いたことに返って来た声は下手くそだった。まるでしゃべり方を忘れたみたいで、妙に揺れたすっとんきょうな声だった。

俺は戸惑い、半ば思い付きで言葉を選択する。

「では獣か？ 森に暮らす者か？」

紅玉の瞳は揺れながらも、真っ直ぐに俺に向いていた。

「……もり、に、いる」

拙い発音。外見は同じくらいにしか見えないというのに、あまりに大きな差が間にあった。もしかや会話をしたことがない……？ そんな馬鹿な。しかし……森に棲んでいたと言っのなら、有り得る、のか？

「でも、人だろう？ それとも本当に獣なのか？ ……人間の変異種、だとも言うのか？」

俺もどうして良いか、わからなかった。ただ、この不思議な少年が一体何者なのか。己が始め気紛れに投げ掛けた問いが、その答えが、今は無性に気になっていた。

しかし少年は首を傾げた。

「おまえの、ゆう、ヒトか、ケモノって、なんだ？」

そう言われてみて、改めて思う。人と獣の定義は何か。そう言えばあまり考えていなかった。その境目とは何だろう。何が両者を隔てるのだろうか。

暫く黙考した結論。それを訥々と口にする。

「人とは……面倒な感情を持ち、面倒ことをする。気紛れで、難解なようで実は単純な生き物、かな」

「ケモノ、は？」

「獣は、正しい答えを本能が知り、感情を制し、正しいを実践する。賢く、誇り高き生き物だな」

俺は俺の持つ知識から、そう考える。

そう付け足すように言った。ただ、言い切ってから不安になった。

果たして俺の選んだ言葉は正しかったのか。そして正しく伝えることが出来たのだろうか。

正解なんてない問題に、そんな意味のない不安を覚えた。

しかし少年は先程までの反応とは異なった、難しいことを考えるように眉間に皺を寄せるといふことをしているのが、何となくわかった。暗くてあまりよく見えないから気配で、という不確かなものだが……。

伝わったようだ。とりあえず伝わってはいる。喋ることは上手く出来なくとも、言葉を理解することは出来るようだ。

少年は考え込むように俯いていた顔を上げた。それは困ったような途方に暮れた顔。

「お、まえは、なんだ？」

「……俺か？ 俺は、人だろうな。お前はどうかんだ？」

「……オレ、は……オレはっ、し、らないっ」

意地になったように歯を剥き出して彼は答えた。怒っているように見えるが、寂しそうにも見えた。

そこで漸く気が付いた。

今更過ぎることだが、でも自分でも驚く程唐突に理解した。何故だろう。薄暗かったのもあるが……動揺、だろう。こんなところで誰かと出会うなんてイレギュラー過ぎる。でもそれには理由があったのだ。

彼は足を怪我していた。

それはそうだ。足を抱えて踞っているのだ。普通に考えれば怪我を負っているから、だろう。なのに今の今まで気付かなかった自分の鈍感さに、観察力のなさに、呆れてしまう。

暗さに慣れた目でよくよく見れば、その足が微かに奇妙な方向を向いていることがわかる。折れているのだろうか。しかしその割りに、目の前の少年は泰然としていた。

ふと、思い出す。そう言えば簡易医療キットを持っていたなど。
出掛けに母に押し付けられたものだ。せめてこれくらいは持って
行きなさい、と。偶然の巡り合わせかね。

少し面白く思い、一人小さく笑った。

そして少年にまた視線を向けると、足を踏み出し、言葉を投げ掛
ける。

「さっき人は気紛れだと言ったよな」

「……ああ」

「だから俺も気紛れを起こすことにした」

「……？」

足取りも軽く、直ぐに少年の元まで下りていく。近くで見れば流
石にわかった。彼の額にうつすらと脂汗が滲んでいることが。

「怪我、見てやろう。簡単な処置なら俺にも出来る」

「……あ、んだ、それ？」

「要するに痛みを和らげてやるから大人しくしているということだ」

「……横暴、だな」
おーぼー

「勝手に言っている。俺も勝手にするから」

そう言っただけ俺は宣言通り無遠慮に手を伸ばした。反撃、反抗も覚
悟の上だったが、意外にも彼はあっさりと足に触れさせてくれた。
野生の獣は意地でも弱みを見せないと聞くんが、やはり彼は人間だか
らか。

本で得た知識を反芻しながら触診。ああやっぱり折れている。良
くもまあ平気な顔をして話せるものだ。逆に感心してしまう。

「なに、してる？」

「包帯を巻いて骨を固定、保護している。まあしばらくしたら外し

て良いぞ」

「……じゃま、だな」

不満気に口をへの字に曲げてみせるが、それでも包帯が巻き終わるまでじつと静かに見守っていた。

「よし。もう良いぞ」

「もおいしい？」

「でも三日くらいは我慢しろよ。骨がくっつけば好きにすればいいが」

「……みつか、てなんだ？」

「……日が三度昇ったってことだ。わかったか？」

「……わ、かったっ」

コクリと大真面目な顔して彼は頷いた。それに満足すると俺は立ち上がった。

「じゃあな」

挨拶はそこそこに、俺は足早に歩き出す。あまり遅くなると母が心配する。

しかし不意に、振り返りたい衝動に駆られた。そして俺はそれに素直に従った。

見えたのは、何かもの言いたげな、けれどその言葉を知らない哀しい少年がいた。

それにどうしても応えたくなくて、気が付けばこう言っていた。

「観月紫蘭^{みづきしらん}だ。俺の名前はシラン。……お前は？」

その瞳は、生き生きとした煌めきを取り戻したそれは、まるで暁

のように、俺には思えた。

「たつみ、しん、たろうっ」

懸命に己の名を告げる少年を見て、しんたろうってどんな字を書くのだろっと、惚けた考えが勝手に浮かんで来た。呼ぶなら、シン。

「シン、か」

無意識の内に呟いていた。うん、悪くない。妙にしっくりくる名前だ。

ふと少年を見る。彼は不思議そうに暁色の瞳を一杯に開いて俺を見ていた。口もぽかんと半開きの有り様だ。

俺はまた可笑しくなって喉の奥で笑うと、珍しく自分の願望を混ぜた言葉を投げ掛けた。

「またな、シン」

もしも再びがあるのなら、その時はあの答えを。
そんな栓のない考えを頭に過らせながら、俺は背を向け、歩き出した。

001 灰幕【真】（前書き）

まだ色々ちゃんと決めていないのに始めてしまいました。明らかな見切り発車ですが……一応大まかなストーリーは決まってるんでそれを突っ走ることとします。

というわけで、第一章の第一話が始まります。

001 灰幕【真】

「やーな天気」

オレは一人空を仰いで呟いた。

空はいつもの厚い厚い灰色雲。取り分け今日のは念入りに空を覆い、隙間一つない。いつものことだけど、オレの好きな青色は見れそつにない。やっぱり灰色なんて大嫌いだ。

そんなことを考えながら、オレは恨めしげな目を空に向けていた。

「おいおい、仕事してくれよ」

軽く呆れたような声が背に掛かり、オレは振り返る。

「おーよ」

「あんた、大丈夫なのか？ 何事もなく向こうまで行けるよなあ？」

「さあなっ」

依頼人の男の座る馬車の幌に、ひょいとひとつ飛びにオレは乗った。男は心配するような台詞の割りに飄々とした顔でオレの動きを追っていた。

「何が起こるか、何が出来るかなんて、オレに知りようないからな」

「そりゃそつだ」

「ま、でも全力尽くして守るから、任しとけおっちゃん！」

無駄に自信に満ちた笑みをにつ、と向けると依頼人の男もふつ、と余計に力の抜けた、柔らかな笑みを浮かべると言った。

「頼りにしてるぞ」
「おおよっ」

そうして荷馬車は走り出した。
ガタゴトと馬車を牽く馬は、異様な逞しさと小さな黒い角を額に持ち。

馬車の荷台には簡素な木箱に詰め込まれた野菜が山になり。
見える景色は、後ろには街、脇にはまっさらな草原、遠くに森、その奥には山があり、ぼんやりと臨むことが出来た。そして馬車は踏み固められた道を、唯一道と呼べる一本の線を迷うことなく突っ走っていた。

ここは日本と呼ばれた島。今は孤島と呼んだ方が正しいだろう。
異常気象に天変地異。それにより世界がバラバラになり、政府はバラバラになった。日本は西と東に真つ二つなんていう有り得ないようなことになっている。

生態系はわけのわからない方向に突っ走りだし、気象はもはや神のみぞ知るものとなった。

無秩序が秩序となった世界にある元日本というちっぽけな島。そこに生きる人々は遅く、新しい秩序を積み上げることによって生きていた。

しかし、そんな話を人事のようにには知っているけれど、正直言って今あるものがオレ達の現実で、昔がどうだってことはどうでも良かった。ただオレ達は変わった世界で強く生きていくだけ。それだけのことだ、とオレは思っている。

分厚い灰色の雲の下、馬の牽く荷馬車は順調に街道を進んでいた。しかし、やはり役目を果たすことなく仕事を終えることは許してもらえないようだ。このままなら行けるかも、という考えが頭に過っ

た頃、それはやって来た。

「おっちゃん、スピード上げれる?」

「何か、来たのか?」

出発前の声音とはがらりと変わった、緊張感に強張った声が聞き返してくる。

「おうよ。来ちゃってるなこりゃ……鹿臭い」

「兄ちゃん、大丈夫なのか?」

「まだ少ない。それで遠いし……馬の脚次第、だなあ」

「おっし、そんなら話は早い」

そう言うつと男は脇に置いていたケースを手に取り、そこから目当てのものを取り出した。

「……ししゃも?」

「気にすん、なっ!」

と声と共に男は手にした小魚を放り投げた。それは綺麗な放物線を描き、上手い具合に馬の眼前に躍り出て。

パクつ。

と食べられた。

「いっちょ頼むぞ、ツオン」

「ヒヒンッ」

ツオンと呼ばれた小魚を食べる奇妙な馬は、一声鳴くと大袈裟な程の身震いをブルルとした。そして用意は出来たとばかりにダンツと地面を鳴らすと。

「ツオンッ！」

と奇妙な鳴き声を放ち、唐突に凄まじい勢いで走り出したのだ。

「う、うえええ！？」

なんだなんだなんだ！？ これ馬か！？ あ、いや変異種なんだろうけど……でもやつぱりこれ本当に馬なのか！？

そんなことを思ってしまうほど強引に、ガツツータ、ガツツータ、という何だか半ば浮くようなスピードで馬車は引かれていく。

「な、な、なんだこの馬は！」

「ツオンだよ。『ツオン』って鳴くから」

「やつぱそこが由来なのか！」

この今にも振り落とされそうな振動の中、慣れているのかおつちやんは涼しい顔。でもオレは当然慣れていないから意味もなくあたふたとする。気を抜くと舌噛みそー。

そんなことを考えていたらふと小さな疑問が沸き上がり、あまり考えずに口にする。

「おつちやんさあ、ツオンさえいりゃ護衛なんていらねえんじゃないの？」

「ああ？ 馬鹿言ってるじゃねえ。敵がかなり近付いて来ないと俺らにはわかんねえんだよ。それにまともに戦う手段がないんだ。だからあんたらを呼ぶんぜ、万が一のために」

そんな会話が交わされる中、敵は近付いている。

「逃げ切れそうか？」

「……ビミョーだな。群れだったっぽい。最初のは振り切ったけど連鎖的に気付いた奴らが来てる」

「なんでそんな見てもいないことがわかんんだ？」

不思議そうにおっちゃんが尋ねるのでオレはきっぱりと答えた。

「知らん。なんとなくだ。臭いとか音とか、気配とかだと思うけど」

「……お前さん、面白いなあ」

「そうか？」

オレは不思議そうに首を傾げた。しかし直ぐに何かに気付き、遠くを見た。

「来るか？」

「……来る」

砂埃が遠くで巻き上がるのが見える。そしてよくよく目を凝らせば見えてくるものがある。

「……」

おっちゃんは絶句だ。オレは睨むようにそいつらを見ていた。

馬のような遅い脚を持ち、シンプルな二本角をかがげ、赤く爛々と光る瞳をひたすら前に向けて怒濤の勢いで迫って来る、あれは。

「鹿、だな」

草食ではまずない牙を見せて猛然と駆けるそれは、もはや鹿では

ないのかもしれない。しかしそれは進化の結果だ。異様なこの世界で生き延びるために獲得した性質。

それが彼らの場合、肉食に、強者になることだっただけ。

そうした、今までの常識をぶち壊してでも種を残し、繁栄を勝ち取った彼らを、オレ達はこう呼んでいた。

変異種^{へんししゆ}、と。

「……もうちょいスピードアップは？」

「……やばいか？」

「……」

どうしよっかなー、と思う。

まあ無理じゃあないけど、やだなあつて思う。こんだけ数いるとやっぱり本気で行かないと無理だ。自分しか生き残れない。それは嫌だし駄目だ。でもあんまりやりたくない。

とかまあ駄々をこねてる場合でもない、か。
腹をくくる。

「おつし！ んじゃあおつちゃん。オレ、今から本気になって来るから馬車止めて」

「……は、はあっ！？ そんなことしたら俺らが死んじゃうだろ！」

「でも乗ったままじゃ戦いにくいって。かと言ってオレを置いてつたらおつちゃんの安全が保障されなくなっちゃうし。しょうがねえだろ？」

「しょうがねえ、って……」

絶句するおつちゃんは置いて、とりあえず馬車を止めることにする。

「ツオン、スピード落としてくれ」
「……ツオン」

少し迷ったが、ツオンは大人しく言うことを聞き、減速を始めると直ぐに止まった。

「な、なんで言うこと聞くんた……こいつは野生の馬で、俺以外の奴には慣れもなかったのに」

「そっか。なら仲間だと思ってくれたのかなっ」

ちよつと嬉しくなりながら、またひょいと馬車を飛び降りた。そして腰の得物に手を伸ばす。

「ど、どういうことだ？ それにお前、一体どうするつもりだ……？」

「さっきも言っただろ？ 戦うんだよ。それしかねえだろ」

「でもあれは……二十近い数いるぞ。逃げるだろう、普通」

「なら普通だと思わないでくれ。とにかくおっちゃんは動くなよ？」

そう忠告すると得物をすっ、と抜き払った。刀だ。大切な人がオレの願いを叶えるためにくれた大事な相棒。

それを持つとオレは馬車の後ろ、猛り狂う鹿の群れの真正面に立った。

意識して大きく息を吸うと、ゆっくり吐き出す。スイッチを入れる感覚。覚悟を決めた。なら行こう、と自分に呼び掛ける。

オレは地面を思いっきり蹴ると、自分から群れの直中に突っ込んで行った。

すれ違い様に刀を振るう。容赦はなし。瞬殺で切り捨てる。次。一步で距離を詰めると切り上げる。次。返す刀で薙ぐように囲む敵を切り払う。次。背後に立ったのを振り向き様に一閃。次。次。次。

。

そうやって半数近くの鹿を切り伏せるとオレは立ち止まった。群れの真ん中にだ。でもきつと、傍目から見れば可笑しな状況だろう。なんせ鹿はオレに恐れを含んだ視線を向けているのに、オレはいつものように飄々と突っ立っているからだ。

オレは鹿達の視線を真正面から受け止めると、口を開いた。

「今更言っても信用ないと思うけどさ、オレはあんたらと殺し合いしたくない。だから、退いてくれないか？」

「……」

沈黙がオレに刺さる。でもそれに堪え、オレはひたすら待つ。すると先頭の奴が一步後ろに下がった。それに習うように他の鹿も下がる。これは……。

「いい、つてことだよな？」

「……ウオフ」

低い唸り声が返事だった。オレはホツと胸を撫で下ろした。良かった、これ以上はやらずに済んだか。

それだけ確認出来れば十分。オレは背を向けると鹿包囲網をひよいと飛び越えて御者台まで戻ってきた。

出迎えたのは依頼人のおっちゃんのおんぐりと口を開けて惚けた顔だった。

「おっちゃん、行かないとまたオレらがご馳走候補になるぜ？」

「……あ、ああ！」

遅れて言葉を理解したおっちゃんはようやく手綱を握るとツオンを走らせた。荷馬車が再び猛スピードで走り出す。

しばらくそんな調子で進むと、ようやく建物が見えて来た。無事任務完了だなく、と安堵しているとおっちゃんがこつちを凝視していた。

「な、なんだよ、怖い顔して……」

「あんた、一体何者なんだよ？ 人間、だよなあ？」

ああ、そのことか、と苦笑する。この人の依頼は初めてだったが、本当に何も知らずにオレを選んだらしい。オレのことを面白いつて言っただけ、このおっちゃんも十分面白いな。
そんなことを思いながらオレは答えた。

「オレは巽真太郎^{たつみしんたろう}」

そんでもって人間じゃなくて。

「ドラゴンだ」

また半開きになった口を閉じれずにいる間抜けなおっちゃんの顔を見て、オレはニツと笑った。

001 灰幕【真】（後書き）

サブタイトルは多分統一感ないものになっていくと思います。とりあえずノリです。ノリで何とか行きます。

因みに今回のタイトルは開幕の「開」に灰色の空の「灰」を掛けてみたのですが……あんまり深い意味はないような微妙な感じなので気にしないでください。全てはノリで切り抜けると信じて、次、行きましょう。

002 狼と竜【真】（前書き）

シン視点です。ようやく本編スタートな感じです。主要メンバーが何人かやっとなってきます。あんまり説明なしでキャラ達が暴走気味に好き勝手なことを言っています。が、おいおい説明されるはずなので……細かいところは気にせず、雰囲気を楽しんでもらえたら、と思います。では二話目をどうぞ。

002 狼と竜【真】

ようやく仕事も終わり、もうすぐ家だな、とか思いながら歩いて
いたんだけど……。

「なんか……臭い？」

血の匂いに鹿の匂い、それと……犬、にしちゃあ獣臭い。一体何
匹変異種が紛れ込んでんだあ？

一人首を傾げていると駆けてくる足音が聞こえてきた。多分子供
のものだ。

「シンにいい、シンにいい！　たいへんなんだよお！」

振り向くと同時にぽすつ、と足にそいつはタックルしてきた。そ
してそのまましがみ付き、気の弱そうな垂れ目をオレに向けた。

「なんか侵入したのか？」

「そうなの！　こわいのがシカさん追っかけて入っちゃったの！」

「で今はどこにいるんだ？」

「みんなであっちに追いつめてるよ。けどこわいの強いみたいだから
から、様子見、なんだって」

「様子見てりゃ出てってくれるのかねえ……」

とりあえず膠着状態らしい。ならオレが乱入してもいいだろ。

「どっち行った？　その鹿追ってる怖いものってのは」
「あっち」

そう言っ て垂れ目の男の子が指したのは……。

「おいおいおい……マジ？」

「うそつかないよ」

それはそうだ。こいつは脅されてなきや素直なやつだから。と言
うか嘘を吐けと脅される理由もそれな気がする。

「いつもの気の強いのは？」

「アンちゃんは危ないからおうちで待ってて、って言ってきたの」

「そつか。じゃあお前もアンのとこで大人しく待ってな、ユウリ」

「うん。がんばってね、シンにいつ！」

「おうよっ」

トコトコ駆けていく男の子、ユウリを見送ると、彼が指し示した
方を向いた。それはオレらの家がある方向。あいつは多分、と言
うか絶対家に居る。

「……マジかあ……大丈夫かな」

とにかく急がねばと思い、全速力でスタートダッシュを切った。

大慌てでやって来ると人だかりが家の手前に出来ていた。ほんと
家の前じゃねえか、と思わず悪態を吐くが、それと同時に冷や汗も
感じていた。

「シン、お前帰ってたのか？」

悪態は焦りもあつて思つていた以上に大きな声になっていたように、オレの声を聞きつけた後ろの方にいた男が振り返った。オレは苛立ちやら焦りを隠せないまま荒っぽく答える。

「今帰つてきたんだよつ。何やってんだよ、包囲網でやつかあ？ そんなことやつてる場合か！」

ほとんど怒鳴るようにそれだけ言つとそいつを押し退け、人だかりに突っ込んで行く。焦つて焦つて上手く考えはまとまらないから、もう考えないことにする。だから人垣を乱暴に掻き分け、ドンと最前列に出た。

鹿、だけじゃなかった。灰色のやたら毛むくじゃらな獣が、横倒しになった鹿の腹にかぶりついている。それが一番前に出て最初に飛び込んできた光景だった。

「……なんだ、あれ？」

「オオカミだ……」

「は？」

近くにいた誰かが呆けた声で答えた言葉を訝しげに聞き返したその時、それは振り返り。

目が合った、気がした。

濁りきつた沼のような灰色の目。長すぎる毛によつて口元はよく見えないが、血が滴り落ちていた。あまりに人から掛け離れた姿に見える。しかし、よくよく見てみれば前足は地に着いているようには見えないし、頭の位置もおかしいような気がする。もしかして……？

なんてことを考えさせてはくれないらしい。灰色の獣はふつと頭を下げ、もう二本の足も地に着け、地面に吸い付くかのような体勢をとつた。

あー、来るな。

呆けたようにそう思う。本能がそう言っている。だから気づけば柄に手が掛かっていた。

ガギイイン。

金属と金属がぶつかったような音が響いた。けれどそうじゃない。一方は確かに刀だが、受けたのは全く違うもの。それは。

「っ、爪っ？」

刃を止めていたのはまさかまさかの爪だった。煤けた色をしたその爪はやたら太く、鋭く、なにより信じられないくらい硬いようである。変異種だからって言ってもそんなのありか！

そんな風に内心仰天していたが、どこか不思議と冷静な部分もあった。……。

「うっうっうっ！」

刀が力任せに跳ね上げられ、もう一方の凶悪なまでに研ぎ澄まされた爪が、オレの首目掛けて突き出された。

にも関わらずスッと力を抜いて体を沈めることでそれをかわして見せたのは、戦い慣れているからなのか、本能のようなものなのか。……でも本音で言えばめちやくちゃ怖かった。あの爪コワッ！

「うっうっうー」

灰色の獣は睨みながら唸っていた。警戒しているらしい。オレもこええよお前、と言いたい。言いたい、が。

「お前、一応人間だよな？」

困ったような顔で問い掛ける。言った瞬間、辺りは怖いくらいに静まり返ってしまった。そして爆発する。

「は、はああああ！！！」

「うあつ、耳にいてえだろ！ 合唱すんな！」

「お前こそ馬鹿言うな！ あれが人間なわけあるか！」

「馬鹿はてめえだ、あーほ！ どう見たって人間じゃねえか！」

睨まれている。それがわかるくらいに今は顔が顫おそになっ

ていた。灰色の長い毛の隙間から覗く、丸く大きな黄褐色の瞳は鋭いが静かで。微かにはみ出した前髪は毛皮に似た、しかし明るい灰色をしていた。

そう、毛皮。彼は犬だかの頭蓋骨の付いた毛皮をすっぱり被っていたのだ。そして幼かった。十歳前後だと思う。

「うー」

灰色の獣、改め、灰色の少年はなかなか警戒を解かず、未だに唸っている。どうしたものかと思うが、けどこちらも警戒は解けない。本当にこいつはシャレにならない強さだからだ。あと怪力だ。馬鹿力としょっちゅう言われるオレが簡単に刀を弾かれたんだから。

「はあー」

どうしたもんかな、とため息を吐いた、次の瞬間だ。

がちやり。

「……………」

「……なんだ？」
「バカああああ！！！」

なんでこういう時に限って空気読まずに出て来ちゃうの！？
オレの住む家の扉が開き、黒髪の青年が顔を出していた。状況がわからず固まっている。そして毛皮を被った少年もその音にびっくりすると、家の方を見た。

どうするどうする？ この狼少年めちゃくちや足速い。先にスタートダッシュ切られたら間に合わないかも。それはダメだ。それはヤバイ。じゃあどうすんだよ！ あー、もー……後で考える！
それだけ決まればもう良かった。

「ごめん！」

一言先に謝ると、オレは素早く行動に移した。
少年に肉薄するや否や、腕を掴み、引っ張る。と同時に足払い。
完全に体勢を崩し、浮いた少年を力任せに押し伏せる。

どたん、という音が響き、あっという間に少年は地面に転がされ、オレはマウントポジションを陣取る形となった。

「うー、ううう……ぐおお……」

少年は唸り、身を振るが、かなり本気になって抑え込まれた体は動かない。

「落ち着け、ってこんなことしといて何だけど……とにかく落ち着いてくれっ」
「グルグルウ……」

本当に狼みたいな声を出し始めてしまい、オレは慌てて言葉を繋

げる。

「お、お前がこの辺にいる奴らを襲わないって約束してくれればもうオレらは攻撃しないから……頼む、頼むからそう約束してくれ！」

そうじゃなきゃ力づくで追い出すなり殺すなりしなくちゃならない。でもそもそも言葉を理解してくれるのか……？

そんな不安が過る中、ふと少年の抵抗が止んだ。

「……ロウ、襲わない。なら、襲わない？」

「襲わない襲わない！ もう攻撃しないよ。だから約束してくれるか？」

「……なら、約束する。ロウ、この人、襲わない」

ほつとその返事を聞くとオレは息を吐き、少年を押さえる力を抜いた。上から退くと、少年はゆっくりと体を起こした。

「お、おい、大丈夫なの」

疑り深い外野からの声は、鈍い音と共に途切れた。そして野太い、能天気にも聞こえる声がしてくる。

「馬鹿かてめえは。シンが大丈夫だと判断したから手を離れたんだ。それに侵入者の方も落ち着いてんだ。野暮なこと聞くんじゃねえよ」

声が近付いてくる。でもまあそれは良いか、と思い、とりあえず目の前の少年に手を差し出す。

「乱暴して悪いな。どうにも手加減苦手で。ほんととはもっとスマー
トにやりたいんだけどな……」

ばやきながら差し出された手を、不思議そうに彼はしばし眺めると、黄色い瞳を輝かせて手を取った。

「強いな、強いな紅い目の人！」

「お、おお……なんだその呼び方？」

「変か？　ロウ変？」

「変じゃ、ないけどよ……そんな風に呼ばれたの初めてだな。オレはシンって言うんだ」

「シンか？　強そうだなっ」

「そうかあ？　にしてもロウも強いな。怖いくらいだったぜ？」

と、そこで何故か彼は首を傾げた。……なんだ？

「名前、ロウって言うんじゃないのか？　さっきからロウロウ言ってるからてっきり……」

「ううん。ロウはロウだぞ。シンは間違ってる」

「そっか。なら良かった」

名前がようやくはつきりわかって何だか安心した。にかつと笑うと、灰色の毛皮を被った少年、ロウも屈託のない笑みを浮かべた。

「おい、俺を無視するなよ」

一段落ついたところで割り込んで来たのは、さっきも遠くから煩いくらい聞こえてきた、あの声だ。オレは思いつきりしかめっ面をすると、声の主にそれを向けて言い返した。

「おせーよハンダ！　なんであんたが今更ノコノコやって来てんだよ！」

「すまん。情報が錯綜しててなかなか来れなくてな」

「言い訳すんなよ」

「まあそう拗ねんなって。お前の活躍で場は治まったんだから」

「むー。大体地区長のおんたが」

ぽかつ。と台詞の途中にいきなり軽く後頭部を叩かれた。それに続き後ろから声がかかる。

「半田^{はんだ}さんに当たるな、シン」

痛くないけどイラッと来た。そして頭を叩いた人物がその苛立ちに追い打ちをかけるような奴で……。ぷちん、とキレた。

「あの場面で空気も読まずに出てきちゃったお前が一番の問題だあああああ！！！」

怒鳴りながら振り向く。

そこにぼさつと突っ立っているのは黒髪の青年。成長期に伸び悩んだ背丈を未だに引き摺っている、みみっちい二十二歳だ。因みにオレの方が余裕で背が高い。

そして無駄に不機嫌そうな顔付き。でもそれは凝り固まった性格によるもので、別に怒っているわけではない。ただそれがデフォルトなだけだ。

黒い瞳をぼんやりと開いているこの男。オレの住む家の家主であり、腕のいい鍛冶屋だが、どこか妙なところで抜けている、この男の名前は。

「シランっ！」

「……わかった、わかったから怒鳴るな。……耳が痛い」

目を細めて耳を押さえたシランはあまり反省したようには見えなかった。が、確かに大きな音は痛いということはさつき身に染みていたので繰り返す気にはなれず、代わりに大きく息を吐いた。

「シランは本当にこういう時は絶つつつ対に頼りにならない。つか頼りにしないからなっ！」

「……前科もあるし、反論の言葉もないな」
「ふんだ」

完全にふて腐れてそっぽを向いたオレに、苦笑する気配だけが何となく伝わってきた。なんだなんだ。シランなんて知らねー。……シヤレじゃないからな？

「まあまあ。とりあえず何事もなく治まったんだし、良いじゃねえか、シン」

「良かねえよまったく……まったく」

「お前の過保護っぷりは相変わらずだなあ」

「過保護じゃねえ！ シランが悪い！」

「駄々をこねるな。それより……」

不意に台詞を切ると、シランは辺りを見渡した。釣られてオレも一緒になって見渡す。

落ち着いて見てみれば、何だかあっちこっち微妙に壊れている。

元から掘っ立て小屋みたいな家が適当に並んでいただけが、その柱やら屋根が外れたり折れたりしていた。

「……ロウが暴れたから、か」

「ロウ気付かなかったぞ……」

「……」

「……まあ、アレだ……いつものことだな」

そう言ってしまうばそうなのだけど……そうだよな。うん、そう
だ。

「ハンダの言う通り、いつものことさ。ロウは気にしなくていいよ」
「そうかあ？　ロウ悪い。ロウのせいだ……」

どうも真面目な性格なようで、ロウはしょんぼりしてしまった。
どうしようかとあたふたしていると、シランがぽつりと言った。

「修繕の手伝いをしてくればいい」

「おお、それ良いな！　な、ロウ？」

「うん。ロウ手伝う！」

「おいおい。これ以上は壊してくれるなよ？　それに何手伝うんだ
？」

やる気に水を差すようなことを言い出すハンダにムツとなって言
い返す。

「壊さねえよ！　それにロウは凄いんだぞっ」

「ロウ凄いぞっ」

「何がだよ。つかお前ら早速仲良いな……さっきまで戦ってたのに」

「戦ったからこそその友情だ！　な？」

「そうだぞ、友情だっ」

「……シラン、相棒とられたな」

「……なんで俺に言いますか。勝手にすればいい。それに相棒と言
うよりは同居人で主夫だ」

「そうだなー、シランはダメ人間だもんなー。オレが世話してやん
なきゃなっ」

さっきのお返しとばかりに追撃する。シランはにやにや笑うオレの顔を見て、ため息を吐くとハンダを見て言った。

「それ以前にただの馬鹿だけだな」

「違いねえ違いねえ。うははっ」

「笑うなハンダ！ シランもひでえな！ もう怒ったぞ、シランの昼飯なんて知ったことか！ 行くぞ、ロウ」

「手伝い行くー」

怒ったのでシラン放置でロウを引き連れ、修繕作業に乱入することにする。既に野次馬のようだった戦闘員は散り散りになり、各自片付けを始めていた。

「俺も行くかな」

「俺も行きます」

「シランは待った！」

こいつも生真面目気質なので予想はついていたので、オレは速攻で振り返った。シランは予想していなかったようで目をぱちくりさせてオレを見返した。

「な、なんだ？ まさか片付けも危険だから参加禁止、なんてことまで言う気か？」

「ちよつと言いたいけど流石にそこは良いとして……」

言葉を一旦止め、オレが息を大きく吸うと、シランは身構えた。しかしそんなことお構い無しに怒鳴るように言った。

「シラン！ また本読みながら寝てただろ、こんな昼間っから！ 風邪ひくからやめろって何度も注意してるだろ！ そんなことして

るから警報が聞こえなくて逃げ遅れて、拳げ句の果てに空気読まずに登場なんてことするんだろうが！」

「……すまん。って、なんでお前がそんなこと知っているんだ？」

「だって家から出てきた時明らかに反応が鈍かった！ 半分くらい寝惚けてたろ！」

「ぐっ……だがだからと言って修繕などの仕事は助け合っのが当然」

「そうだ！ でも起き抜けでいつも以上に抜けてるシランにやらせたら危険過ぎるから！」

「……顔洗ってきます」

「うん、行ってこい！ その間に頑張って終わらせちまうからなっ」

ふん、と不機嫌そうに鼻を鳴らすと口ウとハンダに目配せする。

速く行こうぜ、と。ハンダはやれやれと肩をすくめるとシランの肩をぽんと叩いた。

「愛されてるな」

「……母さん以上に過保護だ」

「鈴蘭いなくても寂しくないな」

「あつたりまえだろ！ スズさんからシランのこと任されてんだからよっ」

胸を張り、にかっ、と笑顔で言っでやると、シランは困ったような顔で小さくぼやいていた。

「俺がお前のことを頼まれていたはずなんだがな……」

それに今度は口に出さずに答える。

シランがいるからオレは笑ってられるんだ。お前はちゃんと役目を果たせるよ。

オレは隣に立つ、小さな狼のような少年の白い顔を覗き込むと彼の名前を呼び、今度こそ歩き出した。

「ロウ、行くぜ」

「うんっ」

002 狼と竜【真】（後書き）

ようやくロウとシランが出せたー！ って言ってもシランはもう出てたんですけどね。まあそれは置いて……なんかシラン、この回じゃただの駄目な人だ（-|-;） 作者的にはこの不機嫌面な青年好きなんですけどね……。ロウ、ちょっと置いてかれ気味ですが……きつと活躍する、はず。一人だけカタカナで呼ばれたり漢字だったり忙しい人、半田さん。ちょいちょい出てくるはずなんで良かったら覚えといてやってください。

003 溜息と尻尾【紫蘭】（前書き）

今回はシラン視点になります。

三人の会話を楽しんでもらえたら、と思います。作者的にはシンのお母さんっぷりが書いてて楽しいんで。あとロウの抜けてる感じとか、シラン視点だと書かれてないけど終始不機嫌そうなシランとか
e t c e t c ……。

とにかく第三話、始まります。

003 溜息と尻尾【紫蘭】

あいつは馬鹿なようで案外言ったことはやる質だ。さっきあいつは俺が戻るまでに終わらしてやる、と宣言していた。だからあまり驚くことではないのかもしれない、が。

「……速いな、本当に」

「お、シラン戻って来たか」

さっきまでの怒りはどこに行ったのか、あっけらかんとしたシンが惚けた顔で振り返った。

辺りの家屋の修繕は終わったようで既に閑散としていた。シンとロウは最後に残った食べ残し、鹿の死骸の前にしゃがみこんで処理方法を考えていたようだ。

「もうちゃんと起きたか？」

「流石に起きた。すっかり冷水で顔を洗ってきたからな」

「うんうん、なら良いや。シランって本当に寝起き弱いよな。普段だったら刀もなしにあんなところで棒立ちにはならねえだろ」

「……悪かったな」

確かに目が覚めた今となっては我ながら、何とも間の抜けた登場だったと思う。読書中のうたた寝には注意しよう。にしても……警鐘でも起きなかったとは、な。

我が家の裏方を見やれば、簡単に木で組まれた櫓やぐらが見える。警鐘はその頂上に小ぢんまりと備えられていた。見た目は頼り無さげだが、地区内には不思議な程よく響くように出来ており、緊急時にはガンガン鳴らされる。

起きる、はずなんだ……あんなに近いのだから。いや、そうでな

くとも起こされるはず……なのだがなあ。

「警鐘を恨んでもしょうがないぜ。聞いたら、ロウがこの辺りに来るまでずーっとガンガンやってたらしいし」

「……そうか」

「気を付けるよお？ オレがいない時こそ警戒してなきやいけないんだ。なのにシランは熱中するものが多くて危なっかしいよ」

「流石に起きていれば気付くだろう」

「どーだかねえ。工房こもったら簡単には出て来ねえじゃん」

「……気を付けよう」

「そーしてくれ」

なんだか先程からシンに説教されてばかりだな……。ふと視線を脇にやると、狼の毛皮を被った少年と目があった。

「なんだ？」

「いや、なんでもないが……ロウ、だったか？」

「……ん？」

「いや、名前のことなんだが……」

さっきから彼自身も、シンもそう呼んでいたから多分そういう名前なんだろうと思っていたが……違うのか？ と戸惑っていたが、今度はあっさりと頷いた。

「ロウはロウだぞ」

「そ、そうか」

……ワテンポ遅いと言っか、彼の中での名前の認識は一体どうなっているのか不思議だ。名前を呼ばれることになれていないからだろうか？

まあいい。この流れだ、簡単に自己紹介しておこうか。

「俺の名前は観月紫蘭だ。シランでいい」

「シランか？ 綺麗な名前だなっ」

「そう、だな」

眩しい、と思わず思ってしまうほど、彼の黄色の瞳は本当にきらきらと輝くようだった。まさに子供の瞳。その目は外見年齢よりずっと幼く、純粋な印象を受ける。

子供は、苦手だ……。

そんなことを心中で呟いていると、シンが話題を戻した。

「とにかくこれ、片さないとな」

「まさか食べる気じゃないよな？」

「食べようかと思っただけど、さ」

「先に食べられた」

「……？」

二人の話がよく分からず、首を捻っているとシンが手招きした。見に来いということらしい。とりあえず見てみる。

「……」

見なきゃ良かった。

見た瞬間、軽く後悔した。苦手な人なら卒倒ものだ。鹿の死骸には虫が集^{たか}っていた。百を軽く超えそうな数が鹿の体全体に蠢^{うごめ}いている。

先に食べられたと言っのはこういうことらしい。つまり虫に先を越された、と。

「これは流石に食べるな」

「食べねえよ。よっぽど空腹な時以外」

「どんな空腹下でもこれは食うなよ……」

「まあとにかくこんなだから仕方ない。森に置いてこう。ここにあると何かと危険だからな。ロウ以外の侵入者まで呼ばれちゃ困る」

「ああ、そうだな」

「ってことでロウ、頼んだ」

「わかったっ」

「って、ロウに頼むのか？」

「おう」

そんなやり取りをしている間にもロウは鹿を無造作に持ち上げると、肩に担ぐでも、かといって引き摺ることもせず、ただ風のように駆けていった。……よく走る勢いだけで鹿を浮かせるものだ。腕力の助けもあるんだろうが。

でもよく考えるとロウと鹿。明らかにロウの方が小さかった。シン並みの怪力の持ち主らしい。

「……凄いな」

「だろ！ ほら言ったら、ロウは凄いんだって」

呟きにやたら力強い相槌が返ってきた。シンを見ると、ロウのとなのに何故か自慢気にふんぞり返っていた。馬鹿だな。

「で、何を考えているんだ、シン？」

「んなつ。な、なんでそんなこと訊くんだよ」

「わざわざロウに頼んだのは何か理由があると考えた方が妥当だからな。お前はあまり人にものを頼まない。特に会って間もない相手にはな」

シンは凶星なようで言葉に詰まり、困った視線を向けてきた。それに俺が困る。仕方ないのでため息混じりに言った。

「とりあえず言ってみろ」

そう言っても、まだ迷うことがあるらしく暫く視線をさ迷わせていたが、ようやく口を開いた。

「ロウを昼食に呼びたいんだけど、いいか？」

「……好きにすればいい」

そんなことか、と思わずまたため息がもれた。シンは逆に一転して喜びを隠さない笑顔で礼を言っていた。

「別に料理を作るのはお前だし、お金だって大半お前の報酬なんだから、俺に許可を取る必要はない」

「でもシランの家だし、やっぱり確認しなきゃだろ。とにかくありがとっ」

本当に単純な奴だ、と浮かれるシンの顔を見て、少しだけ違う意味の息を吐いた。

「シラン、ロウと一緒に銭湯行ってきたよ」

「……昼食はどうした？」

軽快に昼食の準備にとりかかったかと思えば、あまりに唐突にそんなことを言い出したシンに、思わずそう問い返してしまった。しかしシンは何でもないかのようにけろっとした顔で答える。

「飯の前に口ウを綺麗にしてやった方がいいだろ？ 風呂上がりの方が飯は旨いだろっし」

「ならお前が行けばいいだろう？」

「やだ」

「……」

「あ、冗談だつて。えーと。オレ料理担当だし、食べる専門の二人が行くべきだろつて」

「別に食前に風呂に入るなんて習慣はないぞ」

「でも口ウずつと風呂入ってないみたいだし、やっぱり家とかで食べる時は身も綺麗な方がいいと思うんだよ」

まあ、筋は通ってるか。一理あるな。

シンが言う通り、口ウは本当に汚れている。まずすっぱり被った毛皮からして清潔と程遠い代物だ。フードを外して現れた灰色の髪は、元々もあるだろうがごわごわを通り越してガチガチ。極め付きに、彼の肌はやたら白いため泥や血の汚れが酷く目立つ。

それでも普通に家に上げて平気な顔をしていられるのは、子供っぽい無邪気さに何となく誤魔化されているのか。はたまた単に慣れているからなのか。

ふとシンを改めて見てみるが、特に目立った汚れもなく、普通だった。怪我もないこともついでに確認する。

「ん？ なんだ？」

「いや、何でもない」

長い沈黙と視線にシンが首を傾げたが、特に何も言わなかった。別に何事もないのなら、取り立てて話題に上げるようなことでもない。

「銭湯、か」

「連れてつてくれよ」

「でも昼食はそれまで待っているのか？」

「ふふーん。よくぞ聞いてくれたね」

「……」

地雷を踏んだ気がした。少し躊躇するが、話が進まないので促すように渋々口を開く。

「……なんだ？」

「今日の昼飯はカレーライスなのだっ！」

「……で？」

「最近仕入れた情報によると、カレーは一度寝かしてからのが美味しいらしい！ だから一度冷ましてまた温めてみようと思う！」

「それでいいのか？ それに理由は？」

「知らん！」

「……そうか」

「でも美味しいカレーは食べたいだろ？」

「まあ、そうだな」

「ってことでその待機時間を有効に使ってくれ！」

「……つまり銭湯行けと」

「そゆことだ」

……さて、どうするかな、と思い、試しにロウに問い掛けてみる。

「ロウは風呂に入りたいのか？」

逃げるつもりはないが、一応当事者の意見も聞くのが筋だと思ったからだ。

ロウは何故か楽しそうに俺とシンのやり取りを聴いているだけで

今まで参加していなかったが、話を振るときよんとした顔で俺を見返してきた。

「ふろつて、なんだ？」

「……」

そこから説明が要るのか、とこれからの苦労を想像させられ、少しばかり脱力させられる。とりあえずこの場はシンに任せようと思い、俺は沈黙を選んだ。案の定、直ぐにシンがロウに言葉を返す。

「風呂つてのは水がたくさんあってな、怖いとこだ」

「怖いのか？」

「おい」

なんて説明をしているんだこいつ、と思わず口を出してしまった。シンは慌てて付け足す。

「そんで体を綺麗にするとこだ。だからロウは行った方がいいと思うよ」

「ふろ……お風呂か？　ロウ入ったことあるぞつ。ずっと前に。ロウ、思い出した」

「そつかそつか。良かった。んで、ロウは風呂入りたいか？」

「ロウ入るー」

「だつてよ」

言質はとったとばかりに得意気な顔をするシンに、呆れ顔で俺は溜め息混じりに答える。

「……わかった。行くか」

そう言つて銭湯にロウを連れて行くことを了承すると、俺は立ち上がった。ロウにも声をかけ、さあ出掛けようと戸口に向かうと、シンが勢いよく待ったをかけた。

「シラン！　せめてタオルくらい用意しようとしろよ！　それに着替え！」

「……そうだな」

さすが自他共に認める母親役。そういうところはしっかりしているな。何てことを考えている間にシンがバタバタとタオルやらを取り出し、押し付けてくる。

「ロウ、服の替えは持つてる？」

「ないぞ」

「じゃあ貸すよ。シランのお古で良いよな？」

「それは良いが……ロウが着られるような服なんて残っていたか？」

「あるに決まつてんだろ？　捨てるなんて勿体無いじゃん」

ああ、母さんがいるようだ……。

ほとんど母親のようになっていくシンを見て、何故だか寂しいような物悲しい気分になるような複雑な気持ちを味わっていると、今度は子供服が投げ付けられた。

……　本当にあつたんだな。俺以上に家の中を把握してるんだな、シン。母さんに仕込まれたか。

「その毛皮洗つとくよ。いいか？」

「うん。お願いします」

「うわー、下の服もすげえな、こりゃ。……いいや。銭湯行くにしてもとりあえず着替えよ」

「はい」

「……俺は外で待つてる」

「ほいよ。でもシラン、逃げるなよー？」

「逃げるか。お前じゃあるまいし」

そんなことを言いながら外に向かう。この狭い家に三人いる時点で多少の息苦しさがあるというのに、慌ただしく動く人がいたら非常に落ち着かない。だから逃げるように外に出ることを選んだのだ。

「……はあ」

よくわからない子供の面倒を押し付けられた、といった感じだな。

「……シンほど手がからないことを、願う。本当に」

そう呟くと、また深々と溜め息を吐いた。

「……やっぱりお前、人間じゃないな」

銭湯の脱衣所にて。俺は対応に困っていた。何故なら普通に考えればあるわけのないものを目にしてしまったからだ。

「ロウはロウだぞ？」

尻尾が、あった。

灰色の、髪によく似た、でも髪と違い柔らかそうな毛質のものだ。それが目の前で機嫌良さにゆらゆらと揺れていた。明らかに直接尻に生えている。

しかしロウは能天気な顔でとぼけた返答をするだけだった。

「……犬」

「狼だぞ？」

「……そうか」

自己申告を素直に受け取れば、彼は狼なのだろう……いや、狼の尻尾を生やした人間、のはずだ。

「お前は一体何者なんだ？」

本当に、真剣に、真面目な問いだった。けれど予想通りと言つか、彼はこう答えた。

「ロウはロウなんだぞ？」

そう言って無邪気に首を傾げるロウ。この肩透かし具合に俺は何か既視感を覚え、少し頭が痛くなった。

004 願い事と優しい人【紫蘭】（前書き）

シラン視点だといついつい詰め込みがちになるようです！……や、なんかいろいろ説明してたら一万字ほど行ってしまいました。後回しに出来る説明は削ってみました。今回は前回の二倍ほどです。ちよつと真面目パートだし、地の文が多めですが、一章と言うか大きな一話がようやく終わる感じなのでお付き合いください！
では引き続きシラン君視点な第四話始まります。

追伸。

この前置きの文章が邪魔臭いと思う方は言うてください。その場合は短くするか、ばっさり消すことにします。

004 願い事と優しい人【紫蘭】

「人間と変異種の間の子、というやつか」

「んー？」

能天気な顔を向けてくるロウに、少し言葉に迷ったが、ここで止めるのも気分が悪いので独り言覚悟で続きを口にする。

「変異種の遺伝子を使って作られた、人工的な人間の変異種。そんな噂を、よく聞く」

今日の日本は生態系がものの見事に崩れ去っている。

ある時期、異常気象を耐えるために様々な生物の突然変異が大量に現れた。それが次第に落ち着き、定着したのが現在変異種と呼ばれる常識はずれな野生生物たち、なんだそうだ。

しかし俺達は普通の生物とやらをほとんど見たことはない。遠い過去のことは書籍の中にしかない。百年以上も前の日本は、もう本でしか知り得ないのだ。

「お前は人間の変異種なのか？ 狼の遺伝子を持った、人間なのか？」

様々な生物が突然変異を繰り返し、今の姿を獲得したが、人間は特に例外だった、というのはよく聞く話だ。……本の中で、だが。何故か人間は大きな進化も退化も、突然変異も何も起こらないらしい。理由はわからないが、人間だけは百年前も変わらない姿をしているそうだ。その事実が、人間にとって何だか安心してしまふ事実だと俺は思う。

しかし、そうは考えない人がいるらしい。そうした人々は無謀に

も、非情にも、生命の神秘というものに手を入れ始めた。という噂、
なのだが……。

「ロウはロウで、狼……だと思っぞ？」

「……そう、か」

心の内で密かにため息を吐いた。こいつらは本当に、どうしてそう自分のことに無関心というか無頓着なのか。何だかんだでやっぱり似ている。シンとロウは。

「まあ、お前が話す必要がないと思うなら、それでいい」

「……ロウ、覚えてない。いろいろ」

「記憶喪失なのか？」

「わかんない」

要領の得ない会話はそれが原因でもあるのか、と妙に納得する。

ロウは気にした風もなく、ぱちゃぱちゃと水面を軽く叩いて遊んでいた。

いい湯加減。今はのんびりと二人並び、がらんとした広い湯船に浸かっていた。

風呂に入る前に発覚したロウの尻尾。俺には判断しきれないことだったのでとりあえず受付のお婆さんに確認を取ったが。

「平気よ。大丈夫だから入ってらっしゃい」

と普通に言われてしまった。何でも常連客にも尻尾がある人がいるらしい。寛容な銭湯だと感心してしまった。寛容なこの街らしい判断だとも思う。

なので結局普通にロウは銭湯に入った。と言ってもあの汚れ具合、まず湯船には浸かれない。ロウはたどたどしい手付きながら自分で

身体中を洗い始めたが、あまりに終わりそうになかったので助けてやり、何とか許容範囲だと言える程度まで綺麗に出来たので、こうして一緒に温まっているのだった。

「平和、だな」

「そうだなー」

ロウは大人しくて助かる。昔初めてシンを銭湯に連れてきた時、あれは最悪だった。非常に苦勞した。

「シンは水怖い？」

「らしいな。飲んだり触る程度なら気にならないようだが、浸ったり浴びる程の量になると何故か怖いらしい」

「なんでだろう？」

「さあな。当人も理由はわからないと言う」

「不思議だ」

「不思議だな」

でもその水嫌いのせいでシンはこの銭湯で大暴れしたのだ。

まず銭湯、風呂というものを理解していなかったらしい。初めての風呂を見て、使用用途を告げると逃走した。無理矢理なだめて体を洗わせた、と言うか洗ってやったが、今度は頭からお湯をかけるというところでまた暴れた。何人か犠牲者を出しながらも何とか泡を流してやり、そこで俺は放棄した。シンは必死な顔で逃げようとしたが、何故か悪乗りした男達がいて、そいつらが上手く言いくるめたようでシンは恐る恐るだが湯船に入り、一応肩まで浸かった。良くもまあ犠牲者が屍のように散乱している中でそんな無謀なことを、と思った。

だがまあそこまでは良かったのだが、とうとう恐怖が許容範囲を越えたらしく、なんとシンがぼろぼろと泣き出してしまったのだ。

すると男湯内はまた別の意味で大混乱に陥り、俺は溜め息と困り顔でシンを連れ出し、再度なだめるはめになったのだった。

「シン大丈夫だったか？」

「しばらく混乱気味だったが、まあ何とかなったな。でもそのおかげで銭湯はトラウマの象徴だな」

「だからやだつて言ったか？」

「だろうな。まあ、湯船には漬からないが体を洗う程度ならたまに行っているはずだ」

「怖いのに、すごいなっ」

「恐怖心と気遣いの葛藤の末、だろうな」

シンの仕事と言えば専ら都市間の護衛だ。依頼は多いし、割と実入りのいい仕事だから腕に自信がある人は副業のようにやっている。本業と言うと恐らく、一年契約などを交わして長く護衛したり、旅して回っている人を呼ぶのだと思う。

半田さん経由で斡旋してもらっていたが、次第に指名で依頼が来るようになり、一部では結構有名人のようだ。……と、話が脱線したな。

そういうわけでシンは護衛の仕事をしている。そのため泥や血で汚れやすい。だからそういったものが酷い時は銭湯なり近くの川で洗ったりしている。慣れただろうがああ嫌がりようだとやっぱりまだ苦手だろうな、と思う。

「案外匂いを気にするんだ、あいつは。血の匂いを家に持ち込みたくないらしい」

気にしなくてもいいのに、と思ってしまいが、意地のようなものがあるらしく、曲げる気はないようだった。

「でも多分シン、鼻良いからやなんだよ。ロウもあんまり好きじゃない」

「そうか……そうだよな」

俺はあまり匂いは気にしない。でもシンやロウは多分俺と比べられない程に鼻が利く。それは仕事をする上では有利だし便利だが、日常生活を送る上では、優秀過ぎる。だからあいつは様々な匂いが混在する街中は苦手だし、ロウも戸惑っていた。

一般人基準で出来るだけ考えてやりたいが、やはり、違うんだよな。シンは人間の枠には収まらない。可哀想と思うのは筋違いかもしれない、が。

「あいつの願い、俺には叶えられそうにないな……」

「願い？ シンのか？」

「ああ」

「きいても、いいか？」

ロウは遠慮がちに言うか、無理に話さなくていいんだ、と言うように優しく確認した。シンなら絶対に無遠慮か、好奇心を隠しきれずに相手に苦笑されるのが常だが、ロウはその点、丁寧だった。やっぱり記憶がないだけでちゃんと誰かに育てられていたんだろうという確信を持つ。

そして改めて幼い顔には少し違和感を覚える、誠実そうな顔を見返すと、小さく溜め息をついた。こういうのは苦手なんだ。

「人間に、なりたいんだ」

「……人間になりたい？」

俺がぼそつと言った言葉を、ロウがおうむ返しに言った。俺は何となく気が抜けて軽く頷くと、天井を仰いだ。

「そう。あいつはな、優しい人間になりたいらしい。だからかいつの間にか母さんから料理やら家事を習って、ああしている」

「なんでになりたい？」

「……あいつは勘違いしてるんだ。あれで頑固だからな、ちっとも考えを改めてくれない」

「何を勘違いしてるの？」

素朴な疑問、と言った感じに口ウは無邪気にそう訊いてきた。出来ればはぐらかしたいところだった。俺は何とも苦い顔をした。最後の抵抗に口ウの顔をちらりと見たが、あまりに純粋な子供の顔に、結局逃げられず、溜め息混じりに答える。

「……あいつは、俺を……優しいと思ってるんだ……優しい、人間だと」

「シランは優しいぞ？」

迷うことなく返ってきた言葉に、思わずげっそりとした顔になる。

「冗談を言うな。優しいという意味すらわかっていないやつが優しいわけがない」

「でもシラン優しいっ」

「どこがだ……」

「洗うの手伝ってくれた！」

「昼食が遅くなりそうだったからだ」

「でもシラン優しいよ？」

「……」

「だってシン優しいの、シラン優しいからだぞ？」

「……なんでそうなる」

「そんな感じした！」

「……はあ…… 大体気紛れに手当てしてやっただけなんだ。なのに家にまで来て……俺と居たって何も変わらない」

あいつに必要なのは本当に優しいやつだ。母さんとか、半田さんとか、それに口ウだってそうだ。なのになんで俺を選ぶのか……。そんな思考は次の言葉で遮られた。

「じゃあなんでシラン、シンという？ シランはいやって言えた」
「……」

真っ直ぐ過ぎて、少し痛い言葉だった。なんせ俺には答える言葉がないのだから。だから苦し紛れのように、言い訳のように呟いた。

「……感謝の言葉も知らない馬鹿を、放置できるか」

何となく気まずくて、俺は天井を睨むように見詰めた。誰かの描いた青空が、俺を見返していた。

「おっ、おかえり」

「……只今帰った」

「ただいまっ」

狭い家の中を器用に駆けると口ウはシンに飛び付いた。

「おーおー、さっぱりしてきたか。見違えたな、口ウ」

「お風呂おつきかったぞ！ 銭湯すごいな、はじめて！」

「そっか、銭湯は初めてだったんだな。なあ、天井見たか？」

「んー？」

「あそこ空の絵が天井に描いてあんだ、しかも青いのが！」

「ロウ見なかった……」

「あー、出掛けに言えば良かったな。悪い、さっき思い出したんだ」
「……俺としてはお前が気付いていたことが意外なんだが」

初めての銭湯の取り乱し様からして、銭湯では冷静を保てないだろうと思っていた。斯く言う俺も今日初めて気が付いた口だ。

「いやさ、水見ると落ち着かないなら上見てれば、って言われて見たら青空の絵があつて、軽く感動して……やっぱり青っていい色だよなー。空は青だろ。なんで晴れねえんだー！」
「……」

ほとんど説明になってない、と言うか最後なんて文句になっているシンを見て、会話にならん、と諦めた。コートを脱ぐととりあえず椅子にかけ、ロウもシンから引き剥がすと上着を脱がせ席に着かせた。俺も席に着く。

何だかんだで手際の良いシンは、数分で仕上げを済ませると料理を並べ出し、昼食の準備は終わった。上機嫌なシンが音頭をとる。

「んじゃ、命に感謝して、いただきますっ！」

「戴きます」

「いただきますっ」

皆一斉にスプーンを持つとカレーに取り掛かった。しばらく黙々と食事をしていたが、皿を半分ほど空けた頃に俺は顔を上げると、訊きたかったことをようやく口にした。

「シン、なんでロウの尻尾のことを言わなかった？」

これは尻尾の衝撃から落ち着いてまず思い浮かんだことだ。ロウを着替えさせたシンなら見ているはずなのだ。では何故何も言わなかった？

「え？ 尻尾ってダメなの？」
「……？」

逆に首を傾げてしまった。シンが慌てたように言葉を繋げる。

「だって尻尾あるからって何も問題ないじゃん。それにロウ、一応隠してたし、大丈夫だろうって思ってた」

「風呂に入る時には見えるだろう？」

「でも前に尻尾ある人入ってたし」

「……」

もしかや普通なのか？ 尻尾があるなんて常識なのか？ ……っていやそれはないか。流石にシンも尻尾はない。しかしまあ……。

「今更、か」

そもそもこの街にはシンやロウのような人、と言うか人種は他にも何例かあるようで、シンの受け入れも案外簡単に通ったことを覚えていいる。その中に尻尾のある人だっているだろう。そういう街だった。

「わかった。そうだな。いけないことではない……ただ、驚くから先に言っただけだった、な」

「あ、悪い」

「いや……すまん、今のは意地が悪かった。気にしないでくれ」

「……シランってほんとめんど臭いよな、たまに」

「……悪かったな」

「別にいー。慣れてるからなっ」

シンは仕返しとばかりに意地悪な顔をしてみせると、けらけらと笑った。俺は苦笑するとカレーを口に運んだ。そんなやり取りをぼんやりと見ていたロウがご飯を飲み込むと口を開いた。

「シンはいつからシランとこ来た？」

「んん？ オレがいつからここに住んでるかってこと？ えーと……」

「……四年、ほど前からじゃないか？」

「おーそっか、四年かぁ」

シンは自分のことなのに俺の言葉で納得顔。まあここに来るまでは年を数える習慣を知らなかったようだし、最初の頃は数字を知らなかったのだから無理もないか。ロウは何故か嬉しそうに頷いていた。

「長いなっ。仲良しだなっ」

「だろー」

「……」

男二人にその言い方は、言葉は……逆に少し不気味な感じがするな。と顔をしかめそうになる。いや、もうなっているかもしれないな。

そんなことを心中でばやきながら、ロウを見た。

「ずっと二人？」

「ううん。前まではスズさんもいて三人暮らしだったよ」

「二年前だったか。因みにそのスズさんと言うのは俺の母親だ。観^み
つきすずらん
月鈴蘭」

「優しい人でな、綺麗な人なんだ。今はシランの父ちゃんとかだけ
どな。シランも二十歳になったし、オレもいるから大丈夫だろうっ
て、そっち行っただ」

俺の父親も鍛冶師だ。正しくは父親が鍛冶師で、俺も鍛冶師にな
ったというところだが。偏屈で人が苦手な父は、数年前に人里離れ
た辺境で新しく工房を構えた。なので残った工房を俺が貰い、一人
で仕事をするようになり、母は心配だからと一緒に残っていたが、
シンが来てそれもなくなったようで、二人目の心配な人、つまり父
の世話をすることに決めたらしい。

「だから今は二人暮らしだな」

「……」

「ロウ？」

シンが気遣うような声で名前を呼んだので俺もロウの顔を覗き込
んでみる。視線は上の方を向いて、顔は呆けたようだった。しかし
直ぐに二、三度瞬きをすると何でもないように首を傾げた。

「なんだ？」

「……大丈夫なら、いいけど」

「ロウは、両親は覚えてないのか？」

何となく予感があった。ロウの記憶の穴は、これだという勘が。
そしてそれは当たりだった。

ロウは目を見開くと、直ぐに固く閉じた。耳をふさぎ、膝に顔を
埋めると、椅子の上で小さく丸まってしまった。

俺とシンは驚いて思わず顔を見合わせた。

「……ロウ？」

「うー」

「ロウ、どうしたんだよ。何か悪いことしたか？ オレ駄目だったか？」

「……」

シンがいくら優しく話し掛けてもロウは顔を上げなかった。たまに唸り声を発するだけだ。居たたまれない気持ちになって、俺は立ち上がった。

「……ロウ、俺が悪かった。親のこと、不用意に訊いていいことじゃなかったな」

「……」

「もう言わない。許してくれとは言わないが……まだご飯残っているんだ、顔を上げてくれ」

「……うー」

「……」

困った。しかし俺の心ない言葉が原因だ。なら、仕方ない。

「わかった。俺は外にいるからな。シンなら大丈夫だろう？」

「おいシラン……」

シンが不安そうな顔で引き留めてきたが、俺はそれを無視して裏戸から出ようと歩き出し、ロウの隣を通ろうとした時だ。

ぐい、と。

弱いけれど、小さくだけでも、服の裾を摘ままれ、俺は驚いた顔

で振り返った。

「シラン、居なきゃだめ……シン悲しい。ロウも、悲しい」

黄玉の瞳が、泣きたそうに潤みながらも、真っ直ぐに俺を見ていた。俺は苦笑も出来ず、間抜けな顔でそれを見返す。

「……いい、のか？」

「……ごめんなさい」

よくわからないけど……許してもらえたらしい。だから俺は小さく、戸惑いながらも感謝の言葉を告げた。

湿っぽくなったが再び三人席に着き、昼食を再開する。未だに口ウはぐすぐす言っていたが、一応は平和な昼時が戻ってきたようだった。

「あー……」

「……なんだ？」

何か言いたげな、けれど言いにくいらしい中途半端なシンを、少し呆れながらも促した。シンはちらちらとロウを伺いながらも俺に向き直り、口火を切った。

「あのさ、その……」

「はつきりしろ」

「……頼みがある、んだけど」

その言葉に、ん、となった。似たようなやり取りが既にあっただな、と思った。あの時の願いは昼食に招待する、だった。……。

「言ってみる」

そう言いながらも、何となく予想は出来ていた。しかしそんな様子には全く気付いていないシンは必死な顔で、願いを言った。

「ロウも一緒に、住んじゃダメかな……？」

「この狭い家で三人生活する気か？」

「でもスズさん居た時も三人だったし、いけるだろ？　なあダメか？　なあシラン……」

「わかった」

「やっぱり普通の人じゃないの二人も抱えるの大変だもんな。シランにこれ以上迷惑かけるなんて図々しかったよな。ごめんよシラン、でも」

「……お前、話聞いてたか？」

「……へ？」

間抜け顔のシンに思わずため息を吐きながらもう一度言ってやる。

「わかった、と言った」

「えと……何が？」

「だからロウがこの家に住むことを了承すると言っている」

「ほ、ほんとか？　シラン嘔吐かない？」

……そんなに信用ないのか。今度は自分に対してのため息を深々と吐いていると、ようやく理解してくれたシンが跳び跳ねた。

「やった、やったぞロウ！　住んでいいって！　嘔吐かないって！」
「え……」

ロウも信じられないというような顔で俺を見ていた。……本当に信用ないのか、俺。と軽く落ち込みながらもシンに文句を言う。

「最初からそう言えばいいだろう。こんな回りくどいことをせんでも……」

「うえ！ き、気付いてたの？」

「流石にわかるだろう」

一度目のお願いの時、こいつは迷った。多分シンの中ではロウを住むことを俺に了承させるための計画があつたのだろう。でも最初のところで悩んだ。普通に頼んでみても良いんじゃないかという気持ちになつたから。でも結局はやめて計画通りにした。

「なんで遠回りな方を選んだ？ 断られてからやつても良かっただろう？ ロウを知つてもらつて納得させようという計画は」

「うつつ。全部ばれてるじゃん……」

「ほら、吐け」

これがあまりに信用がないため、直ぐには了承してくれないだろうと思つたから、と言われたらもう今日はふて寝だ、とか思つていた。しかしそうはならなかった。

「シランなら多分何だかんだで良いって言つてくれると思つたけど……やっぱりシランに決めて欲しかったから。シランがちゃんと断るなら断るで理由が言えるように、したかったから……」

「……はあ」

贅沢かもしれないが、信用されすぎも俺には荷が重いことだがな……。

「俺だつてお前を信用してる。お前がちゃんとした理由を言えて、ちゃんと納得出来るものなら反対はしない」

それに、と続ける。

「俺の一存でこの特区に住めるようになるわけじゃない。半田さんに許可取って、住民登録の必要もある。それにロウにも働いてもらう」

「ロウは強いから働けるよな？」

「ロウ、がんばる……っ」

ロウは少し赤くなった目で、力強く俺を見返した。まあ大丈夫だろうと思う。ロウは素直で誠実な子のようなから。

「でもシラン。なんであんなにあっさり良いって言ったんだ？」
「……」

やっぱり素朴な疑問。俺は少し困って、目線を泳がした。たまたま目が合ったのは、涙に濡れた、でも何だか嬉しげに笑った黄色の瞳。それが何だか重なるんだ。

森の奥。暗がりに心細そうにこちらを見上げている、切なくなる程のひとりぼつちな目が。大きな体をしていても小さな子供のような少年の、寂しげに光る紅が。

「……ほっとけないから」

「ん？」

「いろいろと、事情がありそうだから……。そう言うお前の理由は？」

そう問い返すとシンは何だか満足そうな顔で答えた。

「シランと同じだ。ロウは何かたくさん忘れてるみたいだけどさ、思い出すにはいろんなことして、たくさんきっかけを作ればいいと思うんだよ。でも森にいても何も無いから……」

酷く説得力のある言葉。でも釣られて俺まで切なくなる。シンはうつ向かせた視線を直ぐに上げると意気揚々と言った。

「だから！　ここで一緒に住めば何か思い出すと思う。それに一人は寂しいかな、うん、オレもほっとけなかったんだ」

「……ありがとう」

ロウは泣きそうな顔で笑っていた。

もし俺が拒否したら、ロウはまた一人になる。一人で生きられるのと、一人でいられるのは違う。抛り所のないやつを一人にはしたくない。思い上がりも甚だしい、と言われるかもしれない。でも多分そうなんだ。俺はこいつらを……助けたい。

「……共同生活の基本は、助け合いだからな」

何故か二人はその言葉を真面目な顔で受け止めていた。そしてシンはにっと笑うと、やっぱり満足そうに言った。

「やっぱりシランは優しいな！」

「……どうしてその結論になるのか」

「シラン優しいっ。ありがとう！」

「……」

俺は大きくため息を着くと、ほんの少しだけ愉快そうに苦笑いを

した。

005 ようこそ第八特区へ【真】（前書き）

サブタイトルがなんか変？ 気にしちゃ駄目です、まだマシなタイトルだな程度に思ってください……はい。なんで特区？ という疑問はそういうものなんだと納得してください……説明は放棄しました、すいません！ かなりぐだぐだ感満載ですがよろしくお願いします。

では一章の延長戦的な第五話、シン視点ではじまります！

005 ようこそ第八特区へ【真】

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

ロウの嬉しそうな声にオレも何だか嬉しくなってくる。

「良かったな、ロウ」

「うん。ようやくロウもこの人っ」

「だな」

ニコニコと顔を見合わせるオレ達。そんなオレ達を少し柔らかい表情で見ているシラン。

「免許証と登録証は身分証明に便利なんで大事にしてくださいね。再発行にはお金が少しかかってしまうので」

にこやかな受付の人が言った。ロウとシランが真剣に頷くことで応える。結構この二人似ていたりする。特に真面目なところが。

ここは中央区。シランが言うにはお役所の集合地、だそうだ。名前の通り、この街、第八特区だいはちとくの中心部だ。そこに立ち並ぶ建物の中の一つ、住民生活管理局。そこで、この特区で暮らすための細々とした手続きをしていたのだ。にしても。

「簡単だったなー。ほんとあっさり。1日で終わっちまった」

「今回は半田さんと稲城さんいなぎが骨を折ってくれたからな」

「骨折れたのか!？」

「……苦心してくれたで伝わるか？」

「おお、なるほど」

確かにそうだった。オレの時もハンダが多少何かしてくれたけど、今回は守衛長まで頑張ってくれたらしいし。

「ほんとイナギさんは良い人だよなー」

「半田さんにも感謝しろ。あの人はお前の時も今回も口添えしてくれたんだぞ」

「わかってるって」

ハンダはそうは見えないが実はちょっと偉い人。オレらの住む第六守衛地区の地区長だ。でもイナギさんの方がもっと凄い、守衛区全体の頭だ。だから守衛長。

この第八特区は特殊な街なため、ほぼ円形になっている。その中心がさっきいた中央区。そしてそれを囲うように商業区、居住区、農業区があり、高い防壁の外側に守衛区がある。そして各区の中でも地区という区分けがされている。第六守衛地区とはつまり守衛区の六個目の地区ということだ。

「まあ稲城さんの口添えが大きかったことは確かだな。あの人は街の防衛の最高責任者だ。あの人が必要な人材だと言ったら誰も断れんだろう」

「だよなー、やっぱすげえよ」

「イナギさん、って誰だ？」

ロウがきょとした顔で首を傾げたのでオレが説明をかって出る。

「壁の外で一番偉い人だ。ロウは会ってないけど……まあそのうち来るよ。その時はちゃんと紹介してやるよ」

「……忙しい人だぞ？」

「でも推薦してくれたんだし、流石に会いに来るんじゃないか？」

「……まあ、お前にしては納得出来る答えだな」

「なんだよその言い方は！ オレだってちゃんと考えてんだぞ？」

シランの馬鹿にした感心の言葉にむかーと言い返す。でも意外と言えは意外。イナギさんならロウに会ってから推薦すると思ったけど、本当に来ないからなあ。

「イナギさん忙しいんかなー」

「ロウ会ってみたいぞ」

「会わせてやりたいよ」

ハンダは大体家に居んのにな。イナギさんは家にすら滅多にいないだぜ？

そんなことを考えながらも足は中央区を抜け、第一商業地区に入っていた。中央区とはまた違った活気がオレらを呑み込む。ここはちよつと苦手だ。いろんな匂いや音が混ざって襲い掛かってくるみたいだからだ。空気に酔いそうになる。

だから自然と足は早くなっていた。隣を歩くロウも、さっきまでの元気がしぼんでいく。やっぱりロウも苦手らしい。

「……なあシランー」

「好きにしろ。オレも好きにする」

「……」

「なんだ？」

「やあ……ふて腐れてる？」

「なんでそうなる」

「そんな感じだからだよ」

「……気にするな」

ふむ。腕を組んで考え込んでみる。……うん、面倒だ。結論は出てるし。

「はい」

「……なんだこの手は」

「ひょいっと帰りたいだろ？」

「……別に多少は慣れている。図書館にも良く行くからな。俺は普通に帰れる」

「でも一緒にいんだし、一緒にいいじゃん？」

「……俺は一般人だ」

「んで非常識一家の家長なんだろ？」

「お前が言うか？」

「言うさー。な、ロウ？」

「なんだ？」

無責任に話を振ってみたなら普通に聞き返されてしまった。まあいいや。

「ズバツと帰ろうぜ、ズバーと」

「ズバか？ いいな、ロウそれがいい！」

「ロウ、わかって答えてるか？」

「まあまあ、些細なことは気にしない気にしない」

何かもう良いや。ロウも良いって言うてるし、人ごみ歩いてるのも面倒だし、それに。

「おい、や、やめ」

「しーらねっ、とお！」

無理矢理シランの腕を掴むとひよい、と持ち上げた。腕だけじゃない。シランの体ごとだ。あたふたするシランは無視でそれを抱えると、ロウに目配せする。

「んじゃあ、行きますかー」

「ズバ、だな！」

にっこにこな二人と。目を白黒させて抱えられた人。

あー、なんつつかな……。

「「とうっ」

「放せー！」

たのしーんだ、なんか。それに、何よりシランの反応が面白い。オレとロウは息もぴったり飛び上がると、手近な建物の屋根に飛び乗った。

「よし、ズバツと帰るぜ」

「ズバツと帰ろー」

「馬鹿か！」

最後の一名は無視。オレは北を、第六守衛地区の方向を、オレ達の家を見据えると、にかつと笑った。

「家まで競争！」

「ロウ負けない！」

「俺を抱えたシンの方が不利な勝負をするな！」

うん。いいかんじに混乱して突っ込みどころが可笑しなシランが楽しい。だからオレは無駄に自信満々に言ってる。

「なに言ってたんだ。シラン程度重荷になるわけない！ オレの勝ちに決まってるんだろ」

「いやお前、本気か？ 本気で本気出す気」

「ふふん。オレが負けに甘んじるような大人だとも思ったかシラン？」

「そこは自慢するところではない！」

「スタート！」

「話を聞けええええええ」

オレの掛け声と共に勝負の火蓋は切られた。二人の元野生児の瞳に手加減の文字はない。

と言つても、空を飛べるわけでもないので勝負内容は地味だ。屋根から屋根へ跳び移り、家を目指すのみ。まあでも他の人がやってるとこは見たことないし、多分変なことなんだと思う。シランも反対したし。

でもさ。人ごみ苦手なの我慢してもしようがないし、別に悪いことじゃないよな？

まあ、多分跳び移る時の浮遊感が慣れないから怖いんだろうけどな、シランは。でも落とすわけないし、慣れれば楽しいし。

ってことでオレは全力で跳んでいた。

シランの怒声というか悲鳴は長く尾を引いていた。

「はっはー、オレの勝ち」

「うー、シンの方が不利なはずなのにー」

「何を言うか。シランを持ってこそオレの真価は発揮されるのだー」
「ずるいぞシンー」

とか言うやり取りをしながら家に入っていく。ぐったりしたシランは丁寧に椅子に座らせた。

「酔った？」

「……大丈夫だ」

「水飲む？」

「……いやいい」

「そか」

やりすぎたかなあ、と内心反省。楽しいし、シランも人ごみ苦手だからやったけど、逆効果だったかなと肩を落とす。まあ夕飯の準備でもするかなと歩き出すと、いきなりシランがむくつと起き上がった。思わずびくつとする。

「シン」

「な、なんだ？」

「……感謝しづらいが……でも感謝する」

「へ？」

「街中歩くよりは……随分マシだった」

それは。それはさっきのことか？ 感謝、されてるってことは、良かったのか？ なら、なら……。

「良かったあ」

「……泣くなよ」

「泣かねえよ、こんくらいでー。でも良かったあ。シランが嫌なことしちゃったかもって思っ……良かったあ」

そんなこと言いながらも実はちよつと泣きそうだった。だってシランに悪いことするなんて、嫌だ。さっきは調子に乗りすぎたとか

なり後悔しそうだった。

心底安堵した。

だから泣き笑いみたいな顔になる。自然に泣いちゃうし、笑っちゃうんだから仕方ない。

「シン大丈夫か？」

「うん、大丈夫大丈夫。夕飯作るからな」

「ロウ手伝うぞ」

月のような瞳がきらきらと向けられていた。けど少し考えてから言う。

「今日はいいよ。ロウも面接とかで疲れたろ？」

「ロウ元気だぞ」

「いいの。それより明日のオレの仕事一緒に行こうぜ。ロウも慣れなきゃな。何かしら仕事しないと」

「そうだなっ。じゃあそうする！」

「……ロウ、もう少し落ち着いてからでもいいと思うが？」

シランの言葉だ。それにちょっと拗ねた気分になる。

「なんだよー。オレン時は直ぐに仕事だったじゃんかよ」

「お前はもう大人と変わらない歳みたいだったからな。でもロウは子供だ」

「ロウ出来るぞ？」

「そうだ、ロウは強いんだ！ 即戦力というのはまさにロウのことなんだぞ！」

「……好きにしろ」

なんだか急に面倒臭くなったような顔になると、シランはまた机

にうつ伏せになった。その様子にちよつと心配がむくむくと沸き上がって来そうだったが、シランが気にするなと言つように手を上げたのでそれも治まった。

夕飯の準備、だな。

「さて、今日は何が出来るかなー」

「……せめて何を作るかな、にしてくれ」

オレはそんな突っ込みに笑顔で答えた。

「ムリ！」

006 吹雪と睡魔【狼】（前書き）

初のロウ視点です。主にロウが頑張る話です。つかロウだけ頑張ってます。そしてさらっとシンの能力的なものをシランが言ってる、けど、まあ現時点ではあまり気にしないでいいところですな！。まあそんなロウ君の頑張る六話目をどうぞ。

006 吹雪と睡魔【狼】

「シン大丈夫かあ？」

「……………あ……………」

全然大丈夫そうじゃなかった。今にも倒れそうな危なっかしいシンに不安になる。それにしても……………。

「まっしろ」

「……………う……………な」

どうもシンは「そうだな」と相槌を打っている、と言うか打ちたいようだ。しかし言葉になっていない。それ程までに眠いらしい。

これは、重症だ。

「シン戻る」

「……………や……………いごとお、……………なきや」

ほとんど言葉にならない言葉。でも不思議と何となく伝わってくる。いやだ、仕事やんなきゃ。多分そんな意味だ。口ウはため息を吐いた。白く、吐く息すらも一瞬で凍り付いてしまいそうなくらいいや凍る間なんてない程強く吹き付ける風があるからいくら寒くてもそれは無理か。

「ふぶき」

見事に吹雪いていた。視界はほぼゼロ。寒さは無視出来ても、視界がないこの状況は無視出来ない。見えないんだけど。

「……シン」

シンは今にもこの凍える風に吹き飛ばか、生きた雪だるまになりそうな様子だ。動きが緩慢で、シンらしさが微塵もない。防寒具でぶつくりと太ったシンは、それでも寒さに背中を丸め、凍えていた。

「だから口ウ行くって言ったのに……」

話は少しばかり遡る。それは今朝のことだ。

「冬眠か、シン」

「………ん、あ？」

かなりの間があつてようやく微かに反応があつた。シンはとろんとした目をしばたかせ、ゆっくりとシランを向き、しばらくぼんやりと見てから言った。

「……呼ん、だか？」

「タイムラグがあるな」

「ん……ああ」

「起きているか？」

「……ん……お、てる」

「………」

びつくりした。正直驚いた。シンが恐ろしく反応が悪い。と言うより、全く起きてない。一応意識がある、と何とか表現出来るレベルだ。一体どういうことかと、疑問をシランに視線という形で問い掛ける。案の定、シランは直ぐに気付き、溜め息混じりに教えてくれた。

「変温動物、に近いらしい」

「へんおん動物？」

「自立した体温調節ではなく、外部の温度変化により体温を調節する動物だ。トカゲやカメが当たるな」

「……シンは、何？」

「ドラゴン。……多分爬虫類に入るのだろうな。外見的にも、恐らく」

「シン、ドラゴン？」

「まあ自称、だがな」

シランは不機嫌そうに顔をしかめた。わからないことがあるのもどかしい、といったところだろうか。いつもの不機嫌をより深めたような顔をして眉間に皺を寄せていた。

「しかし実際、皮膚に鱗を出したり、火を吹くことを鑑みるに……

まあ普通の人間ではないことは確かだな」

「火い吹くのかシン！」

「ああ。今度見せてもらえ」

「うん！」

凄いなシン、とか思っているとシランが深々と溜め息を吐いた。

「一番妥当なのが何か爬虫類の変異種の遺伝子を持った人間なのだろうが、火を吹くとなるとわからんなあ……」

どうもそれはシランの悩みの種のようにばやくようにそんなことを呟いていた。

「なあシラン。変温動物だとどうなる？」

「……ああ続きか。変温だと環境の変化に弱いらしいんだ。自分で

体温が調節出来ないから、体を動かすエネルギーを確保出来なくなる」

「暖かくなないと動けないのか？」

「まあそういうことだ」

「ドラゴンなシンは寒いと動けないのかあ」

「まあ人間部分もあるから全くではないが……かなり機能停止に近いな」

「ふうん」

話を聞いて改めてシンを見る。話の途中で力尽きたようで、机に思いつき顔をぶつけて眠っていた。腕を触ってみる。人にしてはひやっとした感触だった。

「大丈夫かシン」

「駄目だろうな」

「……」

返事はやっぱりなかった。そんなことをしている間にシンの仕事の時間が来てしまった。仕方ないからロウが行く、と出ようとしたら死霊のようなシンに足を掴まれ、結局半分寝ながらも意固地になったシンが無理矢理ついてきて。

「………っ、あ」

シンは小さな小石に器用に躓くと、顔からもろに雪に突っ込んだ。

「……」

目も当てられないような状態になっていた。

「シン、大丈夫かあ？」

「……ああ……うん」

シンの首根っこ、と言うか防寒具をむんずと掴み、シンを救出してそう尋ねると、多少ましな返事がようやく返ってきた。しかしどうしたらいいんだろ、という感じだ。

とりあえず面倒になってきたので掴み上げたシンを持ったまま口ウは歩いた。遅れ気味だった荷馬車に追い付くと、ふにゃふにゃなシンを荷台に放り、ロウは御者台に顔を出す。

「馬大丈夫かあ？」

「なんとか、ね。シン君は？」

「多分だめだ」

「あはは、そっか」

苦笑いをして答えるのは今回の依頼人さん、ハギノさん。シランと同じくらいの年格好の優しそうな男の人だ。切れ長の目を和ませ、吹雪の中とは思えない程安穩とした調子で話す。

「ロウ君が来てくれて良かったよ。ロウ君は寒さに強いのかい？」

「うん。ロウ寒いのが得意だぞ」

「うんうん、頼もしいね。あと少しだからお願いね」

「うんっ」

力強く頷くと御者台から今度は屋根の上に跳び移った。見晴らしは全く良くないが、多少はわかりやすくなる。痛いくらいに吹き付ける風とか雪の塊に負けず、毛皮のフードの中で耳をそばだて、鼻を利かす。何となく、何となくだけど予感がする。来るのか、来ないのか。

じつ、と氷の彫像のように静止して集中していると、耳が何かを

捉えた。目を見開き、辺りをよく目を凝らして警戒する。すると視界の隅に動くものを見つけた。直ぐに屋根から降りるとハギノさんの隣に立った。

「来たぞ。走って」

「ロウ君、流石にこの天候でこれ以上のスピードは無理なんだ」

困った顔でそう返されてしまった。そっか。……ならわかった。

ロウは御者台から小窓をするりと抜けて荷台に行くと、死んだようにぐたーとなったシンの肩を掴んだ。

「シン起きるー！」

ぐいぐいと肩から体ごと容赦なしに揺らす。しかしシンは起きない。むうっ、と膨れっ面になったロウ。もう本気なんだぞ、とばかりに今度は頬をバチンバチンと叩き始めた。

「シン〜！」

「……っ……って、えよ」

弱々しくも何とか開いたシンの目はかなり涙ぐんでいた。

「ロウ、痛い……」

「シン馬車守る、ロウ行くっ！」

「守る、だな？ わかった、わかったから痛い……」

シンは腫れ上がった頬を泣きながらさすっていた。流石にやりすぎたので手短にでも謝ると、ロウは再び屋根の上によじ登った。いた。

それは綿のような毛玉のような白い玉だ。いや白い玉のような生

物だ。雪に紛れたそれが吹雪の中、ポンポン跳ねていた。たくさん。

「……」

初めて見た。なんだろあれ？

でもあんまり大丈夫ではなさそうだった。跳ねてるだけなら平和そうだけど……多分それだけじゃ終わらない。

だからロウはフードをぐいっと深く被ると前屈みになり、爪を構えた。

一つ、他より強く弾んでいたやつが一番乗りを決めたらしい。一瞬動きが止まったかと思うと、縮こまり、一気に伸び上がった。狙いは馬。白い玉はがばつと中身を見せるように開くと、上から馬目掛けて落ちていく。それを。べしつ。

と叩き落とした。白い玉もどきは思いつきり地面、と言うか雪、に叩きつけられたが、特にダメージはなかったようでもまた跳ねた。でも警戒はしたようだ。

だからか今度は本気だった。待っていましたとばかり待機組が一斉に飛び掛かって来たのだ。

ロウを狙って。

赤い赤いおっきな口を広げて。

「うあああつ！」

はつきり言って。

悪夢だった。ホラーだった。

白い玉の中は口だったんだ。口しかないのかって言うほど歯がびっしりと並んだ真つ赤な口腔を見せ付けるように跳ねてきたのだ。団体さんで！

ロウはかなり必死だった。いくら野生児と呼ばれるような生活し

ていても、こんなのに狙われたことも襲ったこともない。本気で恐怖を感じながらもロウは必死に対応する。

まずとりあえず逃げた。避けた。まずあんなの正面から受けられないので避けた。幸いロウ目掛けてやってきたので馬には届かなかったから。

そして落ちたやつらに狙いを定める。白い玉もどき。大きさはロウの両の掌をいっぱいに広げたくらいの幅で、丸い。頭くらいなら丸呑みされそうだ。だから狙いやすいと言えそう。なので雪玉の山のようになったそれを、思いつきり。

殴った。

だって一つ一つ切りつけるにしたって、数が多すぎる。だから滅多に使わないようなことだけど、殴った。爪は収納してから。

プギイ！

変な悲鳴のような鳴き声がした。でもとりあえず。殴る。渾身の力で殴る。殺さなくていい。ただしばらくは襲ってこないように。

あとは時間稼ぎ。

馬車は上手くロウと白玉を避けてもう走り過ぎている。シンに頼んだから大丈夫。多分、大丈夫。……大丈夫だよな？

とにかくロウは出来るだけ多くを引き付けて、適当に弱らせて逃げ切れれば良い。

脇から最初にあしらったのとか、殴打から逃れたやつが再度襲い掛かってきたけど。

「ロウは負けないぞっ」

また爪を出すと、狼の瞳で笑った。

何とか白い玉ご一行を追いついたので、大急ぎで馬車を追い掛け

ていた。でも多分そこまで先には行っていないと思う。この吹雪だし、護衛がシンだけでは今日は不安だろうから、多分待ってる。だから急いで走っているのだ。が。

「やな感じ」

もしかしたら別の獣に襲われてるかも、と思った。
案の定。

「ロウ君、シン君が……」

熊がいた。多分熊。や、牛？ ……わからない。

はつきり言つてよくわからない生物がいた。でも多分、熊。全身に皮膚が弾けるんじゃないかってくらいに肉を詰めた、筋骨隆々な熊だ。それとシンが戦っていた。眠気でふらふらなまま。

急いで間に割り込むとシンを抱えてそのまま通り過ぎた。

「シン大丈夫か？」

「……まあ、何とかあ、あ」

「……」

やっぱり駄目かもしれない。

とりあえずシンは離脱させることにして馬車付近にほっぽると、ロウは二本足で堂々と立つ熊に向かい合った。

ロウの獲物は大体こんなのだ。あんまり小さいと面倒で手間なので、大抵大物を一頭狩ったらそれを腹に詰め込んで数日もたせる。だからこういうある程度大きなのは得意だ。

でも、ロウは狩りが得意なのであって、殺傷は得意ではない。そういうところは器用じゃないのだ。そして今は食事してる場合じゃないし、そんな時間はない。今立ちほかかる熊は、ただの障害でし

かないのだ。

なら、退かす。

それだけでいい。

「帰ってくれ」

……………。

返答はなし。殺意はあり。

それならいいよ。受けて立つぞ。

そう無言の内に意思伝達を済ますと、ロウは腹を決めた。熊の目の前までずんずんと迫ると、熊の手に自分の手を伸ばした。

……………届かない。

身長差に理不尽を感じながら、少しいじけた気分になりながら、仕方ないのでぴょんと跳ねた。それでようやく熊の手を掴めたのでぐつと腹に力を入れ、前転をするように体を捻った。

どったーん、と。

ロウは全身を器用に一転させることで熊の巨体を思いっきりを投げ飛ばしたのだ。

背負い投げ、というのを一応知っているが、多分違っただろう。掴んだ手を無理矢理引き寄せ、そうして強引に相手の体を浮かせて、これまた力任せに地面に叩き付けたのだ。熊は全く反応が追いついていないようでぽかーんとした顔で固まっていた。

まあ、いいだろ。

……………ちよつと惜しいけど。けど。

「シンの料理が待ってるからなっ」

だから帰りに会っても食べないぞ、熊っ。と聞いてなさそうな台詞を言うだけ言っと、ロウは馬車に戻ろうと振り返った。

馬車が横転しかけてる。

「ロ、ロウ……」

「シン!？」

何だか呼ばれているので慌てて馬車まで駆け戻る。

どうもさつき熊を叩き付けた振動で馬車が傾き出したのだろう。

それをまあ仕事の一環だし支えようとしたのだろう。けれど睡魔という敵と戦っているシンにはあまり力が出せなかったのだろう。

だからシンはピンチだった。今にもシンは馬車に押し潰されそうだった。

「ウ、……」

倒れる！

ロウは思いっきり地面を蹴った。弾かれた球のように、猛スピードで突っ込んで行き。

「……ロウ頑、張った」

息切れしながらも何とか手を伸ばし、傾いた馬車の側面を支えた。間に合ったみたい。軽く力を入れて車輪で立てるように戻してやる。ロウにとってはさほど重くはなかったけど、シンにとっては重かったな、と思った。そして足元でどさっ、というシンの力尽きた音を聞く。

「ドラゴンも、大変だなあ」

限界を越えて本格的に眠り始めてしまったシンを見て、シランがいつもするようにロウは苦笑した。

「ただいまー」

「……あ……いま」

「……苦勞かけたな、ロウ」

早速勞われてしまった。シランは本当に申し訳なさそうに、背負われたシンを見ている。

「ロウ頑張った！」

「ああ、偉いなロウ」

ぼん、と温かい手が頭に乗った。ちょっと硬い、でも優しい手。

偉い偉い、とロウの頭を撫でてくれた。ロウは照れ臭くて、嬉しくて、えへへと笑う。

シランはそうしてからまたシンに視線を移すと、苦笑しながら言った。

「さすがに寝かせてやるか」

「だなっ」

毛布を引っ張ってくるとシンを降ろした。もうだるんだるんなシンはもぞもぞと毛布を体に巻き付けると落ち着いたのか、直ぐに眠ってしまった。

「だらしないやつだな」

呆れ顔で呟くが、どこか安心したような雰囲気もあった。それを見て、ロウは閃いた。

「そっか」

「……何がだ？」

いぶかしげに問うシランに向かってにつこりと笑むと、ロウは言った。

「シラン心配だったんだな、シンのこと！」

「……当たり前だろう。こんな状態、なんだからな」

いつもより不機嫌そうでもあり、どこか照れたようにも見える、動揺したシランの言葉が返ってきた。

ふと、仕事中に考えたことを思い出し、シランに質問する。

「明日はシンの料理、食べれる？」

「……さあ、な。気温が戻れば直ぐにでも復活するだろうが……そんなこと、誰にもわからないだろう」

シランは窓の外、未だに真っ白な雪が舞い、吹き付ける景色を見て言葉する。

「昨日は秋晴れだったのにな……」

「ん？」

「いや……独り言だ」

シランはそう言って深々とため息を吐いて、また一言漏らした。

「まだ十月のはず、なんだがなあ……」

その意味を知らないロウは、ただ小さく首を傾げることしかできなかった。

007 家と役目【真】（前書き）

予定は未定ってことで予定無視して全く別の話を上げます。今回はシン視点の短い日常の話です。まあゆるいんで軽く読んでくださーい。
では第七話をどうぞ。

007 家と役目【真】

キッチンと机。それがこの家の全てと言っていい。

まず二つある戸口を遮るような中央に立派な木の机がある。そして折り畳みの椅子が三脚、机を囲むようにあった。大体席は決まっ
ていて、キッチン側がオレ、裏口と呼んでる戸の方がシラン、表と
呼んでる戸側がロウだ。

あとは本棚。と言ってもいろんな物が入っているので混沌として
いるが、その本棚が裏口の手前の壁にある。だからシラン定位置は
その近くだとも言える。ちょうど目線の高さ程の棚二段はシランの
本が占拠しているのだから。

以上が狭いと連呼される観月家の全てである。と言っても、シラ
ンの工房という離れが裏にある。因みにシランはそこで寝て、オレ
とロウはこっちの家で雑魚寝だ。

そんな狭っ苦しい家をシランはあまり好きではないようだが、オ
レは結構好きだった。狭い方が何だか落ち着くし、掃除も楽だから
な。

と、言うわけで、掃除だ。

「シラン、散歩行ってこい。掃除すつから」

「……なんで追い出されるんだ。俺も手伝っぞ」

「でも狭いだろ？ 一人でやった方が動きやすいの。嫌だったら工
房の掃除してろよ」

「……わかった」

とぼとぼとシランが出て行った。多分散歩だ。シランは結構マメ
だから工房は案外清潔にしてある。まあ寢床でもあるし、当たり前
か。結局やることがないからぶらぶらして来るのだろう。

「一時間くらいしたら良いからなー？」

「……適材適所だよな」

と返事なんだがよくわからないことをぼやきながら行ってしまった。まあ、多分聞いてただろう、と判断する。因みに口ウはお仕事で夕方まで帰らない予定だ。

……よしっ。

「やるか」

オレは意気揚々と腕捲りをした。

「珍しくないけど珍しいことしてんな、お前」

「お、ハンダじゃん。なんだ？」

砂やら埃を外に掃き出しているところに声がかかり、振り返るとムサイおっさんがいた。まあハンダだけど。

「いやあ、掃除なんてやんねえからな。マメなことだ、と思ったんだよ」

「なんだとー？ 掃除しないなんて病気になるぞ？」

「そこまで不潔にはしてねえよ！ でもまあそうやってちよくちよく掃除するのは偉いな、と」

「三人も出入りするんだ。ちゃんとやんないとな。スズさんなんて毎日やってたんだぜ？ オレはそこまでは出来ねえよ」

「でもお前仕事があるんだし、いつも家にいられたスズさん比べんでも……」

「いーや、やっぱり頑張らないと。家の管理はスズさんに託された

オレの仕事なんだからな！」

「……主婦対主夫か」

「あ？」

「やあ、なんでもない。とにかくあんま根を詰めるなよ。お前のおかげで依頼の回転が随分と早くなったんだ。お前に倒れられると俺がどやされるんでな……ほどほどにな、頑張れよ」

「おう！」

満面の笑みで応えると、ハンダもにと笑った。ハンダはオレより少しだけ背が高い。それが何だか少し安心するのは何故だろうか。そんなことをハンダの後ろ姿を見送りながら思っていた、が。

「おおつ。掃除掃除……」

我に返ると慌てて掃除を再開したのだった。

「綺麗だな、家！」

「お、わかってくれるかロウ。そうだぜ、今日はちょっと久々に掃除したんだ」

「ありがとーシン」

「良いつて良いつて」

何だか照れくさくて頭を掻く。ロウは素直に感心するように黄色の瞳を輝かせてオレを見てきた。恥ずかしさを紛らわすようにシランに話を振る。

「いつものことだよな、シラン」

「そうだな、お前がいつもやってくれていることだ、いつも一人だな。本当にご苦労だ、感謝している」

あ、あれ？ やたら早口な上に険のある言葉に、驚いてシランを見返してみるが、なんだか目を合わせてくれない。しかもいつもより不機嫌度が上がっているような気もする。あ、あれえ？

「し、シラン？ …… なんか、怒ってる？」

「怒る？ 怒るわけないだろう。いつも一人で手早く綺麗にしてくれるシンを有り難く思っている」

「いや、でも、怒ってるだろ？ なあ、なんか悪いことした？ オレ何かした？」

「だから怒っていない。俺は手伝っていないからな。お前のおかげだ。だからお前はロウに感謝されるべきだ」

「あつ、あつ、追い出したこと根に持つてるな！ なあそうなんだろう？ ごめんって、言い方悪かったよって、だからねちねちと責めないで！」

「責める？ 責めるわけがないだろう？ 俺は何もしていないんだからな」

「うわー、シランが壊れたー」

「シンっ、ロウ今度は手伝うぞ！」

「え？ 別にいいけど」

急にロウの言葉が割り込んできたことに不意をつかれつついつい普通に通じ承してしまった。でも一瞬で後悔した。なぜなら左に座る人から凄くない機嫌オーラがオレを襲ったからだ。

「…… 何故俺は追い出して、ロウは手伝わせる？」

「ああ！ やっぱりロウはいいよ、仕事大変だし！」

「シンも仕事大変だぞ？」

「そうだ、お前は」
「あー！」

大声出して無理矢理二人を止める。気持ちを汲み取ってくれたらしく、二人は大人しく黙った。

「わかった。わかったから落ち着け」

「……」
「なんだ？」

とりあえず落ち着いたようなので話す。

「まずシラン。シランは工房もあるし、家のことは良いよ。こっちはこっちで寝てる組でやるから。……ダメか？」

「……そうか。わかった、そうしよう」

「じゃあ今度はロウもいる時に掃除しようか。ロウもそれでいい？」

「わかったぞ。ロウ頑張る」

「……ふう」

収まったようだ。何だか疲れたなー、と思う。シランは生真面目だからな、何だかんだで気にしてたのか。でもまあこれで一件落着くということだ。

「飯にしますかー」

とまた腕捲りをする、キッチンに向かったのだった。

「……お前は働き過ぎな気がする」
「シンお仕事好きなんだよ」

そんな言葉を背に受けながら。

008 歩いていくために【狼】（前書き）

なんだこの真面目そうなタイトルは！こんなとこで使って良いのかと思うけど案外真面目な話な気もするので良いんじゃないでしょうか、と自己完結してこのサブタイトルになりました。

でもロウとシランのちょっと気が抜ける感じの会話がちょいちょい挟まっていると思うんで大丈夫です多分。無駄に設定があるので今回はなんだかわせぶりな回になってるかもしれませんが当分放置になると思いますが容赦を。

では、ほのぼのなスタートのシンが全くいない第八話が始まりますつ。

008 歩いていくために【狼】

シランはいつも本を読んでいる。大抵家にいて、ずっと読んでいる。

「シランは仕事ないのか？」

「……」

いつもの顔が引きつった。

「……急になんだ？」

「だってシラン本読んでばっかだ」

「……まあ、そうだ。有り体に言えば、仕事がない。かと言って好きなものを打ってられる程鉦物は自由ではない」

「シラン何する人か？」

「……言っていないかったか」

「言っていないぞ」

「鍛冶師だ。刀鍛冶、と言いたいところだが、刀だけでは商売にならないからな」

「かじし？ かたな？」

「鍛冶師と言うのはな……金属を鍛え、加工して物を作ることが職業とする人、といったところか。で、刀と言うのは……端的に示せばこれだ」

そう言っただけでシランは本棚に立て掛けてあったものを机の上に置いた。何となく見覚えのあるような形に首を捻る。

「かたな？」

「そうだ。シンも持っていたらどう？ オレとしてはこちらが本業

「なんだが」

シランは慣れた手付きで二点を持つと、すつ、と慣れた手付きで両側から引っ張った。いや、滑らせた、と言った方が正しいみたいだ。

すらりと伸びた、鈍く光る銀色に、目を奪われた。

「わぁ……」

「綺麗だろう？ 刀と言うより日本刀と呼んだ方が正しいか。この武器はな、折れず・曲がらず・よく切れる、という三点を多くの日本の鍛冶師が追求したことにより生まれたものなんだ。少し前は美術品としての価値ばかりに注目され、碌に本来の役割を果たせずにいたそうだが、この時代になったことで再び武器として扱われるようになり、有用で強力な、変異種だろうと幾らでも斬れる得物として普及し始めたのだ。しかし高価であるし、生半可な腕の者が持ったならどんな業物でも無用の長物にしか成り得ない。しかし刀とはやはり何かを守るために在るものだ。俺は考えている。だから俺の居る時代が確かに俺の打った刀がその役目を果たせるものであったことに感謝している。だが刀が何かを守るということは同時に何かを奪っているということだ。それは武器を製造する者として肝に銘じておかねばならないことで、それに」

「……シラン？」

「……悪い。調子に乗ったな」

びっくりした。相変わらずの不機嫌顔ではあったが、その中にも嬉しそうな時や難しい顔の時があって、なんだか表情豊かなシランだった。シランがあんなに楽しそうに、長々と話すなんて。

「よっぽど刀が好きなんだな」

「……ああ。好きだからやっている」

「すごいなっ。良かったな！」

「……と、とにかく。無職では、ないんだぞ、俺は」

なんだか照れくさそうにするシランがちょっと面白かった。

「うんっ。シラン鍛冶師頑張れ！」

「ああ、自分の仕事は常に最高であるように努めている。大丈夫だ」

一転して真剣な顔になった。迷わずそう断言したシランを凄いと思う。かっこいいと思った。やっぱり職人さんっていうのは誇りを持って仕事を全うする人だな、と何だか嬉しくなってしまう。それと同時に懐かしくも、ある。

「……どうかしたか、ロウ？」

黙ったロウに違和感を持ったのか、いぶかしげにシランが問い掛けた。ロウはちょっと困った顔をしたけど、結局素直に思ったことを口にした。

「ロウ、職人さん好き。ミエもそうだったから」

「ミエ……誰かの名前か？」

「うん。毛皮作ってくれたのもミエなんだぞ」

「ああ、あの狼だか犬の毛皮か……あれは見事だ。相当腕の良い人なんだろうな」

「うんっ、ミエは凄いんだ。死んだ体にも役割を、意味を与えられる、凄い人だぞ」

「……そうだな」

シランはゆっくりと頷いた。言葉を理解し、噛み締めるような動きは何だかシランらしい。

「友達か？」

「んー……ロウはよくわかんない。でも大切な人だ。優しい人。シランにちよつと似てるな」

「そう、なのか？」

「うん。拾って住ませてくれるとことか」

「……」

「心が広いつて言ってるんだぞ？」

「……そうか」

何故か複雑そうな顔をされた。小さく「似たようなことをする人はいるものなんだな」と呟くのが聞こえた。その辺りが何やら感慨深いようだ。しかしふと、何かに気付いたようにロウを見るとシランは聞き返すように言った。

「一緒に住んでいた？」

「そうだぞ。少しだけ。確か一年くらい」

「……道理でシンよりはものを知っているわけだ」

やたら納得顔のシラン。そんなにシンは大変だったのか、と思っただけそう言えば銭湯のエピソードがあっただけだと思ひ、ちよつと口ウも納得してしまった。

「ならもしかして読み書きは出来るのか？」

ちよつと期待のこもった目で見られたが正直に首を横に振る。

「ううん。基本、おしゃべりしてたから。でもミエ手紙書けてた。だから教えてもらわなかっただけ」

「そうか」

「ほんととはな、もつといろいろ、読み書きとかも、教えてもらいたかった、んだぞ……」

「……そうか」

「……」

この話はやめよう。そう思った。大切な思い出だけど、今傍にいてくる人を心配させることはない。今口にする必要のある話、でもない。

「ところで」

「……なんだ？」

唐突な切り替わりにシランがきょとした顔で聞き返す。

「シンは読めるか？」

「……出来ないな」

深々とため息を吐いてシランは答えた。これまた悩みの種のような。……シランって大変そうだな、いろいろ。ふとそう思った。

「あいつは本当に食わず嫌いと言うか……直ぐ逃げるんだ、この手の話題になると、な。だからまともに教えられたことはないな」

「シン嫌なのかぁ」

「ロウはどうなんだ？」

「んー？」

何のことか？ とロウが小さく首を傾げると、シランが言葉を続けた。

「本を読んだり、手紙書いたりしてみたいか？」

シランは興味深そうな、好奇心が宿る深い夜空の色の瞳でロウを見ている。したいこと。ロウのしたいことか。ちょっと考えてみる。

「シラン本読むの楽しい？　好きか？」

「……」

シランは不意を突かれたような困った顔をした。でも考え込むように少し俯くと、ロウの目を見てはつきり答えてくれた。

「昔は暇潰し以上の意味はなかったが……今は楽しいし、好きだな。先人の、他者の考え方や知識を知ることが純粹に面白い。そして直接的に生きる糧になることもある……つまり、為になるな」

「おー、本つてすごいっ」

「ああ。書物は文字の意味を知っていれば誰でも見て得ることが出来る。まあ今はかつてのような大量生産は不可能だが、今でも数冊この街でも発行している。特区と呼ばれる程の規模を有した都市でも、そうそう出来ることではない」

「八区はすごいんだな！」

「……一応正式には第八特区だからな？　この街は」

「わかってるぞ？」

「ならいいんだが……」

ちょっと心配そうな顔だ。そこは来たばかりのロウでもちゃんとわかってるぞ。気を取り直したシランが話を戻す。

「で、どうなんだ？　読み書き覚えたいか？」

「教えてくれるのか？」

「それは……当たり前だ。お前の保護者を務めるからには、一般教

養を教える義務があるからな……まあそれは大分昔の話で今は法律もなく、正しくは過去形なのだが……」

何だかしどろもどろだ。でも気持ちは伝わってくるし、何を言いたいのかわかる気がする。泳ぎまくっていた黒い目がようやく止まり、ロウを見た。

「……どうなんだ？」

だからロウは満面の笑みで答えた。きっとシランが欲しい答えだし、それに……。

「あのなつ。ロウ、忘れたこといっぱいあるけど、それ以前に知らないことも、いっぱいある」

そう。ロウも知りたいことがいっぱいある。知らないことばかりなのだ。

手探りでずっと歩いていた。

いや、ただただ迷っていた。始まりも終わりも見えない世界を。前に突き出した目標のない手は、一度温かい手に出会って拾われた。けどそれは抗えない時の流れに離れてしまった。だからまたさ迷って、走って、転んで、真っ暗闇をがむしやらに進んで、歩いて、不安になってまた走って、躓いて転んで。

また、拾われた。

よいしょ、って立たせてくれて、明るい道を一緒に歩いてる。隣で手を引いて歩いてくれる。でも、頼ってばかりじゃ駄目だと思っから。また離れても、ちゃんと前向いて歩けるようにならんくちやいけないと思っから。

だからロウは踏み出したい。

うつん。踏み出すよ。

だからその一歩だけ、もうちょっとだけ、手を引っ張って欲しい。
だからシラン。
甘えかもしれないけど。

「教えてくださいっ」

それにシランはふっ、と頬の筋肉を緩めて、嬉しそうに微笑むと待っていましたとばかりに答えた。

「請け負った」

その顔は、何だかシンに似ているな、とちょっと思った。

009 シラン先生と勉強会【紫蘭】（前書き）

タイトルがふざけてるって？ 今更です。 気にはいけません。
話はサブタイ通り。まんまです。
では久々にシラン視点の第九話をどうぞ。

009 シラン先生と勉強会【紫蘭】

「勉強面白いな、シランっ」

「……………」

「シラン。なんでロウを撫でながらオレをそんな目で見る?」

「爪の垢をもらう相手が出来たな、シン、という意味だ」

「……丁重に断らせてもらう」

「なら俺はロウに頼み込もう」

「どうやって?」

「……ロウ、お菓子食べたくないか?」

「食べるー。頼み引き受けるぞ」

「うわ、きたねっ! 食べ物で釣りやがった!?」

「さあ、ロウの爪の垢を煎じて飲まされるか、自分から読み書きを学ぶか、どうする?」

「ぎゃー」

そんな平和な時間。

俺は今、ロウの先生だ。……大袈裟か。

この間読み書きを覚えたい、と気合い十分な希望を受けたので今日から早速授業だ。図書館から目星をつけていた資料を借りてきたので朝食を終えると直ぐ様始めたのだ。

まあ適度な休憩も必要だろう、としばらくそんな調子でシンに軽く逆恨みな仕返しのような会話をすると、気が済んだのでロウの家庭教師を再開する。しかしシンはどうしてこう頑なに拒むのだろうか……。

そしてまた家の中は静寂に包まれた。シンは「洗濯だ」と鼻唄混じりに出て行ったので本当に静かだった。

「シラン、合ってるか?」

「……ああ、正解だ。平仮名はもう大丈夫そうだな」

「カタカナも大丈夫だぞ？」

「そうか……じゃあ簡単な漢字に行くか」

「うん！」

しかし……本当に速いな。ロウの覚える速度。平仮名の表を見せただけで覚えたと言うのでテストをしてみたが、慣れないため多少歪なこと以外、特につかえるでもなくすら書いてしまった。

昔の十歳くらいなら当たり前かもしれないが、今の時代では俺の倍生きた人でも読み書きが出来ない人はざらにいるだろう。逆にこの街の識字率が異様に高いと言っている。紙の生産も盛んであるし、かなり以前の生活に近いのではないかと思う。特に中央区辺り、行政を取り仕切る役所仕事に従事する人々はほとんど出来るのだとか。斯く言う俺は父の趣味だった読書に興味を持った時期があったため、父に教えてもらったのだ。父は人と話す代わりに鉄や文字と話しているみたいな人だったから。

そして今俺は父から習ったことをロウに教えていた。こうやって先人の文化や知識は伝わっていくのだな、と柄にもなく浸り気味。

「シラン、漢字のは何使う？」

「あ、ああ……確か一応借りてきものがここにあるはず」

ロウの声に我に返った俺は思わず上擦った声で答えた。……今は先生なんだ。今くらいいしっかりしろシラン。自分に言い聞かせると腰を浮かし本棚を漁る。前回返し忘れた本と調子に乗って借りすぎた本で本棚は許容量一杯だった。馬鹿だった昨日の自分を恨みながら落とさないよう気をつけて本棚を探す。

「これ、だな」

昔の子供向けの漢字の本。由来も一緒に学べて丁度良いだろう、
とかなり前から目をつけていたにも関わらず、今まで出番を延々先
延ばしにされていた可哀想な本である。……本自体には何の感慨も
ないと思うが。

「読んでいいか？」

「ん、ああ」

本を机に置くと直ぐにロウが手に取り、早速表紙を捲り始めた。
そして普通に読み始める。確かに基本平仮名で、簡単な漢字の書き
順や由来が書かれた絵本みたいなものなのだが……。

「読めるのか？」

「読めるぞ。シランの選んでくれた本、ロウでも読めるなっ」

「そ、そうか」

……シンに見習わせたい。

そんな無謀な考えが浮かぶ程、ロウは真剣で真面目だった。しか
も吸収力が半端ない。これは直ぐに一人で本読み出すな。もはや予
言でもなく決定事項だ。一人空いた時間、読書をする勤勉なロウが
容易く脳裡に浮かぶ。

「仕事行ってくるなー」

「シン行つてらっしゃいっ」

「……気を抜かず、気を付けて行くんだぞ」

「わかつてるってー。んじゃ勉強頑張れよー」

そんな会話を交わすと着替えを終えたシンが上着を羽織ると表か
ら出て行った。洗濯は終わったのだろう。家事に関しては実にそつ
なくこなすやつだから。

ロウは今日仕事がない日だし、俺は……言わずもがな。
たまに来るロウからの質問に答えながらゆったりと時間は流れ。

「昼、だな」

「そう言えばシンいない時、どうしてる？」

「俺が作ってるに決まってるだろう？」

「シラン料理できるのかっ」

「……」

出来ないと思われていたらしい。まあ、そうだな。普段はシンに丸投げしている身だ。無職で何も出来ない人間だと思われて、どう反論出来ようか。……地味に痛い事実だな。

「ロウは座って読んで待っていてくれればいい」

「手伝うぞ！」

「いや、俺はあいつほど手際が良くないから上手く指示が出せない」

「そうかぁ。わかったぞ」

ロウは素直に引き下がってくれた。俺は本棚から厚めのノートを引き抜くと、台所に向かった。ノートをパラパラと捲り、適当な頁を探す。

「それなんだ？」

「これか？ 母さんお手製の料理本だ。あまり料理をやらない俺や父さん、物忘れがたまに酷い母さん自身のために書き貯めたやつだよ」

「ふえー」

感心の声上がる。それから思い出したように本に視線を戻した。そんなロウに習い、俺もノートに視線を落とす。メニューを決める

と材料と器材を出して早速調理開始だ。シン程ではないが手慣れた調子で進めていく。

料理をしているといつも疑問に思うことがある。それはシンの料理のことだ。

同じメニューでも毎度味付けも具も全く違って謎だが……何故か美味しいのだ。かなり不思議だ。そしてシンの料理の師が俺の母親にも関わらずちゃんと美味しく出来ていることは奇跡だと思う。

本当のことを言うと母さんは何故か非常に料理が下手だ。そんな母さんがシンに教えたのはほぼこの一言のみ。

「料理は感性！」

詰まるところ勢いとか思い付き。シンはまさにこれを実践して自分のままに料理をする。流石に慣れてきてからはある程度法則のようなものがあるようだ……凡人にはわからない何かがあるらしい。未だに俺には理解出来ない。

そんなことを考えながらも順調に料理は出来上がり、昼食の時間となる。基本、俺は黙々と食べ、時折休憩のように話す口ウに相槌を打ちながら滞りなく食事を終えると、片付けもそこに勉強会を再開だ。

そんな調子で夕方、帰宅したシンの一言。

「お前らは金太郎か！」

それを言うなら二宮金次郎だと思う。

そして早速だが後日談。

半田さんに泣き付かれた。

因みに嬉し泣きの方だ。なんでも上に誉められる程正確でわかりやすくまとめられた、見事な報告書が上がったらしい。言わずとも

わかると思うがロウのものだ。

嬉し泣きの場合、泣き付かれたという表現は不適當かもしれないが、まさにそんな感じだったので、まあ、良いんじゃないだろうか。シンにも教えてやってくれないか、と頼まれたが丁重に断った。

「不可能です」

最早シンが何かを書いている場面など、全く想像がつかないのだから。

010 狼少年の謎【狼】（前書き）

ロウ君の謎に迫ってみましょーな回です。ぶっちゃけ中途半端な上に何もわからなかったような気がしてきましたが……あんまり気にはいいけませんね。相変わらずの脱線したお話です。
ではシンの叫びから始まる第十話をどうぞー。

010 狼少年の謎【狼】

「つめ！」

「……？」

いきなりシンが叫んだ。堪えきれなくなっただけだ。……何がだろっ？

「ロウ、お前に訊きたいことがあるっ！」

「……前後してはいないか？」

発言が。

「気にすんなよ些細なことはー」

「……」

シランは放棄したらしい。ため息を一つすると、本を引っ張り出していつものように読み出した。シンもシランはいつでも良かったようで、咎めることはなく、ただただ意気揚々とロウを見て言った。

「さあ、今日こそ答えてもらっぞっ」

隠したつもりも、はぐらかしたこともないのに。で。

「何のことだ？」

「惚けるなー、お前の爪のことだ！」

「ロウとぼけてないぞ？」

と言っても妙なスイッチの入ってしまったシンには通じないらし

い。

「ほら爪！」

とりあえず言われた自分の手を見える。……ふーむ。

「何訊きたい？」

「シン落ち着け」

「……二人で言わんでも」

言ったことは別々でも意味は何となく近かったからか、ちよつとシンの勢いが弱まった。シランはシンの調子が目に余るものだったから口を挟んだだけらしく、直ぐに視線は本に戻ってしまった。でも何かあればまた助けてくれるだろう、とちよつと安心しながら、ちよつと変なシンに目を戻す。

そしてシンもようやくまともに話す気になってくれたようだ。

「ロウの爪ってさ、刀普通に受け止めてたじゃん？」

「うん」

「しかも黒くてぶつとかったじゃん？」

「うん」

「じゃあさ」

「うん」

「どこに収納されてんの！」

穏やかな会話はいきなりの大声によりぶち壊された。まあ、いいんだけどな。

「どっつて……」

指の、付け根に近い方の節目を指差す。

「この辺だけど」

「……出んの？」

「出るよ」

「……皮膚切れちゃうじゃん」

「うん」

「痛いじゃん」

「すぐ治るぞ」

「……大変だな」

「そうか？」

「どんな仕組みになってんだよ？」

「わかんない」

「……そうか」

「うん」

何だかシンが痛々しいそうな目でロウを見ていた。ロウとしては気にしたこともなかったのですがそんなに驚くことなのか、と逆にびっくりだ。

「お前だって異常な治癒力があるだろうが」

「それはそれ、これはこれ！」

というシランとシンの会話が間にあっただが二人の話はそれだけだったようで直ぐにシランは視線を戻し、シンもロウに向き直った。

「でも普通の爪もあるんだよね？」

「うん、あるぞ」

ちよっと硬めで尖った爪が小さく指先にある。でも狩りの時は役

に立たない。でも木登りなんかの時は便利だ。

「なんかすげえな」

「そうかあ？」

「なんでそうなってるんだ？」

「ロウが狼だからだぞ」

「ちなみに足は？」

「なんだ、足は見てないのか？」

シランからの疑問が挟まった。本を読んでいる割りにちゃんと話聞いているんだな、と思った。

「じゃあシランはロウの足知ってたんだ」

「まあ、風呂に入れば、そりゃあな」

「オレは結局着替えくらいだし、見てねえんだよお」

「そんなに気になるなら見せてもらえば良いだろう」

「そだな。ロウ良いか？」

「うん」

別に断るようなことでもないので素直に頷くと、クツを脱いだ。もうへ口へ口でクタクタだけど、随分前からずっと履いているもの。

「こっちは収納出来ないのか？」

「みたい」

足の指の方が獣に近いと思う。指先は丸まり、地面に立てるように爪も伸びていた。でもやっぱり太く硬い。ついでに足は小さかった。

「なんか、妙な感じだな」

シンの素直な感想に、ロウは笑って答える。

「毛がないからな。普通の狼とも違う」

毛で生え際が隠れないから本当に、爪がどう生えているか見えてしまう。しかも下手に人間味のある肌色の皮膚から異様な黒い爪が生えているから。歪で、何だか怖く見えると思う。

「でもロウ、狼だ」

何だか曲げちゃいけないと思う。覚えてないけど、でも狼だからロウだから。強く生きる象徴だから。

「だなつ。すげえなロウ。狼少年だ」

「ロウは嘘つかないぞっ！」

「へ？」

どうもシンは^{はな}嘘を知らずに言ったようだ。シランが密かに笑っているのが見えた。

でも、シンも嘘つかない。本当に感心してるだけ。怖がるわけでも気味悪がるわけでもない。シランも同じく。何でもないように流してしまった。

心が広いなあ、と思った。

「満足？」

「うん、満足満足。ありがとな」

「ううん、いいよ」

クツを履き直した。実は爪で空けてしまった穴があることは……

内緒だ。

「ついでにもひとつ良い？」

「いいぞー」

「尻尾ってどんな感じ？ オレ尻尾生えたことないから良くわかんねえんだけど」

最初もそうだったがシンは尻尾についてはかなり寛容なようだ。何で爪は駄目なんだろ、と不思議に思う。

「そうだなあ、例えると……顔みたいだ」

「かおあ？」

「楽しいと自然と動くぞ。でもあんま使い途ないぞ」

「そういうもんか」

「うんっ」

「いや、顔は必要だろ」

「目はあるけど顔自体に用途はあるか？」

「……なるほど」

シランも納得させて質問攻めは終了らしい。ついでに補足すると、普段は丸めてズボンの中に納まっている。十数センチメートルの柔らかい尻尾なので苦もさほどない。

「いやー、解決したあ、すっきりしたなあ」

よっぽど気になっていたようで、実に清々しい笑顔のシンだった。でもそんなに気になっていたなら……。

「なんで聞かなかったか？」

「ふえ？」

不意打ちだったのか間抜けな声を出してシンは振り返った。でも一応聞いてはいたように考え始める。そんなに悩むような理由なのか？ と思っただけ違った。

「んー、何となく」

「ふーん」

「あ、でも」

「ん？」

「訊いていいのかな、と思って」

「そか」

「そだ」

最後にはにっこりと笑い合った。まあ良いか、と言葉なく言い合った。

「どつちもどつちだな」

不機嫌そうに聞こえる低い声がぼそりと感想を漏らした。

そう言えばシンは、鱗を生やして火も吹けて怪力らしい。それなら確かにロウの小さな尻尾と黒い爪の生えた手と足くらい、そんな驚くことでもないのかもしれない。

一番豪胆と言うか許容力があるのは、何も聞かずにそう在ることに特別疑問を抱かないで一緒に居てくれる、シランだな。

冷静な第三者の呟きにそんなことを思いながら、ロウは苦笑いを溢した。ちよつとだけ安堵を混ぜて。

011 そこに在る意味【真】（前書き）

結構真面目な話ですが、シンとハンダのやり取りが楽しい話でもあります。シンは何でシランを選ぶのか。
そんなシン視点の十一話が始まりです。

011 そこに在る意味【真】

「お前ってほんつとシラン好きだよなー」

「はあ？」

いきなりハンダが話し出した。

オレは現在報告義務を全う中だ。だから第六守衛地区長の家、つまりハンダの家に来ていた。

大体の仕事が第八特区に仲介してもらった、と言うか与えられた仕事なので、オレには報告義務、というものがあるらしい。そしてもし戦闘があつたならその相手、数、場所なんかについてを詳しく記した報告書を作らなくてはいけないんだそうだ。でもオレは読み書きがからつきし。それにどちらにしろ大抵地区長であるハンダがくれる仕事だから、ハンダに仕事がどうだったか、という内容を報告しなきゃいけない。だからハンダに言つて、ハンダが必要だと思つたところをオレに確認しながら報告書を書く、という形を取つていた。

と言うわけで現在オレは報告をしに、ハンダの家に邪魔しているのだ。因みに報告は済み、今はハンダがかきかきと忙しく手を動かして報告書作成中だ。もう帰つていいと言われているのだが、何となく情性でハンダの作業を眺めながら勝手に入れた茶を飲んでいた、のだが。

「いきなり何言い出すんだよハンダ」

「だってそうだろう？」

「そうだぞ。で、どうしたよ？」

「や、普通に返されても困るんだけどな」

ハンダが頭を掻く。オレは首を傾げた。何が言いたいのやら。で

もまあ沈黙に飽きたハンダの世間話的な軽い振りだったんだろうな、
とも思い、何かいい話題はないかと記憶に検索をかけることにした。
しかし気を取り直した、話すことを決めたハンダが会話を再開し
たので結局それは中断されることとなった。

「なんでシランなんだ？」

「んん？ 何言いたいんだよ？」

「だってよ、シラン以外にもいただろ？ 世話してくれそうになって
言うか、優しそうなやつ」

「……？ 確かに今はいっぱいいるけどな」

「あ？ じゃあなんだ。お前、今まで他の人間に会ったことなかつ
たとか言うのか？」

「そうだけど？」

「……」

何故かハンダが絶句している。どうしたんだろ、と小首を傾げる
がわからない。

「ハンダ？」

「……嘘だろ？ え、生まれて初めて会った人間がシラン？」

「ああ」

「嘘だあ」

「嘘吐いてどうすんだよ？ とりあえずオレの覚えてる限りじゃシ
ランが初めてだったぞ」

「マジか？」

「マジだ」

信じられんとまさに顔に書いてあるかのような形相だった。もは
や書類作成の手を止め、目を見開いたハンダが身を乗り出すように
訊いてくる。

「じゃあ親の顔は？」

「さっぱりだ。つかそもそも人間じゃねえし」

「育ての親は？」

「言うならシランだ。誰かに育てられた覚えはねえよ」

「じゃ、じゃあどうやって生きて来たってんだ？」

「今更何言うんだよ？ 狩りしてに決まってんだろ。野生児ってからかうのはあんただろが」

「……………」

どうも衝撃的な事実だったらしい。シランから聞いてそうだったけど、知らなかったのか。そっちの方が意外だな。

「お前、いくつだ？」

「歳か？ さあなあ…………外見だけで言えば十八とかその辺らしいけど、そんな習慣知らなかったからな。数えてなかったからはっきりとは知らない」

まあアレなら知ってるのかもしれないけど…………話したの一回だけだし、面倒だからなあ。

「なあ、オレ何歳に見える？」

「外見でか？」

「あー、や、中身的に」

ちょっと気になったので尋ねてみた。案外ハングは真面目に考えてくれるようだ。ペンを置き、腕を組んで唸る。

「…………お前ってとりあえず外見以上に見えることはないな」
「そうなのか？」

「んでたまに……もの凄く幼くも見える。ほんとガキな時あるよな」
「……………まあ、いいや。で？」

「俺に精神年齢なんてわかんねえよ。人の心なんて把握できるかってんだ」

「なんだよ、あんだけもつたいつけて放棄かよ」

「……………聞くのか？」

何故かやたらと真剣な顔で問われた。ロウソクの灯がすきま風に揺られて、橙色の光が怪しくハンダの顔を照している。……………なんだこの空気。そんなに重要な話か？

「いいから言えよ」

「……………詰まらんやつだなあ」

そのぼやきはいつものちよつと情けない感じの顔だったので少し安心して、ハンダの言葉を待つ。ハンダは顎を擦りながら少し思案するように上を見ながら言った。

「まあ、なんだ。お前は多分十五歳前後のガキだよ、きつと」

「……………ビミョーな答えだな」

「うるせえ。お前が微妙なんだよ。ほら主夫は大人しく家で家事してる」

「へーい」

適当な返事をするオレは素直に席を立った。椅子にかけて置いた上着を手に取ろうとした時、急に待ったがかかる。

「やっぱ茶をもう一杯淹れてから帰ってくれ」

「……………さっさと帰れって言った癖に」

と文句を言いながらもやっぱり素直に空のカップを受け取ってしまふ。

「お前が淹れた方が美味いからな。……それともう一つ、いいか？」
「注文の多いハンダだなー。なんだよ？」

カチャカチャと手は動かしながら応える。振り返らなかったから断言は出来ないけど、多分ハンダは神妙な顔で言った。

「だからシランなのか？」

「……なんだ、さっきの続きか？」

「まあ、そうだな」

はー、と息を吐き出す。どうしてそんなにそこが気になんのかなーと思う。オレは手を一旦止めると、何となく上を見た。

「そうだなー。話したのも、与えてくれたのも、教えてくれたのも……シランが最初だったよ」

声を出して自分の考えを話して、相手の考えを聞くってことを。相手に優しくする、手当てをする、自分に出来ることを相手にしてあげるってことを。そうして伝わった思いに応えるってことを。教えてくれたのはシランだ。

はじめてだった。

話し掛けてくれた。優しくしてくれた。オレを呼んでくれたのは。

「あの時出会ったのがシランだったから。優しくしたシランだったから……」

だから会いたいと思った。知りたいと思った。優しくになりたい、

人になりたいと思った。

「まあ、もしもあの時会ったのがシランじゃなくても、やっぱり好きになったかもしれないけどな」

「……もしも、なんて言うな」

そこでオレはようやく振り返った。ハンダはしんみりとした顔をしていたが、それを振り払うかのように頭を振ると、ニカツと笑って言った。

「シランとお前が出逢ったから今がある。それだけが真実だ。シランだったから今のお前になったんだ」

「……そうだな」

「だから俺はお前達が安穩と暮らせるよう、これから勝手に見守って助けてくんた。それが俺の役割。お前は何かしたい？」

オレが何がしたいかだって？ そんなんわかんない。わかんないけど……。

「シランを守りたい。オレはシランといたいから。ロウも、ハンダだって……守りたい」

「はは、俺も入んのか。そりゃありがたい」

「ちや、茶化すんじゃないよえよ！」

「わかってるって。それがお前の願いで役割なんだろ？ なら頑張れ。迷っても弱音吐いても構わねえ。余裕で受け止めてやるぞ？」

「……あ、ありがとう」

なんだか気恥ずかしくて俯いてしまふ。ハンダが立ち上がると、頭をぐいぐい乱暴に撫でてきた。

「だからガキなんだよ、お前は」

うしし、と笑って髪をくしゃくしゃにしてくるハンダに抗議しながらも、思った。

ほんとお節焼きだな、あんたは。だから変なやつらに好かれんだよ。だから妙に安心しちゃうんだよ。

だから、いつもありがとう。

012 等価交換できないもの【狼】（前書き）

これで本当に一章終了になります！無駄に長くてすいませんね。でも楽しんで戴けたら幸いです。

締めは口ウの不安、悩みの話です。それを心配する二人の子供。そんな三人の第十二話をどうぞ。

012 等価交換できないもの【狼】

ロウにとって大事なのはシンとかシランとか、近くにいてくれる大切な人たち。優しくて温かくて、大好きな人たち。でもロウに出来ることは少ない。たくさん貰っても、返せない。優しさに甘えてロウは生きてる。いいのかな、いいのかなあ？

「ロウ君、なんだか元気ないけどどうかしたの？」

そんな風に言われて慌てて声の方を見る。ぶつかるのは垂れ目で気弱そうだけど本当に心配したような男の子の瞳。

「あんたが心配するほどロウは弱くないわよ。あんたが心配するなんてとんだ思い上がりね！」

「アンちゃん、ひどい……」

勝ち気につり上がった、幼さよりも気の強さが目立つ女の子がそう言つと、垂れ目の子は肩を落として呟いた。

報告書出した帰り。夕飯には少し早い夕暮れ時の第六守衛地区をぶらぶら当てなく歩いていたらこの二人に出会したのだ。

気の強い女の子がアン。漢字で「杏」と書くらしい。十歳の割に頭良いやつだけとたまに無鉄砲なんだよな、とはシンの評価。

気の弱い男の子がユウリ。漢字は「悠里」。年はアンの一つ上。勇気も根性もあるけどとことんアンに弱いんだよな、とはシンの言葉。

因みに二人とシンは仲が良い。しかし年齢も身長もかなり差のあ

る三人が一緒にいてもあまり違和感がないのは何故だろう？

シン経由で仲良くなったのでたまにこうして話すのだが……何だか心配させてしまったようだ。そんな風に見えるのかな？

「でもそうね……なんか悩みでもあるの？ 珍しくユウリみたいな気弱な目になってるわよ？」

「そう、かな」

何となく自信が持てず、曖昧な返事になってしまい、思わず視線を落とす。すると二人が、ユウリとアンが顔を見合わせる気配がした。

「えと、どうしたの？」

「そうよ。何かあるなら言いなさいよ。うじうじしたらユウリになっちゃうわよ？」

「だからアンちゃん、ひどいよぉ」

「うるさい、弱虫」

「うっ……」

なんだかユウリがひどい目に合っているので慌てて顔を上げた。

「アン、ユウリ悪くないぞ。ユウリ弱虫じゃない。優しくて強いぞ」

「……強くは、ないわよ」

ロウがユウリを弁護をすると、アンはふて腐れたようにそっぽを向いてそんな風に答えた。

「強くは？」

「う、うるさい！ そうよロウ、あんたがはっきりしないのが悪いんだわ！」

何故だかロウが悪いことになったらしい。でもロウも悪い気がする。とにかく矛先はロウに真っ直ぐ向いたらしい。

「ほら！ この際弱音でも何でもいいから、ちゃっちゃっと吐く！」

ぐいつ、と背伸びしたアンが人差し指をぴんと立ててロウに突きつけた。年の割に背の高いアンが背伸びをすると簡単にロウを追い越してしまう。軽く上から突き付けられた人差し指は案外に威圧感を放っていた。

でもやっぱり子供は子供なので怖くはない。そもそもあまり恐怖心というものをロウは持ち合わせていないみたいなので変異種相手でもあまり怯えたことはない。ないけど……。

「う、うん……」

何となく話さなければいけない気分には十分させる効果があったようで。気が付いたらロウは頷いていた。

「はい、言う！」

了承を得るや否や、御者が馬に鞭を入れるように間髪入れずアンは促すように声を上げた。思わず慌てると、口は勝手に本音を吐き出していた。

「これでいいの、って、思って……」

「何よ？ はっきりしてよね、ロウ」

「アンちゃん、ちよつとは優しく……」

「時には強引なことも必要なのよ！」

おおよそ子供らしくないことを堂々と宣言するアンに、ユウリとロウは圧倒されていた。

「ほら、ロウ！ 意味わかんないわ、説明してよ！」

「え、と。ロウ、シランとかシンにいつも優しくして貰ってて、助けて貰ってて。でもロウ、何も出来ない……」

「シンが何か言ってきたの？」

「ううん。でもロウ何も返せない。だから、だから……」

自分でもよくわからない、整理出来ていないことは、上手く言葉に出来ない。ロウはどうしていいかわからない。だからただ小さく俯く。

「ばっかじゃないのー」

「あ、アンちゃん！」

「っ！」

びつくりして顔を上げ、まじまじとアンの顔を見てしまう。アンは鼻を鳴らして、心底アホらしい、という気持ちを隠すことなく全身から発していた。

「等価交換なんて法則、成り立つわけないのよ！」

「……あ、アンちゃん？」

ユウリはポカンと呆けた顔でアンを見返した。ロウは困ったように眉に小さく皺を寄せた。

「知ってる？ 同じ価値のものを交換するのを等価交換って言うのよ」

「一応、知ってるけど……」

「ロウも知ってるぞ」

「じゃあ話は早いわ。こんなのデタラメよ！」

「……なんで？」

アンの意図が掴めず、二人揃って首を傾げてしまう。意思の疎通が滞りなく行えない男二人が気に食わないようで、アンはあからさまに不機嫌な顔をしてみせたが、やれやれとかぶりを振ると説明を続ける。

「いい？ 全く同じものなんてないのよ。はっきり言ってあたしは納得してないわ。ペラペラの紙一枚が銅貨百枚と等価なんて！ ちゃんちゃらおかしいのよ！」

そう言って何故だか高笑い。アンの奇妙を通り越して軽く不気味なテンションに、思わず今度はユウリとロウで顔を見合わせる。でもそんな空気を物ともしない無敵状態なアンは豪胆に続ける。

「だからねえ、あたしの言いたいことわかる、ロウ？」

そう訊かれるがわからないものはわからない。だから素直ロウは問い返した。

「……アンは何言いたい？」

「だからあ、いい？ 同じもの、価値観として本当に釣り合うものはないの！ つまり！」

「「つまり？」」

「あなたが受けた好意、親切を全部返せるわけではないの！ つかぶっちゃけそんなのわからないの！ そんなの価値観の違いで一にも百にもなるんだからっ」

「……」

ちょっと圧倒される。そして妙に納得する。アンはいつも以上に気の強さを表すまなじりを吊り上げると言った。

「だから、あなたはあなたなりの思いを返せばいいじゃない。小さくても感謝してると言っ、お返しだからって行動すれば、それでいいのよ」

「そっか……そうだね」

アンはそれを聞くとにつこり、満足げに笑うと締め言葉を告げた。

「要するに、自己満足よ。自己満」

「……」

「あ、アンちゃん……」

「あははははー」

アンの高笑いが再び響く。ユウリはそんなアンの身も蓋もない言い方にあたふたと取り繕うように変な動きをしていた。そしてそんな動きをする二人を見て、なんだか心が軽くなったロウがいた。

「ありがと……アン、ユウリ」

「なんでユウリの名前が出るのよ。何もしてないのに」

「う、ううん。えっと……何だかごめんね」

全く違う二人の反応がおかしくて、笑いを堪えるのが大変だった。不思議なくらい、ロウは幸運だ。こんなに優しい人ばかりに出会えるなんて奇跡だ。だから。

「本当に、ありがとう」

誰にともなく、感謝の気持ちを呟いた。

013 招かれざる訪問客【真】（前書き）

二章突入で本編スタートです！……似たようなことを何度か言った気がしますが気にせずに。観月家VS謎な三人組って感じです。まあ一名ずつと読書してますが。

と言うわけで二章第一話にして『蒼天の真竜』第十三話……どんどんややくししく墓穴を掘ってる気がするけどとにかくスタート！

013 招かれざる訪問客【真】

「暇」

「……」

「ひいまあだー！」

「……」

「……ひでえ」

沈黙しか返って来ない。めちゃくちゃブルーな気持ちになった。

「……なんだ鬱陶しい」

ようやくシランが本から顔を上げてくれたので、オレは一瞬にして笑顔になって食い付く。

「だからシラン、暇なんだよー」

「そうか」

「そうなんだよ」

「……」

「シラン」

「……非常に鬱陶しいな」

眉を吊り上げ、眉間に皺を寄せて心底面倒臭そうにシランは言った。いろいろ突き刺さるリアクションだな。

「仕事がなくなると直ぐにそれだ。いい加減家事以外の趣味を持て」

「えー」

「字を読むのも書くのも嫌ならいっそのこと絵でも描いてみたらどうだ」

「やだ」

「……」

「黙らないで！ 悪かった、オレが悪かったからだんまりはやめて！」

「……はあ」

シランは厄介だな、と言いたげな目でオレを横目に見ていた。鬱陶しいのはかなり承知だ。でも暇。

なんでこんなに暇かと言うと、ある意味ロウのせいだ。当人は隣の席でゆったり読書タイムだが。

オレらの本職は戦闘員。外敵から特区を守るのがお仕事で、だから外壁の外なんて妙な場所に住んでいるのだ。

オレは戦えます、という申請をしてそれが上を通れば晴れて給料の出る戦闘可能住民とかいうのになれるし、必要最低限の生活が保障されるようになる。オレもシランもロウも登録済みなので都市防衛が義務となる代わりに食糧やらを貰える。

しかしもう一つ仕事があつて、それが第八特区が受けた依頼の遂行だ。それは主に商人の護衛依頼である。そして食費が馬鹿にならないウチの主な収入源でもある。

だが、ロウとオレが片っ端から仕事を受けてしまったからスムーズになつたのは良かったが他の住民に仕事が行かなくなつてしまったのだ。だから調整のため、強制的に一週間の休みを言い渡されてしまった。そんなルールないだろ！ と抗議したけど、お前ら働き過ぎ、と言われて却下されてしまった。

そうになるとやるのが家事しかなくなるが、家事なんて無限にあるわけじゃないし、午前中には終わつてしまい、非常に暇になつてしまったのだ。

「まあある意味自業自得だな」

「なんで！」

「だってお前がロウに働くよう早くから言い始めて、しばらくしたら直ぐに別々に仕事を受け始めただろ」

「うわー、言うなー」

確かに自業自得なのはわかるが……やっぱり言うなー。

「ううー、何かやることないかぁ」

「散歩でもしてきたらどうだ？」

「うーん、それは考えたけどさぁ」

「けど？」

「……なんか、やな感じすんだよな、今日」

昼頃から何だか雲行きが怪しい……ってまあ空は相変わらずの灰色なのはそうなんだけど。何だか空気の流れみたいなのが変わな感じする。

「……不吉なこと言うな」

「でもほんと不安で。だから家出たくない」

「でも暇だ？」

「うんっ」

「……勝手に喚いてろ」

「ひでえよ」

どんどん扱いが悪くなってきた感じでいじけ始めた頃、やーな気配を感じて顔をドアに向けた。ロウも同じように顔を上げたことを気配で知る。そんな妙な雰囲気流石のシランも気付き、こっちを向いて多分嫌そうな顔をした。

「本当に何か来るのか」

「みたい」

シランの呟きに口ウが返す。オレは椅子を下げると立ち上がり、ひよいと机を飛び越えてドアの前に立った。頭にあるのはハンダが教えた四字熟語。

先手必勝。

「何の用だ！」

オレは怒鳴りながら勢い良く戸を内から開いた。

ドガッ。

「ぶっ」

ばた。

「「「……」」」

鈍い音とドア越しの手応え。場の空気が気まずそうに淀んで静まった。

「……ごめんなさい」

とりあえず謝った。

「つてえよ、何だよ、ちくしょう、うつ……」

「わりい、大丈夫か？ 泣くなよ？」

「泣いてねえ！ つか泣かねえよ！ 三十路過ぎた男が泣かされてたまるか！」

「リーダー、泣いた方がすっきりすることもありますぜ？」

「そうですよ、強がる必要はありませんよリーダー」

「馬鹿、変に優しくすんな！ 真面目にやれ！ 仕事だぞコラア」

何だか良くわからない状況になってしまった。しかしまさか顔面クリーンヒットとは。そこまでは狙ってなかったのに。不運な。

訪問者は三人。出鼻を速攻で挫かれたのがリーダーで、それを慰める二人が部下A、Bってところだろうか。部下二人は同じ濁った感じの緑色の服だったが、リーダーは似ているがちょっと違う、装飾のついた服を着ていた。

しばらく揉めるような仲良しなような会話が続き、ようやく落ち着いてきたようだ。

「あー、なんかごめんな。で、何か用？」

悪いことした気分だったので結局普通に用件を訊く。するとようやく気を取り直したリーダーが前に出て、仕切り直すように咳払いをした。一応言っておくとリーダーはオレより背が低かったので全く迫力がなかった。

「えー、我々は観月紫蘭殿に用があって参った」

「シランに？」

振り返るとシランはもう座っていなかった。つか家の中に姿が見えない。リーダーも家を覗き込んで同じことを思ったらしい。

「紫蘭殿は？」

「何の用だ」

「うおっ！」

いきなり隣から不機嫌な声がしてリーダーが飛び上がった。シランはさつき以上に面倒臭そうに顔をしかめてオレの隣で足を止めた。なに、裏戸から出てぐるっと回ってきたらしい。普通に出てくれば良いものを。

「お前らがあの不幸の手紙モドキの送り主の仲間か？」

「その表現は酷くないか！？ しかもモドキって中途半端だな！」

「どうなんだ」

「ひいつ」

無駄に不機嫌オーラで目付きの悪いシランは確かに怖い。ちょっとリーダーは後ずさった。しかし部下二人がいることを思い出し、少し勇気付いたのか、もう一度咳払いをすると胸を張って言った。

「よ、用件はあの文書の通りだ！ 来てもら「断る」お、う……」

言葉が終わるのも待たずに否定されたせいか、リーダーの台詞は尻窄みに終わった。何だか落ち込みやすいらしい。

「リーダー！ 根性ですぜ！」

「ファイトですっ」

部下の声援に何とか再びシランに向き直すが、もはや始めの勢いは微塵もなく。

「あ、あの、俺らも仕事でして、ね？ 話だけでも……」

「手紙は読んだ。答えは行かない。それで良いだろう？」

「はい、え、あー、でも話、もうちょっと……」

「断る」

「……ごめんなさい」

心が折れたリーダーは部下に慰められていた。ずーんと沈んでいる。もう駄目だ、俺は駄目な男、役立たず……、とかいう呟きが聞こえてくるのが何とも居たたまれない気分させる。

「……なあ、もう少しくらい話を聞いてやつても良いんじゃないか？」

贖罪、というわけでもないが、つついそんなことをシランに言っていた。しかしそれに対するシランの答えも実に素っ気ない。

「あいつらは俺にこの特区を出て行って欲しいんだ。お前はそれでも良いのか」

「うん、よし、可哀想だけど今回は諦めてもらおう」

「……お前は本当に単純だな」

ちょっとシランに呆れられたけどこれは曲げられない。俺はシランと離れたくないし、シランだって街は出たくない。なら、うん、諦めてもらおう。

「しかしこいつらもしつこいな」

「へ？」

「五回は断りの手紙を出しているのに、とうとう人まで寄越すとは、どこまでご執心なんだ」

苦虫でも噛んだような顔をしてシランが吐き捨てるように言った。ふと疑問に思った。

「なあ、差出人は誰なんだ？」

「日本政府だと名乗ってる。まあ本家はとっくのとうに解散してい

るから、騙りか看板として使っているのか、或いは……」

「何だよ日本政府って」

「まあ、この特区の中央区みたいな役割の組織だ。随分昔に匙を投げたから、今はこうして自治組織が発達して小さな国のような街が点在しているがな」

「わ、私たちはそんな無責任な政府に代わり人々を守るために出来た新日本政府なんです！」

部下Bがいつの間にか近くにいた。拳を固く握り、力強く言い放つ。

「基盤となったのは元日本政府ですが、今ではたくさんの人達が一緒に暮らしを良くしよう、多くの人を守ろうって頑張っているんです！」

「だからあんたの協力が必要なんですぜ。来て下さいよダンナ」

部下Aも追撃の言葉を言う。そしてリーダーが二人に背中を押されて再びシランの前に立つと。

「お、お願い、しますっ！」

頭を思いつきり下げた。今にも土下座しそうな勢いだ。

「ほんと、本当に、ただ一緒に来て、俺達のボスの話、聞いてくれるだけで良いんだ！ 頼むっ、一緒に来てください！」

ここまで言われたら……シランはどうする？ 横目にシランの様子を確認する前に、シランは口を開いていた。

「……断る」

「紫蘭殿！」

「シラン！」

思わずつられてオレも声を上げてしまったが、シランのやけに静かで冷たい目にぶつかり、それ以上は言えなくなる。

「……行くだけなら、良い。しかし答えを変えるつもりはない。全くない。ただの迷惑にしかならないだろう。だから俺は、行かない」

答えが決まってしまうっているから断る。シランらしい答えと言えば答えだ。俺はこれ以上何も言えない。

「それに、俺はこの特区と契約する形で暮らす人間だ。簡単には移籍できないはずだ」

とどめとばかりにシランが言い放つ。しかし、意外な反撃があった。

「特区とうちの間では話はついていて。あとはあんた次第なんだ」

リーダーが少しビビりながらも勇気を振り絞ってそれだけ言った。オレには良くわからない内容だったが、シランが動揺したのだけはわかった。

「……明日また来てくれ」

「シラン？」

「本当か！ わかった、出直して来よう！」

「何かよくわからないけどやりましたねリーダー！」

「良かったですなリーダー！ ゆっくり休みましょうぜ！」

三人は浮かれながらも素早く退却して行っただ。逃げるの、じゃなかった、帰るの速いなあいつら。
でも……。

「シランどうした？ 急に意見変えるなんてどうかしたのか？」

「……必要がある」

「は？」

「確認する必要がある。俺は出掛けてくるからお前は」

「オレも行くよ！」

何だか少しシランの様子がおかしいし、何を確認したいのかも気になる。

「ロウはどうする？」

「……あ。ロウは留守番してるぞ」

ロウは未だに読書タイムだった。今のゴタゴタの最中もずっと読んでいたのだろうか？ いや、間違いないなく読んでたな。シラン以上の読書家かもしれない。

「じゃあ出掛けてくるから家頼んだよ」

「任せるー」

全く信用出来ない返事。だって本から全く顔を上げることをしてないのだ。でもまあ大丈夫だろう。泥棒なんて滅多にないし、ロウに勝てるような人も早々いないから。

それよりもすたと既に歩き始めているシランの方が心配だった。

「んじゃあ行ってくる！」

「いつてらっしゃーい」

だからオレは挨拶もそこそこに、シランのあまり大きくない背中を追って駆け出したのだった。

013 招かれざる訪問客【真】（後書き）

学校が始まってしまいました。慣れない環境なのでいつ更新できるかは断言できませんが、とりあえず四月前半にはあと二話程更新出来る、かな。シランはリーダーの言葉を確かめるために稲城さん（何気に未登場）に会いに行きたいが待ち受けるのは変な地区長、副長たち。シランは無事に辿り着けるのか？って感じの話になります。うわ、初めて次回予告っぽいかも。

とにかく頑張るのでよろしく願います。あと、『ドラゴンと僕と彼女と』という短めの小説を移動してきたので良かったら読んでみてください。

014 容赦無用のお宅訪問【紫蘭】（前書き）

さて、区切り所に悩んだ結果、少し長めになりました。今回は新キヤラばっかですが、再登場あるのか怪しい奴らばっかでもあります。まあ副長の彼はご近所なのでまた出るでしょうが。

そんなわけ（？）で新キヤラ増量期間に入っていく第十四話、始まります！

014 容赦無用のお宅訪問【紫蘭】

「でどこ行く気なんだ？」

「……とりあえずは半田さんのところを訪ねようと思う」

「なあなあ、何を確認したいんだよ？　なあ、シラン？」

俺は一度足を止めると、振り返った。そこには急に止まったことに驚いた顔のシンがいる。

「な、なんだ？」

「好奇心や暇潰しのつもりなら家で待ってる。俺は真面目な話をして行く。もし騒ぐようなら直ぐに追い返すからな」

少しいつもよりキツイ言い方をしているのは自覚している。でもこいつがついて来る必要はないのではっきりと言ってしまった方が良かった。けど。

「わかってるよ。でもシラン何か様子おかしいし、だから、その……」

言いにくそうに、少し俯きながら、俺をうかがいながらシンは口ごもっていた。でも流石にわかる。四年間一緒に暮らしてきたんだからわかるに決まっている。

心配なのだ。いや、不安と言っていいかもしれない。でもそう言うとうと傷付けるかもしれないから、だから上手く言えない。

……何やってるんだ、俺は。こいつに心配されてどうするんだ。

「と、とにかく。静かにしてるからさ、ついてっても良いか？」

「……好きにしろ」

「お、おうっ」

安心したように不安顔から一転して嬉しそうな笑顔になる。それを見るとやっぱり思ってしまう。

どうして俺なんだ、と。

「……」

でも今訊くことではない。だから俺は体の向きを元に戻すと再び歩き出した。

「あー、ツンデレのシランさんにシンくんじゃないですか」

「……」

「ミサキっ」

半田さんの家をノックしようとした時、背後からそんな妙な挨拶が聞こえた。俺はしかめっ面をより深めて、シンは喜色を浮かべて振り返った。

そこに居たのはボーイッシュな女の子でも通りそうな、俺より少しだけ背の高い、明るい茶色の髪をした男だ。

第六守衛地区副地区長。それが彼の肩書きだが専ら副長と呼ばれる。そして童顔な彼に合わせたような名前が。

みづき
美崎先。

「シランさんつつこんでくれないんですか？ ひどいなあ、シンくんだったらちゃんとつつこんでくれるのに、差別ですね」

「……シンはそう言うことは言わない」

「あー、そっか。うん、わかりました、任せてください！」

「何がだ」

「大丈夫です。次回をお楽しみに。ね、シンくん？」

「え？ あ、うん」

「よしっ」

「……」

ターゲットロックオン、と言う感じの美崎。ガッツポーズまでして……何をやらかす気だ。

「これ以上シンにいらんことを吹き込むな」

「ええ！ そんな残酷なことを言わないでくださいよ！」

「……」

俺こそそんな残念なことしないで欲しい。シンに変な知識を植え付けるな。後が面倒だろう。

「にしても、またこっちまで寒くなる格好してますね、シンくん」
「そうか？」

その通りだ。今日は多分十月に相応しい秋晴れだがどこか涼しげな空気漂う気象だ。だから俺は黒いコートを羽織っているし、美崎はカーキ色のジャケットを着込んでいる。そんな面々の中。

シンは涼しい顔して半袖だった。

寒い、本当に。黒いＴシャツに下は明るい茶色の、確かカーゴパンツとかいうやつ。

「だってシランが行っちゃいそうで慌ててたからさ、上着着そびれた」

「……悪かった。取りに戻るう」

「寒くねえけど？ 急いでんだろ？ 風邪なんてひいたことないし」

大丈夫だつて」

「まあ本人が大丈夫なら良いんじゃないですか？」

「……」

二人に言われ、渋々頷く。確かに俺とシンじゃ全然体力や免疫力が違う。この程度じゃ滅多なことがない限り体調を崩したりはしないだろう。それに。

「隊長もよく薄着、と言うか上半身裸で歩き回りますからね。このくらい普通っちゃ普通、ですね」

「……では何故話題にした」

「何となくです。昨日は急に夏日でしたからね。流石に僕も結局半袖出しちゃいましたよ」

「……そうだな。昨日はそうだった」

今更改まっつて言うようなことでもないが、やはり異常だとか言い様がない天気の変わりようだ。四日前はまた雪が降りそうな程の冷え込みだったし。

「で、何かご用ですか？」

「……」

いきなり話題が変わった。真面目になったと言うか本題の前振りがようやく来たと言うか。

しかしそれについては何も言うまい。俺はシンとロウだけで一杯だ。美崎については半田さんに任せることになっている。決してシンにいらんことを吹き込む片割れだから逆襲の意味を込めているわけではない。

「半田さんに訊きたいことがあるんだ」

「あー、隊長はちょっと出てるんでしばらくは帰って来ませんよ。僕でわかる範囲でなら答えますが？」

「……」

二つの質問がある。片方が目的を果たす質問で、もう一方が手段のための質問だ。目的のための手段。

……流石に副長ではあまり知らないだろう。だからまず目的に辿り着くための手段の質問だ。

「稲城さん、守衛区長に会いたいんだが、今どこに居るかわかるか？」

「守衛長ですか？　なら多分今回ってる途中だと思いますよ」

「……回る？」

「はい。守衛長はほんと真面目で優しいのでほぼ毎日各地区長を回って問題がないかとか、報告書の回収をしてくれてるんです。絶対ではないですけど、悪くても防衛長には会えますよ」

そんな話聞いたことあるな、と思った。

因みに防衛長と言うのは外敵、危険な変異種や滅多にないが賊などに対する対策を立てる人だ。位としては稲城さん、守衛区長の次に偉く、地区長の上。守衛区は実は内回りと外回りで分かれており、内回りの第一～四地区が警備長管轄域、外回りが第五～八地区が防衛長管轄域になっている。まあでも結局は守衛区全体を纏める稲城さんの補佐みたいな役割だ。

最悪防衛長が捕まれば、稲城さんの居場所はわかるだろうし、もしかしたら知りたい話も知ってるかもしれない。なら、決まりだ。

「地区長の家を回る順序を教えてください」

「簡単ですよ。ぐるっと回れば良いんです。すぐろくみたい」

「……」

「だから、ここが第六なんで第五、第四、第三、って調子で回って行けばどこかでぶつかるはずなんです」

どうも第一守衛地区から順々に回っているらしい。確かに簡単だ、わかりやすい。

「わかった、ありがとう」

「これも仕事ですから」

にっこりと笑って答える美崎。

「じゃあ頑張ってくださいね」

「ああ」

「死にたくなければちゃんとノックして名乗って許可取ってから入室するんですよ」

「……ああ」

何だか恐ろしいものが待っているらしい。よく考えると半田さん以外の地区長とはほぼ会ったことがない。半田さんの愚痴では聞いているが……。

「まあ大丈夫ですよ、シンくんついてるし」

「そうだぞ、頼もしいだろ？」

「……頼もしい、頼もしいが……お前が逆鱗に触れるようなことをしないかが心配だ」

でも本音を言うなら。

一人じゃなくて良かった、だな。

「副長はお留守番してなきゃいけないんで案内出来ませんが、まあ辺りの人に訊けば地区長の家くらい直ぐわかるでしょう。御武運を御祈りしてますから」

爽やかな笑顔と不吉な言葉に見送られ、俺達は早速第五守衛地区に来ていた。

「なんかさ、守衛地区長お宅訪問ツアー、って感じだな」

「……お前はどつてそういう妙な言い回しばかり覚えてくるんだ」
「だってエノキがマンガ読んでくれるんだもん。三人で読むと楽しいんだ」

「……」

エノキ……榎って確か第七地区の副長だったはずだ。そして間違はなく三人とは美崎、榎、シンだ。……副長二人も揃って何やってるんだ。

「まあエノキがいつも忙しいから滅多に出来ないけどな」

「……まあ、地区長が大変らしいからな」

これは半田さん情報だ。第七の地区長はちゃんぽらんで榎が可哀想だ、とか言っていた。榎は真面目な方らしい。と言つかいろいろ話を聞いて思ったが、地区長と副長のペアは真面目と不真面目でセットみたいな決め方なのだろうか……あながち一笑には伏せない生々しさがあるな。

「……ほどほどにな」

榎にとって迷惑なのか息抜きなのかわからなかったのととりあえ

ずそう言うのみに止めた。

そしてそんな会話をしている間に目的地についてしまった。第五
守衛地区長宅。お隣なのもあって良く噂を聞く。

口が悪い。美人なのは否定しない、でも性格悪いのも否定しない
！ 口と暴力が同時進行。ドS。容赦なし。

しかしそれでも地区長をやれているのだし、まだまともな人、で
あると思いたい、願いたい。

「……」

深く息を吸う。気に障ることをすると地獄を見るらしい。なんで
俺はそんなおっかない人の家を叩かなくてはいけないのだろうか、
という疑問すら過る中、意を決して手を上げた。

コン、コン。

「名乗りな」

もしかしたら半田さんと同じように留守かもしれない、という希
望は打ち砕かれた。なので用意していた言葉をはつきりと述べる。

「第六守衛地区に住む観月という者ですが」

「ああん、あの間抜けのどこだあ？」

いぶかしげな声と共に扉が内側に開いた。覗いたのはきつい顔の、
確かに美人なのだろう。日に焼けた少し浅黒い肌に、豹を彷彿とさ
せる鋭い目や鼻は整っているからこそ威圧感のようなものを強く放
っていた。

「何の用よ」

「稲城さんに会いたいんです」

「守衛長？」

怪訝そうに眉を吊り上げる。その顔はかなり怒っているように見えるが、多分怒ってはいない。そういう顔なのだと思う。

「守衛長はまだ来てないよ。どうせ上野のところで止まってんでしょ」
「上野……？」

「第三のやつ。とにかくここには居ないの。……もしかして順番に回ってんの、あんたら？」

「ああ」

「そ。なら次は三好^{みよし}ね。あそこは無駄に黄色いからわかりやすいでしょうね」

「わかった、ありがとう」

「ええ、じゃあね」

ばたん、と乱暴に扉を閉められたが……意外とまともな人だった。やっぱり地区のリーダーをやっているだけあって無茶苦茶な人ではなかった。わざわざ家の特徴まで教えてくれたし、普通に親切な人だった。……まあ、良かった。

「次、行くか」

「おうっ」

「地区長は不在ですが、何かご用ですか？」
「守衛区長はまだ来てませんか？」

第四地区長宅は本当に黄色かった。卵色という感じに綺麗に塗られたその家の戸を叩くと出てきたのは柔らかな物腰の女性だった。

栗色の髪は長く伸ばされ、癖があるのか先は軽く跳ねている。髪に似た明るい茶色の瞳は小さく、色白で、さっきの人とは真逆のような人だが、やっぱり美人なんだろう。

その人が俺の質問に首を傾げる。栗色の髪が砂のようにさらさらと溢れるように揺れた。

「守衛長、ですか。今日はまだいらしてませんわ」
「そうですか」

ならば第三か、と考えながら礼を言って立ち去ろうとしたところを引き留められた。

「もうすぐいらっしやと思います。ここでお待ちしてはどうですか？」

それは少し嬉しい誘いではあったが、第五地区長の言っていた「どうせ上野のところで」というのが引く掛かる。いつもそこで時間かかっているようだ。そしてそこは第三地区。なら直接行った方が早そうだ。

その旨を告げると相手も直ぐに引き下がり、扉は再び閉じられた。

「そんなに急ぐのか？」

「出来れば手間は取らせたくない。歩きながらも話を聞ければと思っただけ」

「ふうん。しかし今の人、綺麗だったな」

「……そうだな」

シンはいろいろ疎い割にはそういうことは言ってくる。だからといって女性に興味があるわけでもないようだ。思ったこと感じたことを素直に口に出しているだけらしい。

「地区長んちに居たってことは副長だろ？ 多分すげえ強いんだぜ」
「……お前がそんなことを言ったら怪物になってしまう」

無茶苦茶な馬鹿力で人並み外れた戦い方をするシンより数倍強いなんて人がいたらよっぽど人の枠からぶっ飛んだ人だ。それこそ化け物だろう。

「それにさっきの人は下手すると母さんよりも細腕だっただ」

パンツ。

「ろ……」

乾いた音が短く聞こえた。

事態が把握出来ず棒立ちになり、続く言葉は霧散してしまった。
シンの腕に見えるもの。

一瞬火傷に見えたが違った。網目模様のようなもの。でも模様ではない。それは立体的にシンの皮膚に浮き上がり、錆びた金属のような色に鈍く光るもの。人にはないものだ。

ウロコ。ドラゴンの鱗だ。シンをドラゴンたらしめるものであり、シンを人間の枠から弾き出す象徴でもある。

そのトカゲの皮膚のような鱗がシンの腕に現れていた。いや。腕だけじゃない。頬や首筋、多分服に隠れたところにも、ぽつぽつと浮島のように赤銅色の欠片が出てきている。

気が付けばシンが俺を庇うように立ち、扉と対面する形になっていた。

「シラン狙うなんて良い度胸だな……殺されてえのかよ」

シンの怒りに呼応するように皮膚が赤く燃え立つ。

「私を侮辱した貴方を、赦す訳には行きません」
わたくし

ぎい、とゆっくり開かれた扉からまず覗いたのはこちらを狙う銃口。次いで先程応対した女性だ。静かな鬼が睨んでいる。そんな表現が似合う。

「退いて下さい」

「やだ」

「そうですか。貴方も私の力などちつとも怖くないと、戦力になどならないと申したいのですね？ 良いでしょう、その考え、私が撃ち抜いてみせましょう」

カチャ、と銃口が位置を変える。狙うのは恐らくシンの額。頭が真っ白になりそうだ。

ふと蘇るのはいつかの半田さんとの他愛もない会話の欠片。

「二重人格タイプはコエーよな」

今なら俺もそれに答えられる。全力で肯定しましょう。

怖い以上に危険人物じゃないか！

どうしよう、ピンチだ。紛れもないピンチだ。かなり怖い状況。

シンが静かだ。喋らないという意味でもあるが、それだけじゃない。何と云うか、空気が張る、鎮まる、そんな感じなのだ。緊張とか気を研ぎ澄ますと言ったものからなのか。とにかく怖い空気。

このままじゃ殺人が起きる。それがシンが怒りのまま女性を殺すのか、女性の銃で俺が撃ち殺されるのかは知らないけど。

でも嫌だどっちも。
でも。

シンは息を止め、足に力を込めた。

女性は拳銃に掛けた指に力を込めた。

次の瞬間にあるのは殺し合いだけだ。やめろと言いたいが殺気に満ちた空気に吞まれ、上手く声を出せない。だからシンの肩を掴んだ。その気になれば簡単に振りほどかれるだろうが、思わず掴んでいた。

誰よりも人間が好きなやつだと思っから。誰よりも優しいやつだから。

やめてくれ、シン。

頼むから。

でも、シンが撃たれたら？

そんな迷いを嘲笑うかのように響く音が、俺の耳朵を容赦なく打った。

パンッ。

015 やがて辿り着く場所【真】（前書き）

視点はシンに戻ります。
さて、第十五話をどうぞ。

015 やがて辿り着く場所【真】

パンツ。

肩を掴む手が力んだ。

ちつとも痛くないがスゴく痛い。その手から伝わってくる思いが痛くて重くて、結局俺は出遅れた。

しかし、女も似た理由で出遅れていた。

そうしてこの場にはただただ間の抜けた空気が漂い、気の抜けた音だけが響いたのだった。

「喧嘩しちゃ駄目じゃないか。しかも僕の家の前で」

張り詰めた糸を切ったのはただの手拍子だった。続いて割り込んだやたら緩い場違いな声が、緊迫した空気を完全に破くこととなった。

「地区、長……」

「また拳銃抜いちゃって、美那ちゃんたら血の気多すぎだよ。せつかくの美人さんなのに、どうしてそう直ぐ実力行使に出ちゃうかな？」

「すみません……でも、侮辱されるのは見過ごせません」

「悪気ない時もあるんだよ？ 少しは分別を持とうね、良い？」

「……はい」

そんな会話により女は肩を落とすと、大人しく黒い怖いものを下ろした。そうしてようやくオレとシランが解放される。ほっと息を吐いたのは多分二人同時。肩の力が一気に抜ける。

ふと闖入者が振り返った。何だかほわほわとした笑みを浮かべな

がら、でもちよつと困った感じの声で言った。

「迷惑かけてゴメンね。ほら、美那ちゃんもちゃんと謝る」

「……すいませんでした」

素直に謝った女を見ても何だか怖くて、とりあえずシランの近くにしようと心に決める。またあの危険なを出された時でも対応出来るようにと。そうしてようやく助けてくれた声の主をちゃんと見ることが出来た。

薄い茶色の髪に、同じ色の瞳は優しげに緩んでいる。一見若そうだが、何だかおじいさんのようなゆったりとした時間の流れを纏っている感じで、年齢ははつきりしない。とにかくにつこり笑顔だ。

「君たちが真太郎君と紫蘭君かな？」

「なんで名前を……」

「初めてそう呼ばれたかも！」

「……………」

真太郎って。

自己紹介でも滅多にフルネームを名乗らないし、最初に呼んだシランが「シン」だったのでそれで良いかな、と納得していたし気に入っていてもいた。周りもシランが呼ぶのに習っていたから今までその呼び方をした人は多分いない。

「あ、そうなの？ やった、一番乗りだね」

「だな！」

「……あの、話戻してもいいか？」

「どうぞ」

シランの申し出ににこやかに応じる男。そういやオレ達のことは

何故か知ってるみたいだが、オレはこいつを知らないぞ？ シランも同じことを思ったらしい。でも少しはオレよりわかっていたらしい。

「あん……や、あなた、が第四地区長、ですか？」

途中女に睨まれて慌てて言葉を修正するシラン。オレは女を睨み返す。シラン睨むんじゃねえよ！

険悪なムードで睨み合う二人。しかしこっちの雰囲気なんて気付かないように、男は変わらずにこやかに答えた。

「そつだよ。僕が地区長の三好小々路。こっちが僕の補佐役をしてくれる副長の椎名美那ちゃん」

「あ、俺は観月紫蘭でこいつが巽真太郎で」

「うん知ってる」

「……何故、ですか？」

「まー……あ、いや。正哉君から聞いてるからね。君たちのことは」

イナギマサヤ守衛区長をマサヤ君なんて名前で呼んでる人、初めて見た。新鮮だな。つか本当にこの人何歳だろ？ 確かイナギさんは四十八だって聞いたな。……同じくらい、なのかな？

「で、こんなとこに居るなんて、何か用かな？」

「あ、そう、守衛区長に会いたくて来たんです」

「ああー、なるほど。彼ならまだ葉月君のところだね。まだ来ていないのなら」

「ハヅキ、君？」

「上野葉月君。守衛区の第三地区長だよ」

「ああ……わかつ、りました。そっちに行ってみます」

シラン敬語とか苦手だからな。今の不自然なところは多分「わかった」と言い掛けたところを直したんだろう。ま、オレはシラン以上に敬語とか使わねえけどな。

「うん、気を付けてね」

「……はい」

一番の危険人物はあんたの隣に居るよ！ と叫びたかったがこれ以上シランが狙われる理由を作りたくはない。早く行こうぜ、とシランに目配せする。

しかし何故かシランはそれを無視し、なんとオレの前に出た。ギョツとして慌てて戻そうとしたが「大丈夫だ」の一言で聞いてくれやしない。確かにミヨシってやつが出て来て来て大人しくなったけど……不安なんだよ。

だからオレはせめてシランの隣に立ち、いつでも庇えるように構える。

「椎名さん、でしたか」

「……何でしょうか？」

まだ怒りが残っているようで、女、シイナは睨むようにシランを見た。

「さっきの会話、言葉はあなたを侮辱するつもりで言ったものではありません」

「……」

「でも誤解させたのなら、謝ります」

「え……？」

「すいませんでした」

抵抗なく、シランはすつと頭を下げた。逆にシイナはきょとんとして呆気にと取られている。謝罪は全くの予想外だったんだろ。オレだって予想外だ。

「許してもらえ、るか？」

敬語はやめたらしい。顔を上げたシランは真っ直ぐにシイナに向き合った。シイナは戸惑っていたが、ミヨシに小突かれてようやく口を開く。

「そういうこと、でしたら、あの……」

あたふたと意味もなく手を動かしていたが、直に落ち着くところを見つけたのか、栗色の瞳で黒瞳を見返した。

「私の早とちりで銃を向けてしまい、申し訳ありませんでした」

はつきりそう言うと、綺麗なお辞儀をした。花が日が落ちるのに合わせてゆっくりと頭を垂らすように。そして太陽に照らされた花が起き上がりゆっくりと開くように。シイナは顔を上げた。

それを見て、シランはほっと表情を緩めた。安堵の息を一つ吐くと、また口を開く。

「申し訳ないと思っているなら一つ、約束して欲しいんだが……」

「……何でしょうか？」

「……どんなに怒っても、銃を撃つのは最終手段にしてくれ」

げんなりした顔で心底そう願う、といった口調でされた申し出に、シイナはちよつと驚いたような顔をしてからクスツと小さく笑うと、了承するように微笑んだ。

「わかりましたわ」

「ありがとう」

「本当に大丈夫、美那ちゃん？ 約束できるの？」

「善処致します」

怪しいよなあ。だって多分地区長のミヨシにも散々注意されてるだろうし。大丈夫かあ？ と思ったが。

「俺は信じる。だから約束守ってくれよ」

「はい」

楽しげに笑って答えるシイナ。何だよさっきまで睨んでた癖に。シランもあっさり許しちゃってさ……ったく。

「ほらシラン行こうぜ。オレはシランの安全を確保する義務があるんだ！」

「義務はないだろ」

「うるさい！ それより……」

我慢して来たがシランの顔を見たらやっぱり心配になってきた。真剣な視線を感じたシランがちょっと怯む。

「な、なんだ？」

「流れ弾！ 来てないよな？ 大丈夫だよな？」

と言いながらももう勝手にチェックを始めてしまう。顔とか腕をぺたぺた触って確認、確認。

「お前なあ…… 大丈夫だ。お前が守ってくれたからな」

「ほんとか？ 本当に痛いところないんだな？」

「それよりお前は大丈夫だったのか？ 弾丸、どこで受けたんだ？」

「あ？ 腕だけど」

言いながら一応腕を試してみる。鱗はミヨシが割り込んで気が緩んだ頃に引っ込んでしまったので、今は普通の人間みたいな皮膚だ。でも特に傷痕はないし、違和感もない。そもそもあんな小さい弾くらいいじゃ貫通出来るわけないし、傷もねえよ。だから簡潔に答える。

「鱗で受けたから平気」

「そう、か……良かった」

シランもほっとしたらしく、不機嫌な中に喜色が滲む。慣れないとわかりにくいけどな、シランの表情の変化は。

「怪我がないようで良かったよ。美那ちゃんも、約束したからには本気でその癖治して行こうね？」

「はい、地区長」

癖なのかよ……なんつつ物騒な癖なんだ。シランも苦笑いだ。

「では失礼します」

「良かったらまた遊びに来てね。美那ちゃんのケーキはとっても美味しいから」

そんなにつこり笑顔の地区長と、ちょっと表情が柔らかくなった副長に見送られ、オレ達は恐らくゴールへとなる家へと足を向けたのだった。

「この辺り、のはず。……もう一人くらい訊いてみるか」

そんな風に一人つぶやくシランを揺すって名前を呼ぶ。鼻がわかつていることを教えるために。シランはいつもの皺の寄り気味な顔で振り返る。

「シランシラン」

「……なんだ？」

「あの家だつて、多分」

「どうしてだ？」

「イナギさんの匂いするから」

「……そうか、流石だな」

納得すると素直に感心したように頷くシラン。イナギさんの匂いが近い、強い。だからあの家にいるんだとわかる。

「へえ、君、鼻が良いんだね」
「ん？」

振り返ると男が一人立っていた。気付かなかったけど、一体いつから居たのやら。

無駄に意味ありげな風に宵闇色の目を細めた男は、真っ黒な外套を纏っていた。背はオレよりも高い。てか足がすらつと長い。口を愉快そうに歪めた黒髪の男は、オレを真っ直ぐに見ていた。

「やあ」

「……？ 誰だお前？」

「まあ、初対面だからね。俺は遙。よろしくね」

「ハルカ？ オレはシンだ。えと、よろしく？」

「じゃあついでに狼君にもよろしく言つていてね」

「あ？ それ口ウのこと？ お前何なん」

とオレが問い詰める前に、既に用は済んだとばかりに男は口を閉じると、深みのある笑みを口元に浮かべたまま背を向け、直ぐにスタスタと歩き去ってしまったのだ。

……何だか消化不良と言うか、納得行かねえ会話だったな。

「何だっただ、あいつ？」

「……わからない。しかし鼻が良いな、と褒めていたということは、お前の判断は正しい、ということじゃないか？」

「うーん、まあそうだな……入るか」

さっきのことはあまり気にしないことにした。確かにあいつは肯定してたからイナギさんは間違いなくあの家に居る。ならシランの目的が果たせる訳で、なんも問題ない。うん、よし。

「行こうぜ」

「ああ」

シランはオレがさっき指差した家へ真っ直ぐに向かった。しかしふと予感がしたので手を伸ばすと。

「わっ」

シランの襟首を掴み引き戻した。そこでまたふと思った。シランは安全圏に入っただけ、オレはどうするんだ？ その答えが出る前にそれは勢い良く。

っつ。

丁度シランと入れ替わり自然と前に一步踏み出したところだった。そこへほぼ同時に踏み込む人がいたのだから……まあそうなるに決まっている。そして幸か不幸か背の高さはあまり変わらなかった。だから盛大にぶつけたのは互いに額、頭だった。

「つてえ！」

「っ！ つ、つ ！？」

火花みたいなのが見えた気がする。目がチカチカするぞ……。オレは数歩後ずさると頭を押さえ、顔をしかめた。しかし相手の方が勢いがあつたせいか、声も上げる余裕すらないらしく、尻餅を付いたまま深く踞つてしまった。

「……大丈夫か二人」

「オレは平気だけだよ」

最初は痛かったが直ぐに痛みは引つ込んでしまった。ドラゴンならではの回復力。だけど衝撃やら痛みで危うくドラゴンの鱗が出てしまふところだった。銃弾もへっちゃらな鱗に人間の頭が思いつきり衝突したりなんてしたら……どうなるんだろ？

「うう……すみません、慌てました」

ようやく痛みから復帰しつつあるようで相手も顔を上げた。シラシラくらい年だと思う。薄い黒の少し野暮ったい髪。青年は、つり目に涙を溜めてオレを見上げた。立ち上がる程は立ち直れていないらしい。

「オレの方こそ何か、ごめん」

今日は何だか扉と縁があるのかね、と思いながら青年が飛び出して来た扉の方に目をやると、武骨な困った顔にぶつかった。

「あー……まあ、なんだ」

扉の向こう、つまり青年の出てきた家の中に立つ大男は、その巨体に似合わず何だか安穩とした雰囲気を纏って言った。

「まずは落ち着こうか、お前ら」

「でも！」

「まだ子供だったんだろ？ 気を付けるように他にも言うておく。それで良いだろ？」

「良くありません！ 危険度を貴方もご存知でしょう！」

「だが子供は脅威ではないだろう」

「成体になってからでは遅いんです！ だから俺が！」

「……なあイナギさん」

「なんだ？」

「いつまでこれやんの？」

「うむ。上野が落ち着くまでだな」

「わかった」

「わからなくて良いです離してください」

何故かイナギさんの命令で青年、ウエノを確保していた。つか羽交い締めだ。結構力のある抵抗が返ってくるが、本気で押さえてし

まえばオレに断然分がある。……でも何だろう、この状況？

落ち着けと言ったイナギさんを無視して走り出そうとしたウエノを止めると言われたので、ついつい素直に捕まえてしまったらこうなってしまった。身動きの取れないウエノが大男なイナギさんを見上げる形で抗議している。因みにシランは後ろで沈黙だ。

イナギさんは尚も暴れるウエノを見て、深々とため息を吐くと、とどめとばかりに言った。

「お前は地区長なんだ。もう少し泰然と構えろ。仲間が不安がるだろう？」

「そう、ですが……」

「副長はもう卒業したんだ、自覚を持て、上野」
「……はい」

随分と厳しいな、と思った。こんなイナギさん初めて見た。いつも怖そうな顔だけど、普段から優しくて穏やかな人だから。仕事の時はやっぱり別なんだな、と思った。

しかしウエノがようやく落ち着くと、ほんのちよつと顔が緩み、空気が和らいだことを感じる。

「とにかくその件は保留だ。まあ、暇な時間に無理のない程度であれば俺がとやかく言うことじゃないがな」

「はい！ ああ、取り乱してしまい、すみませんでした……」

「シン、もう離して良い」
「わかった」

抵抗はもうなかったので普通に解放した。すると直ぐにウエノは振り返るとオレをまじまじと見てきた。

「なんだ？」

「あんなに抵抗したのに全く外れませんでした……」

どうも驚いてるらしい。確かにこの男自身も見た目に反してかなりの馬鹿力だ。だからそれなりの自信はあったのだろう。

「他地区の人、ですよ？　見掛けない顔ですし」

腰の刀に目を向けて言う。まあ武器を持っていればほぼ間違いなく守衛区の住民だからな。傭兵とかもあるけど、服装や装備からして違うことは一目瞭然だ。

「そうだけど」

「……刀。もしかして観月さん？」

「……観月は俺だが」

とようやく隅に居たシランが前に出た。やっぱりシランは割りと有名だよなー、と思う。

「ああやっぱり。鐵^{くろがね}さんの面影がありますね」

ウエノは顔を綻ばせて言った。クロガネ、というのは確かシランの父ちゃんの名前だったはずだ。しかしシランはムスッとした顔で答えた。

「そうですか」

良くは知らないが、あまり父ちゃんのことを好きじゃないらしく、シランは父ちゃんの話になると不機嫌度が上がるのだ。それを感じたのかウエノもそれ以上は言わなかった。

「じゃあ君が紫蘭君なんだね。噂には聞いていますよ。でもじゃあ彼は……？」

オレを不思議そうに見るウエノ。何か言う前にイナギさんが口を開いてしまった。

「半田から聞いただろう？ シンだ、ドラゴンの」

「ああ！ 彼がそうなんですか！」

目を丸くするウエノ。対称的に渋い顔になるシラン。

「半田さん……」

「心配するな。別に言い触らしているわけではないぞ。必要な時に対処出来るよう、限られた人にしか彼は教えていない」

「そう、ですか」

何だか思い詰めたような顔で俯くシラン。心配になって声をかけようとしたが、その前にイナギさんが苦笑した。

「お前も背負い過ぎだ。もう少し軽く考えろ。二人分も背負ってたら潰れちまうぞ？ そんなに頼りないか、俺達は」

「……俺が弱い、だけだ」

「お前も大概、不器用だなあ」

苦笑いながらイナギさんはくしゃくしゃとシランの頭を撫で回した。それを見て、何だか寂しくなった。理由はわかんないけど、やっぱり寂しい気がした。

「守衛長ってお父さんみたいですよね」

いつの間にか隣に並んで立っていたウエノが微笑んでオレに言った。でもオレは答えられない。答えを知らない。ふて腐れて見せるという虚栄すら出す余裕もなく、ただぼんやりと呟いた。

「おとうさん……」

オレの知らないものだ。

015 やがて辿り着く場所【真】（後書き）

苦労性な葉月くんが何に困っていたかの説明がないんですが……話すと長くなるのでスルーしてしまいました。とにかく変異種のことです。何かと巻き込まれる葉月くんは本編の裏できつと苦労してるんです。何気なく気に入ってるキャラなんですけどね。

016 進むべき道を探して【紫蘭】（前書き）

今回は本当にタイトルのまんま、真面目にそういう話です。おせっかいと言つか心配性なキャラばっかですね。理由は一応あるんですが。

まあそんな感じで十六話、シラン視点でお送りします。

016 進むべき道を探して【紫蘭】

「ああ、あの話な」

ようやく落ち着いたところで昼に起こった出来事を簡潔に伝えると、そんな反応が返ってきた。

「では本当、なんですね？」

「人聞きの悪い話だがな、本当だ。すまん、話していなくて」

「……」

「紫蘭が移籍した場合の扱いの確認、こちらが何を代わりに得るか、お前に対する交渉に関しての制限、が取り決めの主な内容だ。お前やこの特区が不利にならんようにと、あちらの話し合いに応じた」

「……はい」

「お前抜きに話を進めたことは本当にすまなかった。だがお前は馬鹿に真面目だ。下手に話しておくと思つて悩むと思つて伏せていたんだ。悪かったな」

「いや……案の定、といった感じなので、反論は出来ない」

「そうか」

しかし少しほつとしている自分がいた。見捨てられたわけではなかった、なんて見当違いな安堵。矮小な自分が露見するようで、非常に嫌だった。でも安心してしまふのは仕方ない。

「そういうことだ。だから決定権は間違いなくお前だけのものだし、その辺りの取り決めもしっかりやった。それを破つて来たらそれなりの対処をすることも伝えた。もちろん、具体的にな」

悪戯をした子供のような顔をしてみせる稲城さん。この特区はか

なり強い。力での意味ではない。それも確かにあるが、何より信用がある。発言力も強い。だから報復の内容も大体予想がつく。そしてそれなら流石に相手も無茶はして来ないだろうと安心出来た。

「……ありがとう」

「なに、お前らを守るのが俺の役目だ。当たり前だろう」

そういう人だ、稲城さんは。

手の届く範囲全てを気に掛け、全てを守るのだ。それは嘘ではないし、それがこの人の矜持。そしてそれを貫き通した結果が今、第八特区全てを守ると言っても全く過言ではない役職、守衛区長だ。今や、稲城さんの手は特区全体にまで伸びている。

こんな凄い人、俺は他に知らない。だから稲城さんは誰からも信頼され、尊敬されている。それもまた、当たり前のこと。

「しかしな、紫蘭」

「何ですか？」

妙に真面目な声に、改まる。稲城さんは真っ直ぐに俺を見て言った。

「お前はあまりに外を知らない」

「……」

「鐵ほど極端なことをやれとは言わないし、まあ、やられても困るんだがな」

と、急に少し締まらない顔になった。この差がなかなかに脱力させられる。ついさっきまでの神妙な雰囲気は、あっという間に霧散してしまった。稲城さんは気にせずそのまま続けてしまう。

「だから、なんだ……見に来て話を聞いてくれないかって話なんだろう？」

言わんとしていることはわかった。しかし答えが出せないのも沈黙のまま続く言葉を聞く。

「だったらせつかくだ、行ってみたらどうだ？ 見学に」

「……偵察してこい、と？」

意地の悪い返しだった。我ながら嫌な性格してると思う。しかも答えから逃げるために絞り出した台詞だというのが何とも嫌になる。しかしそんな自己嫌悪の渦にも稲城さんはひよいと入ってしまうのだ。

「そう取った方が気が楽ならそれでも良いけどな。まあ謎の組織だ。それも助かるな」

「……すいません」

「謝るな。確かにそういう意見が出たのは嘘ではないんだから。ただ俺としてはだな……」

そこで区切ると稲城さんは俺を見た。何かを読み取ろうとするかのよう。そして照れ臭そうに笑って言った。

「余計なお世話かもしれん。けど俺は結構心配してるんだ、お前をな。少しは周りを見るようになったが外はまだだろう。だから俺はお前にいろいろ見てきて欲しい。このまま閉じ籠って押し潰されないように、な」

考え過ぎだと我ながら思うんだがな、と付け足すが、本当にそう思ってくれてることはわかった。心配されている。本当に、本当に

……俺は周りに迷惑をかけてばかりだ。

「ただでさえ狭くなった世界なんだ。全てを見るのは容易くて難しくなった。あとは踏み出すか否かなんだ」

「……外には、森の向こうには、何があるんですか？」

稲城さんは怖く見える顔を精一杯緩ませて言った。

「その答えをお前が見つけるんだよ」

踏み出せるのか？

俺は見付けられるのか？

そして。

あいつのことも、答えを見付けてやれるのか？

でも、きつと足踏みしているだけじゃ何も変わらない。きつと前に出さなきゃどこにも行けない。

答えは見つからない。

なら、今俺が持つ答えは一つ。

「行きます」

間違っているかもしれない。けど、ここに座っているだけじゃそれすらわからないのだから。

「気を付けて行ってこいよ」

稲城さんは和やかな笑みを浮かべたかったんだと思う。声はとも優しい温かな低音だった。

「いつでもおいで。何もないとこだけど、相談に乗ったりくらいは出来るから。ちょっと俺達似てるみたいだし」

半田さん程頼りがいがないかもしれないですけど、と苦笑しながら言ってくれた上野さんに礼を言つと、俺達は直ぐに立ち去った。長居するつもりは元からなかったから。しかし。

「……そういう約束ではあったが、どうかしたか、シン？」

上野さんの家を出てからも延々と黙りを続けるシンに心配になってきた。何だか様子がおかしい気がする。何というか……寂しそうな雰囲気。シンはゆっくりと顔を向けた。
泣きそうな顔に見えた。

「なあシラン」

心なしか涙声のシンは、小さな小さな声で言った。

「父ちゃん、って何だろな」

「……………」

「母ちゃんってスズさんみたいで、兄弟ってシランとかロウで、それで、そん」

「……シン」

「父ちゃんってなんだろ、そもそも家族ってなに？ オレは知らない、知らない、知らない！」

ああ、あの時だ。

初めて出逢った時の心の悲鳴みたいな叫び。胸を刺すような痛々しい表情。わからなくて戸惑って、何だかわからない感情に押し潰されそう。

俺はどうすれば良いのだろう。

なんでシンの父はここに居ないのだろう。

「……シン」

「教えてよ、オレは知らないから、教えて、誰か教えてよお……」

泣いてないけど泣いていた。

「わかんない、わかんないんだ。父ちゃんも母ちゃんも本当は知らない。家族だけじゃない、本当はオレ」

「もう良い」

ピタッとシンは止まった。視線を感じるのに俺は顔を伏せたままだった。怖いのだ、その真っ直ぐ過ぎる目が。自分を信じるその暁色が。

「俺にだってわからない。わからないから、だから」

それでも口は勝手に動いて、勝手に願って、勝手に
勝手に祈っていた。

「探しに行く。俺は探す。答えを持つものを、見付けに行く。見付かるかなんて知らない。けど、俺はちゃんと」

答えを出したいんだ。きっといつか、胸を張って答えられる何か

が欲しいんだ。シンやロウを背負えるような、守れるような、何かを。

傷だらけな彼らを溢したくないから。また一人ぼっちにはしたくないから。
だから。

「いろいろなものを見て、聞いて、知って　見付けたい、答えを。その意味を」

「……なら、オレは」

気が付けば顔を上げていた。見えるのは泣きたそうで泣けなかった、中途半端な苦しそうな顔。潤んだ朝焼け色の瞳は、それでも迷うことなく真っ直ぐで。

哀しくなる程真っ直ぐで。

曲げることを知らなくて。

「シラン、守る」

だから張り合ってしまう。この瞳を裏切りたくない。だから俺も愚直に進む。間違いは正しながら、迷いは向き合いながら。

俺達は前に進めると信じてる。

そう、信じてる。

017 夕暮れ時の小さな影法師【狼】（前書き）

ようやく出番の少ないロウ君のターンです。そのせいかは知りませんがちょっと長めになりました。

シンとシランの間みたいな彼視点で送る第十七話、始まります。

017 夕暮れ時の小さな影法師【狼】

「あれ、あいつらまだ帰ってねえのか？」

日が十分傾き、濃い影を落とすようになった頃だった。薄暗い家に顔を出したのは、厳つい顔だがどこかのほほんとした雰囲気を持つこの地区の頭、ハンダさんだった。

「まだだぞつ。何か用か？」

「いやあ、オレが留守の時に来たらしいからさ、無事守衛長に会えたかなと気になってな」

と言いながら慣れた調子で家に入ってくると普段は使われていない口ウの左隣の席に腰を下ろした。

「守衛、長？」

聞いたことある気がするが、誰のことだろうと引っ掛かり、首を傾げてみせるとハンダさんは苦笑した。

「稻城の旦那のことさ。この辺りが守衛区って呼ばれてることは知ってんだろ？」

「うん知ってる」

「で稻城さんはその守衛区の長だから守衛区長なんだが、街の防衛に関してが一番上にいる人なんだよ。だから一部の奴ら、特に俺みたいなんは尊敬とかそんな意味を込めて『守衛長』、守る長とあの人を呼ぶ」

「ほー」

イナギさん。何だかんだで会えていない人だけど、ハンダさんとかたくさんの人に慕われてるなんて凄い人なんだな、とちよつと期待が高まる。

「あー、まあそんな大袈裟に捉えて呼んでる人は少ないかもしれないけど、いけどな。実質的に守衛長だからそう呼んでるだけかも」

期待の目で少し見てしまったからか、控え目に言い直されてしまった。でもそれは関係ない。ハンダさんがそういう意味で呼んでるだけで十分意味があると思うから。

「いつか会えると良いなあ」

「同じ街だし住んでりゃ会えるさ。お前の仕事ない時に今度回って来たら教えようか？」

「ほんとかつ！」

「お、おお」

怯むハンダさん。そんなに大きな声を出したつもりはないんだけどな。

「近いぞロウ」

「んお？」

いつの間にか身を乗り出していたみたいだ。机に手をついて、ぐいっとハンダさんに迫っていた。ごめんなさい、と謝ってからすぐと席に戻る。

「ハンダさん、約束だぞ？」

「おう、約束な」

そこで会話は一区切りついたらしく、微妙な沈黙が生まれた。とりあえずロウは読み掛けの本に栞を挟んで閉じた。

その動作があつたからなのかは知らないが、ハンダさんが再び口を開く。

「留守番だったのか？」

「ロウ本読みたかったから」

「こんな暗いの灯り点けないのか？ 字、読み辛いだろ？」

その言葉に首を傾げた。だって光源が一切断たれたら見えないのは当たり前だけど、室内はまだまだ薄暗いだけで光はちゃんとあるなら問題ない。

「……そつか、お前、目え良いもんな」

何故かわしやわしやと頭を撫でられた。不思議そうにハンダさんの顔を見上げる。いつもの優しそうな顔にちよつと陰りがある気がする。

「ロウ変？」

「変じゃない、凄いだよ。お前らはな」

そこで漸く納得した。そつかシンはドラゴンなのが嫌なんだっけ。ハンダさんはそのことを実は結構気にしているんだ。でもロウは違う。

「ロウ、人間よりは狼だぞ？ それが普通」

「お前は狼の方が良いのか？」

ハンダさんは急に言われた言葉に困惑したように眉をハの字にす

ると、そう問い返した。だからロウはこくと頷いた。

「ロウは狼だ。そういうもの」

「……そういうもんか」

何か言いたげに視線をさ迷わせていたが、結局そう呟いて納得することにしたらしい。それで良いと思う。ハンダさんが思った通り、ロウにはこれ以上の答えを持っていないから。多分どこかで溢して来たものの一つだ。ロウだってわからない。

それでもロウは狼で。

ロウはロウだと覚えているから。

「ありがとう」

はにかんでロウは言った。

「……お前はあいつと違って賢いなあ」

ハンダさんは苦笑混じりの感心の声を上げた。

とそこで遠くから聞き覚えのある声が聞こえてきた。出会ってからまだ短い時間しか経っていないが、馴染み易い、温かな声。

「シラン達帰ってきたっ」

笑顔でそのことをハンダさんに伝える。それを聞くとハンダさんも耳を澄ませた。暫しの沈黙。そして口を開くハンダさん。

「なあ」

「ん？」

「俺の耳には怒鳴り声が聞こえるんだが」

「ロウもだぞ」

「何でケンカしてんの？」

「さあ？」

「……………」

「仲良いからなっ」

「や」

それで片して良いのか？ というハンダさんのツッコミはほとんど意味を為さなかった。ただただ笑顔で楽しそうに遠くの会話に耳を傾けているロウには。

そして数分後。

「ぜえったいにつ！ 絶対に！ オレはついて行くんだからな！」

「お前は待つてろ」

「やだね！ つかさっきの聞いてたのか？ オレはシラン守んの！ 近くに居なくてどうすんだよ！」

そんな言葉の応酬が家の前に立つまで、いや、戸口に立った今尚続けられていた。でも家の戸に手を掛けたのならロウのすることは一つだ。ロウは目を輝かせ、喜び満タンの笑顔で言った。

「おかえりシン、シランっ」

「おう、ただいま！」

「……………今帰った」

「おー、いつも元気だねえ、お前ら。あ、お帰り」

喧騒と共に帰宅した二人。と言うより喧騒そのものな二人だけでも言い争っていた割りに普通に返事が返ってきてちょっとびっくりした。まあこの二人らしい。

そしてシンとシランは今ハンダさんに気付いたらしく、交互に言葉浴びせる。

「なんでハンダが居るんだ？」

「……ひとくりにしないでください。騒がしいのはこいつ一人だ」

「……なんで俺にばっか。刺のある言葉だなあ」

ちよつとハンダさんがしょんぼりとした。しかしシランもいつも程冷静ではないのか何も答えずに定位置、ロウの右隣の席に落ち着いた。シンはロウの向かいだ。でも座る前に台所に常備している水差しを持つと二杯コップに注ぎ、自然な流れで自分とシランの前に置いた。

「……案外ホテルとかで働けそうだな、シン」

「あ？ 何だよ、ハンダも何か飲むのか？」

「や、長居はしないから良い」

「そか」

相当喉が渴いていたのか、会話が切れるとシンは水を勢い良く飲み干した。シランは半分程口にすると、コップを置いた。

「で、何か用ですか？」

「……」

「何だよ、言えよ」

「いや、てつきり放置されると思ったからな。あんな登場だった癖に普通に構ってくれるのな」

「一応客だし」

「……まあ、悪いですから」

顔を見合わせて頷き合う二人。入ってくるまで喧嘩していた人達

とは思えないくらいの息の合いようだ。水の鎮静効果なのか？

「用って程の用でもないんだけどな。で、守衛長には会えたのか？」
「なんでハンドが知ってたんだ？」

「美崎から聞いたんだろ。心配してくれてありがとうございます。
無事会えた」

「そりゃ良かった。上野のそこだった？」

「ああ、第三地区だった」

「ふうん。ならばちぼち戻って良い頃合いかね」

何かを計るように空を見てハンドさんは呟いた。シランとシンは
何かわかっていらしく、同意するような雰囲気。

「まあでも、一つ良いか？」

「なんだ？」

「守衛長なんかは何の用だったんだよ？」

確かにそうだ。今まで聞いた話を総合すればイナギさんというの
はかなり偉い人。わざわざ直接会いに行く必要がある用事とは？
って言っても昼の出来事を聞いていたから想像はできる。だから
口ウにとって必要なのはその結果、結論。
いや。

それすらさっきの喧嘩の内容で知っている。あとはその喧嘩の結
果だけが本当に重要なのだ。

シランは少し考えをまとめるように俯き、眉間に皺を寄せる。

「……急な話なのだが、何と言うか……ヘッドハンティング、と言
って伝わりますか？」

その言葉でハンドさんの顔は一転して険しくなった。そして怖い

顔で静かに訊ねる。

「……詳しいことは旦那に聞こう。で、お前の答えは？」

「話を聞いて欲しいと言われた。俺は行く気はない。しかし……聞くだけ聞いてみようと思う」

「それは、あちらさんのところに赴くってことなのか？」

「ああ」

「……なるほどな。それであの言い争いな。ふん、なるほど」

ハンダさんは顔の陰を深め不機嫌そうに鼻を鳴らし、納得の言葉を漏らした。

「一応聞くが、それはお前の意思、なんだな？」

「そうだ。俺は知らないことが多すぎる。それに見付けたい答えがある。だから……必要だと思った」

「……そう、か」

ふっ、と顔の陰しさが失せた。ちょっと情けないような、けれども優しい不器用な顔に戻る。

「それは良いことだな。うん」

まあ確認は要るけどな、と低い低い声で呟いたのは聞き逃さなかった。それからハンダさんは二人の顔を見比べて言った。

「来たいって言ってんなら連れてってやれよ」

「……でもこれは」

「てめえの都合だって？ まあ良く話し合って納得しとけよ。俺はシンに一票」

それだけ言うとハンダさんは立ち上がった。

「んじゃ邪魔したな」

立ち去る背中。それを皆黙って見送った。そして始まるのは戦いだろ。二人をハンダさんがしたように見比べてみる。

シランは黒い瞳を揺らしている。迷っている。悩んでいる。何がシンにとっての最善であるかを。眉間の皺を深めて考えている。

シンは褐色の瞳で真っ直ぐに見詰めている。守りたいと願うこと。それは痛い程わかる。その強い願いは揺れることは決してない。

ロウの答えは決まっている。そしてこの問題はシランが折れるか、シンが納得しなければ解決しない。そしてそれは互いの言葉でしか意味がない。第三者の言葉なんて無意味だ。

つまりロウが居てもしょうがない。

「ロウちょっと出掛けてくる。二人は納得出来るまでゆっくり話してて」

椅子から降りると直ぐにドアから出ようとしたが、シランの声に引き留められる。

「ロウは、どうするんだ？」

何を訊いてるかなんて改めて尋ねる必要はなかった。ロウは振り返る。微笑んで答える。当たり前のこと。

「決まってる。シンが行くならロウもついてく。行かないならシンとお留守番。そうじゃなきゃ意味がないぞ」

「……そう、だな」

意味がない。

だってシンを置いていくのにロウだけ連れていくなんてシランはしないし、出来ない。そしてその逆、シンを連れていくのにロウだけ置いていくことも。だからロウはシンと同じ選択を取るしかない。シランのことなんてどうでも良いなんて思えないけど、シランやシンを無視してまで我が儘を言うつもりはないし、そこまでの意思もロウにはないのだ。

まだまだ不安定。ゆらゆらしてるのがロウだ。だからそう答えた。その答えにシランは困ったような、曖昧な笑みを浮かべた。多分どんな顔をして良いのかわからないのだ。そしてそれがわかっていたのに意地の悪い返しをしたロウは良くない。

でも喋るのが苦手なロウは、簡潔にまとめて話すべき、その方が伝えやすい、そう思っている。頭の中ではいろいろ考えているけど、それを全て表現するのって難しいから。

だから最小限で最大限の意思の疎通が出来たら良いと思う。

「……行ってきます」

でも多分ロウは悪い子だ。あんまり正しくない。上手くない。ごめんなさいは言わなかった。

「ハンダさんっ」

例えるなら四角い。そんな大きな背中。

無駄にあるわけではない肉は、鍛えられているだけあつてきびきびとした動きを可能にしていた。それでも出て間もなかったのですねずんと歩くその背中直ぐに見つかった。

そしてロウの声に気付くと、そのがっしりした肩を振り向かせた。

「ロウ？　どうかしたか？」

「ロウも聞きたいから来た」

「……？　旦那から詳しい話を聞く、ってやつか？」

こっくんと頷き返す。ハンダさんはちよつと困つたように頬を掻いた。

「そりゃあ良いけど……あいつらに訊かないのか？」

「シンとシラン話し合う。それは二人の問題。時間要る。ロウ邪魔したくない。それに約束したぞ？」

「約束……ああ、旦那に会わせるってあれ。……そっぴやそっぴや。今日は休みなんだったか」

すっかり忘れていたらしく、申し訳なさそうに頬を掻きながら口ウを窺い、それから諦めたように息を吐くと言った。

「……まあ、良いか。じゃあ来いよ。暫くすりや旦那も来んだろ」「うん！」

無事了承を得たのでハンダさんの隣に並ぶ。シランとハンダさんの家はそこまで離れていない。だからハンダさんに追い付いて間もなくハンダさんの家は見えてきた。シラン家以上にこぢんまりとした家が。

「狭いからなあ。美崎追い出すかねー」

とぼやきながらノックなしにドアを開けた。迎えたのはのんびりとした緩い声。

「あ、隊長ー。お帰りなさい」

「おう。何かあったか？」

「ええ。等々力^{とどうき}さんが『酒はねえかー』となまはげみたいなのを言いながらやって来ましたよ」

「……あいつ、何やってんだよ」

「いつも楽しそうな人ですよー、って、あれ？　ロウくんじゃないですか。隊長で見えませんでしたよ」

「……暗に邪魔だと言いたいのか？」

「こんにちは、ミサキさん」

ハンダさんが戸口を譲ってくれたので顔を出すと挨拶した。家の中のミサキさんは椅子に座ったまま手を振って応えた。

「ほらほら入って。今日はどうしたんですか？　仕事もない日でしょうに」

「ロウ、イナギさんに訊きたいことがあるの」

「また守衛長ですか。大人気ですねー」

「はあ、お前は平和そうだな、万年」

「あれれ、結構真面目な話なんですか？　僕、席外しましょうか？」

ミサキさんの言葉にハンダさんはちょっと考えるような間を置くと、頭を振った。

「や、まあシランの話なんだよな。お前が必要以上に言い触らさないと誓えるなら別に居ても良い」

「僕だつてちゃんと良いことと駄目なことの分別くらいは出来るんですよ？　僕が確認したいのは、聞くべき話なのか、聞いてはいけない話なのか、どちらでも良い話なのか、ですよ」

隊長の判断に任せます。

ミサキさんは迷いなくそう言った。ハンダさんはちょっと迷うように間を置いて答えた。

「聞かんでも良い話だが、シランに今後も関わって行きたいなら、必要かもな」

「じゃあ聞かせてください。それに、シランさんが出てきた時点で他人事では無くなりますからね」

「ふん、お前らしいっちゃあらしい答えだな」

につこりと微笑むミサキさんに、満足そうな顔をしたハンダさんが頷いた。追い出すかと言っていたのはやっぱり冗談だったみたい。と思ったら。

「でも狭いからお前は立ってる。邪魔でかい俺は座ってるから」

「隊長、何気無く根に持ってますね？」

「何のことだ？」

と惚けてみせるハンダさんは普通にミサキさんを押し退け代わりに席についた。ミサキさんはやれやれと言った顔で歩き出す。

「ロウくんはこれに座ってください」

「ミサキさんは？」

「あはは。僕は平気ですよ。やっぱり優しいね、ロウくんは」

何だか笑いで誤魔化されてしまったけど、ミサキさんに座る気が全くないようなので、落ち着くために座らせてもらうことにした。それを見届けるともう一脚、椅子を出すと、ハンダさんの隣に控えた。

そして唐突に再開する。

「で、等々力さんは隊長秘蔵のワインを掘り当てると嬉々としてお土産を手に去りましたよ」

「おいしい！ あれか、あれ持ってたのか！ なんで止めないんだ！」

「あはは、等々力さん止めるなんてダムが決壊を止めると言うようなものじゃないですかあ」

「絶対に面白いがって見送っただろ美崎い！」

地団駄を踏むハンドさんを余所に、ミサキさんがトドロキさんについて教えてくれる。

「第七地区長さんなんですよ。お隣さんってことですね。因みに副長の榎大地くんは僕の友達で上野さんに次ぐ苦労人として名を馳せてます」

ウエノさんもエノキさんもわからなかったが、そんな理由で有名になるなんて大変だなと思った。

「地区長も副長も面白い人ばかりだから楽しいですよ？ 暇だったら今度挨拶回りってことで行きませんか？」

「楽しそうだな！ 行きたいぞっ」

「おい、ロウを混沌に巻き込むな」

「やだなあ、混沌の親玉じゃないですか隊長は」

「俺は割かし普通だ！」

「僕の方が普通ですよ？」

そんな不毛な感じのやり取りを聞いていると、ふと、扉の前で足音が途切れたことに気付く。普通に考えればお客さん。今に限定すればそれは。

「入って大丈夫ですよ旦那」
「あれ、守衛長ですか」

ハンダさんは気付いていたようだ。やっぱり地区長をやっているだけあって普通の人ではないみたい。ロウが来てからは随分と平和だったから未だにハンダさんが戦っているところは見たことがないが。

みたいな。戦って、みたい。

けどそれは今言うことではない。ロウは扉に目を向けた。

「……ああ、お前がロウか」

入って来たのは大男だ。

背が高い、高過ぎる。同じようにがたいの良いハンダさんよりもずっと高い身長は、ロウが二人いて肩車したって頭には手が届きそうにないくらいだ。巨人と言っても良いかもしれない。

熊みたいだ、というのが第一印象。別に毛むくじゃらではないし、横にがつしりしているというわけでもないが、雰囲気がそんな感じなのだ。

頭をぶつけないよう屈んでいるので陰ってしまい本来の目の色はよくわからないが、とりあえず黒かった。それが余計に迫力に拍車をかけているように思う。しかし奥の奥、微かに覗く柔らかさがそれを打ち消す。きっと慣れてしまえば怖いなんて思わない。

緩く優しいですらある。

多分そういう人だ。

色の判然としない瞳から、それでもいろいろ読み取って下した結論。それはきつと間違いではないと今まで聞いた風評が裏打ちしてくれる。

「そうだぞ、はじめましてイナギさん」

だからロウは安心して心の底からにっこりと微笑んだ。

018 ひだまりの待つ家【真】（前書き）

タイトルだけが決まらず一週間経過……馬鹿ですね。結局雰囲気で決めました。

それぞれの思いが上手く伝えられなかったり、そもそも自分でも整理出来てなかったり。そんな中での旅立ちの日。思いは一つになるのでしょうか。

第十八話の語り手はシンです。

018 ひだまりの待つ家【真】

真つ暗闇。

そこにぼつんとあるのは赤く褐色がかった、ぼんやりした光を放つ大きなもの。

それだけがその世界の全てだ。

大きなものは微かに赤銅色に発光していて、輪郭がほんのりと浮かび上がっている。それは山のようでもあった。でこぼことしたその輪郭は、しかしどこか整然と並んだ突起により、嫌な感じとか怖いとかいう感じはない。どちらかと言えば綺麗。

鋭い表皮、否、鋭く立ち並ぶ鱗は後ろに撫で付けたように揃い、同じ方向性を持ち。斜めに倒れた針山のような巨体は微塵も揺らぐことなく、当たり前のようにそこに在った。

大きな眼があるであろう場所には重たい瞼が落ちたまま。ただただ静かな巨像のように、それは在った。

ドラゴン是在った。

夢だな、とは思った。来ようと思った覚えはないし、何だかいつもよりぼやけて見える気がするから、多分そう。そんな風に一人納得する。

オレの中。奥の奥。そこに居座る赤銅色のドラゴンは常に静寂を体現するようだった。

かつて一度。初めて目を開けた時に一方的に言われたきり。その後一度でも口を利いたことは記憶にない。

でもオレが力を貸せと言えば面倒臭そうに尾を振り、火を出せと叩けば鼻を鳴らし、守りたいんだと言えば小さく息を吐いた。

願えば応える。しかし言葉ではなく、力を貸すという形で。貸してくれるのは鱗、火、腕力などの身体的能力。

この目の前に鎮座してるこいつが、オレがドラゴンである理由。

それだけじゃないけど最たる理由。

でも、と思う。

もしかしたらこのドラゴンがオレの中に居るから、オレは人間じゃないんじゃないかって。もしかしたらオレだけなら人間になれるんじゃないかって。そんなことを考えてしまう。

「なあ、オレは何なんだ？ お前は何でここにいんだよ？」

しかし答えは静寂のみ。死んだように動かない、くすんだ赤の竜が在るだけ。

オレはムスツとなった。だからオレはやなんだ。

「お前なんか大嫌いだ！」

それでも何一つとして答えは返って来ない。

オレは顔を歪めて願った。

早く目が覚めますように。

シランに、ロウに、会えますように。

そして世界は暗闇に沈んだ。

「シン大丈夫？」

「……ロウ」

まず最初に見えたのはロウの顔だった。それで何だか安心した。溜まっていた息を吐き出すと、改めてロウの顔を見て、言った。

「ロウ、近いよ」
「あ、ごめん」

まじまじと覗き込むように、ロウの顔は握りこぶし一個程も離れていなかった。寧ろ指二本が間に入るかすら怪しい。

「なんで近いの？」
「んー。なんかシン、苦しそうだったから。心配だけど、起こすの悪いから」
「だから見てたの？」
「うん」

出来れば起こして欲しかったけどな、と思っただけど、でも結局はそのプレッシャーみたいなもので起きた気もするからまあ良いか、と一人納得することで落ち着いた。

「シン元気？」
「ああ、ロウのおかげで元気だ」
「良かったあ」

破顔するロウに釣られてオレの顔も綻ぶ。大分癒された。

「ありがとな」
「ん？ どう致しまして？」
「うん、それで合ってる」

そう言いながら体を起こす。珍しく寝坊したようで、窓の外には既に朝の支度を終え、出回る人の気配があった。多分八時くらいだろう。

「悪い、直ぐに朝飯用意するから」

と手早く着替えながら言うと、ロウが首を傾げた。

「シランがもう下降りてるぞ？」

「へ？」

いつの間に家に入ったんだ？　じゃなくて、オレが居るなら朝飯はいつも任せてくれるし、じゃあなんで。

と考えていたらピンと来た。

着替えもそこそこに、慌てたオレはロウを飛び越え、床に開いた四角い黒い穴、出入口に飛び込んだ。

この家が例外と言うわけではないが、守衛区の小さな家に住む人は大抵床下、つまり地面の下も利用している。貯蔵庫として食べ物なんかを収納しているのだ。地面の下なら外が真夏日になろうが、氷点下になろうが、そこまで温度が変わらない。冷蔵庫なんて便利な道具はそうそう使えないし、そもそも守衛区は機械を動かすための電気というのがないから当たり前だ。

だからうちにも床下はある。ただ例外と言えるのは、最早地下室としか言い表せないような空間になっているからだ。因みに他は精々掘って腰くらいの高さまで。結局梯子まで作る羽目になった。まあ、自業自得なんだけだな。

そうして地下室に飛び込んだオレは普通に着地した。シランの目の前だった。非常に驚いた顔。

「あ、ごめん」

「……埃が立つから梯子を使えと言っているだろう」

眉間に皺寄せて注意するシラン。でもそうじゃなくて。

「シラン！」

「……なんだ？」

落ち着いた調子でシランは先を促した。オレは焦っていた。自分でも理由がはつきりしていても戸惑うくらいの焦燥感があった。

「行くのか、一人で行くって言い張るのか！」

「……そうだ」

結局。

結局昨日は決着がつかなかった。どちらも譲らず、引き分けたままだった。シランが貯蔵庫、いや、地下室にいる理由は朝食の材料を取りに来たわけではない。旅支度を整えるためだ。ここには頻繁には使わないようなものも収納されている。シランの用はそれなのだ。

オレを、置いていくんだ。

「一人じゃなきゃダメなのか？ オレは居ちゃダメなのかよおシラン。」

また泣きそうな気分になりながら、必死に訴える。シランはさっきよりもきつく皺を刻む。そして言うのだ。

「……お前はここに居るべきだ。オレと居てどうする。半田さんや美崎、稲城さんのいるここの方がお前にとって良いはずだ」

その言葉に、目の前が真っ暗になったような錯覚に襲われた。シランは、何を勘違いしているんだろう？ だって、シランじゃなきゃダメなんだ。確かに大切な人達だ。でも違う。シランはシラ

ンで、一番大切な人で、離れたら。

また一人だ。

そんなのイヤだ。

だからだからだから、だから！

オレは振り絞るように叫ぶ。

「オレはシランと一緒にいい、シランを守りたいんだ……どうしても曲げないって、ならいい、勝手にについてく。んで守る。悪いか！」

それだけ宣言すると、ぷいっ、と顔を反らし、朝食の材料をてきぱきと揃えだす。

今の言葉は実は考えなしだった。つまり勢い、出任せ。でも自分の言葉に後から納得する。そうだよな、シランがダメって言うなら勝手にについて行けば良い。それだけだ。うん、そうしよう。

そう思うと急に楽になった。開き直ったと言うべきか。始めからそうすれば良かったんだ。

「……はは」

そして唐突に上がった力ない笑い声に驚いたオレは手を止め、振り返った。そこにいるのは勿論シラン。途方に暮れたような顔をして突っ立っていた。

「そつだよな、お前なら簡単だ。俺は間抜けだな、本当に……本当に」

言葉や表情だけでは読めない意味も含まれている台詞のように感じた。でもオレにはわからなかった。でも次の言葉でそんな些細なことはどうでも良くなってしまった。

「一緒に行くか……いや、一緒に来てくれるか、だな」

「……ほ、ほんとか、いいのか？」

「俺が馬鹿だったんだ。本当はお前や半田さんが正しかったんだろう」

疲れた顔でばやくシラン。最早違えようのない答えをもらったオレは跳び跳ねた。

「やった、やったぞロウ！ 良いつて、一緒に行つて良いつてさ！」
「良かったなシンッ」

上の、家の中からロウの嬉しそうな声が返つて来た。オレは大きなリュックを引っ張り出すと必要なものをとりあえず放り込み始めた。シランが荷造り途中だったカバンからも勝手にいろいろ取り出しリュックに詰め込む。着替えと保存の利く食料、寝袋、タオル、水筒などなど。

「ロウ」
「はい」

と阿吽の呼吸。説明なくオレが投げたリュックを入り口に顔を出したロウが受け取る。

それから朝食準備の続き。今度は昼御飯分の材料も手に取る。

「……はあ」

シランは何故か疲れた息を吐き出すと、朝食分だけ受け取って先の上に戻った。昼食の材料を揃えたオレがそれに続く。

「張り切って行くぜ！」

「おー！」

「……………」

シランはもう一度だけひっそりとため息を吐いたのだった。

「ロウも行くよな？」

「シランが良いって言うてくれるならっ」

「……良い」

「やったなロウ！」

「やったぞシン！」

無駄にテンションの高い二人だった。でも昨日からの落ち込みようが結構酷かったのでその反動みたいなものだ。実際すごく嬉しいし。

一先ず朝食の準備。ロウはリュックの中身を一度出して仕舞い直してくれている。適当に突っ込んだだけだったので助かるな。シランは何かガショックだったらしく、気持ちの整理をしている最中のよう。そっとしておくことにする。

コンコン。

というノックに反応して俯いていたシランが顔を上げた。オレが出ようとしたが、シランがそれを手で制し、俺が出る、とぼそぼそと言った。

来たのは案の定と言うか、あの三人組だった。

「返事を聞きに来た」

「行く」

「……え、それだけ？」

「……他に何かあるか？」

「いや確かにそれで良いんだが、あまりに簡潔と言うか、なあ」

「リーダー、素直に感謝の言葉で良いんじゃないですか？」

「そうですねリーダー。素直に行きましょうぜ」

「なんで俺が素直になれないキャラみたいな方向にフォローするんだよお前ら」

あの三人、おもしれーなやっぱり、と思いながら聞き耳を立てる。

「だがそうだな、ありがとう。我らの身勝手な願いを聞き入れてくれたこと、感謝する」

「……そうか」

非常にどうでも良さそうな返事だった。心もってないぞシラン。つか何だか気まずそうな雰囲気がここまで漂ってくるな。これは……助けねば。

一時火を消すと手を拭き、台所を離れるとシランの後ろに立った。ギョツとしたリーダーと目が合う。……あれは悪気があったわけじゃないんだ、そんな目で見ないでくれ。

「あー……朝飯食べてく？」

「お誘いありがとうございます。でも済ませて来たので」

「じゃあ茶でも飲んで待っててくれよ。それとも何かやることある？」

「あ、いや、特にないが」

「なら上がってるよ。狭いけどさ。……ロウー」

以心伝心という言葉を知っている。知っているがロウは本当に察しが良い。どちらかと言うと未来予知みたいな感じだ。

「椅子二つでいいか？」

「ばっちりだ。ありがとロウ」

ロウは既に地下室から予備の椅子を出して並べていた。机の両側に一つずつ追加だ。これで六人全員座れるようになった。

「シラン良いよな？」

「……そうだな」

特に不満もないように静かに頷いた。三人組を招き入れると入口側の三席を勧め、シランとロウは裏口側の二席につく。オレは手早く再び火をつけるとやかんを置いた。

「……お前が料理作るのか」

「そうだよ。オレの得意分野だ」

リーダーに答えながら鍋をかき混ぜる。昨日の残りのスープ。ちゃんと今朝で食べきれる量だ。それからパンも焼く。あと野菜切つてサラダつと。

「ちゃんと料理するんですね。流石第八特区です。交流都市と呼ばれるだけありますね」

「しかもモットーは時給自足。難攻不落の城塞みたいなもんだな、本当に」

何故か感心する部下Bとリーダー。ってそう言えば

「名前聞いてなかったよな。オレはシンっていうんだ」

料理の手は止めず、振り返らず問い掛ける。答えたのはリーダー

だ。

「それもそうだな。俺は秋峰^{あきみね}だ」

「名前は？」

「お、お前こそ『シン』だけしか名乗ってないだろう？」

「あそつか。オレは巽真太郎だ。シンで良いよ。で？」

「ぐう……」

何故だか口ごもるアキミネ。すると部下二人が代わりに口を開いた。

「私は新見閑歌^{にいみしずか}と申します」

「俺ア、戸狩丸太^{とがりまるた}って名前さ」

「で、リーダーは」

「待て、待て！ 自分で言える！ お前ら早まんなっ」

こいつら面白いよなあ、ほんと。苦笑を浮かべるオレの顔は多分見えていない。ついでに言うと後ろでわいわいやってる奴らの顔も見えないんだけどな。でも非常にわかりやすい声が割り込んだ。

「結局なんて名前だ？ あ、ロウはロウっていうんだぞっ」

「……既知だろうが、観月紫蘭だ」

ロウの笑顔とシランの困り顔が目につく。そして無言で促すように見ているんだろう、リーダーを。無言の視線に耐えきれなくなったリーダーがとうとう口を割った。

「……だよ」

「聞こえませんよ、そんなぼそぼそじゃ」

「ええい！」

開き直ったらしく何だかやけくそな声が響いた。

「スバルだよ昂！ 秋峰昂が俺のフルネームだよ悪いかコンチクシヨー！」

「……悪くないが」
「かつこいいなっ」

素直な答えが返ってきた。と言うか、なんでそんなに名乗りたがらなかったのかがわからないような名前だ。別に悪くないよな、スバル。ロウの言う通りかつこいいくらいだ。しかし何か以前あったのか、やけくそな声が続く。

「似合わないことは知ってるさ、誰一人として名前で呼んじゃくれねえんだからな！ ああそうさ、昂って顔じゃあねえんだ、それでもそう名付けられたからには名乗るしかねえじゃねえか！」
「……誰も否定していない、昂さん」

ピタッとリーダーの動きが止まった。いや振り向いて確認したわけじゃないが、でも空気で何となくわかった。

「呼んで、くれるのか？」
「……そこまで言われたら、な」
「じゃあロウもスバルさんって呼ぶぞっ。良いか？」
「あ、ああ、ああ！」

感極まった声上がる。シランは優しいよなやつぱり。しっかしなんで他の奴は呼んでやらないのやら。

「んじゃあ面倒だしスバルとシズカとマルタだっけ？ それで良い

よな？」

結局皆まとめて下の名前で呼ぶことにする。特に反論はないようだ。しかしふと疑問に思ったのかスバルが口を開いた。

「そういやその二人、シンとロウだったか……連れて行くのかい、紫蘭殿」

「そうだ……それを拒否するのなら」

「あいやいや、そういうつもりで言ったわけじゃないんだ。護衛として三人程度なら付き人の許可はもらってるから大丈夫だ」

「……そうか」

安心したようなシランの声。もうオレ達がついて行くことに関しては決定事項らしい。良かった良かった。

「んじゃ話もついたことだし」

「ご飯だー！」

ロウの歓声が上がった。

そして暫し朝食タイム。各々ある程度満足すると自然に打ち合わせが始まる。数日家を空けるとなると、いろいろ片付けやらがあるからだ。

そして話し合いの結果。

「んじゃ二手に分かれるか。ロウは板もらって来て。二人は終わったら地下室の整理頼む。昼飯とか準備終わったら手伝うから」

「……ああ」

「わかったぞつ。ロウ行ってくる！」

そんな会話の後、勢い良くロウは飛び出して行ったのだった。既

に自分の皿は綺麗に平らげていた。

そして残ったオレ達は中途半端な朝食を片付けることにする。

「あ、聞くの忘れた」

「……なんだ？」

「サンドイッチの具、何が良かったって」

「肉だろう」

「やっぱし？ まあいつか。肉入れよ。どうせ今あるのは使い切れないといけないしな。まあ残ってたら残ってたで代わりにハンダが喜ぶな」

地下室は何だかんだ言ってもやっぱり貯蔵庫。天然の冷蔵庫みたいなものだ。だから食料満載。保存食も多くあるが、そう長くはもたないものも多いから、ハンダに渡して適当に地区内で分けて消費してもらったことにした。

多少もちそうなものは持って行くけどな。そして昼食はそうして残った余り物でサンドイッチを作ることにした。

「さてと、やりますか」

「……そろそろ帰ってくるだろうしな」

「え、さっき出てったばかりだけど、ロウとやら」

「ただいま！」

「……はやっ」

ロウの足とスタミナを嘗めちゃいけない。スバルの驚きの声をそんなことを思いながら聞いた。それにロウのお使いはハンダのところで済むから直ぐ近くだ。数分あれば十分。

「ありがとう、行くか」

「うんっ」

シランとロウが出て行く。オレは昼食の準備だ。そうだ、もう一つ訊き忘れてた。オレは振り向くと机の方を見て言った。

「お前らも昼飯いるか？」

多分満面の笑顔だった。

結局シズ力達が手伝ってくれたので昼食の支度は思っていたより早く終わった。別に昼食に誘ったのはそんなつもりでもなかったんだけどな、と思ったが、皆で作るのは結構楽しかったのでまあ良いか、と納得し、地下室の片付けを始めた。そうして暫くするとシランが戻ってきた。

そうして皆で片付け始めるとあつという間に地下室はがらんとした寂しい雰囲気になり、トントントンという軽快な音で封印された。それから三人揃ってハンダの家に、改めて行くことを伝えに行った。

「ま、シンもロウもいりゃ俺も安心だな。シランを頼んだぞ、お前ら」

そう言ってハンダは思っていたよりもすんなりと笑って頷いた。

「任せとけ！」

「ロウ頼まれたぞっ」

でも家に戻る時、ハンダがシランに耳打ちするのが見えた。何を言っただから風向きが悪いこともあって聞こえなかったけど、気にな

った。シランの顔がほんの少しだけ曇ったように見えたから。
それから家に帰ると何故かイナギさんとミヨシ……さんが居た。
……きつと「さん」を付けておいた方が安心だ。

「……どうしたんですか、守衛区長に、第四地区長まで」
「いやね、正哉くんが見送りに行くから来いって聞かなくてね。ちよつと拐われて来たんだ」

それは笑顔で言うことなのか？ ミヨシさんはやっぱりニコニコ笑顔で答えた。

「拐ってないぞ。少し持ち上げて来たただけだろう？」

「本人の意思尊重してよー」

「……嫌だったか？」

「別に良いけどね。君の我が儘なんて今に始まったことじゃないし」
「ん、ココは心が広いな」

「あはは、分かりづらい言い方だね。それに小さい小さい路って書くから、あんまり僕の名前は心広そうじゃないよね」

「そう言えばそうだな」

……何なんだこの二人。やたら仲良しだぞ！ とびっくりしている。

「……ココ、って」

シランがツツコンだ。いや、ツツコミと呼べる程の勢いはない、最早呟きのようなものだったけど。でもミヨシさんはしっかり拾ってくれたよう。

「ああ、僕のあだ名だよ、一応。名前が小々路こじろだからココ。因みに

恥ずかしいからあんまり呼ばないけど、正哉くんはまーくんだよ」

「友達なら何時でも何処でも愛称で呼ぶべきだろう？」

「ちよつとは体面も気にしようよ君」

「そうか？」

イナギさんって確かに普段からフレンドリーだけど、何かその上に行くフレンドリーさだな。そう言えば幼馴染みなんだっけ？ 名前はあんまり覚えてないけど聞いたことあるな。

だからなのか？

「えーと、まあそう言うわけでお見送りに来たんだよ。何か手伝うことあるかな？」

「いや、そんな……」

「あとは家のドア閉じれば終わりだぞっ」

狼狽えるシランの脇からロウが口を挟む。

「おや君が噂のロウくんかな」

「噂は知らないけどロウだぞ？」

「そうか、僕は三好小々路だよ。よろしくね」

「うん、よろしくだぞ！」

というやり取りも挟みつつ、出発の最終準備に掛かる。

オレはいつも仕事の時に使う服に着替えた。一番動きやすいし、元々外に出るための服だから何かと都合が良いからだ。そして腰に刀、上に深い蒼のジャケットを羽織れば準備完了。用意したでかいリュックを手にする。

シランは藍色のマントを羽織った。腰には勿論自ら鍛えた刀がー振り。マントの下には小さなリュックが隠れている。中身は多分手放せない鍛冶師としての道具だ。刀は得物でもあるし、やっぱり必

要なんだろう。基本的に三人の荷物はオレのリュックの中だ。

そしてロウはオレと同じで仕事用の服だ。最初に着ていた立派な狼の毛皮は置いていき、シラン同様灰色のマントを纏っていた。その身一つあれば十分なロウは軽装も軽装。動き易さ重視なその格好は寒そうだけど、寒さに強いと豪語するだけはあるので、ロウに関しては平気だろう。

準備は出来た。

あとは旅立つだけ。

「なあ、どのくらいで帰れるんだ？」

「片道は普通に歩いて五日程だな」

「そっかあ」

最低でも十日くらいは帰れないらしい。正しくはシランの家だからちよつと間違っているかもしれないけど、でもオレの帰る場所は間違いなくここで。

どうしても名残惜しく感じてしまう。

離れるのが何だか辛い。自分で言い出した癖にだ。だからシランはあそこまで頑なに一人で行くと言ったのかな、なんて今更思う。

「……お前は、行かなくても良いんだからな」

だからそのタイミングでシランにそう言われて、酷く動揺した。

「べ、別に、オレは、行きたくて着いてくんだ」

「……無理をする必要はない。半田さんなら面倒見てくれる」

「う、うるさい！ シランだけ行かせられるかよ、行くよ、行くに決まってるんだろ！」

シランは静かにぐらぐら揺れてるオレを見ていたが、それ以上は

言わず。

「……そうか」

とだけ頷いた。

まだテンパっていたオレは、いつの間にか強引に話題を変えていた。口を衝いたのは無意識の内に今一番気になっていたこと。

「そ、それより、シランは何言われてたんだよ、ハンダに」

「……ああ」

少し意外そうな顔をしたシランは、ちよつとだけ迷うような間を置くと答える。どこか翳りのある顔で。

「シンは子供だからお前は引き摺られないようにしっかりしろよ、と」

「ハンダあ！」

ほとんど条件反射で叫んでいた。それと同時に気になるシランの表情も軽く吹っ飛んでしまっていた。怒りの対象が目の前にいないためその怒りは燦つたまま出発する段となつてかなり不満だったが仕方がない。

「体に気を付けてな。無理はするな」

「見付かると良いね探し物。遠くから君たちの幸いを祈ってるよ」

そんな二人に見送られてオレ達は住み慣れた家を離れ、暫しの旅路へと着いた。

シランは見付けるために。

オレは守るために。

ロウは共にいるために。

わからない答えを知るために。

「行ってきます！」

オレ達は今日大きな一歩を踏み出した。

019 心配事と退屈病【紫蘭】（前書き）

浮かれたまま投稿です。何があったかって？初めてお気に入りユーザに登録して頂いたのです。本当に皆様いつもありがとうございます。

今回はちよつとグダグダな本編と本編の間の話を書ランに頑張ってます。

ではタイトル通りな十九話をどうぞ。

「なあシランー」

わかつてはいた。

シンが家を離れたくらいではあまり変わらないだろうこと。そもそも人間、そう簡単には根っ子は変わらない。だからそこはわかっていた。

だが、だ。

何日も家を空けるようなことは一度もなかったため、俺にとってこの旅は重々考えた末の結論であり、一大決心と言って良いほどの決断だったのだ。その上シンとロウまで巻き込むとなればかなりのブレッシャーがあつた。

自分のことですら不安なのに、責任を持てるとは言い難いの。果たして俺にあと二人分の責任を持ち、ちゃんと出来るのか。守れるのか。

弱い俺は不安で、不安だからこそ結局二人を巻き込んでしまった。その責任は二人の後見人でなくとも背負わなくてはならない。逃げることは赦されない。

だから俺は、有り体に言えば。
緊張していた。

馬鹿だ愚かだ阿呆だと指差されても、別にいい。俺は反論出来ない。でも正直本当に緊張していたのだ。

シンは馬鹿だが根が真っ直ぐ過ぎてたまに無謀なことでも考えなしに実行してしまうことがあるし。ロウはロウで普段は大人しく素直な上に聡いのだが、好戦的過ぎるくらいがあり、暴走としか表せない状態も希に見られる。そんな二人を俺が無茶しないよう、見ていられるのか？ いや、逆に見てることしか出来ないのではないかなんて。

ことばかりが頭を過った。

但しそれは数分前のこと。今の俺は別の問題に、軽く頭が痛くなってきた。

それが。

「暇だよー。なあなあ何かやることない、シラーン？」
「……………」

最早シンの病気。常に何かやっていないと落ち着かないというアレだ。数分前からそんな調子で駄々っ子になっていた。

「シラーン」
「……………」

正直。

「鬱陶しいぞ、お前」
「ぐあっ、また言われたあ」
「……………」

そう言えば最近同じようなことを言った気がした。いや多分言った。と言うか、昨日だった。

「出発してまだ一時間しか経っていないだろう？」
「一時間も我慢したんだぞ！」
「……………」

シンに我慢は難しい。
今とても良くわかった。

「シン暇か？」

「そうだよ暇なんだよー」

ロウが助け船を出した。いやきつと自分も退屈していたからだろ
う。ロウはきらきらとしか黄玉の瞳をシンに向けて言った。

「なら戦うか？　ロウと戦うかつ」

「いやあ……遠慮しとくよ、なあシラン？」

ロウが好戦的だということが発覚したと同時にシンが案外戦うこ
とを好いてはいないこともわかった。強いからと言って戦うことが
好きなわけではないらしい。しかもどうも一度手合わせしただけで
苦手意識を持ったらしく、ロウが幾ら誘おうが、シンは絶対に相手
しない。とことん逃げるのだ。

「……暇ならやれば良いだろう」

「うわシラン、裏切るのか！？」

裏切るも何も鬱陶しいシンが悪い。しかも多分自覚してやってい
るから尚質が悪い。俺は深々と溜め息を吐いた。

「……まあ、迷惑になるから出来れば遠慮して欲しいが」

「そうかあ。ロウ大人しくするー」

「……ロウは素直で良いな」

「どーゆー意味だよ」

半眼でじとーと俺を見るシン。そのままの意味だ、と答える俺。

「どーせっオレは素直じゃないですよーだっ」

いや、かなり素直な部類に入るぞお前、と言いかけたが結局言わず。

「少しは我慢を覚えろ」

とだけ言った。シンは膨れっ面になると、ぶつぶつ文句を垂れながら地面を蹴ったり無駄に飛び跳ねだした。

と言うか、無駄に凄いことをしている。

いきなりとんぼ返りしたかと思えば、背中から倒れて逆立ちしたり、その状態から飛び起きる勢いで木の枝に乗り、その枝でぐるぐる回ったり。

お前は曲芸師にでもなるつもりか、と問いたくなる程器用に飛び回るシンを呆れた顔で見ていた。こちらからは楽しそうに見えるが、良く良く見ると不機嫌全開の膨れっ面のままだった。恐らく全く楽しくはないのだろう。

これはこれで鬱陶しいと言うか落ち着かないが、しかしシンの曲芸の間も俺たちは進んでいて、シンもそれに合わせて動いているので問題はなかった。変なところで器用な奴だ、本当に。しかし同時に不器用だ。

「……………」

器用で不器用。

妙な既視感を覚えたがあまり深くは考えないことにする。

「すまない」

唐突に昴さんが謝ったので虚を突かれました。シンも同じだったようで少し先の木からずり落ち、ぼてっ、と落下した。シンのことだから大丈夫だろうと思っていると、案の定ケロッとした顔で

起き上がった。そしてびつくりした顔を昴さんに向ける。

「馬車があれば直ぐだったんだが……」
「……そのことか」

何でも。

始めは馬車で第八特区に向かっていたそうだ。しかし途中変異種に出会い、何とか撃退したが馬車がやられてしまったらしい。

「仕方ないですよ。あのアライグマの食い意地は半端なかったです」
「し」

「そうですぜ。リーダーは最善を尽くした」
「と言うか。食われたらしい。」

アライグマに。

どんなアライグマだよ、と思ったがシンは。

「あー、あれな。嫌だよなあ、こええし」

と頷き、ロウは。

「危険度はCだけどすっごく厄介らしいなあ」

と本から仕入れた知識を口にしていた。俺だけが知らないらしい。変異種はそれ用のリスト、本が各特区で作られており、常に書き足され、修正されている。変異種の情報はそれこそライフライン。知識があるのとないとでは、やはり対処のしやすさに差が出るし、迅速な対処も可能にする。だから特区間での情報交換は頻発に行われているし、年に一回、まとめられた情報は書籍として発行され、誰でも閲覧出来るようになっていいるし、多少出回りもする。商人なんかにとってはまさにライフラインと言えるものが変異種の情報な

のだ。

俺だって図書館を利用しているだけあって見たことはある。しかしそれはかなり昔、軽く目を通す程度だった。だからあまり覚えていないし、そもそもその時点では馬車まで食うアライグマなんて載っていなかった可能性も十分ある。

だから別に俺が特別無知なわけではない。……なんだか我ながら言い訳染みているな。

「別に気にしなくて良いって。つかどうせ馬車でも屋根に乗るか走るし」

「は、走る？」

立ち止まってしまった俺達のところまで戻ってきたシンの言葉に、昴さんが呆気にとられた。と言うか。

「……お前、仕事でもそんなことしているのか？」

「えー、やらねえ？　なあロウ」

「ロウもやるぞ。けど、今回は仕事じゃないし、落ち着きないだけは迷惑だぞ？」

「……ロウまで説教しだすのかよ」

げっそりとした顔になるシン。お前が落ち着きなさすぎだ。でもまあこの二人なら馬車と併走するだろう、平気な顔で。オオカミとドラゴンを自称するだけある。

「はー、大将みたいな奴だなお前ら」

「……それは、人間か？」

「へ？　そら人間だろ。コイツらも人間だろ？」

「……」

否定はしないが肯定もし難い問いだな。ロウは言わないことにしてるのか知らん顔。シンはロウにまで説教されてちょっと凹んでるため聞いていない。

しかし、公言してるようだから気にしていないのかと思っていたが、案外ロウもオオカミだとかいう辺りは伏せるつもりらしい。いや。もしかしたら俺を気にしているのかもしれない。そのことを気にしている俺を。

臆病で怖がりな俺を。

「……大将、というのは？」

「ああ、何だろな……俺の上司、みたいなもんかね。地位としちゃ同じくらい何だが、アイツの方が上だな、実質的に」

「だってリーダー、大将に頭上がないですもんね」

「それどころか尻に敷かれてるに近いしな」

「……お前らは本当に俺を貶すことしか言わんな。そんなに俺が嫌いか？」

ちょっと泣きそうな顔をした昴さんが閑歌さんと丸太さんに問うように言つと、瞬く間に凄しい勢いで反論が襲った。

「何を言うんですか！ 大好きですよ、大変お慕いしております！」

「そうですね、リーダーに一生付いてく覚悟すらありますから俺」

「じゃあなんで苛める！？」

「愛情の裏返しですよ」

丸太さんが閑歌さんの言葉を受けてウンウンと繰り返し深々と頷く。もう昴さんは涙目だ。

「ドSな部下なんてもう嫌……」

まあ、好かれてはいるようだ。ただ……あれだ、人望はあるがちよつと残念な感じの、変わった人が集まってしまふ、そんな体質みたいなの。

「好かれてんだし良いじゃん」

「まあそうだよ、そうですよお」

口調すら何だか変わってきてしまっている。大丈夫か？

「落ち込まないでくださいリーダー！ 大丈夫です！ それより暇なシンさんの退屈を紛らわす方法を皆で考えましょう」

「だな」

「そうだな……ってあれ？ 俺のこと自然に流した？」

昴さんが二人を見るが、微妙に視線が合わない。

本気で質の悪い苛めだ。好いてるのも本当だし、苛めるのが楽しい、愛情表現というのも本当だろう。運のない人だな、昴さん。

「もう良いけどさあ」

いじけたようにぼやくが、でも真面目に考えてくれているようだ。

「しりとりとか、どうだろうか？」

「流石リーダーです。良いんじゃないですか？」

ただ、それを挫くようですまないが。

「「しりとり？」」

家のことでは天才なシンと知識欲全開のロウでも、一般教養と言

うか、常識のようなものは大層苦手分野だった。
二人は仲良く首を傾げた。

簡単な説明を終え、二人も乗り気になったところでしりとりが始まった。

「まあ定番に、『しりとり』の『り』から……林檎」

「『じ』……ゴリラ」

「えっと、『ら』だよな？ ラーメン！」

「……おい」

速攻で終わってしまった。当事者はきょとんとしているが、周り
はびっくりである。流石のシンも自分の失敗に気付き、あっ、と間
抜けに口を開けた。

「そっついや『ん』で終わっちゃいけないんだっただけ。メンドーだな
あ」

「ゲームのルールだ」

遊びとは言え枠が、決まりが無ければ成り立たない。何でもあり
はそれはそれで楽しいかもしれないが、万人が楽しめるものではな
くなるだろう。

縛りがあるからこそ楽しむ余地があるのだと俺は思っている。シ
ンも同じなのか、渋い顔をしながらも素直にごめん、と口にした。
仕切り直し。

「えーと……ライスでどうだ」

「スイカ」

「か、『か』か？　かがみ！」

「御影石」

「『し』？　竹刀^{しなひ}」

「リーダーらしいっすねー。じゃ俺は糸で」

「んじゃトマトー」

「砥石」

「栞^{しり}っ」

「リーダー」

「なんだ？　って『り』だからかよ。しかもこの場合『だ』か『あ』か？」

「どっちでも良いんじゃないか？」

「じゃあ『だ』で」

「……大根おろし」

「鹿威^{ししおと}し」

「なんだそれ？」

「えっとね、名前の通り鹿とかの畑を荒らしたりする動物を脅して近付かないように竹筒と水を利用して音を出すものだぞ。段々庭の飾りになってたみたいだけど」

「へー」

「良く知ってんなあ、坊主」

「この間読んだ本にたまたまあつたんだぞー」

わからない言葉だとシンが面倒だったが、ロウが辞書のように解説したり、時折ロウも知らない言葉は適当な人が説明しつつ淡々と進むしりとり。そして所々昴さんが地味に苛められている。わざわざ『だ』で、とりクエストしたのは閑歌さんだ。本当に地味だな。そして大分時間が経った。シンがうーあーとうめきながら頭を抱えている。

随分と続いたからか、さっきから考える時間が長くなっていた。元々言葉をあまり知らなかったシンは、半田さん等々に生活や仕事に必要な言葉は叩き込まれている。だからこそやたら偏りがあることは否めない。本を読まず、守衛区と外にしか行かないのだから。

「どうした、降参か？」

昴さんが茶化すように言う。しかし悩むシンは真剣だ。くわっと目を見開くと。

「降参なんかしねえよ！」

その怒鳴り声は結構な音量で、慣れていない人には強すぎたのか明らかに昴さんら三人は怯んだ。怯えたと言っても良い。

「シン、怒っちゃダメ」

「へ？ 怒ってねえけど」

「でも怖いから怒鳴っちゃダメだよ？」

「ああ、わりい」

全く悪気のないものだったから。シンはさっきの剣幕が不思議な程あっさりと謝った。三人は何が何だか分からず、棒立ちだ。

シンは見た目や普段の話し方だけで判断してはいけない。

それでは、ずれるから。

本人も自負する程に、実際の年齢どうこうははっきり言って関係ない。本当にシンにとっての始まりは俺と出逢ってから、つまり四年間くらいしかないのだ。

あまりに大きな四歳児。

それがシンの時折感じる違和感の正体だ。だから我が儘で、優しくはあるが自分勝手。落ち着きはないし、我慢も大の苦手。子供な

のだ。

でもだからこそ、半田さんは出掛けに、俺に忠告をくれた。

「あいつの、ガキのワガママには引き摺られんな、お前は冷静でいろよ」

そんでロウに頼んな。

それは結構痛い言葉だった。

でもそつだ。ロウに苗字をやり、保証人になったのは助けてもらうためじゃない。助けたいから、守りたいからだろう。本末転倒というやつだ。俺はとことん愚かだ。

「シン」

「な、なんだよ」

怒られると思っていいのかびくびくした、揺らいだ瞳で俺を見た。俺は溜め息を吐きつつ。

「遊びなんだからもう少し気楽にやれ」

「わ、わかってるよ。でもよお、もう思い付かねえんだよ」

「……やめるか？」

「それはそれで癪だ」

「……」

また面倒臭いことを言うな。本当にちよつとは大人になって欲しい。

そんな呆れ顔を見たからか、急にシンは不機嫌を深めたような声で乱暴に言い出した。

「いいよわかったよ。だけど良いか、これからオレが言う言葉はオ

レもこれっぽっちも意味わかんねえやつだから訊くなよ?」

「……………」

どういう意味だ、と問う前に、シンは宣言通りの言葉を口にした。

「小泉純一郎」

「……………」

皆ほぼ同時に首を傾げた。確かに次の頭文字は『こ』で、ルール変更により人名ありには大分前からなっている。間違っではない。しかしそれすら尽きたと自分で言っていたのに、いきなり出したのは明らかに人名だ。しかも聞いたことがない。

しかし、誰だそれ、とは誰も言わなかった。さっきのシンの言葉と、酷いしかめっ面なシンの顔のせいだろう。だがシンの謎の言葉は続いた。

「杓子果報」

「クレッシェンド」

「アンドレス山脈」

「人工衛星」

辛うじて推測するなら漫画から仕入れてきた、といったところだが、しかし意味も分からず言葉をシンが記憶してくるとは思えない。そして気になるのはやたら不機嫌なシンだ。少し前までは悩みながらも楽しそうに言葉を出していたのに、今はすらすら言えているにも関わらず大層詰まらなそうだった。

結局直ぐに昼食になり、そうなると直ぐに機嫌を良くしたシンはいつも通りになってしまったので理由はわからなかった。しかし。

「ほれシラン。ちゃんと食べるよー」

しかしこんな一転して上機嫌なシンに、あれだけ嫌そうにしていたことを訊くのは憚られて、俺は黙々と昼食に徹する他なかった。

まだ出発したばかりだというのに不安ばかりが募る。

不甲斐ない自分に、つい溜め息が漏れた。

020 図書館のケモノ【真】（前書き）

さて漸くここまでやって来ました。あの子がやっとこさ登場です。今まで男ばかりでむさ苦しかったでしょう。シズカいたけど。とにかく二十話目です。シン視点でどうぞ。

第一印象としてはえらく中途半端な場所。

そこは一応第十六特区の管轄らしいが、発展した街を中心にある程度の人が集まり、何となく特区というくくりでまとめたただけそうだ。周りの村や町はついで。数合わせ程度でしかないだろう。言うなら広く薄っぺら。

確かにオレがいつも行く第十六特区とはまるで違う街、いや村だった。話は聞いていたが、今この目で見て、ようやくちゃんと理解出来た気がする。

スバル達の間があるのはその特区の端の端。整備などされていない、小さな村のような、簡素な家が疎^{まば}らに建ち並ぶところだった。第八特区とは大違いだ。あそこはみんな協力して生きていくという街だけど、ここはそんな思いやりが一欠片も感じられなかった。例えるなら家族に無関心な人ばかりの家。さみしいな、と閑散とした村を見て思った。

「……」

「無言で責めるなよ。俺だって仕事じゃなきゃ嫌がる奴を無理矢理説得して連れてくなんてこと、したくねえんだ」

「……わかってる」

そう。もう一人スバル達のボスが呼びたい人がここに居るのだ。シランが嫌な顔するのもわかるし、板挟みになってるスバルも複雑なのはわかってる。だからオレは黙ってシランの傍にいた。

この話を聞いたのは昨日の晩、夜営の準備も夕飯も済み、ゆったりにしていた時だ。シランはただ一言。

「遅い」

だった。

言うのが遅い、ということだ。

スバルはしきりに謝っていたので流石のシランもそのことについては許しただろうが、納得が行かないのも分からなくもない。スバルたちのしつこい勧誘に困る人が他にもいたのだから。しかしスバルたちも仕事は仕事。皆あまり割り切れない気持ちがある。仕方ないと言ってしまう片がつくと言えなくもない、のかね。

柄にもない考え事をしているといつの間にか目的の場所についていた。

「まあ、無用な誤解を受けるのも面倒だろう。あんたらはその辺で待っていてくれ」

と言われ、結局茂みに隠れるまではしなかったが、大分離れたところでオレたちは立ち止まった。スバルたちの背を見送る。

彼らが目指す建物は村の中でも一際目立つものだった。別にどきつい色とか変な装飾があるからではない。逆だ。黒と白のとても質素な外観は、品、みたいなものがあつて、他の建物とは雰囲気からして違うのだ。でも一番の理由は。

「大きな、あれ」

「図書館だなっ」

「雰囲気としてはそんな感じだな」

「ああ、そっぴや本の匂いがするな」

「でしょ？」

「……相変わらず凄い嗅覚してるな」

確かに本独特の、乾いた埃っぽい妙な匂いが微かにする。しっかし、図書館か。

「司書さんに用があるのかなあ」

「……どちらかと言えば目当ては書籍だろうな、恐らく」

シランが眉間に深く皺を寄せて言った。気に入らない、といった顔だ。本当にそういう感情は全く隠さないよな、シランは、と思う。普段は仏頂面過ぎて、喜んでいたりしても慣れた相手しかわかってもらえないのに。あ、隠さないじゃなくて隠せないのか。

「シランの仏頂面も困ったもんだよなー」

「……なんで今言う」

「何となく」

しかしちよつと皺が緩和された。今のやり取りでちよつと力が抜けたみたいだ。良かった良かったと、再び視線を大きな建物、多分図書館に戻した。

そして丁度、スバルが動いたところだった。コンコンと控えめなノック。

……………。

分厚い扉に音は吞まれてしまったらしい。反応なしだ。スバルもそう思ったらしく、大きく拳を振りかぶり、扉を叩く。
バンツ。

重厚な木の扉は、軽々と勢い良く開いた。最早お約束。扉は吸い込まれるようにスバルの顔面へ一直線に。そうして吹っ飛ぶスバルに対し、黒い扉は解き放たれた。

それはまるで雪のような純白で。

灼け付くような強い意志の赤が煌めいた。

「私は行きませんよ！ 貴方たちと話すことは一つありません！
帰ってください！」

ものすごい勢いでそう叫んだ少女は小さな赤い瞳を、しかし弱々しさなんて微塵も感じさせない雰囲気で言った。

立ち止まり、勢いで浮き上がっていた髪がふわりと肩に降りた。

それは透き通るような白で、ひどく細く、光を反射してキラキラして見える。

白と赤。

そのコントラストだけで十分目を引くが、もう一つ特徴を挙げるとしたら、それはぴょんぴょんと自由に跳ねる癖っ毛だ。長い髪がまるで意思でも持っているみたいに見事な跳ねっぷりを見せていた。

「は、話だけでも、聞いてくれないか……」

「お断りします、帰ってください」

顔、というか鼻を押さえてよろよろと立ち上がりながら言うスバルに、冷たく言い捨てる少女。どうも凄く怒っているみたいだ。オレだって流石にあれば思わず謝ったけど、あの子は流されならしい。いや、怒り心頭で冷静じゃないだけかもしれないが。

流石に二十歳は行っていないだろうが、整った顔に凜とした雰囲気で大人数に見える。背はシランよりほんの少し低めで随分とほっそりしている。でも軽々と、勢いよくあの重たそうな扉を開いてみせたのだから、見た目は当てにならないんだろう。普段はちよつと垂れ目気味そうな目が今は吊り上がり、相当な怒りなことは容易に察することが出来た。

「とめる？」

「……どっちを訊いているんだ」

「もちろん両方」

「もちろんか？」

「だってどっちの味方もやるつもりないなら、ここはケンカ両成敗、

ってやつじゃない？」

「シン、ケンカじゃないし、成敗しちゃダメだよ」

「あ、そっか」

でもじゃあどうすんだよー、と口を尖らせていると向こうでも何やらアクションがあつたようだ。

「諦めてください。私はここを離れるわけには行かないんです。その旨はそちらにはすでに伝えましたよね？ ……これ以上ここに居座ると言うなら実力行使もやむを得ないと見なします」

「ひっ」

スバルが遠目にも青くなつたことがわかつた。事前知識として知つていたのか、さっきの登場で察したか。とにかくスバルもその実力行使がやばいということだけはわかつたようだ。

ここで退かなきゃ本気でオレらが割り込む必要がありそうだった。スバルの数歩後ろに控える二人も緊張の面持ちだ。

しかしスバルは明らかに及び腰だったと言つた。交渉のために武器を部下に預け、丸腰で怖いに決まつているのに、逃げなかつた。

「本当に、すまない。でも仕事なんだ……明日、また訪ねよう。その答えを聞いて納得出来たら俺が代わりにそれを上に伝えて、もう人を超越さないよう、嘆願しよう」

スバルは真っ直ぐに少女の鋭い赤い目を見て、振り絞るように、けれど逃げることなく言い切る。

「だから今日一日、真剣に考えて欲しい。明日、その答えをくれ……失礼した」

深々とスバルは礼をした。目の前の少女に恐怖しているのは間違いなかった。でもその気弱な顔には申し訳なさも含まれていることも間違いなかった。

「……わかり、ました」

小さな小さな細い声がスバルの頭に降り掛かった。そして扉はゆっくりと閉まり出し、慌てて下がったスバルを待ってから堂々と元の位置に帰った。

スバルはもう一度、改めて感謝するようにその場で頭を下げると後ろに控えた二人に目配せをし、それからオレたちの方へと歩いてきた。

「らしいな、お前らしい」

「ああいう風にしか出来ないんだ。不器用だからな」

迎えたシランの言葉に苦笑して答えるスバル。それから何故か妙に神妙な顔になるとシランの顔を窺うように見た。

「……なんだ？」

「……さっきの会話、聴こえてたか？」

「ああ、把握している」

それは微妙に嘘とも言えなくもない。何故ならやっぱり普通の人間の耳ではこの距離は離れすぎていたから、シランには会話が全て聴こえていたわけではない。だがオレとロウが通訳みたいなことをしていたから、シランも内容を知ってはいる。

しかしスバルはそんな裏話は知らないので神妙な面持ちのまま、

続けた。

「勝手に約束してしまったことは謝る、すまない。でも一日、時間が欲しいんだ。……頼む」

明日答えを聞くというあれのことだろう。どこまでも腰の低い人だなあ、と感心だか呆れだかを抱いていると、シランは予想通り即答した。

「長くて明後日までだ。それなら待とう。良いな？」

「……ああ、有り難い」

少しほっとした顔でスバルは頷いた。でも実はオレもちょっと意外だった。即答するだろうとは予想していたが、明後日まで待つと言うとは。譲歩しても精々一日かと思っていたから。でも話を聞いた時から決めていたのだろう。シランは考えることもなく、泰然としていた。

シランの快諾もあり、徐々に余裕が戻ってきて表情が柔らかくなったスバルが微笑しながら皆を促す。

「じゃあ宿に行くか。一応こんな時のために宿屋は把握しているからよ」

それに呼応した皆は歩き出したが、オレは動かなかった。なぜならシランが歩こうとしなかったからだ。

「俺は図書館に用がある」

スバルがパツと振り返った。驚きの表情。しかしシランはいつもの仏頂面で淡々と答える。

「言っておくがお前らの仕事のためにオレが動くことは決してない」
「……だよなあ」

スバルが頷く。それが落胆ではなく安堵だったのは、早くもシランの性格を掴み始めているからか。確かにこの場合のスバルたちにシランが協力するわけがない。

でも。優しいシランは何だかんだで助けられるなら助ける。事情にもよるが、何かしらスバルたちを助けることをしそうだとオレは思っていた。口にはしないけどな。

「それは良いが、宿屋の場所は知らないだろう？ 迎えに来てもらいや良いが……」

「大丈夫だ。この村の中の宿屋か？」

「ああ。一つしかない、って、なら誰かに聞きゃわかるか」

一人で納得するスバル。まあでもオレかロウがいればそうじゃないけどスバルとかの匂いを辿って行ける。だからシランは迷う必要がないんだろう。

「二人も良いか？ 先に宿に行っても良いんだが」

「シランというに決まってるんだろ」

「ロウも図書館行きたいぞ」

オレは当たり前だったので直ぐさま頷いて、ロウは目を輝かせて声を上げた。

「決まりだな」

「では何かあったら宿に来てくださいね。誰かしら居るようにしますで」

微笑んでシズ力が言うと、スバルとマルタも適当な挨拶をしてから村の奥へと足早に歩いて行き、直ぐに見えなくなった。

「なんか急いでるな」

「作戦会議でもするんじゃないか」

どうでも良さげな顔でシランは呟くと、図書館へと足を向けた。そしてゆつくりと扉を叩く。気負いは一切ない。そして分厚い扉の向こうから冷ややかな声が返ってきた。

「……どなたですか、何のご用でしょうか」

「この本が読みたい。それとお前と話がしたい」

「……さっきの人のなか」

多分「仲間ですか」とでも言おうとしたのだろう。しかしシランは頓着しない。

「関係ない。俺はどうしても知りたいことがあるんだ。守りたいものがある。どうか話を聞いて欲しい」

「……」

沈黙。長い長い沈黙という返事に、シランは静かに唇を噛んだ。よっぱど知りたいことがあるらしい。ならオレもそれを望む。オレだってこんなの悔しいからな。

「なあ、シランの話聞いてくれないか。シランは悪いやつじゃないんだ。そりゃいつつも不機嫌な顔してて愛想ないし、怒ってるみたいないしゃべり方でこわく見えるけど」

「おい」

「でもなでもなっ。嘔吐かないし優しいし、無駄に甘党で体に悪いから止めるって言っても聞かねえし、器用だけど不器用で、頑固で納得できないことは曲げないし、寝起き悪いしお説教長いけど！
ってあ、あれ、悪口になってる？ や、で、でもでもっ、違っの、案外素直なところがあったり、いろいろ気づいて助けてくれたりして、良いやつなんだよ、シランはほんとーに」
「……おいシン」

何だかシランに睨まれてる気がするけど気にしない。言葉を物言わぬ木の壁にぶつける、その向こうへ投げる。とどけ、おmoi。そう願う。

「なあ、なあ！ シランと会ってくれよ、頼むよ」

しかし答えは。

「……………」

切なくなってきた。そんで延々と返事のない扉に向かって話していると何だか悲しくなってきた。だから、段々と声の上擦ってくる。

「返事くらいしたって、いいだろ？ ……そんなに、シラン嫌いなのか？ オレもロウも、嫌われちゃったのかあ？」

「シン、もう」

シランが見兼ねて優しいげな声音で言おうとするが、オレはそれをキツと睨むようにして制した。

「良いのかよ、訊かなくて良いのかよ！ 大切なことなんだろう？」

何訊きたいのかオレ、知らねえけどさ、でもやだよ、諦めんの。
いやだ」

「……俺は」

俯いたシランが口を開いたその時だ。

ギィ。

と蝶番の軋む音が鈍く鳴った。はっとなって扉を見るとほんの少しだけ開き、赤い目が覗いていた。

「あ、あなたは どうして、 どうして 目的 もわからない その人の 願いを
叶えようと、泣くのですか？」

否定よりもまず先に、いや、勝手に口は動いていた。

「大切な人だから。シランを知っているから。だから手伝いたいし、
諦めて欲しくない。シランが諦めるとこなんて見たくないんだよ」

真っ直ぐに赤い目を見返す。キラキラと寂しげに揺れるその小さな瞳は、最終的にシランで止まった。

「何を、訊きたいんですか？」

しかしシランは答えず、黙ってオレを見て、ロウを一瞬見た。なんだろ、と首を傾げるオレ。ロウも一瞬だったがその視線に気付いたようでシランをやたらと静かで澄んだ目で見返したが、それだけだった。ロウは意味をわかっているみたいだ。しかも何故だか赤い目の女の子にも伝わったようで直ぐに黙考に入り。

「……私に危害を加えないと誓って貰えるのなら、多少はお話しても良いですよ」

それにオレは目を見開いた。

「ホントか！　ありがとう！　シラン良かったなあ」

「……お前はオレの保護者か何かか」

シランは苦笑していた。しかし怒ったり呆れたりはいしていなかった。オレは胸を張って答える。

「似たようなもんだろ」

「逆だろう」

「いんやっ、シランの世話してるのはオレだもんね」

にしし、と笑い返す。すると近くでクスクスと小さな笑い声がした。赤い目の女の子だ。いつの間にか扉は開き、再び姿を見せていた。

真っ白い髪は何だか雲の向こうから射す月の光を細く束ねたみたいで。赤い目は何だかトマトみたいな色だとオレは思った。力強い、きれいな瞳。一発でその目が好きになった。柔らかくて夏の夕暮れに照らされたトマトって感じ。優しい感じ。

オレとは違ってとても澄んでいる赤だった。オレの目も赤だけど濁ったような、赤茶色、赤銅色って感じだからなんだか羨ましい。そんなことを考えながら見ていたからか、女の子が照れたように白い頬を赤くして言った。

「あの、そんなに見られると恥ずかしいですよ」

「あ悪い。オレはシンっていうんだけどさ、あんたは？」

「あ、はい」

赤い目の少女は小さく笑むと、澄んだ、でも弱さなんてこれっぽ

っ
ちも感じさせない芯のある声で言った。

「ヨミといいます。姓は夢見^{ゆめみ}を名乗らせていただいています」

やわらかな朝日がトマト色の瞳を照らし出していた。

021 知識の代償【紫蘭】（前書き）

最初コメディ？、後半真面目な感じです。シランの思い、本音がわかります。

では今更シンやシランのキャラが掴めて来ました、という爆弾発言をしつつ、シラン視点の21話をどうぞ。

通されたのは図書館の奥、司書の控え室みたいなものだろう。

大きめの本棚が一つと、古めかしいどっしりした木の机、それに隠れるように小さな丸椅子が四つあった。あとは細々とした筆記具の類いやメモが、机の隅やラックの上に纏められているだけ。

部屋の主は几帳面らしく、とても整然としている。本棚の中のノートなどの資料も名前の書かれた背表紙は全て手前に向けられ、丁寧に置かれた仕切りで多種多様な資料は秩序を作り、綺麗に分かりやすく並べられていた。

ヨミと名乗った、恐らくこの部屋の主である少女は、俺たちに席を勧めると自分は奥のキッチンに隠れてしまった。それにシンがそわそわしだす。多分ヨミが用意しているお茶が気になるのだ。シンは客が、自分が接待を受ける側になるのが大の苦手だ。落ち着かないらしい。しかし人の家だから勝手に台所に入るのは失礼だろうと何とか堪えているようだ。……ちよつとは素直に好意を受け取れよ、と思う。

「シン」

「なんだよ」

不機嫌そうな声なのに、こちらに向く目はまるで待てをしている犬みたいに真っ直ぐだった。それに思わず苦笑しつつ、尋ねる。

「今から何を話そうとしているか、お前はわからないだろう？」

「ああそつだよ、そーですよ。バカなんでオレにはさっぱり伝わんなかったさ。で、親切に言葉にして説明してくれんの？」

どうやら酷く臍を曲げているシンは、口を尖らせて、全く期待し

ない目で、でもやつぱり真摯な目で見ている。

しかし俺は未だに答えを出せずにいる。つい月色の瞳を探してしまいそうになるが思い止まった。そこは頼ってはいけなところだと思うから。

しばし黙考する。

シンにとって何が良いのか。シンは過去に囚われない。だからと言って過去が要らないのではない。自分が何者なのかの答えを必要としないわけではない、と思う。

いやそもそもこれがシンに関わる話になるかもまだ俺にはわからない。ロウとシンは根本的に違うものである可能性だってある。

狼と竜。

その二つの間には本当は大きな違いがあるのではないか。実在している動物と、空想の世界の生物。その違いはどう受け止めれば良い？ どう判断すれば良い？

でも最後にそれを決めるのは 。

「ロウは狼だぞ」

不意にした声に、はっとする。気が付けばティーカップを並べ終え、正面の席に着いたヨミがいた。そしてヨミの隣に座ったロウが好きな食べ物でも教えるみたいに言った。

「狼、なんですか。だから狼君……でも怖くないですね」

「ロウは人間っぽい狼だからなっ」

「そうですか。なら私は兎ですよと答えなければいけませんね」

「ああ兎かぁ。そっかそっか、確かにそんな感じだよなヨミは」

シンまで納得顔で頷く。何と云うか……案外あっさりしてるな、と思った。ついさっきの悶着はどこへ行った。と拍子抜けした顔をしていたようで、ヨミが俺を見てクスクスと笑った。

「すみません。なんだか……ほっとしてしまつて。さっきはごめんなさい。話も聞かずに酷い対応をしてしまいました」

そう言つて深々と頭を下げるヨミ。それに思わずムスツとした顔になる。

「俺は気にしていない。謝るならシンに謝ってくれ。それより俺こそあんなタイミングで、あんな説明で話を聞かせて欲しいと言つのは……図々しかった。しかもそれをわかつて強行した。……すまない」

立ち上がると俺は机に頭突きをする寸前まで頭を下げた。そして更に図々しいことを宣^{のたま}う。

「それでも、そうしてでもこうして話し合いの場が欲しかった。気分を害しただろうが、話を聞かせて欲しい」

「……そんな、仰々しいものでもありませんよ。それに……全て話すつもり、ありませんから」

そう言つてヨミはにつこりと微笑んだ。何と言つか……黒かった。

「では何からお話しましょうか」

一口紅茶を含み、落ち着いたヨミが静かに改めて口火を切った。

「そもそもどこまで知っているのですか？」

「……推測の域を出ない程度、噂程度だな」

「お二人は何も知らない、と？」

その質問に、カップを引き寄せた手を止め、神妙な顔で答えた。

「もしかしたら記憶喪失なのかも、しれない」

「オレは違うからなー、それ」

シンが無駄に自信ありげに、いや、当たり前という風に言った。

そして俺の手を遮るように手を伸ばして砂糖の入った小さな壺を拐って行ってしまった。流れるような動作に啞然となる。目標を失った手が力なく机に落ちた。ギチギチとオイルをさしていないゼンマイのようにゆっくりとシンの顔を見る。

すごい笑顔だった。

しかもいつの間にか俺のカップまで手にしている。全く気付かなかった。お前は手品師か。

「砂糖はあんまり入れちゃうと、せつかくの紅茶の味がわかんなくなっちゃうから程々にな。一番はやっぱ砂糖なしミルクなしそのまんまだよ。元々良い匂いなんだしな」

とか言いながら手際良く俺のカップに砂糖小さじ三杯を入れるとにつこり笑って。

「はいシラン」

「……ありがとう」

カップを受け取ると小さく啜った。スツとした紅茶の香りとほんのりとした甘さが口に広がる。確かに良い匂いだ。

再びシンに目を向けると今度は口ウの紅茶を拉致していた。こちらら砂糖二杯。

「仲が宜しいんですね」

ヨミが微笑んで言った。それに俺は苦笑だ。確かに険悪とは程遠い、良好な関係。それは喜ばしいことだが。

「シンが俺の母に似たおかげで、まあ生来のものかもしれないがちよつと度を超す世話焼きになってしまい、いつもこんな感じだ」

「だってよー、シランとかほつとくと砂糖五杯とか平気で入れるんだぜ？ とーによーびようつてのになっても知らねえからな」

「なら放っておいてくれ」

「やーだよ」

そう言つと小憎たらしい顔でにしし、と笑つた。俺はため息一つ吐いてもう一口紅茶を口に運んだ。

ロウも俺もかなり甘いものが好きだ。そのせいでたまに半田さんや美崎に「甘党」だの「糖尿病予備軍」だのと言われ、それがシンにまで定着してしまったのだ。……困る。

「ではロウ君が記憶をなくしている、と言つことですか？」

「そうだぞ」

「……生まれが野生ということは

」

「そういうとこの記憶はすっぱり抜けてるみたいだから良くわからないぞ」

「そうですか……そうですね、それに関係ありませんし」

「関係ない？」

意外に思い、思わず口を挟む。するとヨミがこっちを見た。何だか哀しげで、微かに青くなつた顔で。

「私達が危惧することに、出自は関係ないでしょう？」

その言葉に、目を見開く。ヨミは小さく微笑む。

「知っていますか？ 狂った研究者、まさにマッドサイエンティストに相應しい、生命の冒読者たちを」

「……噂、程度にな。實在、するのか」

「ええ、私が証明ですよ。明らかに人間の枠を越え、変異種の中でも異質な存在。人間のようで人間でない、獣。混ざり者、レプリカ、獣人、劣化ファクター……変異人間なんて呼ばれたりもしましたね」

そう言つてヨミははにかんだ。何だかそれが痛々しかった。俺は自分のカップに目を落とすことで、逃げた。赤褐色に染められた、香り立つ湯気を立ち上らせている境面は、不器用でどうしようもない自分の顔を勝手に映し出している。

「すみません。気持ちの良い話ではありませんよね」

「……謝るな」

まるで弱い自分を責められているようだから。やめてくれ、頼むから。そういう達観したような、諦めた笑みなんて、しないでくれ。唇をぎつ、と噛み締める。無力感がただただ俺を襲つ。

「逆にあなたは、何に対して謝っているんですか？」

再び目を見開く。いつの間にか顔を上げていた。だから固まる俺をよそに、ヨミは不思議なほど穏やかな表情で、緩く結ばれた口をそつと動かしたのがよく見えた。

「あなたは何に罪悪感を抱いているんですか？ あなたが悪いことなんて、一片足りともないと、私は思いますけど」

会って間もない、しかも一度拒絶したにも関わらず、ヨミは何故か妙に確信を持った口振りで話す。俺は戸惑うばかりだ。

「どうしてそんなことが言える？」

「だって、シン君とロウ君を見れば一目瞭然じゃないですか」

驚いて二人に視線をやろうとしたが、その必要はなかった。何故なら二人共俺を見ていたからだ。真っ直ぐな目で、迷いなく。言葉で言う必要なんてないと知っているみたいに。

「重たいと、思いましたか？」

「思った……思っている。ずっと、前から」

あの日、鮮烈な赤に出逢い、再会の願いが果たされた、あの瞬間から。

背負って行かなくてはいけないような気がして。それなら決して落とすものかと踏ん張って、歩いて行かなくてはと思って。

でも俺一人ではあまりに無謀で、結局何も出来ずただただ与えられてばかりなのが口惜しく。反面、居心地よく。

だからと言ってそのまま良いはずもなく、そして俺の責任が消えたわけでもない。

「俺に出来ることなんて何もない。だから重かった。何も出来ない、何もしてやれない俺を選んだシンが。その上にロウが。俺は弱くてどうしようもない、何も知らない愚か者だと言うのに」

俯きかけたその動きを止めたのは、盛大に音を立て椅子が転がったのと、乱暴に机が叩かれた鈍い音だった。続くのは悲鳴のような心からの叫び声。

「そんなことねえよ！ 何言っただよ、シンが教えてくれたことも、これも！ シランがしてくれたことじゃねえか。オレは、オレにとっては！ シランはすげえ物知りで優しい、本当に、本当にっ！」

これも、と言って刀を突き出して見せる。俺は鍛えた刀。人間になりたいと言ったこいつにやった刀だ。それを掲げてシンは何故か今にも泣き出しそうな顔で。いや。

「悪かった……だから泣くな」

「な、泣いてねえ！ 泣いてねえよお。っ、だいたい、シラン悪い……いっつもいっつも自分は、ダメだとか……なっ、なんでそんなうぐっ、悲しいこと、言うんだよお」

もうぐっちゃぐちゃだった。涙が際限なくぼろぼろと溢れ返り、嗚咽で言葉も隠れてしまう。体裁も羞恥も何も考えていないような泣き方。思いのまま、この大きな泣き虫は泣いていた。

「大丈夫ですか」

「シンの言う通りだぞ。シランは自分を卑下しすぎっ」

ヨミはシンの顔を気遣わしげに覗き込んでハンカチを差し出していた。ロウは駄目でしょと言うように、ちよつと怒った風に俺を見た。俺は小さくなることしか出来ない。

「っばーかばーかシランのばーか！ もう知らねえ、っうっう」

ぐずぐずと鼻を吸ったり涙を拭ったりと忙しいシンはそんなことを言い捨てると、ずるずると足を引き摺るみたいな、死霊のような動きでゆるゆる歩いて部屋を出て行ってしまった。走らなかったの

は多分前に感情が高ぶった時に勢いのまま駆け出し、何軒か建物をぶち破った事件を忘れていないからだろう。微妙にほっとしてしまふのは仕方ない。

「シラン。自分が好きじゃないとか口ウもわかるけど、でもシラン好きな人はそういうことをシランが言っちゃうとすっごい哀しいし、シンみたいに傷付いちゃうから……特にシンの前では言っちゃダメだからな？ 約束だぞ」

「……ああ、すまない……約束だ」

絞り出すように何とか俺が答えると口ウは苦笑みを浮かべ頷き返した。そしてヨミに頷く、と言うか会釈のようなことをすると口ウも席を立ち、シンを追い掛けて行った。

残ったのは二人。

「ではシン君のことは口ウ君に任せて、話しましょうか」

「

「……ああ、頼む」

微笑むように言うヨミに、我ながら苦しそうな情けない声で応えた。しかし後が続かない。そのことをいぶかしみ、いつの間にか下を向いていた顔をヨミに向けた。ヨミは微笑を湛え、待っている。いや、待っていた。俺が顔を上げるのを。

「何が辛く思うのですか？」

「俺には出来ることがあまりに限られていることだ。俺は何一つ返せない」

「何を貰ったのでしょうか？」

「……意味」

見たことない程透き通った赤から目が離せなくなる。シンとは違う、水晶のような鏡のような瞳を見返して、自分を見詰めて続ける。

「俺は何をしたいのか、わからなかった。知っていてもその意味が解らなかった、解ろうとしなかった。でも、あいつが」

あいつが尋ねたのだ。人とは何か、獣とは何か。何をしている。お前は誰だ？

言葉ではない何かでそう、訊かれた気がして、それに応えたくて逆に訊きたくて、知りたくなって。

お前の名前は？

それが始まりで。言いたいことを知らないやつと、言いたいことが解らない馬鹿が会って。

教えられたのはこっちだ。

「あいつが、訊くんだ。これは何だ、どうしてそうなる。知っていることを教えると言うんだ。本当だおいしいな、すごいな、きれいだ……俺は改めて考えたこともなかった。そういうものだと思っでいて、でも理解しようとせずそのままを受け入れていて」

だから改めてシンに教えるために考えて、シンが感じた素直な気持ちを感じて。

「シンのおかげで漸く解ってきた気がするんだ。世界が急に広がった気さえた。俺は知っていたのにまるで見えてなかった」

「シランさんにとって、シン君は大きな存在なんです」

「ああ、本当に」

「だから失いたくないんですね」

「そうだ。ロウだって、そうなんだ。欲張りと呼ばれても構わない。ただ守ってやりたいと思う。もう独りで戦わせてやりたくないんだ」

「……ようやく、わかった気がします」

息を小さく吸うと、穏やかな顔で唐突にヨミが言った。声のトーンがまた変わり、虚を衝かれ、さっき以上にまじまじと赤い目を見失ってしまう。しかしヨミは全く気にしない、マイペースで続けた。

「シン君たちの信頼の理由や、私が安心出来ると思った理由。シランさんは誰よりも純粹で真っ直ぐなんですね」

意外性が高過ぎてそれ以上の反応が続かなかった。硬直する俺を樂しげに、愉しげに見るヨミ。案外悪女なのか、と膠着を逃れた頭のどこかがそんなことを呟いた。

「研究所は大小様々、無数にあります。でも今のところ気付かれていないならきつと大丈夫ですから、いざというとき動けるよう心構えをしていれば良いと思いますよ」

「な、んで」

このタイミングで本題に戻るんだ。

惚けた顔にそう書いてあったのを読み取ったのか、ヨミは歌うように応えた。

「シランさんは渋い顔よりも間抜けなくらいが良いと思ったからですよ」

「答えになってない……」

「ふふ。何かあったら私にお知らせ下さい。是非力にならせて貰いますから」

「それだけ？」

「シランさんは知っていても知らなくても無駄に悩みそうですから、

なら無闇にリスクを冒す必要はないのですよ」

「なんだって？」

「だからシランさんは幸せに暮らしていれば良いんですよ。ほら、シン君達も図書館の中で待ってます。行ってあげて下さい」

あまりに優しい笑顔。

まだだ。まだ終わっていない。俺の用事はまだ一つ残っている。

「……お前は、お前はどっするんだ？」

「図書館を守ります。それが私の願いで役目ですから」

「それで良いのか？」

「私がやりたいんです。シランさんは気にしなくて良いんですよ。その優しさは二人に」

「良くない」

グツと眉間に皺が寄ったのが自分でもわかった。それにヨミはきよんとした顔をする。

「どうしてですか？」

「単刀直入に言うと、俺も日本政府とやらの呼ばれて、今向かっているところだ」

ヨミの顔が凍り付いた。でも俺は続ける。

「頼れる人がいるなら良い、だが」

「大、丈夫です」

苦し紛れな声。急に弱々しい顔になったヨミが、振り絞るように口にする。

「図書館を守るのが、私の仕事ですから」

「見たところ一人だろう、図書館に居るのは。他の人は」

「大丈夫ですから！ 私は大丈夫なんです、強いから、普通じゃないから！ 一人で、守れます、大丈夫なんです……」

叫び、俯くヨミ。その上に声をかける。

「強がるな」

「強がってません」

「人に頼るのも必要だ」

「必要ありません」

頑ななヨミの言葉に違和感があった。さっきまでのヨミはそんなことを言うやつだったか？ いや。じゃあどうして。

「もしかして、怖いのか？」

びくつと肩を大きく揺らしたヨミが俺を見た。怯えが湛えられたあの赤い瞳で。本当に兎のようだと思わず思った。

「人が、怖いのか？」

「あ」

悲鳴にもならない声が一滴だけ溢れた。見開かれる目には微かに絶望が見えた。

そして漸く俺は自分の愚かさを知った。

知っては、教えてはいけないもの。触れてはいけないものに触れてしまったことを、今更自覚した。

しかし全ては手遅れで。

静寂が場を支配した。

022 痛みの訳【狼】（前書き）

知ってしまったことをなかったことには出来ないんだよ。

そんな風に語るロウ君視点の第二十二話。ちよつとだけ時間を巻き戻した冒頭より始まります。

022 痛みの訳【狼】

司書室から出たロウは、辺りを見渡そうとしてやめた。だってシンは直ぐに見付かったからだ。

「シン」

「うわわ、ロウ？」

と言うか、図書館の扉の前で踞っていて、そこは司書室から丸見えだった。そんなちよつと間抜けなところに座り込んだシンの目は腫れ上がり、鼻も赤くなっていた。

シンは目をぱちくりさせて近付いてきたロウを見上げた。でも元々身長の高いシンはしゃがんでもロウの肩くらいにしかならなかったのだけど。

「な、なんだよ、話終わったのか？」

「そういうのはシランに任せてきた。ほら、顔凄いことになってるぞ？ ヨミにハンカチ借りただろ、貸して」

しかしシンは困った顔をするだけで渡そうとしない。ロウが首を傾げると、ぼそぼそと言いつつ訳するように言った。

「なんか、悪いから」

「汚すのが？」

「……うん」

「そんなの気にしてたらハンカチ使えないし、ヨミの好意も無駄になっちゃうぞ、良いのか？」

どうするの、と言うように手を差し出す。シンは暫くロウの手と

ヨミのハンカチを見比べていたが、観念したようにハンカチを口ウの手にぽんと置いた。

「……良くない」

「うん、じゃあ拭くね」

涙やら鼻水でぐじぐじになった顔を拭ってやる。ちょっと戒めみたいなのを込めて心なしが強めだった。でもシンは文句もなく、何だかシランみたいなムツスーとした不機嫌顔でされるがままにしていた。

何となくわかる。これは機嫌が悪いと言うよりは、恥ずかしいんだろつな、照れ隠し、あと決まりが悪い。皆の前で泣いたこととか、いじけてるところ見られたとか、そんな感じ。

「はい終わりだぞ」

「……ありがとう」

でもぶっきらぼうに答えるシンは、そんな事情を抜いても何だかシランにそっくりだった。

「どうしようか」

「どうしよう、って……」

びくびくしながらシンは司書室の方を見た。

「戻るか？」

「つつ！」

頭をぶんぶん横に振って答えた。よほど嫌だと、恥ずかしいと見える。

「む、無理、却下！」

顔を少し赤くして、声が向こうに届かないよう堪えながら叫ぶという器用なことをして見せたシン。流石に可哀想だよな、と思い苦笑した。

「そうだな、ロウも今から戻るのは気まずいし……本でも読もうか」「うえっ」

恥ずかしがっていたはずのシンは、ゲツ、という顔に瞬時に替わった。そんなに嫌なのかと、つい笑ってしまうと、シンがまたムスツとした顔になる。だから直ぐに訂正を入れて機嫌を取ることにする。

「大丈夫、ロウが声に出して読むから」

「良い、のか？」

「うん。それに二人の方が楽しいからなっ」

すると一転して曇りのない笑顔になるシン。本当にわかりやすいなあ。

「シンが選んで良いぞ、何が読みたい？」

自然と出たのは苦笑じゃなく、微笑だった。シンに笑い掛けながら問う。

そして返事は最高の笑顔と共に。

「もっちゃん料理の本！」

これ以上があるのかと思う程晴れやかで無邪気な笑みだった。

「あ、シラン」

涙もちゃんと綺麗に拭いていつも通りになったシンが、やっぱりいつも通りの喜色の滲む声で司書室から出てきたシランを迎えた。ついさっきまで夢中になっていた本は、扉が開いた瞬間にシンの意識から弾かれてしまったようだ。本当にシラン第一主義だなあ、と思う。

しかしシランは。

「さっきは本当にすまなかった……出るぞ」

とだけ言つと早足に図書館を出て行こうとする。慌ててシンが一緒に読んでいた本を棚にしまい、シランを追った。ロウは立ち上がるともう一度司書室の方を見た。扉は固く閉ざされている。シンが戻した本をちらりと見ると、ロウも急ぎ足で二人を追いつける。

「パンドラの箱」

開けちゃったね、と一人呟いた。

「どーしちゃったんだよシラン。ヨミは？ 結局どういう話したん

だよ？ 途中で出てきちゃったオレも悪いけどさ……シラン？」

怪訝な顔をしたシンがシランの顔を覗き込むがシランはふさいだままだ。

宿に到着したロウ達は部屋で休んでいた。と言うか、シランが黙って一番端のベッドに座ったかと思うと部屋の隅を向いたまま動かなくなってしまったから、なのだけど。

「具合悪いのか？ ヨミに何か言われた？ それともさっきの気にしてる？ あ、ばかばか言ってごめんなさい。……ええーと」

シンも困ってしまっている。弱った顔でロウを見て、またシランに視線を戻し、懸命に話すがシランは反応がなく、ちよつと泣きそうな目でロウを見て。

その繰り返し。

流石に見ていらなかった。シンがあんまりにも可哀想だし、シランの落ち込みようも酷い。

また目があった時、今度は頷いて見せた。シンはほつとした顔で頷き返す。ここからはロウの仕事だ。

「じゃあシンはスバル達の部屋にでも行つててくれるか？ シランと話したいから」

「……わかった。お願い」

逡巡したがシンはもう一度頷くと、部屋を出て行つてくれた。足音が斜向かいの部屋に向かったことを感じ、素直だなあと感心のよくな安堵みたいな感想を抱く。

「……どうしてシンを出した？」

横からのシランの問い掛けに、ロウは微笑んで向き直る。

「居た方が良かったか？ シン居たら話しくいだろうと思ってな
んだけど」

「いや……ありがとう」

なんだろうな、と苦しそうな声で、でも安心したみたいな顔を
するシランを見る。

「辛かったなら、シンにもそう言えば良いのに」

心配されていることが心苦しかったなら、しばらくほっといてく
れと言えば良い。後悔に押し潰されそうなら話を聞いて貰えば良か
ったじゃないか、と思った。

全部伝わったかはわからなかったが、自虐的な笑みを浮かべてシ
ランは答えた。

「救いを求めることがまず筋違いだ」

「……バカ」

なんにもわかってないじゃないか。

思わず拗ねたみたいに言ってしまった。シランが目を丸くする。

シンの時は驚かなかった癖に、なんでロウが一回言っただけでそん
な驚いた顔するのさ。

「シランはそれ直す。それ、シンは泣くかもしれないけど、ロウは
怒るぞっ」

「……すまん」

「ムカツと来る。せめてシンの前では言わないでよ。そんな時は殴る
から」

「なぐつ……わかった」
「バーカ」

シンの生き霊でも入ってるのかと自分でも不思議に思う程自然に怒ってた。簡単とは言え罵倒の言葉も平気で飛び出す。調子が狂うな。

……うん。うじうじしてるシランが悪いんだ。

「まあ、でも、考えなしにヨミに『人が怖いのか?』とか言っちゃって傷付けた後じゃそうなるよな」

「んな」

シランが硬直する。それを見てちよつと落ち着いた、と言つか溜飲が下がった口ウは、逆に申し訳なくなり小さく言った。

「ごめん、聞いてた」

「な、なな、ど、どうやって? だってお前……」

「あのくらいの距離なら頑張れば聞こえるぞ。ドアも隙間微妙に開けて出たから」

「……………」

絶句したシランがまじまじと口ウを見た。それから恐る恐る口を開く。

「シン、は」

「ううん。まず間違いなく聴いてない。まあ実は凄い賢い子でした、というなら聞いてたかもしれないけど、本に夢中だったし聞いてないよ、多分」

「は、ちよつと待って、本に夢中? 字を読めないシンが?」

「口ウが読んであげてたの」

「音読しながら耳を清ませてた？」

「そう」

「……………」

再び絶句のシラン。漸く呟いたのは、器用だな、の一言だった。

「心配だったから、つい。ごめんなさい」

「いや、良いよ」

呆れと感心がないまぜになったような、惚けた顔でシランは許した。それに口ウも安堵する。

「じゃあ本題に話戻すぞ？」

「ぐっ……………ああ」

口をへの字に曲げた情けない顔で渋々と頷いた。しかし逃げるつもりはなさそうだ。そんなシランににっこりと笑い返すとゆっくりと話し始める。

「ヨミは人が好きなんだぞ。だから怖いという矛盾を隠してたんだ。他の人にだけでなく、自分自身にさえね」

「何故、そう言える？」

「シランも見ただしょ？ 司書室にあった資料とかメモ。大体は図書館の学問の本だった」

様々な人が利用出来るよう、しやすくなるように考えるもの、考えられたもの。そんな本や本から書き留めたらしきメモが大量に見受けられた。

「もし自己満足で図書館を守る、って考える人ならそんなことしな

いし、利用する人のことを大切に思ってなきゃあそこまで出来ないよ」

「……ああ、俺も見た」

「だからあんなヨミを見て思ったんでしょ？ 矛盾してる、おかしいって」

「……その結果があれだけだな」

「知ってはいけないことだったんだよ。シランはそれを教えちゃったんだ」

シランは沈痛な面持ちで頷いた。わかっているのかな？ でも多分わかってる。結構シランはそういうところは理屈じゃなく感覚、心で感じて理解するから。

だからこそシンと出逢って世界が広がったと感じたのだろうけど。しかしどうするかはとことん頭で考えてしまっから袋小路に入っで、身動き取れなくなり勝ちなのだろう。

「ヨミは今まで独りで強がってたんだ。そうじゃなきゃ立ってられなかったから。矛盾が心に突き刺さるから」

自衛の為には知らないことにしなければいけなかった。無意識の防衛だ。

「でもシランが教えちゃったから、もう知らん顔出来なくなった。ヨミは人が好きで人が怖いという矛盾と戦うことになる。うっん、戦ってる」

「無神経な俺の、せいだな」
「そうだな」

目を丸くした、ギョツとした顔のシランがロウを見た。ロウはニコニコとその驚愕の表情を受け止める。するとシランは直ぐに項垂

れてしまった。

「そうなんだ、だから、俺がやらなきゃいけない。俺が、出来ることをしよう……ヨミがちゃんと向き合えるように」

「ロウ達ができること、だぞ？」

「……ロウ、達？」

ゆっくりと顔を上げたシランは、全くの予想外といった惚けた顔でおうむ返しに言った。

「シランの失敗は残酷だったかもしれない。でもきつと踏み出さなきゃいけないものだから、シランで良かったんだよ」

「良かった？　俺が突き付けた事実が？」

あんまりにも情けない、珍しいくらい狼狽したシランに、思わず笑いが込み上げて来る。

「ちょっと違う。ロウが言いたいのはな、たまたま矛盾を指摘した人が、超絶にお人好しで責任感の塊みたいな人だからほつとくことなんか出来なくて、ヨミも問題から逃げずに済むね、ってこと」

シランは林檎でも丸呑みしたみたいに変な顔になった。そして恐る恐るといった体で確認の問い掛けを口にする。

「それは、俺がしつこく何とかしようとするから、ということか？」

「そこは素直に受け取ろうよ。ほら、一人で立ち向かうには、現実って冷たいじゃない。世知辛いつて言葉もあるし」

「……今日は一段と子供らしくない発言だな」

「ロウは子供じゃないもん」

そう言って笑うともうシランは何も言えず天井を仰いだ。何だか声にならない悲鳴が聞こえる気がする。

「とにかく伝わったか？ シランの問題ならロウもシンも勿論手伝うし、そもそも優しいシランならロウ達居なくても絶対円満解決してくれると思ってるんだぞ」

「……その信頼度の高さは何とかならないか？」

「それは無理だなあ」

だってシランがシランだからこそだから。

どんなに失敗しても、間違っても、シランがシランらしく正そうとする限り全く信頼は裏切られないから。シランのその眩しいくらいに真っ直ぐさは、どう考えてもシランの性格じゃ曲げられないだろうし。だからもうこの信頼度はどうしようもないんだよな。上がることはあっても下がりそうにない。

渋い顔になった彼を見返しながらそう思い、一人頷く。彼は深々と嘆息した。

「まあまあ、誉めてるんだぞ？」

「笑顔で言われてもな……遊ばれている気しかないのだが」

「そんなことないぞ？ ちょっと楽しくなってきたけど。ヨミの気持ちかわかると言つか」

「……………」

「あは、ごめんって。ほら、ヨミのこと、まだ言っていないでしょ、あれ」

「あれ？」

きょとんとした顔で首を傾げるシランに、もう普通の表情を忘れてしまったみたいに自覚できるほど凄い良い笑顔のままロウは言う。

「ほら、俺も行くから一緒に行つて話聞いて、で断るなら一緒に頭下げて帰つて来よう、みたいなお誘い」

その言葉に、シランは完全に固まり、次に顔を真っ青にすると叫んだ。

「な、なんでロウが知つ、あ、いや……………はあ。お前は本当に何でもわかるんだな」

「シランのやることつて、とっても分かりやすいよね」

シランはちよつと恥ずかしそうに顔を赤くした。けど、直ぐに妙に神妙な顔になるとロウに尋ねた。

「それをヨミはどう受け取ると思う?」

不安なんだろうな、と思う。でもロウはあっさりと首を横に振つた。

「それはヨミに聞かなきゃわからないことだよ。シランが聞くことだ。シランがどうするかが大切なんだぞ。心配しなくてもなるようになる」

「……そんな軽く構えられない」

「うん、シランはそれで良いんだよ」

「……そうか。じゃあ立て続けだとヨミも落ち着いて考えられないだろうから」

「そうだな。スバル達が行く前に訪ねてみようか」

「……読心術でも使えるのか?」

「唇の方なら多分出来るぞ」

「それはそれで凄いな」

何となく目を合わせ、二人は動きを止めた。ロウは相変わらずの笑顔で、シランはいつもの仏頂面に戻って、互いの視線を受け止める。

先に降参したのはロウのご機嫌にうんざりしたようなシランだった。

「……シンにちゃんと謝ってくる」

「それが良いな。シンはもう全く気にしてないから、焦らず気負い過ぎないようにな」

そんなアドバイスに苦笑したシランは感謝の言葉を告げると、疲れた横顔で部屋を出ていった。

一人部屋に残される。

「意地悪だったかな」

いろいろな意味で。でもシランにはズバズバ言っちゃった方が良い。一人だと長いから、ひたすら悩む時間が。そういうのが必要な時もあるけど、今回はそんなに猶予はなかったので強引にまとめて答えが出せるよう手伝ってみた。余計なお節介だったかもしれないが、でもシランを助けられるなら助けたいし、ヨミも放っておけない。

でも、だ。

やっぱりああいう読心術みたいなことは控えた方が良いだろうなとも思った。シンやシランだから好意的に受け取ってくれるが、下手すれば気味悪がられる。怖がられる。それは……避けるべきだろう。ロウだって嫌だから。

「うわわシ、シラン！」

不意にシンの声が響いてきた。向こうの部屋が何だか騒がしい。あれだけ言ってもやっぱり土下座とか始めちゃったかなシランは、
と思い苦笑する。だってシンの慌てた声がまだするから。

ロウは腰を上げた。このままじゃ苦情が来る。止めて来なきゃな、とドアに向かう。

その道すがらに思う。

これからの未来。ロウは余計なことを散々してしまいそうだ。いや、するだろう。今のことも、今までのことだって余計なことと言える。でも好きな人達だからほっとけないのだ。知ったことを知らなかったことには出来ない。丁度今のヨミのように。突き付けられた現実から逃げる術は生きている限り皆無だろう。だからロウは逃げずに向き合うしかないんだ。やれることをやって、最善を尽くすしかないんだ。たとえ。

たとえその結果が、どんなに悲しい事実に辿り着こうとも。

急に胸が張り裂けそうな気持ちになって、引き吊るような声がか細い声が溢れた。零れ堕ちた。

「……シ、ラン。シンッ」

誰か、聞いて。誰か大丈夫だと言って。そんなことないよって慰めて。

「誰か」

誰でもいい。

「だれでも、いいから」

でもこの声は届かない。ロウがそう望むから。

歪な笑みは笑顔の仮面で隠そう。歪んだ言葉は優しさで包もう。

悪夢の未来は誰の目にもつかぬ場所で消してしまおう。

大丈夫。まだロウの世界は温かく優しいから。

「続くための努力をしよう」

幸せのための努力を続けよう。

023 夢の理由【ヨミ】（前書き）

急遽一つの章にする予定だったものを二つに分けました。なのでかなり短いですが、すみません。

初めてのヨミ視点で二十三話はお送りします。

023 夢の理由【三三】

「何故この字を選んだ？」

懐かしい声。

いつも怒っているみたいな声だった。でも怒られたことは一度もない。そもそも怒るのが苦手な人だったから。だからいつもそつと諭すように言うのだ。この時のように。

「他にもあつただろうに」

私は自然と答えていた。いや、記憶の中の私が言ったのかもしれない。けどどちらでもいい。凜と張った糸のような、でもこの優しく染み渡る声に耳を傾けることに忙しいのだ。

「ありました、とても素敵な言葉が。でも、私には出来すぎています」

「またその笑みか……僕は好かん。やめろ」
「……すみません」

実はまだこの頃はあの人が怖かった。怒っているようにしか見えないのだ。今は違う。たくさん一緒に居たからもわかる。意味が汲める。

あの方は深々と嘆息を言った。

「……勝手にしろ。最後に決めるのは自分なんだ。自分が納得出来るのなら咎めない。これ以上は言わん。……ただ」

あの方は躊躇うように一度言葉を止め、唇を湿らすと、ゆっくり

と問い掛けた。

「どうしてそれを選んだ？」

私は微笑んだ。きつとあの日の私も同じ顔をしていただろう。結局私の本質はあの日からちっとも変わっていないんだ。

そんなことを思ったからちっと寂しげな笑みになったと思う。あの人の顔がそれを見て微かに歪む。あの日の私が気付かなかったもの。

あの人は優しくかったから辛く思ったのだろう。自分に呪いをかけるような行為を。自傷のような命名を。

それは自らを縛り付ける戒めであり鎖。そんな風に考えた私は、そして今もここにいる。消せないから。消えないから。

嘗ての私が願ったのは酷く残酷な願い。それをあの日、心に刻み付けた。忘れないように、消えないようにと。

自分の意志で。^{ナイフ}

淡い光がカーテンの揺らめきに合わせて漏れる。その光は薄く張った闇を緩やかに奪い去るように、じんわりと館内に染み込み、そして闇に消えた。それはちっぴけで弱々しいものだったから。闇を照らすには足りなかったようだ。自分まで闇に吞まれてしまいそんな錯覚に襲われ、私は小さく微笑んだ。自傷の笑みと認識しているのに未だに直らない癖。自虐的で自己を否定するようなものなのに、未だに私は自分の存在を肯定してやれない。罪深過ぎるから、
と言いつつ。

「感傷、ですかね」

ふっと笑んで独り呟いた。多分まだ夢の余韻が消えないからだ。とても懐かしい夢を見た。ここへ来たばかりの頃の夢だ。あの人が居た頃の夢。今にも酷く無愛想で怒ったような顔が、目の前に現れそうな空気をを感じるが、そんなことあるはずもなかった。

ふと。誰かが来る、と思った。図書館に向かう足音が一つ、聴こえてきたからだ。二組程候補が直ぐに浮かんだが、自分で打ち消す。これは馴染みの足音ですね。

私は埃を立てないよう気を付けた早歩きで扉まで行くと、真鍮のノブを握った。

「おはようヨミ姉！」

扉が開くタイミングにぴったり合わせた元氣な挨拶が私を迎える。慣れたものだ。私は思わず内心苦笑してしまった。彼はもう扉が勝手に内側から開くことには慣れているのだ。

「本当に早いですね、晴太君^{せいた}」

私は顔を綻ばすと、彼に微笑んだ。晴太君はこの図書館の常連の小さな男の子だ。ちょっと気が弱いところがあるが、ちゃんと勇氣を持っている、本が好きで笑顔が素敵な男の子。

しかしその笑顔が何だか曇っているように思えた。

「どうかしましたか？」

「……あのさ、昨日変な奴ら来てたよね」

「『変な奴ら』なんて失礼ですよ晴太君……でも、ええまあ」

何とも答え難い問いに、濁すように答えてしまふ。何せよくよく

考えると一組目は名前すら知らないのだから。……いや。どこから来たかは知っているのだから、そんなことは些細なことかもしれない。

「でもどうして晴太君が知っているのですか？」

すると晴太君は慌てた勢いで大きくなった声で、弁解するように言った。それで私は理解した。

「あ、あの、わざとじゃないんだけど！」

「ああ」

聞いていたのか。全く気付かなかった。便利と言えなくもない異常に発達した聴覚も、これでは意味がない。きつとシランさん達が隠れているよりも遠くに上手く隠れていたのだろう。

「ご、ごめんなさい！」

「いいんですよ。私の不注意ですから。それで……何か伝えたいことがあるのですか？」

「……うん」

神妙な顔で頷く晴太君。私は少しだけ怖くなる。馴染みの彼が、私の日常の一部までもが、その話題を口にする。何だか私の世界が侵食されているような気がして気持ち悪さと恐怖を感じた。

「……なんでしょうか」

「あいつらグルだよ」

「……え」

私は何を言われたかわからず、呆けた顔をしてしまった。そして

直ぐに思考が追い付き、驚いた。ショックを受けている自分に。思った以上にシランさんを信頼している自分、裏切られたのかと愕然とする自分に驚きが隠せなかった。

「な、何を根拠に、言っているのですか？」

「あいつら同じ宿屋に泊まったし、仲良さそうに一緒に行動してたし、絶対対にグルだよ！」

私は動揺して瞬きを意味なく繰り返していた。確かに帰り際に彼は言った。俺も同じ境遇で、そこへ向かっていると。そして恐らく私のせいで足止めを食らっているのだろということも容易に想像がつく。でももし私を騙そうと思うのならそんなこと言わない方が良いでしょうだ。それに。

「あの人人が人を陥れるような器用なこと、出来るとは思えません。シン君も、ロウ君も同じです」

「……なんでヨミ姉はそんなにあいつらを信用してんだよ」

その問いに私は困ったように目尻を落とした。確かにそうだろう。一時間程度話しただけの相手なのは確かだ。でも信頼しても良いと思わせる何かを彼らが、シランさんが持っていたのも確かなのだ。そして私はそれにすがりたいのだと思う。失った私の支えになつて欲しいなんて傲慢な願いが心の奥底に間違いあるのは誤魔化せない。

「……なんだか似ているからかもしれませぬね」

「館長さん？」

「……ええ」

「だからってその人は館長さんじゃないから嘘つくかもしれないよ」

わかってる。わかっているけれど。シランさんの言葉はあまりに真実に近すぎて、私は何も答えられなかった。ただただ意地を張った頭ごなしの否定しかできなかった。情けない。

でも何かを伝えようとしていた。

あの人はわかりやす過ぎる。少し話ただけでわかった。酷いお人好しで、子供のように意地を張り、自分を曲げない人。曲げられない人。眩しいと思う程澄んだ想いを持つ人だった。

そしてそのお人好しを私にも向けていた。それを断ったのは、拒否し否定した私はどれほど酷い人間か。いや、人間でもない。ただの実験動物だ。

それでもわかるよ。

「あの人は嘘つきじゃないよ。嘘なんて吐けない、不器用な人ですから」

「……ふう」

「はい？」

よく見たら晴太君がふくれていた。非常にわかりやすく不満な顔をしていた。しかし私には理由がわからず、小首を傾げ問う。

「何か機嫌を悪くすると言いましたか？」

「……べつに。とにかく注意！ あいつらのことも気を付けてよヨミ姉っ。ヨミ姉ってぼやぼやしてるから危なっかしいよ」

「そうですか？」

「そうだよ！」

「では気を付けますね」

につこりと微笑んで答えると、晴太君はちよつと照れたような笑顔を返してくれた。

そして新しい足音を耳が捉えた。今度こそ昨日のお客さんだ。二

組目の。私はそのことを晴太君に告げた。

「ならおれもいる！ ヨミ姉が騙されないようにいるよ」

「頼もしい言葉ですが……晴太君、お母さんに怒られますよ？ こんな早朝に抜け出してきたのが見付かったら」

ぎくつ、という風に肩をすくめ、困ったように私を見上げてきた。

「……あとで説明するの手伝って」

「弁解するの間違いでしょう？」

「そ、そうとも言つかも、ね」

視線を明後日の方へやる晴太君がおかしくて、ついクスクスと笑ってしまふ。彼は尚食い下がろうとしたが私が止めの言葉を言う。

「今ならまだ間に合いますよ。忠告が貰えただけでとても助かりましたから、怒られないようにこっそり上手く、速くベッドに戻ってくださいね」

「うー」

まだ不満そうな顔をしていたが、流石に観念したようでわかったよ、と小さく呟いた。さあさ、と背中を軽く押して勝手口に向かわせる。

「頑張ってくださいね」

戸を開け、見送ろうとしたが、急に晴太君がぐるりと回り顔を再び私の方へ向けた。まじまじと神妙な顔を近付けて言う。

「ヨミ姉、ほんとーに気を付けろよ？ 騙されんなよ！」

「どうしてそんなに私なんかを心配するんですか？」

ちよつとその必死さに疑問を持ち、つい問い掛けると、何故か晴太君にぽかんとした顔で見上げられた。間抜けな顔。でも多分その表情を向けられる私が間抜けなんだろうけど、と何となく意味を汲み取り思う。

晴太君は何か言おうとして、それを掻き消すように一度頭を振ると、真つ赤になって叫ぶように言った。

「当たり前だろ！ ヨミ姉がいなくなったら悲しいに決まってるよ！ ううゝ、ヨミ姉のバカ、鈍感！」

「は、はあ？」

突然の罵倒に付いて行けず呆けていると、その間に晴太君は猛スピードで走り去ってしまった。追い掛けることは容易いが、しかし来客もあるし、と迷っている間にもう背中は見えなくなっていた。しょうがない、今度あの台詞の意味を問い質そうと決め、私は正面扉へと向かったのだった。

「たのもー」

そんな声に自然と微笑みながら。

024 心の涙【真】（前書き）

結局シン視点になった第二十四話です。

後半は勢いで書きました。予定外の方へ暴走したので次回が作者にもわからないというダメな状況ですが勢いで更新しました。なんかすいません！でも楽しく書けたので楽しく読んでもらえたら幸いです！

024 心の涙【真】

「たのもー」

「……」

「なんか文句あんなら言えよ」

ちよつと拗ねた風に言うと、シランは相変わらずのローテンションで弁解しているのか微妙な口調で答える。

「いや、意味をわかって使っているのか、と疑問に思ったただけだ」

「なんとなくは知ってるに決まってるんだろ。エノキが使ってたし間違っではないだろ？」

「……まあ、そうだな」

なんだよその引っ掛かる言い方は、とちよつと膨れた。しかも扉の向こうからもシランと似たような空気を感じる。オレそんなに変なこと言ったかな、と首を捻りつつも、扉が開かれるのを見ていた。

「お早いですね」

扉を押して出てきたヨミは柔らかく微笑んでそう挨拶したので、オレもおはよーと笑顔で応えた。ヨミの周りの空気は温かくて好きだ。真つ白な髪に朝日が溶け込み、キラキラと辺りに光が散らばる。なんだか朝日なんてなくても光っていられるんじゃないかとまで思った。

「今日はちよつとすつきりした曇り空だなっ」

「そうですね、今日は良い曇りですね」

ロウもヨミとほんわかした挨拶を交わす。この二人は端から見ているととても和む癒しオーラが出ているように思える。

それからヨミが何だか急に顔を強張らせるとシランを見た。シランもヨミをちょうど見ていたのだった。ちり目が合い、二人揃ってしばらく固まると慌てて顔を反らした。しかし横目で互いに相手を確認すると気まずそうな、恥ずかしそうな顔になる。

なんだこれ、とオレは首を傾げた。

でも本題に入らなきゃと思い、シランの代わりに口火を切った。

「あのさ、なぜか理由は教えてくれないけどシランがヨミに謝りたいんだって。何したか知らないけど、シランかなり気にしてて、何でも言えば出来る範囲の、えーとつぐない、をする、しょ、しょ

」

なんだっけ、と言葉に詰まっているとロウの助け船がやってくる。

「償いをする所存だから、多目に見て欲しいな、っていうお願いなんだよ」

「……おい」

不機嫌そうにオレらを見るシラン。ロウはちょっと苦笑いして、オレはやつと言いたかったことが伝わった清々しい顔で、そういうことだ、とウンウン頷いていた。ヨミはそんな三人をしげしげと見ていた。なぜかわかんないけど。

シランはそんな三々五々な反応に深々と息を吐くと、ヨミに向き直った。しかしまだ決まりが悪そうで、何だか眉尻が下がり、凛々しさが薄まってちょっと情けない顔だ。クスクスという声まで上がり、シランの不機嫌ゲージは大分上がった、ように見えるが、実際はただ困っているだけだ。

「……笑うなよ」

「すみません、つい。シランさんって意外と顔に出やすいタイプなんですネ」

「そーなんだよ。嬉しかったり楽しい時の表情がわかりにくいだけで、すごいわかりやすいんだよ。特に不機嫌とか」

「負の表情がデフォルトだからね」

「おい、いい加減にしてくれ」

うんざりしたシランの苦情に、それでも笑顔なオレ。ロウも同じような雰囲気。和氣藹々としたいつもの会話。そこにそつと漏れた言葉はやたら寂しげに響いた。

「……羨ましい」

「『うらやましい』、って何のことだよ？」

そう思わず聞き返すと、ヨミは慌てて口元を押さえた。どうも無意識からの呟きだったようだ。恥ずかしいらしく顔が熟れたリングゴみたいにみるみる赤く染まっていく。しかし不意に落ち着きなくキヨロキヨロしていた赤い目が一点に留まった。黒曜石と紅玉がぶつかる。一方は気に入らないという不満顔。一方はきよんとしたよな、何か意外なものを見つけて呆けた顔だった。

「羨ましい、とはどういう意味だ？」

「いえ、その」

ヨミはまるで真つ黒な瞳に囚われてしまったみたい。シランを真っ直ぐに見たまま固まってしまったヨミは困っているように見えた。でも一瞬くしゃっと困り顔が歪み、俯いて見えなくなってしまった。そうして絞り出された声は震えている。

「なんでも、ありません」

納得行かない答えに、文句を言おうと一歩前に出ようとする前に、シランが躊躇なく言葉を突き出していった。

「嘘つきだな」

その言葉に貫かれたヨミの声にならない悲鳴が、大きく足りないものを補うように吸った呼気が、やたらと耳に刺さった。そして衝撃に襲われたヨミが思わずといった風な驚きの表情で顔を上げた。

「逃げるのか。お前は結局逃げるのか？ 事実から、自分から」

「わ、わた、私、は」

「独りじゃ立ち向かえないと言い訳してこれからも目を反らしているのか？ お前はいつまで勝手な言い訳をして勝手に孤独を気取っているつもりだ」

「か、勝手なことを言っているのは！」

「そうだ、俺だ。でも俺は目を反らさないし逃げないし自分勝手な言い分も平気で口にしてやる。何故なら気付かせてしまったのは俺のせいで、指摘したからには最後まで付き合うべきだと俺は考えるからだ。だからお節介なのは承知で言うぞ。お前は向き合うべきだ。お前は独りじゃない」

シランが冷たくよく切れる刃物のような漆黒の瞳でヨミを貫く。

ヨミは怯えた顔で、まるで大きな動物に見つかってしまった小さな生き物みたいに縮こまって、宵闇を閉じ込めた瞳を見上げた。

そして絞り出すように。存在を必死に主張するように、肯定するように答えた。

「独り、ですよ。私はあの人がいなくなった日からどうしようもな

く独りなんですよ。そしてもう、それでいいんです。喪うのは辛すぎます……人間なんて脆くて、温かくて、恐くて、騙して、優しく
て」

「好きなんだろう？」

「好きです、好きでも恐いんです、好きだから恐いんです、嫌いだから恐いんです……愛してるから、喪いたくなかったんですよ……」

赤い目にキラキラと光るものが浮かんでくるのが見えた。胸が苦しくなってくる。それを見て、言葉を聞いて、胸がきゅんと鳴きそうになる。なんでこんな辛いことを続けるのかわからない。でもシランがしなくちゃいけないと言うから、ロウと……口を出さないって約束したから。

だから胸を、心を抑えてオレは見守る。だってシランにあるのは痛いほど真つ直ぐで迷いながらも確かに自分の中の正解こたえを掴み、伝えたいという気持ちだけだから。救いたいという甘過ぎるほど優しい思いだから。

「悲しかったら全てを諦めるのか？」

「もうやなんです」

「大切だったものを見失ってもいいのか？」

「大切にしていたものを私が守るんです、忘れません、ここに居る限り、ここがある限り」

「甘えるな」

「甘えてなんかいません」

「俺は人間だ、ただの弱く脆い人間だ」

「知ってます」

「恐いか？」

「恐いですよ、恐いに決まっています。あなたは怪しいじゃないですか、私を陥れようとしている可能性があります。信じ、たいのに……信じてみたいのに！」

血でも吐くみたいに吐き出されるのは言葉。ホントの気持ち。だからシランは目を反らさない。真正面から受け止める。正々堂々立ち向かう。愚直なまでに、直球でだ。

「信じていい」

「何を根拠にですか」

「そんなものない」

シランらしすぎる答えにヨミが一瞬ポカーンとなる。でも直ぐに小さく吹き出した。それを不機嫌な顔で、でも揺らぐことなく見詰め続けるシランがいた。

「言い訳はいらない。もういないんだ。いつまで死人にしがみついているつもりだ」

冷たい台詞に、ちよつと前まで笑っていたヨミが今度は怒った顔で応じた。

「あ、あなたに、何がわかるんですか！ 知りもしないのに」

「知らないが想像はできる。死者を言い訳に生者が怠けたら、死者も嘆くだろう。言い訳にされるなんて迷惑だ」

……あー。

ここまで来るともうわかる。迷ってない。シランはもう迷ってない。そして。

怒ってる。

ちよつぱり怒ってるなこれ、と思った。出来るだけ優しく話そうとしているが、限界が近いなと思う。シランがキレると何するかわからないんだよな。ロウと約束してるけど、程々で止めた方が良く

かとも思い出したが。

ヨミにふと目を向けると、今までで一番驚いた顔をしていた。呼吸を忘れたような、心臓まで動くのを忘れて彫像になってしまったみたいな。

そしてゆっくりと思い出すようにつむがれた声は、震えて、泣きそうだった。

「泉さんの、生まれ変わりか何かですか、あなたは」

「俺は俺だ。それ以外の何者でもない」

「あなたは、喪う痛みを知らないでしょう？ 私の気持ちは、あなたにはわからない」

「そうだ。俺は知らない。だが痛みを知ってそれから逃げているやつに言われたくない」

完全にケンカを売ってる台詞だ。流石に止めよう、と思った時、空気が変わった。

あれ、とヨミを見る。目は怖いくらい真っ直ぐにシランを見ていて。なんだか幽霊みたいな雰囲気を感じた。

ヨミの華奢な身体から殺気が吹き出した。

「ああ！」

考えてなかった。だってすごい静かで優しい空気を持っていたから。でも忘れてた。あの重たい扉を軽々と開ける腕力を。さっきから揺れ動く不安定な感情を。

ヨミだって激情はあるんだ。

「ヨミッ！」

怒りに囚われてもヨミは静かだった。無音のまま床を踏み切り、

迫る。右手には怒気の拳。目指す場所は シランの顔面。

声にならない悲鳴は今度はオレの中にあつた。オレは必死にシランを右肩を掴んで引き摺り倒した。でも、間に合わない。ヨミが速すぎる。だからすぐさま切り替える。シランを全力で抱き込むと庇うために頭を代わりに突き出す。一瞬過つたのはどこか遠く他人の思考のようだった。

オレ、死ぬかな？ あの拳はかなりやばそう。でもドラゴンだしなんとかなるかな？ あとは運次第。

「ダメだよー」

不意に場違いな声がした。そんで気が付いたら目の前に小さな影がいて、ヨミがいなくなっていた。

「あ、れ？」

間抜けな声が口から漏れる。視界から消えたヨミは直ぐに見付かった。左脇の床。そこに仰向けに転がされていた。ヨミもオレに似た間抜け顔、呆けた顔だ。

「だめだぞヨミ。シランはロウとシンの大事な人だからね。そうじやなくても勿論とめるけど」

オレの前に瞬時に躍り出た小さな影　ロウは、やっぱり場違いに和やかな笑みを浮かべて言った。肺に詰まっていた空気が、気が抜けると同時に吐き出される。

「でもヨミ、そうじゃないでしょ。ヨミは決めたんでしょ？　だからこんな使い方しちゃだめだぞ。間違っちゃ、だめなんだよ」

ヨミは何も答えられずにいた。そして先に立ち直った人がいた。シランだ。

「……痛みを知らない。でもそれを避けるための努力を続けていく。そうでなければここには来なかった。俺は臆病だ。痛みを知らないからこそそれは最大で最悪の恐怖の未来だ。だから意地でも失わないと決めた。その覚悟はある。否定させは、しない」

伝わっただろうか。わからない。そもそも頭がさっきの衝撃でぼんやりする。オレもシランの台詞をいまいち理解できてないかもしれない。殴られた訳でもないのに、何だか変だ。視界がぼやっとするし、熱い。

オレはゆるゆると引き摺り倒したシランを離すと足に力を入れた。上手く力が入らないけど立つことは出来たから、ゆらゆらと歩き出した。

目的地に着くともう完全に気が抜けてしまった。立ってるのがやつと。でも手を伸ばした。

「よみいい」

赤い目がオレを映す。情けない顔をしたオレを映す。ヨミは恐々とオレの差し出した手を見て、オレの目を見て、それからそろそろと自分の手を伸ばして……握った。ほとんど反射的に握り返して引っ張ろうとするのだけど、気が抜け切っているオレに引き上げる力なんてあるわけがなくて。

「きゃっ」

ヨミは上半身が持ち上がるまでしか行かなくて。オレは途中で膝が砕けてしまい、ヨミと同じ位置に降りてしまった。もういいやと

思い、そのまま抱き着く形になる。

小さかった。ロウよりはずっと大きなはずの背中では、ロウよりもずっと小さくて細く、脆く感じた。壊してしまいそうで恐くなって、今にも消えてなくなってしまうんじゃないかと思ってキュツと抱き締めた。

「もう、やだよ」

不安が溢れ出す。痛みが溢れ出す。ただそれだけのことだった。

「二人がケンカすんの、やだよ。つらいよ。いたいよ」

「痛い？ どこが？」

「ココロに決まってる。みんなみんな、あんな傷つけ合いみたいな言葉、いたくてつらいに決まってる。もうやだよ、がまんしてるの」「どうして？」

「だってオレ、二人共好きだもん。シランがいたいのも、ヨミがいたいのも、や。血が流れるみたいな言葉、聞きたくない」

これはわがままだ。でももう我慢しない。ヨミも我慢しないで欲しい。シランに意地悪言わないで欲しい。仲良く楽しくしていたい。ヨミの顔はオレの背中に回ってしまっただけに見えるけど、代わりに心臓が近くなって教えてくれている気がする。だからわかる。ヨミが驚いてること。息を吸う音がいやに大きく聞こえた。

「……何の話していたか、わかりましたか？」

「わかんない。ぐちゃぐちゃしててよくわかんなかった。だから教えてよ」

素直に訊いた。ヨミのドクドクというリズムが少し早くなった。ヨミは決心するようにゆっくりと深呼吸をすると、ほんのちよつと

脅えの混じった声で言った。

「私、人間が怖いんです」

嬉しかった。ようやくわかりやすい話になったからと、やっとヨミを助けられる糸口が見つかったからかもしれない。いや、小難しいことはわからない。ただ、教えてもらったことが嬉しいんだ。

「オレは人間好きだ。ヨミはシランもこわい？」

「ちよつと、怖いです」

「まあ顔はこわいけどな、でも全然こわくないんだよ。優しいんだ、めちやくちや甘いの」
「わかります」

笑った。自然とオレも、あは、って笑う。じゃあなんで人間こわいの、と訊くと、酷い人がいたからです、とヨミが答える。

「シランとか、村の人はひどい人？」

「いいえ、優しい人間です、私の好きな」

「なんだ、人間好きなんじゃん。オレと一緒にっ」

「そうですね」

「でもこわいんだな。それはそのひどい人間のせい？」

またそうですね、と繰り返したが、今度のは少し震えていた。それが嫌だったから、回した腕に力を込めた。

「こわいなら誰かと一緒にいればいい。一人はこわいよ。二人ならこわくない」

「なら、ずっと一緒に居てくれるとでも、言ってくれるんですか？」

シランが何か言いたげな気配があつたけど無視して、シランが口を開く前にオレは答えた。

「お願いしてみればいいじゃん。良いって言ってくれるかもしれないだろ」

また息を呑む音、いや、動きがあつた。震える身体が感情を伝える。

「……我が儘すぎる、願いです」

「オレはいつつもわがまま言ってるよ。返そうって気持ちがあれば大丈夫」

「返す、気持ち？」

「そうそう。オレはシランとロウからいっぱいもらってるから、返したいって思ってる。家事くらいしか出来ないし、わがままばかりだけど……きつといつか返せるよ。全部じゃなくていい。義務でもない。そういうもん」

後ろでシランが小さく呟いたが、それはとても微かで、途中で消えてオレの耳には届かなかった。ただヨミが苦笑したことだけはわかった。

「シン君は優しいですね」

「シランがいてくれるからだ。ロウが教えてくれるからなんだ、きつと。優しいって思えんのは」

「私に、出来るかな」

「誰だつてやろうと思えば出来るよ。でもオレのはほとんどわがままなんだ」

「でも、温かい我が儘です」

「なんだそれ？」

わからなかった。でもヨミが笑って、納得したならそれで良いかとも思った。

「一緒に、居てくれますか？ 怖いものが来ても、一緒に」

ヨミは迷うように言葉を切った。でも多分迷ってない。決まっているけど怖くて言えない言葉。だから背を押すように、ぎゅっと抱き締めるんだ。包むように。

そしてヨミは小さく、でも力強く言った。

「一緒に、立ち向かってくれますか？ 手を握らなくてもいい、戦わなくていい。ただ、ただ」

見守ってくれますか？ 一緒にその場に居てくれますか？ 一人を二人にしてくれますか？

なんて。なんて我が儘が下手くそな人なんだろうかと思った。迷うことはなかった。決まっていたことだから。だからオレは答えた。

「いいよ」

「あり、がとう」

ぽたぽたと。温かい滴が背中を濡らしていた。やっと淋しくて冷たく重いなにかが減ったように感じた。まだヨミのあの小さな背中にそれは残っている気がしたけど、もう押し潰されはしないだろう。

「もう、ケンカしない？ ヨミはシラン殴らないし、シランはヨミに意地悪言ったりしない？」

「大丈夫ですよ。もうしません」

「そか。よかったあ」

「どうして」

「ん？」

「どうして私にそんなに優しくしてくれるのですか？」

なんでそんなことを訊かれるのかわからなかった。だからただただ正直に答えを返した。

「ヨミが優しくて、好きだから。でもそんなのなくても、そういうもんだろ？」

「誰かに優しくすることに理由はいらない、ということですか？」

「うん。そういうもんだと思ってるぞ」

素敵なことですね、と霞の向こうの声のように微かに呟くとヨミは離れた。それからロウに向き直った。しっかりと白く細い二本の足で立って。

「あなたが言った通りです。昔決めたんです。この力は誰かのために使おうと。出来るのなら……誰かを救う力にしたいと」

自分の拳に視線を落としたヨミはどこか懐かしむような表情でそう言つと、深々と頭を下げた。

「止めてくれて、本当にありがとうございました」

「ううん。ロウはただシランを失いたくなかっただけ。本当にヨミを救おうとしてたのは、シランとシンだよ」

「ふえ？　なんでオレが出てくんのか？　さっきまで理由も知らなかったし、それにオレはただ二人がケンカしてるのがやだったただだし……」

「そもそも喧嘩じゃないしな」

疲れた感じの声でシランが言った。いつの間にか立ちあがってヨミの前に来ていた。ヨミは恐々とシランを下から窺うように見ていた。

「本当に、すみませんでした……」

「ケガないよな！」

「お前はいつつもそればかりだなまったく。ロウのおかげで無傷だ。ヨミも気負う必要はないが、ロウにはよくよく感謝すること。ロウ、ありがとうな」

「どうしてそこでロウを持ち上げるの！」

「シランもロウも元氣そうだからいいや。つかそもそもシランの言い過ぎだったんだよ、シランの意地悪！」

「話の内容がろくに把握できてなかったやつが何を言うか。まあ……言い過ぎたことは認める。すまなかったなヨミ」

「ほんとごめんなヨミ。意地悪口悪大魔人が変なこと言つて」

「それは俺のことか？ 大魔人って、なんだそれは……」

「まあまあ良いじゃない。みんな怪我もなく一見落着な雰囲気なんだからな。なっ、ヨミ」

「ぷぷっ」

「「「え？」」「」」

「ふふふ、ぷぷ、あは、あははははっ」

「ヨミ、ヨミ？」

何故かヨミが大爆笑をはじめてしまった。なんでだ……。でも。

「まあ、いつか」

なんか丸くおさまった模様。よかったよかった。……ってあれ？何か忘れてる気がする。と思った時だ。ぴたりと笑い声がやん

だ。ヨミ？ と訝しげに口ウが声をかけるがそれには答えず、急にそわそわし出した。

「どうかしたのか？」

「……敵です」

掠れた言葉は完結な答えだった。走り出すヨミをすんでのところでシランが腕を掴むことで制止する。

「何が来たのか言え」

「は、離してください！ 行かなきゃ、今すぐに、急いで！」

「少しは落ち着け。俺たちだって戦える」

「だめっ！！！」

いきなりの大声に驚いたシランが思わず一步後ずさる。でも手は離しはしない。シランはぐっと気合いを入れると今度は前に二歩ずんずんと進んだ。ヨミが怯むが構いやしない。夜の色をした瞳をヨミの顔に近づけ、反らせないようにする。逃がさないようにする。

「なにが『だめ』なのか説明して、敵の場所を吐いてから行け。お前はいつまで独りで戦っているつもりだ？ いい加減キレるぞ」

「だ、って……私が異常でなければ皆死ななかった。もっと生きられた。でも私が生まれてしまったから、そうなってしまった。異常でなければ赦されなくなった。私が出来なければ良かったのに。でももう取り返しがつかないなら、戦うしかないじゃないですか。それが私の生まれた意味で、存在し続ける意義、なんですよ？」

「わかるように言え」

「だから！ 力を持った異常な兎は生まれちゃいけなかったんですよ！ 私は成功作で失敗作だったんですよ！ 私を見本に作られた兄弟は皆普通だから殺されてしまったんですよ！ じゃあ生き残ら

されてしまった強い兎はどう償えばいいと思いますか？ 戦うしかないんです。生きることを肯定するにはそれしかなかったんですよ！ わかったなら離してください、っよ！」

「……わかった。よつくわかった」

あ、怒った。とだけはわかったのでオレだけは身構えた。そして雷は落ちた。

「お前が賢そうな兎の皮被ったただの馬鹿力兎だつてことがなあああああ……！」

「ひいいつ」

ヨミが怒声に脅えたように首を縮めた。しかしシランは離さない。ロウですら啞然として何も言えなかった。

「事情があるのはわかってる。だがそんなもん余裕があるおやつ時間にでも回せ！ いいか？ さっきから言ってるだろ？ 俺が訊きたいのはな、昔話ではなく、今の話なんだよ、今近くにいてっていう敵の話だつて言ってるだろうがあ！」

「み、南の境界線付近ですっ！ 小型の変異種らしき足音や鳴き声が五十ほどですっ！」

「よしシン行くぞ」

「ほいほい。あ、ロウは留守番頼むぞ？ こつちにも来るかもしれないから」

「う、うんロウわかった……」

「おい、来るのか待つかはつきりしろ」

「は、はいい、行きます！ 行かせていただきます！」

結局シランが暴走モード入っちゃったな、と思いながらオレはシランを背負い、なんだかグラついているヨミを適当に持ち上げると、

朝霧の中走りだしたのだった。

025 強がりの結末【ヨミ】（前書き）

たった独りで戦っていた彼女には見えなかった真実。
容赦ないシランに手を引かれ、彼女はようやくそれを知るので
す。そんな第二十五話をどうぞ。

025 強がりの結末【ヨミ】

「うつわー、うじゃうじゃいな。シラン、離れないでくれよ?」

「わかつている。おいヨミ、お前は住人の避難だ、行け」

「イ、イエスサー!」

私は落ち着くために深呼吸を繰り返した。避難誘導です。いつもやっているようにやれば、大丈夫。

「ヨミ、本当に大丈夫か?」

「はいっ、大丈夫ですよ。お手数ですが、あの丸屋根のお家の前辺りにひょいと軽く投げてもらえますか?」

「えっと、ヨミを、ってことでいいんだな?」

「はい、お願いします」

「んー、んじゃ頑張つてな。ピンチの時はちゃんと大きな声で呼ぶんだぞ?」

心配そうにそれだけ言うとしん君は、いつてらっしやいと告げて要望通りひょいと私を投げた。その一拍前にシランさんの声が私にかかる。

「お前は馬鹿だがこんな奴らには負けないな?」

「はい! 行つて参ります!」

何だかシランさんのノリが妙だが、それに対する私の返事も釣られていることがちよつとおかしい。そして清々しい。私を縛つていたものがひらひらと舞つて行つてしまったみたいだ。だから私は身軽に動ける。上手く投げてもらえたので目的の場所に無事着地できた。早速近くにいた敵を薙ぎ払う。

それは小さな猿みたいな変異種だった。薄い紫の短い毛を全身に生やし、目が異様なほど引っ込んでいる代わりに垂れ下がるほど巨大な鼻が顔面のほとんどを占めていた。背丈は五十センチメートル程だが、酷い猫背でかなり小柄に見えた。指先は毛が少なく、今にも折れそうに思えるほど細く長い指が五本覗いている。それだけなら不気味なだけで怖くはなかったろうが、鼻に隠れるようにある口からはみ出した、まるでクワガタムシのような凶悪な牙があるため無視は出来ない。それに、猿を基にする変異種は大抵超のつく怪力を持つ。

「はあっ！」

鋭い呼気と共に蹴りを放つ。それで三体の猿が転がる余地もなく吹っ飛んだ。これで六体無力化済み。流石に猿も学習したようで、警戒したように私から距離をとり始める。私は威嚇するように強く睨み付けると、踵を返し、目的地にしていた丸屋根の家へと入った。

「怪我はありませんか！」

「ヨミちゃん……」

家の中、物陰に隠れるようにしていたのは馴染みの老夫婦だ。逃げる間もなく囲まれてしまったのだろう。私は安心させるように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。今回は私一人ではないので、直ぐに片がつきますから」

「もう自警隊の方が来て下さつとるのかい？」

私は今度は違う意味の笑みを浮かべた。きつとちよつと誇らしげで、和らいだものだ。

「いいえ。もつと心強い方たちで、私の」

その先に続く言葉は呑み込んでしまった。きつとあの調子のシラ
ンさんなら怒るくらい力強く肯定してくれるだろうし、シン君は笑
顔で、ロウ君は迷うことなく頷いてくれるだろう。それでも、勢い
だけで決めていいことではないと思ったので言葉の続きは愛想笑い
のようなもので誤魔化してしまった。

「さあ行きましょう。いつもの避難場所まで歩けますか？」

「走るくらい余裕よ余裕。なあばあさん」

「そうですよ。ヨミちゃんもあたしばかりに構っちゃられない
でしょうし」

元気な笑顔で頼もしげに言うと二人は力強く立ち上がった。バケ
モンと戦えなくとも自分には負けない。それが老人の矜恃というも
の、なんだそうだ。さすが伊達にこの世の中で長生きはしてないな
と感心する。

二人を阻む敵を蹴散らしながら進み、途中五軒ほど取り残された
人を呼び集めると、村の少し奥にある建物へと導いた。それは入り
口だけの小さな小屋だ。入ると直ぐに階段があつて、地下の避難用
に掘られた空間に続いている。

シン君とシランさんが引き付けてくれているおかげか、相手をす
る猿も大分少なかった。避難所に全員入ったことを確認すると、戸
を閉め、改めて耳を澄ます。この辺り、猿がいる辺りにはもう人間
はいないようだ。いるのは猿と戦う二人組と私だけ。幸い怪我人も
出ていないようだ。なら早く追っ払おう、と気合いを自分に入れた。

「ヨミお疲れー！」

「シン君」

しばらく黙々と戦っているとシン君達に出会した。シン君はニコニコと労いの言葉を私に投げ掛けながら敵を牽制し、シランさんを気にかけて、度々援護していた。なんてそつなく器用に戦闘をこなしているんだろうか、と思わず感心してしまった。対してシランさんは随分と落ち着いたのか、冷静な足捌きと丁寧な剣筋で一体一体を正確に捉えていた。しかし二人共、見事に峰打ち。凄すぎるでしょう、それは。それもまたそつなく、特に意識せずにやっているようだった。……殺さずに守る。理想を地で行く人なのは知っていたが、本当に筋金入りだな、と思った。でも、嫌いじゃない。甘くて優しいものが私は好きだから。

「お強いですね、お二方は」

「ヨミもこわいじゃん！」

「……はい？」

「おいシン、誉め言葉はもう少し選べ」

「はいいすみませんっ！」

「……い、いえ、お気に、なさらず」

ドスの利いた低いシランさんの声に、シン君が私みたいになっていた。てかあんなに冷静に戦っていたのに……まだ、あれなのかとあと『怖いじゃん』は『強いな』という意味なのでしょうか？

「ヨミ！」

「は、はい！　なんででしょうか！」

「図書館や別の地区は問題なしか？」

「え、えと……」

さっき調べた時は何にもなかったはずですけど……と思いながら再び耳を澄ませようとするが。

「あのさーヨミ。やるなら安全なところか、終わってからにしてくんないかなー」

「ええ？」

頭の後ろがヒヤツとしたかと思えば、ドサツという猿が落ちたような音がすぐ後ろでした。

「危なつかしくてさあ。二人分見るとちょっと安全保障できねえし」

「す、すみません！」

背後から襲い掛かった猿に気が付かなかった自分が恥ずかしくなつて、頬が赤くなつた。慌てて音を拾い易く安全な高所を探すがあり高い場所が手近にない。それに、大分敵の数が減っていた。なら、決着をつけてしまった方が……早い。

「手早く行きますよっ！」

深く息を吸うと止め、前屈みになる。だん、と足を踏み出すと勢いよく飛び出した。走るというよりは跳ぶ、翔ぶ感覚。敵の間を駆け抜けると同時に腕を手を足を腰を全身を、駆動させる。一体ずつ捉えるのではなく塊で捉えて、突く、裂く、吹き飛ばす。

「ひゅうつ」

息を使い切った頃には立っているのは私とシン君とシランさんだけだった。

「すっげえ！ ヨミすげえ！ズババババって！ うっひゃあー」

「ヨミ」

「っ、ふう……はい！」

今の動きで興奮したシン君が目をキラキラさせていたが、シランさんはあくまで冷静。淡々と私の名前を呼ぶ。息切れ中の私に間髪入れずの呼応は難しかったが、それでも早い方だった。なんせ普段なら全力出した後は半日以上、全身上手く力が入らなくなってしまうのだ。膝が笑って笑ってしょうがなくなる。でも不思議とまだ大丈夫だった。だから私はシランさんに応えられる。

私は改めて耳を澄ました。普段はしない音を拾え。異常を捉えろ。私はそのために在るから。

「っ！」

「あつたか？」

シランさんの声が急に遠くなったように感じた。

「う、そ……」

「図書館なんだな？」

シランさんの強い声が私を呼び戻す。反射的に「はい」と答えていた。シランさんは険しい顔をより険しくさせるとシン君に向き直った。

「行くぞ」

「図書館が襲われてるってことか！」

「考えるのは後だ。疲労状態の兎は来れるのか？」

「え？」

私だと理解できたのは『兎』だったからか。真っ直ぐに朝日すら

跳ね返す強情な黒が私を見ていた。待っていた。私はガクガクと意思に反して笑う膝を思いつき掴んだ。

行けるよね？ 行かなくて意味ないもの。私があそこを守らなきゃ誰が守るって言うの？ そうです、私が守るんです。そう、決めたんです！

「行きます！」

「シン！」

「わかったから怒鳴るなよー。オレの耳もそれなりに良いんだぞ？」

ちよつと不満そうにシン君はばやくと、私とシランさんを掴み上げ、走り出した。さっきまでずっと戦っていたはずなのに全く疲れた様子は見られない、軽快な足取りに本当に感服した。だってその上二人の人間まで抱えているのだ。ロウ君や私とも違うものだと思った。でもやっぱりただの人間でもなさそうだ。しかし尋ねるタイミングではないので、私は前を見た。

……と言うか、何故私はこんな緊急事態にそんなことを考えていたんだろう？ 図書館が危険に晒されていることがわかったのに、不思議なほど心が静かだ。二人がいるからか、ロウ君が残ってくれているという安心感からか。

「直ぐ着くからきつと大丈夫だよ、ヨミ」

「ロウは強い。いろいろな意味でな。ある意味シンよりずっと強い」

「そうそう。オレ、ロウほど戦うの好きになれないしなー」

「俺はおつむの話をしている」

「オムレツ？ いつから食べ物の話になったんだ？」

「……どう思う、ヨミ」

「あはははー」

空笑いしか出ませんってシランさん、と言いたかった。きっと知

らない言葉だったんだろう。そしてシランさん、酷い。

「あ、見えた見えた」

シン君が言ったかと思うとブレーキをかけ始めた。よく考えるとかなりのスピードだった。しかしまだそんなに見えていないのにブレーキをかけ始めるのは……安全運転？ いやいや、シン君は車じゃないですよ。

「あれは……」

「ってまだ随分距離ありますよ！ シランさんも見えるんですか？」

「俺は目が割りと良いが。お前は聴力に偏っているのか？」

「そう表現しても、差し支えないと思いますね……」

実際視界は一般よりも狭いことを自覚している。目のつき方は人間と同じなのだが、知覚できる範囲が限られているようだ。視力が弱いというのとも少し違う気がするが……視力も良くない。あまり遠くはぼやぼやになってしまう。だから当然今あるこの距離では口に見えやしないのだ。

「なあヨミ」

「なんですか？」

トーンが下がったシランさんを不思議に思いながら答えると、シランさんは神妙な顔をして言った。でもシランさんの真面目の顔って少し笑いそうになるな、という考えが一瞬過ったのは内緒なのです。

「お前は図書館を守る、守らなければ。そう繰り返し言っていたな？」

「え、ええ。だって泉さんの、あの図書館で館長をなさっていた泉さんの意志を守りたいから。大切な場所を守りたいと思うのは、普通のことです」

「そうだな」

「……何が言いたいのですか？」

含みのある相槌に、いぶかしげな問いを返して首を傾げてみせた。しかしシランさんはそれ以上は言わず、ただ前を見た。まるでこの先に答えがあると言うように。

「あー、わかった！ ヨミって一人で戦ってるみたいと言ってるから、ってあうっ」

「抜け駆け禁止」

「ひでえよシラン」

鬼だ。自分を運んでもらっているにも拘わらず躊躇なく相手の脇腹を突いたこの人は、シランさんは。とつい思ってしまったらシランさんに睨まれたので考えないことにした。でもせっかくのシン君のヒントも私には効果がなく、何が待っていると言うのか、とちよつと怖くなった。しかし走っているのはシン君で、運ばれているのが私なのだから抗うことは出来ず。

「ふふー、とうちゃーく！ スケッチいたすぞー！」

「それ言うなら助太刀だからなシン」

「それ、助太刀って言いたかったんですか？」

「……二人同時に別々の言い方で訂正しなくなっていていいじゃないかあ。二重でダメーシだよ」

到着早々深手を負ったシン君は、でも丁寧に私達を下ろした。シランさんは慣れた様子で素早く立ち上がると前方へ真っすぐに視線

を向けながら私に話しかけた。

「いつまでも独り善がりな馬鹿兎に訊くがな。他にいないのか？」

「何の、ことですか」

まだ足腰が笑ってる私はよろよろとゆっくり立ち上がりながら問い返す。顔はまだ上がり切っていない。でもシランさんが笑っていることだけは伝わってきていた。一体何があると言うのかと、全身と戦いながら起き上がり。

「お前に見えてない大切なものの話だ！ 同じ志を持つ、そう、お前の」

視界が開けた。

私は息を呑んだ。

「お前の同志と呼ぶべき者たちの話、だな」

「同、志……」

みんながいた。

図書館の常連のおじいちゃん。いっぱいお話してくれるおばちゃん。遊ぼうと言ってくれる女の子。他にもたくさん私の大好きな温かい人がそこにいた。晴太君も、いた。

みんな、戦っていた。

「どう、して……」

「まだわからないのか馬鹿兎？ 簡単だ。お前と同じなんだよ」

ホウキを振り回す女の子。木槌を叩き付ける青年。フライパンを構えたおばあちゃん。

みんな戦っている。何のために？

「ああ、ああ」

そうか、と今初めて知った。初めて、わかった。なんて私は馬鹿なんだろうと思った。

「優しいお前が好きなんだ。本を大事にするお前が好きなんだ。図書館を守るお前が好きだから……戦ってるんだ。お前と一緒にな」

「ああ！ みんな、ヨミ姉帰ってきちゃったよ！」

「良いんだって、いつかは知ることだったさ。それより、ヨミ、安心しろお！ 俺らがちゃんと守ったからなっ！」

「図書館、ケガしてないよ。大丈夫なんだよ」

「ほらもうちよつとやぞ！ もう一踏ん張りじゃ！」

「おおおおおおお！！！」

その呼びかけに応える声があちこちから上がり、空気を震わせた。夢みたいだと思った。嘘じゃないかと思った。だってこんなにたくさんの人が私なんかを助けてくれるわけない。きつと泉さんの人徳と、みんなの図書館が好きって気持ちがあるからなんだ。でも、嬉しいよ、泉さん。

「お帰り、三人ともっ」

「おつかれさんロウ。凄い人数だな、大丈夫か？」

ロウ君が私たちに気付いてやってきた。何故か図書館の屋根の向こうから。そしてひよいと屋根を飛び越えるとシン君の隣辺りに降りてきた。

「うんっ。みんな大勢で戦うの慣れてるみたいで上手くカバーし合

って戦ってくれてるから心配はあんまりなくて良いみたい」

「慣れ、てる？」

「そう。たまにこうやって敵襲があるとみんなで図書館を守ること
にしているんだって」

「えっ ？」

初耳だ、それ。だって今までそんなこと、なかったのに……。

「すまないね、隠すようなこととして」

急に謝られびっくりする。振り返ると手に鍬を持った元気なおじ
いちゃん、俊蔵としぞうさんがいた。

「ヨミちゃんが気付かなかっただけで、随分前からやっているんだ、
こういうことは」

「私が他に気を取られて、力使いきって疲れて倒れている間、いつ
もこうしていたんですか……？」

「そうだよ」

「どうして、どうして言ってくれなかったんですか！」

でもわかってる。私が守ることばかりに気を取られて、図書館を
忘れていたんだ。だから代わりに……守ってくれていたんだ。

「泉が死んでから、ヨミちゃんはもつと無理するようになったら
う？ 下手なことを言ったらもつと無茶して……ヨミちゃんまでい
なくなってしまうんじゃないかな、お節介ながら考えたのだよ」

「お前は周りが全く見えていない。わかっただろう？ これがお前
の現実なんだ、だからな」

ああ、もう、もう言わないで。優しく言わないで。諭すように言

わないで。わかってるから。わかったから。

「もう、独り善がり、しませんっ！」

だからだからだから。

「ありがとう、ありがとう！」

独りじゃなかった。私は独りじゃない。そのことがどんなに素敵で優しいものか。

「図書館を守りたいと思っていたのはお前だけじゃなかったようだな。淋しいか？」

「さびしいわけ、ないじゃないですかあ。シランさんは意地悪です」

溢れそうになるものを必死に拭うと前を見た。同志がいて仲間がいて、どうして泣いている暇があるというのか。

「もう一踏ん張り、頑張りましょう皆さん！」

「応！」

「ええ！」

「おー！」

一番怖かったことは泉さんがいなくなってしまったことだった。それから一番私にとって怖いことは図書館がなくなることになった。それしかないと思ってしまったから。でも違う。無意識ではわかってた。だから図書館よりもそっばかりに気を取られていたんだ。今の今まで。

私が守りたかったものは、怖がっていたものは、きっと。

「話があるんだ」

敵を追い払い、一段落したところでシランさんが私に提案したのは、お人好し過ぎるものだった。まるで近所の子供の初めてのおつかいを心配する、ちよつと心配性なお兄さんみたいだった。

「一人で行くよりは良いだろう。俺だけじゃない、シンもロウもいる。その意思が、直接向き合うだけの意志があるなら来い。一緒に行つて、一緒に聞いて、嫌なら一緒に文句言つて帰ればいい。それだけだ」

言いたいことは言い切つたらしく、満足げな顔を見るとシランさんはシン君ら呼び、宿へと帰ってしまった。私は急な話に棒立ちだと言つのに、無茶苦茶な人だ、と呆けた顔で思った。

「ヨミ姉？」

不安そうな呼び掛けにようやく我に返る。晴太君が声と似た表情になつて私を見上げていた。きつと今の話を聞いていたのだろう。他にもそれらしき人達が、困惑したような、心配するような視線を私に向けていた。

私はぼんやりした顔をいつもの笑顔に切り替えようとして、やめた。愛想笑ひも、強がりの嘘つきも、もう店じまいにしよう。

迷路は先が見えなくて怖いし、暗くて怖い。でも、誰かと一緒にらきつと大丈夫。

皆で選んで決めた道なら、たとえ一人でも胸を張つて歩ける。私

はまだまだ未熟なんだから、泣いて喚いてまた戻ってきたって、仕方ないと言って迎えてくれるよ。もう一度一緒に考えようって、言ってくれるよ。

それが甘えだとしても、ちょっとだけ。あと少しだけ。甘えて大人になりたいの。

身体は成長しなくとも、心は強くなりたい。独り善がりじゃない、本物の強さが欲しい。嘘を被らなくても、ちゃんと歩けるように。

「……すみません、内緒にしていたことがあるんです。その上、厚かましいことなのですが、その……相談に乗って、頂けますか？」

一緒に戦う仲間には、しなくてはいけないことだと思った。でも、本当は自分が決めることなんじゃないかと思った。

でも、違みたいだ。

私を見返す顔、顔、顔。それはどれも優しく、温かいもので。

私は目尻に浮かびそうになるものを必死に堪えると、心からの笑顔浮かべてこう応えた。

「ありがとう」

026 図書館の守護者【狼】（前書き）

たくさん悩んだ、いっぱい迷ったその先には、きっと幸いが待っている。

そう信じたいし、そうするために今日も考え抜こう。今と未来を。ヨミが笑って歩き出す第二十六話です。

「お前ら行かなくていいのか？」

「行けるわけねえだろうが！」

スバルさんがやけくそ気味に叫んだ。確かに余所者が入って行ける雰囲気ではなかった。皆の視線の先には多くの人を前に、頑張つて話すヨミがいた。ヨミはシラン達と一緒に行くことを選ぶのか否か。そんな大事な相談をしているところへ乱入なんて出来る訳がない。だからスバルさんの叫びももっともだったが、それをいつもの顔で聞き流すシラン。シランって案外、感心のない人には冷たいよな。もうちょつと優しくしようよ、と思う。まあシンがカバーするんだけど。

「よそもんが入って行ける感じじゃないもんなー。まあ明日返事聞けば良いんじゃないの？」

ニコニコとシンがそう言うと、スバルさんの表情も多少和らいだ。

「そうだな……まあ日暮れ頃にもう一度訪ねてみるか」

しかしそれをまぜっ返すのが彼らだ。

「そうですよね、押しがちょっと弱すぎるリーダーがあそこに入っていくのは厳しいですもんね」

「大人しく出直しましょうぜ、リーダー」

「だから何で君らはそう言う子供の言い訳に乗ってあげた大人みたいな対応なわけ！？俺リーダー！君らも言ってるようにリーダーなんだぞ一応！」

「一応がつくところがリーダーらしいですね」

「うああああ」

「……お前ら、ほどほどにしとけよ」

さすがのシランも憐れむような顔で二人に注意した。でもその返事が元気良すぎる「はい」だったのが引つ掛かるなあ。シランも同じことを思ったようだが、結局面倒臭そうに眉を曲げると。

「帰るぞ、宿に」

とだけぼりと言うと返事も待たずにすたすた歩き出してしまった。シンが待ってよ、と追い掛ける。ロウもそれに続くが、その前にスバル達を一度振り返った。

「心配しなくてもなるようになるから大丈夫だぞ」

「どつという意味ですか？」

シズカさんが不思議そうに問い返したが、ロウは誤魔化すようににつこりと笑むと背を向け、シラン達の後ろ姿を追い掛けたのだった。

「んんんーっ」

と伸びをする。それから全身をほぐすように身震いをする、ぱつちり目を開いた。

「朝、だぞ」

「ふぉーはな」

「んん？」

寝惚け気味な第一声に入った妙な相槌に目を向けると、シンがパンをくわえた状態でこっちを見ていた。どうやら朝食の真っ最中のようで。シンはゆっくりとパンを咀嚼すると、改めて口を開いた。

「わりい。おはよロウ。良い朝だな、雲も薄くて明るい朝だ」

抜けるような笑顔のシン。どうやらさっきの発言は肯定の意味だった模様。次いで違和感を感じ、室内をキョロキョロと見渡した。案の定。

「シランは？」

「ちよっと前に出てった。今はヨミんとこ。朝飯いる？」
「いるー」

しかしシランと離れている割りに冷静だな、と思った。見知らぬ土地でバラバラになるのは嫌がりそうだと思ってたんだけどな。ヨミがいるからかな。

「じゃあこれ残り食べて良いから。オレはシラン追い掛けるよ。口ウも終わったら図書館に来なよ」

「そうする。ありがと、シン」
「うん」

どこか上の空な返事。引き留めちゃ悪いかないと思いつつも、ついそんなシンに尋ねていた。

「どうしてシランは一人でヨミのところに行っちゃったんだ？」

すると上着の袖に手をかけたところのシンがきょとした顔で止まった。それから眉を困ったように曲げる。

「なんでって……謝るためだろ？」

「謝る……？」

シランがヨミに？ どうして？ と首を傾げていると漸く合点がいったようで「ああ」と勝手に納得した顔で頷き始めるシン。中途半端だった上着をさっと羽織ると口ウに向き直った。

「ほらシラン、暴走モード入っちゃったじゃん？」

「暴走って……それっていつも以上に遠慮がなくなってる感じだったあの昨日のシラン？」

「そうそ、それ」

と軽く相槌を打ちながらシンはベッドの上に腰を落ち着かせた。因みに口ウは全く動いておらず、未だにシンの腰掛けたベッドの隣のベッドの上に座ったままだ。会話は成立するけどまだちょっと寝惚け気味。

「あれになると暴言だらけっつか、しかなくなるんだよね。普段面倒だったり、一応遠慮して言わないようなことをズバズバ言っちゃうんだ」

「で、後々冷静になると反省しちゃう？」

「そうそう」

案外普段がアレでも遠慮するところは遠慮してるらしいんだ、とニシシと笑いながら言うシン。ちょっと意外だなと思った。だってシ

ランだ。あんまり後悔とか遠慮とかしないと思っていた、シランとは縁遠いものだとかばかり思っていたが。

「シランも人の子だったんだなあ」

「ロウ……お前はシランのことなんだと思ってんだよ？」

呆れたように言われてしまったのでアハハと誤魔化すように笑った。ちよつと納得行かない顔をしていたシンだったが、話は一段落ついたと見て。

「んじゃ先行つてるぞ」

と腰を上げた。止める理由もなかったので、食べ終わったらロウも行くな、と軽く手を振って応えた。

ぱたん、と軽くドアの閉まる音を聴くと改めて自分の格好を見て、一人呟いた。

「着替えよ」

まだ寝間着代わりのシャツのままだった。くしゃくしゃだ。

しかしふとベッドを降りる前に、シンが残してくれたという朝食が気になり、上から覗き込むようにベッドとドアの間のスペースに置かれたテーブルを見やると。

「……大、きいね」

なんか握りこぶし程の厚さのパンが二個、皿に乗っていた。いや、パンの厚さ自体は頑張っても親指程しかない。問題なのは。

「ジャム……やシロップ漬け？」

淡い、少し透き通る感じの黄色の果物が挟まっていた。それがでかい、ゴロゴロしてる。そのせいで凄いインパクトのある朝食となっていた。隣に置かれた水入りのコップが酷く小さく見える。

近付いてみるとちよつと光沢があるのがはつきりとわかった。これは……なんだろう。素材まるごと感がびしびしするのだけど。なんの果物だろう。桃、いや杏とか？

暫しのにらめっこ。

サンドイッチの大半以上を具が占める朝食。しかし……。

「美味しそう」

キヨロキヨロと辺りを見渡す。うん、誰もいない。はしたなくても気にする人はいない。

し、仕方がないよね、こんなに大きなサンドイッチなんだもの。だからロウは丁寧に手を合わせ。

「いただきます」

と一人、厳かに言うサンドイッチを持ち上げ、大きく大きく口を開けると。

ぱくり、と食べた。

普段だったら視線が恥ずかしいポーズだけど誰も見てないもの。

あ、あの鹿とか、狩りに関しては別だからな。あれはしょうがない。これはまた別……だけど、良いよな、かぶり付くしかないじゃないか。

と一人言い訳を内心ぶつぶつ言いながら二口目のために再び大きく大きく口を開けて。

扉から覗く一対の黒瞳と目が合っただけで閉じた。

一度、目を閉じてみる。ちよつと待って。あれ、多分あの人だよ

ね。目、合っちゃったよね。見られたよね。上機嫌で大口開けてる間抜け面見られたよ。完全に油断してたぞ。本気で視覚以外の確認、忘れてた。いやでもあの人気配なさすぎでしょ。忍者ですか？ トバさんですか？ あ、トバさんは隣の第五守衛地区の副地区長さんなんだぞ、ってうわ、口ウ混乱してるな。

「どうぞ」

「あ、いいんですか？」

「……手遅れだし」

「では遠慮なく」

宣言通り、全く気負った風もなくあの人、シズカさんが部屋に入ってきた。それがデフォルトなのか、いつものほんのり笑顔な人だ。こういう気まずい時に笑顔を見ると笑われている気がする。まあ、多分被害妄想だけけれど。

「で、何の用か？」

「紫蘭さんに続いてシンさんも出掛けたようなので、残った口ウさんに状況をお尋ねしてみようかなと思ってまして」

「つまり返事を訊きたいから催促、ってわけかな？」

「お好きなように解釈して頂いて結構ですよ」

食えない笑顔に渋い顔になる口ウ。ため息を吐きつつ、投げやり気味に答えた。

「帰って来たらどんな結果であれ出発。それは変わらないぞ。口ウも今から行く。シズカさん達はここから動かないで待つのが吉だぞ」

言うだけ言うと残りの朝食を口に、というか胃に放り込むと立ち上がった。掛けていた上着を手に取ると、さっと羽織る。そんな一

連の動作を静かに目で追ってから、シズカさんは何気なく言葉を投げ掛けた。

「冷たいですね、ロウさんは」

「あなたは得体が知れないから苦手なの。スバルさんみたいなお人好しとは違うみたいだから……」

「よく見てますね。でも私がリーダーを裏切ることはありませんよ。私は自負する程に嘘つきではありませんが、リーダーを裏切る形になることはないですよ」

その『裏切る』というのはきつとスバルさんには嘘をつかない、ではないだろう。多分、スバルさんの本心に反することはしない、嫌われたくないってことでもあるのかな。でも、そこは信じられる。

「本当にスバルさんが好きなんだね」

「その言葉は紫蘭さんに置き換えてロウさんにお返ししますよ」

では邪魔者のようなので失礼させて頂きます、と嘘臭く笑ったシズカさんはさつさと部屋を出て行った。本当に気配を良く消す人だなあ、とちよつと呆れながら音もなく閉じたドアをぼんやりと見ていた。動作が不自然なまでに自然だから気付きにくいのだ。

「困る人だなあ」

対応に。といった感じ。何だかスバルさんとは違う目的みたいなものを持っているような印象で。

「あ、一つご忠告を。お出掛け前に自分の格好をきちんと見ることをお勧め致します」

ガチャ、と扉が閉まる音を呆けた顔で聞いた。自分の姿を見返す。ほんとだ、朝食を優先して着替えてなかった。その上にコートを着てしまっていた。

「あー」

羞恥に思考が持っていられる。
しばらく悶絶してた。

やっと復活してロウは部屋を出た。宿からとつと出てヨミの図書館へ行くのだ。さっきのはあまり深く考えないことにする。
外の空気を胸一杯に吸い込む。朝の空気は澄みきり、くもり空でさえ輝いているような気にさせる。

「よし復活」

自分に言い聞かせるように言うのと走り出した。あまり人はいないので遠慮なく走れる。本当にあつという間に図書館に着いた。ノブに手をかけるが、中から漏れ出した話し声が耳に入り、一時停止だ。

「よろしくね、シン」

「ありがとう！ よろしくな！」

凄い、和やかな雰囲気。ヨミの声が前者、後者がシンだ。ヨミがシンを呼び捨てにしている……。さすがシンと思うが、なんだか入って行きづらく思った。仲間外れにされたようで、ついふて腐れた

気持ちになる。二人だけ仲良くなるなんてずるい。ロウはまだ「ロウ君」なのに。

しかも続いて照れたヨミの声がしてきて口が自然とへの字になった。

「こちらこそ……ありがとう」

しかしそれをぶち壊すような馴染みの不機嫌声が割り込んだ。

「おい」

シランだ。気に食わないといった顔、になつていそうな声だった。思わず苦笑してしまうが、同時にこっそり感謝した。

おかげで入りやすくなったから。

「一人だけ除け者にされてふて腐れてるのかなシラン？　ロウを置いてくから悪いんだぞっ」

扉を開けると意気揚々と言い放った。ヨミとシンは既に気付いていたので普通に挨拶。シランだけは驚いた顔でロウを迎えた。

「いつから居たんだ？」

「ついさっき来たの。シランありがとうー」

「何を感謝されているんだ？」

「それは秘密っ。おはようヨミ、シラン。良い天気だな」

ニコニコと微笑んで相槌をうつヨミに対して、曇り空な不機嫌顔のシラン。さっきのロウの台詞が嫌だったのかな、と思う。しかし切り替えたのか、そんなことより、という風にヨミに向き直るとシランは口を開いた。

「支度は？」

「あ、はい、出来てますよ。決めたあと直ぐに荷造りしましたから」
「あ、やっぱり行くことになったんだな」

さして意外そうでない表情でロウが言うと、ヨミは力強く口の端を上げて応えた。

「ええ。後悔しないためにも」

「あはは、前向きなんだか後ろ向きなんだか、わからなくなる発言だっ」

「前向きだよきつと！」

「しかし『したくない』のために行動しようと思うのは果たして前向きなのか？」

「シラン難しいこと言わないでよおー」

シンが頭を抱えて、シランは仏頂面で放置、それをロウは笑顔で見守る。するとヨミはニコーと微笑みながら。

「やっぱり変な人達ですね！」

と言った。ロウ達はなんとも言えない顔で、きつと三者三様な表情でヨミを見ていた。ヨミはそれがおかしかったようだととうとう吹き出して笑い出してしまった。もうきよんとするしかなかった。しばらくしてヨミが落ち着くとようやく会話が再開される。

「それで、挨拶は済んだのか？」

「はい。昨日決めて、ちゃんと挨拶回りも荷造りも済ませてありますよ。今すぐ出発で大丈夫です」

さすがヨミ。準備は万端の様子。シランは頷くとロウとシンを見た。お前らもいいな？ という確認だろう。ロウは頷き返し、シンは目が合う前から笑顔で肯定を表していた。

「ならとりあえず宿へ行くのか。昴さん達も待っているだろうし」「はい。今荷物を持ってくるので、表で待っていて貰えますか？」

と言われたのでぞろぞろと素直に図書館を出るロウ達。ちょっと気になっていたのでシランを見た。シランはなんだ、と不機嫌そうに眉を上げた。

「シランは納得したのかな、と思って」

「俺がヨミの決定にどうのこうの言う権利はないし、そもそも立場でない」

「それでもシランは納得しなきゃあんなあつさりとは話を進めないでしょ？」

シランはロウを睨むような目付きで見ていたが、やがてふっと力を抜くと答えてくれた。

「お前も聞いただろう。あれが答えだ。あいつはもう逃げない」

「……そっか。なら大丈夫だね」

ちょっとほつとした。昨日最後に見た表情がかなりの困惑顔だったから。それにまるで図書館の何かに縛られているような印象を受けていたから、気になっていたのだ。きつと思いつくとか、そんなもの。ロウには求めても見えない鎖をヨミは持っていた。でも振り切れたようだ。

「なあに言っただよ。ヨミは強いんだぞー？ そんな心配しなく

たって大丈夫だよ」

「どこから来ているんだその自信は」

「勘だ！」

シランは呆れた顔でシンを見たが、頭を振ると気を取り直したように言った。

「ヨミはまだか」

「スルーしなくてもお」

「明らかな話題転換は残酷だね」

「お待たせしました！」

不意にヨミの元気な声が響いた。一斉に三人の視線がヨミに向く。荷物は意外とコンパクトで、小振りのリュックサック一つ背負っているだけだった。

ただ。

「……ヨミ、太った？」

「ええ！」

流石のシランも口ウもつつこめなかった。だって、ねえ。

「凄いて膨れしてるね」

「変異種の兎のあごしたみたいだな」

「え、と……肉垂にくすいって言いたいですよね？」

困惑気味に問い返すヨミに二人揃って頷いた。『肉垂』という言葉は知らないが、ようはあの兎のやたらモコモコした胸毛というか、顎下の毛のことだね。シンはシランに同感なのかしきりに頷いている。

ヨミは何枚重ね着したらそうなるのかと解説を求めたくなるほど一番上に着たコートはパンパンだった。あんなに細かったヨミが数分の間に肥えた豚みたくなってしまうている。横幅は三倍近いのではないか。しかもご丁寧にフードまで重ねているようで、とりあえず三枚ほど判別可能だ。つまり最低三枚は上着を着ていることになる。

「どうしたんだヨミ、そんなにまるっこくなっちゃって」

「変ですか？ 外は寒いじゃないですか。太陽は気紛れにしか私たちを暖めてはくれないんですよ？」

「限度、つてもものがあるだろう」

「シランさんまで……」

ちよつとショックだったようで、項垂れてしまった。しかしこつちとしても衝撃を隠しきれない。思わず三人、顔を見合わせる。最初に動いたのはやっぱりシンだった。

「ごめんて。ちよつとびっくりしただけ。まるっこくなったヨミもかわいいよ？」

「シン、それあんまりフォローなんてないぞ」

「え、ダメ？」

「もういいです、いいですから行きましようよう……」

折れたのはヨミの方だった。ちよつと涙目なヨミだった。

「あのー……頭、上げて頂けますか？」

「他に感謝の意を表す方法を知らん私を赦してくれ」

「いや、あの……シランさん」

「俺は助けないからな」

面倒臭いという感情を微塵も隠さないシランは、不機嫌そうに言い捨てた。ヨミは困り顔で前、というか足下を見た。ロウも一緒に見る。

そこには凄い綺麗な土下座をする人がいた。てかスバルさんだ。頭が床にめり込みそうなほど深々と頭を下げていた。このまま一週間生活させて頂きますとか言い出しそうな勢い。流石にないと思うけど。対するヨミは完全に困惑顔で、何だか慌てていた。

「あ、あの、そこまでする程の者ではないでしょう？ 私は。だからもう十分です、どうか顔を上げてください」

「いえ！ 今回の無茶な願いを聞き入れて頂いたことはもうこんなことじゃあ足りません！ おいお前ら！ もっと気合い入れて感謝しろ！」

「オッス！」

「はい！」

「うああ、シン君ロウ君助けてください、どうか三人を止めてくださいよお」

しかもシズカさんとマルタさんまで土下座モードなのだから無理もない。またちよつと泣きそうなくらい困り果てているヨミだった。しかし三人は感謝の意を表したいだけで悪気は一切ない。

どっちの味方をしてもしなくても申し訳ない気分になれそうだ。これは傍観が楽だよなー、と思いながら横目にシンとシランの様子を窺おうとすると、案外のほほんとしたいつもの顔のシンがいた。

「でもよー、多分気が済むまでやって貰わないと度々こんなことに

なるんじゃないの？」

あっさりとなんことを言ってしまうシン。せっかくなので便乗しちゃえ。長引いた方が面倒だという判断したロウも畳み掛けるように言葉をつむいだ。

「不可能と思われてた結果だからね、喜びもひとしおなんだよきつと。良かったね、スバルさん。ってことで多分もう気持ちは伝わってるから顔上げようよ、ね？」

しかし何故か事態は全く改善されず、ヨミの困惑度が上がっただけだった。

結局そんなこんなで十分後。ヨミが懇切丁寧にお願いして、というか逆拝み倒しをしてなんとか全員が通常スタイル、つまりは二足歩行に戻り、ようやく普通の光景が戻ってきた。ヨミの安堵は半端なかったようで、疲れた笑顔も晴れやかだった。

「じゃあ明日出発で」

「リーダーリーダー！ ちょっと待ってください、紫蘭さんの約束は……」

意気揚々と翌日出立、と宣言しようとしたスバルさんに、シズカさんがストップをかける。すると瞬く間にスバルさんが蒼白した。何か思い出した様子。

「そうだった、三日目の今日までという約束だったな……」

ズンと沈んだ顔になるスバルさん。しかし非常に軽い調子でそれを打ち砕のはくシランだ。

「もうヨミの支度も終わっている。ヨミが良いのなら今日出発しようかと思うが」

「そ、そうなのか!」

スバルさん復活。期待の眼差しを向けるスバルさんに、ヨミも思わず苦笑しつつ、柔らかな物腰で応じた。

「はい、準備は出来ていますよ。昨日ロウ君に、翌日には出発するつもりだから、行くと決めたら出来るだけその日の内に荷をまとめとくように、と教えて頂いたので」

すると何故かシランに視線が集まった。その意味はきっと「ロウに頼んだのはシラン?」みたいなものだと思う。しかしシランは視線を誰一人として合わせず、不機嫌な表情をより深めていた。まあそうだよな、それはロウの勝手な判断で、シランはすっかり忘れていたんだから。

しかし皆が困惑顔な中 若干名不機嫌顔な人がいるが、一人だけ別の行動を取った人がいた。シンだ。

「えらいなあロウは」

そう言つて優しく頭を撫でてくれた。どうやらシンには全部お見通しな模様。それを皮切りに、シランが素直に頭を下げた。

「……確かに、言うのを忘れていた……すまん」

「あ、いえ大丈夫ですよ」

「ロウのフォローのおかげでな」

シンのとどめの言葉にぐったりしたシラン。たまにシンって容赦ないよな。しかし流石シン。フォローまでそつなくこなす。

「まあでも、明日出発じゃなくて明後日出発にしたのは一応行くことになったヨミがゆっくりやることをやれるようにみたいな理由なんだろうけどな」

「お心遣いありがとうございます、皆さん」

「……中途半端ですまない」

意外と堪えたようでぐったりしたままのシランがヨミに謝罪する。ヨミは苦笑していた。

「さてと。なら話は早い。出発で大丈夫ですか？」

異存のある人はいないようだった。

「ヨミちゃん」

「ヨミ姉！」

「ヨミっ」

「……はい？」

宿を出ると老若男女、様々な人が待ち構えていた。ざっと二十はいくだろう。ヨミは目を丸くして棒立ちになってしまったが、そこは関係ないらしく、彼ら彼女らはそろそろとヨミの周りにやってくる。なのでロウ達は空気を読んで場所を空けた。

どうも見送りのようだ。もう済ませたと言っていたヨミも不意打ちだったらしく、言葉もなくおろおろしていた。嬉しそうに困っていた。

「あつたかくていいとこだな、ここ」

シンがそんな様子を見て、顔を綻ばせて言う言葉に、ロウとシランは素直に頷いた。ヨミの人徳と住人の人柄なんだろうなと思う。

「でもちよつと心配性かもね」

「まっただな」

シランの呆れた声が相槌を打つ。それもやはりどこか優しげで、苦笑といった感じだった。

「うーん、でもオレだったらそんなに心配なら意地でも行かせないけどな」

「知ってる」

「うん知ってるぞ」

「な、なんで！」

衝撃を受けた顔をシンはするけど、だって、ねえ？ 出発当日の説得は最終的に脅しだったし。本気でシンだったら閉じ込めてでも行かせないだろう。

「むー、これがウワサの読心術というやつかあ」

「違うからな」

完全に呆れた声でシランが言うと、シンは首を傾げて悩み始めてしまった。そんな深く悩むことじゃないと言っべきか。

「ちよいとお前さんら」

「ん？」

不意に何故か胸板をトントンと叩かれた。つまり相手は真正面にいるのだ。それはさっきまでヨミの傍で話していたおばあさんだった。背筋はピンと張っているがやたらと背が低く、口ウとあまり変わらない。でも変わらないならそんなところ叩かなくてもと思うが……誰にも気にされず話が始まる。

「ヨミちゃんに行くのはお前さんらでっしゃろ？」

「うん、そうだよ」

シンが頷く。おばあさんはそれにつこりと笑うと、手提げかばんからごそごそと何かを取り出した。それは綺麗に織られた布を縫い合わせた、四角いシルエツトのもの。上の部分は白い紐で閉じられていた。手のひらにすっぽり収まる程度の大きさの、小さな平べったい袋。

「御守り、か」

「おまもり？」

シンが首を傾げて口ウを見るが、残念だが首を横に振ってみせることしか出来ない。

「なぜ鹿威^{ししおど}しがわかって御守りがわからない……」

シランから変な視線が。そんなのたまたま「御守り」というものに今まで遭遇しなかったただけだぞ？

「で、おまもり、ってなんだ？」

「まあ読んで字の如く、守って欲しいという願いが込められたものだ。神社や寺なんかで神の加護があるようにと売られていたが、

今ではほとんどないようだ。でもたまに第八特区でも出回っているぞ」

「ふへー。神さまなのか」

「ごめんなさいねえ。これはおばあちゃんお手製だから神様の加護なんて大層なもんはないんねえ」

苦笑すると目尻に年月を感じさせる皺ができた。優しげな、くしやつとした笑顔だ。

「でも神頼みなんかじゃない想いが込められている。俺はその方が効き目がありそうだと思うがな」

「ほう兄さん、かつこええ顔して良いこと言うようになりますなあ」
「……………」

シランが不機嫌な顔になる。まあ照れ隠しなのだが。おばあさんもそれがわかってるのでニコニコとしたままだ。

「では貰っていただけますかねえ？」

その言葉に驚くのはロウ達だ。目を見張り、耳を疑う。

「…………ヨミに、渡してやってください」

「いんやいんや、ヨミちゃんには渡しましたとも。あんたさんらにも持っていて欲しいと思いましてな。生憎、これ一つしかないだけどねえ」

三人の真ん中にしわくちな手がやってくる。シランが何か言おうとしたが、シンとロウが息もぴったり左右に分かれ、道を開けたのでそれも止まる。

「……何のつもりだ？」

「シランが持ってくれば皆一緒に守ってもらえそうだからだぞっ」
「何故にそうなる」

ぼやくように言うが、シンの輝く瞳と目が合ってしまった、ため息混じりにシランはおばあさんの前へ出ると、深々と丁寧に頭を下げた。

「……有り難く、いただきます」

「そんな堅くすることじゃあないですよ。婆の我が儘、受け取ってくれてありがとうね」

しわくちやの顔をより一層くしゃくしゃにすると、お婆さんはあちらの集団に戻って行った。

遠くからわかるヨミの綻んだ顔が微笑ましい。こんなにも想われているヨミが眩しく見えた。

「ヨミと旅するの、楽しみだな」

「うん。それに頑張らなくちゃな。あの人たちの想いの分まで」
「あまり気負うなよ」

少し心配そうなシランの声。多分慣れた人しかわからないものだけど。シンはそんなシランに、ニシシシ、と笑った。

「シランこそ心配性だよ」

シランは口元までへの字にさせて、とても不服そうだったが、駆け寄ってきたヨミを見て口をつぐんだ。

「すみません、お待たせしました！」

「もういいのか？ もつとゆつくりしてても良いんだぞ？」

「いえ、あんまり居ると行きにくくなってしまいますから……行きましょう」

切なさを噛み締めるような笑みだった。ロウは静かに頷き、シンは笑顔で肯定した。シランはキュツと御守りを大事そうに握り締めると、腰のポーチに滑り込ませてからヨミに向き直った。

「ああ、行こう。このたくさんの想いを背に、な」
「はい」

はにかむようにヨミは笑った。それはとても晴れやかで、幸せそうだった。

そして出立の最後の最後。さっきのお婆さんがヨミに歩み寄ると、ゆつくりと言葉をつむいだ。

「いっぱい迷いなさいな。迷わなきゃ見つからんもんもあるんですよ。決め付けちゃいけないよ。大切なものは少ないようで多い上になあ、本当に大事なもんは分かりにくい場所にあるものなのよ」

お婆さんはヨミの手を握って、真っ直ぐな眼差しを向けて、願うように言った。

「そうしてお前さんの『本当』を見つけんしゃい。それは真実でなく、揺らがんもんでないかもしれん。でも必ず最後に辿り着く答えは、きつとヨミちゃんにとっての真実なんよ」

「……はいっ。ありがとっ。……行つてきます」
「気を付けてえな」

そうして背を向けたヨミは、涙ぐんでいた。ちょっと恥ずかしそ

うにロウの視線に笑い返すと、ヨミは真っ直ぐにロウ達の横を通り、ずんずんと前へ歩き出した。

ほんの少し出掛けるだけ、で終われば良い。抜けるような笑顔で、ヨミが「ただいま」と言えれば良い。そして彼らが安心して「おかえり」と迎えられるなら、それはハッピーエンドだ。

ロウはそれを、ただただ願うよ……。

「ヨミの笑顔はオレが代わりに守るっ！」

びつくりした。ヨミも驚いて足を止め、思わず振り返っていた。呆れたように笑むシランの隣。村の方を向いて仁王立ちしたシンがいた。

「だから笑顔で『行つてらっしゃい』って言つてあげてくれ。それがヨミの強さだからな！」

背中しか見えなくてもわかる。超笑顔なシンがいることが。だからロウはアハ、と破顔した。シンが居ればどんな不安だつて一瞬で吹き飛んでしまう。その隣にシランまでいたら百人力だ。ロウも心置きなく笑っていられる。

そうして一人で戦っていた、怖がりの癖に強がりな図書館の守護者は、第十六特区を旅立った。世界中の人を起こしても足りず、地面の下死者までびつくりして飛び起きてしまふんじゃないかって言うほどの、特大の『行つてらっしゃい』を背にして。

「行つてきます！」

共に旅する仲間と肩を並べて。

027 ユメミヨミという名前【狼】（前書き）

二章最後の話はほのぼので行きます。

大体26話の3〜4時間後の道中の話です。

ちよっぴり騒がしい彼らの旅を口ウ視点で見る第二十七話をどうぞ。

027 ヌメミヨミという名前【狼】

「ヨミ……観念して背負われろ」

「あ、歩けます！」

と言った傍から何もないところで躓くヨミ。真っ白な髪が浮き上がり、本体に引っ張られて急降下する。それをシンが受け止めた。

「足が生まれたばかりのヤギみたいだな」

「うっ、すみません」

シンとしたヨミはよろよろとシンから離れようとするが、シンが手を離さないので軽く礫状態に。

「あ、あの、もう大丈夫です」

「大丈夫くないよ。さっきから何回転んでると思ってるんだ？」

「十一回目です」

「胸張って言うなよお」

シンすら呆れるヨミの強情に、シランだけでなくスバルさん達も心配そうに見ている。しかし頑として自分で歩くと言い張るヨミ。だけどシンも結構頑固だ。シランに似て。

「とにかくヨミはもうお休み。昨日頑張ったから疲れちゃったんだよ、な？」

「シン君離してくださいっ」

「やーだよー」

朝焼け色がいたずらっ子の目になっていた。シンはひょいっとヨ

ミを持ち上げた。まるで小さな子に『高い高い』でもするように。それから器用にヨミを背中に戻すと、がっちりと上着の裾を握った。着膨れしてまるっこくなったヨミは普通には背負えないサイズだ。でもそれだけでちゃんと固定されたようですり落ちる気配はない。ヨミがもう全身の血を集めたくらい顔を真っ赤っかにしている以外は問題はなさそうだ。

「シン君！」

「寝てていいんだぞ？　ヨミってこんなに着ても軽いんだな。シラ
ンとどっこいどっこいだ」

「どういう意味だ？」

「もつと食えってこと！　女の人より男の方が重いもんなんだろ？
着膨れしたヨミよりシランが軽いつて大丈夫か？」

シランはそんなシンの言葉に眉を寄せ、いつもの不機嫌顔で答えた。

「服の分を抜いて考えろ」

しかしシンはあっけらかんこう答えた。

「だってそうするとヨミの体重がバレちゃ……あ」

「つまり私はシランさんより重いと言うことですね、服を抜いても
シランさん細いですし……気にしてません」

「ご、ごめん」

ちょっと地味にダメージを負ったのか、ヨミがシンの背中にぐつたりともたれかかった。シンは慌ててフォローしているが、何だか墓穴を掘っているようにしか聞こえない。シンは自分のペースからはみ出ると弱いなあ、とちょっと思う。でもヨミが精神的に弱った

ので身体的には休めるだろう……どっちの方が良かったかは、まあ、問わないことにする。

と、ゆったりしたところで。

「そう言えばヨミって名前、漢字はなんて書くの？」

ふと思い付いた問いを口にする、何故かシランとヨミが顔を見合わせた。次いでシランとシンが見合わせると、シンはちょっと申し訳なさそうにはに cand。

そんな何かの確認作業を終えたシランは、ロウに向き直ると言った。

「ロウは、知らなかったか」

「……知らないのロウだけなんだな、そんなんだなシラン」

落ち込むロウ。まさかこんなところで仲間外れにされているとは。酷いや、酷いや。

「す、すみません、たまたまロウ君がいない時に話してしまっ……じゃあ、今お話しますね」

「いいよ別に、ロウは仲間外れだもん、いいもん、ふて腐れてなんかないんだぞー」

やけっぱちになって意味なく土を蹴り上げる。ヨミが困ってあわあわしている、と言ってもシンの背中の上でただけだ。そしてその傍らでこんな会話が聴こえてきた。

「大体なんでお前は知っているんだ？」

「だってたまたま話してる時に図書館に着いちゃって、入りにくかったからつい外からきいちゃったんだよ。ほら言っただろ？ 土下

座のと、むぐっ」

「言うな」

「ぷは。手遅れだろー」

確かに手遅れだ。バツチリ聴こえるし。そうか、ヨミに土下座しに行つてたのか、朝っぱらから。いろいろな意味で傍迷惑な。

シンの口を手で塞ぐという無駄な抵抗をしていたシランは小さく肩を落とした。

「もういい」

こうしてご機嫌斜めが二人になった。因みにヨミはもうさっきの体重の話は頭から吹き飛んだようで、とにかく慌てて、ひたすら謝りモードだ。そして一人無傷なシンは途方に暮れたように空を見て、唸つて、それから申し訳なさそうに言った。

「悪かったって。あー、二人共、今度好きなもの作るからさ、なあ？」

「カレーだな？」

「カレーだぞ！」

「へ？ あ、うん」

ロウとシランは息もぴつたりと言った。そんな二人にきょとんとしたシンだったが、コクンと快諾してくれた。それを見ると少し機嫌も上向きになってくる。

「肉いっぱいのだぞ！ 野菜も溶けそうなくらい煮込んで、ホクホクのご飯にこんもりかけて、はう、最低でも大盛り五杯は行きたいなあ」

「そうなると炊き出し用の鍋が必要だな。俺の分がなくなる。具は

指定しても良いよなシン？」

「……現金だなあ、シランもロウも」

シンは呆れているが微笑ましそうな笑みを浮かべていた。密かにほつとするヨミもいる。ニコニコとシランの注文を受けるシン。ロウも何だか今から楽しみになってしまった。

「早く食べたいな」

「そんなに美味しいんですか？ シン君のカレー」

ヨミが不思議そうに妙に浮き足立っている珍しいシランを見て訊いた。同じく浮き足立ってるロウが満面の笑みで答える。

「カレーだけじゃなくて何でもおいしいぞ、シンの料理。たまに失敗するらしいけど、ロウはまだ当たったことないんだぞ」

「凄いですねシン君は。私もシン君のお料理食べてみたいです」

ヨミが羨望の眼差しをシンに向けていると、注文を受け終わったシンがにっこりと笑って言った。

「なら今度シランんちに来なよ。ごちそう、してもいいよなシラン？」

「ああ、問題ない」

「ありがとうございます。……で、どちらにお住まいですか？」

「あ……」

「……………」

「ロウ達はお互いに知らないことばっかだなー。因みにロウ達は第八特区の第六守衛地区に住んでるぞ。鍛冶師の家はどこかって訊けば直ぐわかる」

何だか気まずそうに顔を見合わせたシンとシランの隣で説明をするロウ。ヨミはそんな二人の様子に困った顔をしていた。

「あの、知り合ったばかりですし、あんまり気にしないでいいと思いますよ。段々とわかっていけば良いことですし」

場を取り成すヨミの言葉。しかしシンは納得が行かなかったようです。

「そーはいかん！　ちゃんと、せめて好きなものくらいはわかってないと！」

「親睦を深める必要があるだろう」

とシランまで真顔でそんなことを言う。今度顔を見合わせたのはロウとヨミだった。

「それにスバル達とも！　なんか空気悪いし、もっと仲良くしようぜ」

「え、俺ら？」

とシンからスバルら三人衆にまで飛び火。確かに一緒に行動しているが、移動中はスバルらが前に、ロウ達が後ろにという二グループに分かれて歩く形になっている。

しかし立場的にあまり仲良く出来る雰囲気でもないけどなあ。案の定だけどシランがムスツとした顔になると言いにくいことをはつきり、むしろ堂々と言った。

「それは必要ないだろう」

「それはそれで傷付くな……」

「リーダーは繊細なんです、あまりストレートにそういうこと言う

のやめて貰えないツスカ？」

「そうですね！ リーダーには見えないけど『割れ物注意』の文字があるんです、リーダーの心はガラス製なんですよ！」

「……お前らのせいでバラバラのぐちゃぐちゃだよ」

今度はスバルさんが落ち込んでしまった。仕舞いには地面にの字を書きだす始末。いつの間にか皆の足が止まっていた。

結局平和的な話し合いの結果、スバル達は遠慮して、シラン、シン、ロウ、ヨミでの親睦会となった。そういうことで漸く進行を再開する。

「じゃあ言い出しっぺのオレからな。えっと好きな物は温かい人と掃除とか洗濯、あとシランのつくった刀だな」

「で、苦手なのは水だよなっ」

「別に、ちよつとくらいなら大丈夫なんだから？ ちよつと人より……怖がりなだけだぞ？」

結構気にしていたのか、シンは頬を膨らまして不満げに付け足した。そんなシンがおかしくてヨミが思わずクスクスと笑うと、更にムスーとした顔になってしまった。

しかしそんなのお構い無しなシランが口を開くと、途端にそれが大分緩和される。やっぱり分かりやすいな、シンってば。

「俺は甘いものとシンのカレー、あとはまあ、刀が好きだな。読書もだ」

「あとお菓子作りはー？」

とシンが問うと、少し羞恥心があるのか、眉をひそめ、視線を下の方に向けたシランがぼそぼそと答える。

「趣味、だな。金がかかるからあまりやらないが……」

「趣味で刀造るよりは断然安いって」

苦笑されて不機嫌そうな黒い瞳でシンを見るシラン。そして刀造りも趣味で良いのかシン？ そんな二人に何だかいろいろと驚いたのか、目を丸くして固まるヨミがいた。

「刀を造るんですか？」

「鍛冶師だからな。本当は刀鍛冶を名乗りたいところだが……俺が新政府だかに誘われている理由がそれだ」

「そう、だったんですか。でも多分欲しいのは金属を扱う腕なんでしょうね、刀造りではなく」

「だから余計に嫌なんだ。俺は刀を造りたいというのに……皆が刀を使うなら、俺が好きなかだけ造っても誰も文句を言わないだろうにな。刀の良さをわかってない奴らばかりだ」

シランはなんだか子供のような文句を斜め下に吐き捨てるように言った。そんなシランに呆氣に取られるヨミ。大笑いするシン。口ウまでにやけて言った。

「無限に材料はないよシラン。それに鉄を刀ばかりに使ったら、大事な防護壁とか家がつくれなくなっちゃうぞ」

しかしそれにびっくりな回答が返ってきた。シランは至って真剣な顔で口を動かす。

「そもそも中央区の建物も木造にすればいいんだ。そして使わなくなった鉄やらを俺に回してくれば何も問題なく俺はずっと刀を

」

「あははは、シラン刀鍛冶スイッチ入ったなー」

「笑い事じゃないぞ！ シラン何気なく凄いこと、てか怖いこと言い出したー！」

今なおぶつぶつと呪詛のような言葉を呟いてるシラン、怖い！
しかもいつも以上に無表情で妙な気迫まであるし。

「わわわ、ストップシラン！ そうだ、次はロウの番だよな、な？
ねえシラン、いいか？」

「 の柱をシンに頼んで引っこ抜、あ？ ああ、それも、そうか。
長くなって悪かった、ロウ」

「あは、は、いいんだ、止めてくれるなら、な……」

最後に聞こえた台詞が不吉過ぎる。シラン、その『柱』は中央区の大事な建造物のどれかから、じゃないよな？ そこにシンの名前が出てくると洒落にならないんだぞ。とちよつと戦々恐々していたが、ヨミもシランの半ば独り言のような恐ろしい言葉が途切れたのでほっとしたような顔でロウを促した。

「じゃあ今度はロウ君のお話を聞かせてください」

それでようやくロウも落ち着けたので笑顔で応えた。

「任せるんだぞつ。えつとな、ロウは住民名簿では観月ロウって言うんだぞ。シランからちよつと借りたの」

そんなことを意気揚々と言い放つと、ヨミは驚いたというように口を手を当てた。

「そつなんですか？」

「そつなんだぞ。名前しか覚えてなかったからなつ。まあ、名字が

あつたかもわからないけど」

「名前は、あつたんですね」

意外そうに相槌を打つヨミに首を傾げる。何だか引つ掛かる、妙な言い方だ。

「どうかしたか？」

「……ロウ君の自己紹介を中断させてしまつのですが、私の名前の話を先にしてもいいですか？」

きつと今ロウが気になっているヨミの違和感の理由を話してくれるんだろう。さっきはあまのじやくになってしまったが、ずっと気になっていた。だからロウは頷くとヨミを促した。

ありがとうございます、と言って話し始めるヨミは、小さくはにかんだ。傷痕を隠すように。でもあまり怯えの色は見えなかった。

「私は生まれた時、製造番号で呼ばれていました。でも私は人間と兎の子、まあ合成獣キメラと言った方が分かりやすいでしょうか？ その中でもイレギュラーだったので、特別な名前を与えられていたんですが……嫌いだったんです、私はそれが」

「だから別の名前をつくつたのか？」

するとヨミは照れたようにちよつと俯いて頬に手を添えた。

「泉さんがですね、番号で名乗った私に言つたんです。『そんなものは名前じゃない』って」

「泉さんってだれ？」

シンが遠慮なく質問を口にして首を傾げた。そんなシンにも笑顔でヨミは答える。

「あの図書館の館長さんです。夢見泉さんゆめみいずみと言いまして、私を拾ってくださった、無愛想だけどとても優しい方です。お年を召した方だったので、数年前に亡くなってしまいましたが、今も変わらず私の大切な人なんです」

「そつか……居なくなるのはきつとすごい寂しいことだけど、今ヨミが笑えてるのは、その人のおかげなんだな！」

「はい」

ふんわりと、本当に幸せそうに微笑むヨミに、シンの頬も緩んだ。

「そんな泉さんの言葉に背を押され、考えたんです。名字は泉さんの素敵な『夢見』を頂きましたが、下の名前は自分で決めるよう言われました」

「ヨミって名前にしたのは本を読むのが好きだったからだよね？」

「ええ。逆に言うとなんか私にはそれしかありませんでしたから。でも、当時の私はとても心が弱い私で、名前に酷い意味をつけました。自傷に何の意味もないのはわかっていたはずなのに」

「それでも、置いてきた兄弟への罪悪感から逃げるにはそれしかなかったんだ」

「……そう、私は逃げてばかりです。……て、私、ちゃんとその辺りのこと説明しましたっけ？ 研究所から脱走したとか」

急に我に返ったヨミがきょとした顔でロウを見る。やば、と思わず口を手をやりそうになり、でも何とか意思の力で押し伏せると平静を装った。

「……ほら、昨日ヨミ達が図書館飛び出す前にヨミとシラン、言い争ってたでしょ？ その時だぞ。ちよっとだったけどそれで何となくは事情わかったぞ」

「あんな錯乱した支離滅裂な言葉でよくわかりましたねえ……そう、私は独りで研究所を脱走しました。賛同してくれる方が、逃げられると信じる方が、誰一人いなかったから……」

肩を落とし、俯き、滝のように流れ落ちてくる罪悪感を背で受け止めるような覚悟を持った背中だった。しかしシンがヨミを背負い直すように揺らしたのでちょっとその悲壮感も薄れた。ヨミはびっくりしたのかシンの頭を凝視して、シンはヨミに見えないけど背中を通して伝えるかのようにシシ、と歯を見せて笑った。

「ヨミは頑張ったよ。希望を捨てず、独りでも頑張ったんだ。独りで出来ることは少ないよ。それでもヨミは勝ったんだ、研究所から逃げ切ったんだ。ならスゴいじゃん」

「……ふふ、そうですね。ありがとうございます」

ヨミは本当に嬉しそうに言った。シンの背中に顔を埋めて、微かに見える口端も笑みの形にして。ちょっとシンの言葉に報われたかなと思う。ヨミの背負うものは重すぎる。しかもそれにヨミの想いまで乗るから、ヨミ自身の重さで潰れてしまうんじゃないかと思った。

でも、きっとヨミは大丈夫だ。独りじゃなければ大丈夫。シンの言う通りだ、ヨミは強い。

「……それにお前の言葉を信じなかった馬鹿な奴らが悪い。何を罪悪に感じる必要がある」

空気が凍りついた気がした。シラン、相変わらず凄いことさうつと言っなあ。しかしヨミは笑った。シランのふて腐れたみたいな言い方がおかしかったのもあるだろう。

「でもね、勇気と無謀で分けるなら、私の選択は圧倒的に無謀寄りだったんですよ。馬鹿なのは私だったんです。でも奇跡が私を救ってくれたからここでもうして、お喋り出来るんです」

顔を上げたヨミは、そんな時間を、事実をいとおしむように目を細めた。夕焼け色の瞳は温かな思いを湛えるようで、とても優しい色をしていた。

「で結局名前の話から脱線してるな？」

「あ、そうでした、ごめんなさいロウ君」

「ううん。ヨミのこと、いっぱい聞けて嬉しかったから良いよ」

本当にそう思う。ロウが満足げに微笑むと、ヨミもほっとしたように笑んだ。

「では脱線しないように単刀直入に言いますと、私の名前は黄色い泉と書くんです」

困ったようなはにかみ笑いを浮かべ、眉尻を落としてヨミは言った。対してロウは呆けた顔をした。漢字だけは知らなかった。きつと『読』とかそういう単純な名前ではないことは何となく察していたけど……『黄泉』。

「死者の国、かあ」

「ええ。最初は自分への戒めでした。たくさん兄弟が生み出されて、殺される中、私だけが幸福だなんて許せなかった。でも助けに戻ることも出来ない臆病者な私は……自分を苦しめて許された気になりました」

唇を噛み、切なそうに目を伏せてヨミは言った。

「それでも生きたいと思えたのは泉さんが居てくれたからで、恩人を悲しませるようなことはしたくないと考える内に少しずつ私の考えは変わりました」

ゆつくりと目線を上げたヨミは、ロウを真っ直ぐに見詰めてから。

「生きてるだけじゃ何も償えない。だからと言って全てを忘れたり、常に自分を責めて生きるのは間違っています。だから、新しい意味を自分の名前に与えました」

シランに微笑んだ。シランは仏頂面の口元をほんの少し笑みの形にして頷く。それに勇気を貰ったヨミは、胸を張って言い放った。

「死を忘れず、過去を恐れず、日々強く、力一杯に生き続ける。彼らに胸を張って向き合うために、私はそうして行きたいんです。戒めの意味合いはまだありますが、でも、もう自傷のための名前じゃないんです。それにたまたまですが泉さんからも一字貰った形になってしまいましたからね。大事な大事な、私の名前であり、泉さんの形見なんです」

「とっても良い名前だな、ヨミ」

「ありがとうございます、ロウ君。シランさんもそう言ってくれて…… やっと自信を持って名乗れるようになれそうです」

ほんわかとした空気。しかしシランはどうも空気が読めない気があるようで、いつもの不機嫌な顔で淡々と言った。

「それで。この話を先にした理由は『何故ロウは名前を持っている

のか』か？」

「あはい！　そうなんです。特異ケースなら別に命名される場合もあります。大抵の研究所では番号で管理しているはずなんですよね。ロウ君の体にはナンバーは入っていないんですか？」

「なんばー？」

「数字だ。しかし……傷が多少あるだけでそんなものはなかったが」

シランがそう答えると、ヨミは考え込んでしまった。そんなに妙なことなのかと思う。

「……もしかしたら火傷の痕にあったのかもしれないが」

「火傷？　ロウ怪我してんのか？」

急にシンが心配そうにロウを見てくるが、ロウは静かに首を左右に振った。

「ただの傷痕だぞ。ほら」

とシャツの袖をまくって見せる。右の肘から手首辺りまで、少し赤く爛れたような痕があった。しかしそれは微かなもので、とうにほとんど治っている。それを見たシンも安心したようで、良かったーと呟いていた。

「……もしかしたら上から傷が出来て治癒したから消えてしまったのかもしれないね」

「因みにナンバーがあると何がわかるんだ？」

「出身の研究所が大体わかったはず。その研究所のデータがあれば番号で誰が卵子提供者だとかがわかります。でもはっきり言って、どの研究所でも不用意に近付くのは危険です……でも記憶の手掛かりにはなったかもしれない」

その言葉に、シランは齒噛みした。でもロウはわからない。思い出したいのか、そうでないのか。

シンとシランと住む理由の一つに記憶を取り戻すことは一応ある。でも微かに残る記憶の残さは、思い出しても酷く辛く苦しく悲しく、ただ虚しいだけだと伝える。

そして大切な人を守れなかったと。それだけは痛い程魂に刻まれている。それが誰なのか全く思い出せないというのに。

どうして忘れてしまったのだろう。逃げたかったのか。でも実際逃げたい。見え隠れする過去は恐怖を助長するだけ。

「ロウ、大丈夫か？」

「……え？」

いつの間にか足が止まっていたらしい。心配そうにシンがロウの顔を覗き込んでいた。ロウは慌てて魂が抜けたような顔から笑顔に切り替える。

「ごめんなさい。ちょっと考え事してた」

「顔色悪いって。ロウも運ぼうか？」

「ヨミを背負った上にどうやってロウを運ぶつもりだ？」

「……抱っこ？」

呆れたシランが責めるような視線を送ると、シンは誤魔化すように笑ってロウの頭をポンポンと撫でた。

「大丈夫か？」

本当は大丈夫と即答したかった。でもさっきの考えが、不安がなかなか離れなかった。

そのせいで返事が遅れてしまったから、今から大丈夫と言っても明らかな嘘になってしまふ。どうしようかと困ったようにシンを見上げると、朝焼け色と並んで夕焼け色の瞳とぶつかった。そしてそこにはいたずらっ子のような誘いがあつて。

ロウはそんなヨミに乗っかつて開き直すことにした。

「ロウあんまり大丈夫じゃないんだぞお、シン」

「ええっ！　じゃあどうすれば大丈夫になる？　何かオレに出来ることあるか？」

すると待つてましたとばかりにロウは両手をシンに伸ばして、満面の笑顔でこう答えた。

「抱っこ」

隣でシランがずっこけた。シンは呆氣に取られていたが、直ぐにくしゃつと笑った。

「いーよ、甘えん坊さん」

軽々とシンに持ち上げられ、抱き抱えられるとヨミと顔が近かった。目が合うと二人揃つてえへへ、とにやける。

「シランもやる？」

「誰がやるか！」

真つ赤になったシランが面白くて、皆でいっぱい笑いましたとさ。

028 君に捧ぐ詩を【紫蘭】（前書き）

その笑顔のために。

共に在るために。

ただそれだけを願った兔の詩。

第三章に突入です。シラン語りの第二十八話をどうぞ。

028 君に捧ぐ詩を【紫蘭】

森を抜けて現れたのは、簡素な二メートル程の柵だ。検問所と思われる小さな建物が柵の間に小ぢんまりと置かれていた。その向こうには大小様々な木造の建物が建ち並んでいるが、勝手口が見えるだけで人影はなかった。

「ここ外縁部、なのか？」

「いや、ここが入り口だろうから、第八特区で言う防護壁だろうな」

第八特区は五つの区域に分かれているが、特に守衛区を外縁部、中央区や農業区のある内側を内縁部と呼ぶ。それを区切る明確な境界線が防護壁という巨大な壁で、最終防衛ラインだとされている。言うておくと、この柵なんて目じゃない。十メートル以上あるような壁だ。だからシンが外縁部と特区外の境界にある柵とを勘違いするの莫名其妙でもない。

「……あのお、第八特区と比べないでくれます？ あそこに勝てるところがそうあると思うか？」

「思わないな」と俺。

「確かにあんまりうちんとこみたいなのはないなあ」とシン。

「後ろに同じー」とシンの後ろにいたロウは簡単な賛同をただけだった。

ヨミは行ったことがないのでわからないらしく、眉を落として小さく首を傾げるに留めた。昴さんは俺たちの返答に頭が痛いとかばかりにため息を吐く。

「あそこはもう頭がおかしいんじゃないかって程の理想主義の現実

主義者が創った都市だからな。しかもそれが未だに設立者の意志の下に運営が成り立っているっていう事実が本当に化物染みてるよ、あんたらの初代はよ」

「素晴らしいと同時に現実的な説得力を持つ理想だったからこそ、今でも皆努力し、理想を掲げ続けているだけだ。頭はおかしくないし、初代は化物ではない」

そう言って俺は容赦なく昴さんを睨み付けた。引きつった顔で謝罪をする昴さんに、こそこそと後ろで囁く部下二人。うざったかったのでついでにそちらも睨むと丸太さんは困ったように頭を下げ、閑歌さんはニコニコと手を振ってきた。

「シズ力って神経図太いな。怒ったシランに手を振るなんてさ」

「そういう人みたいだからなあ。怖いもの知らずとは逆な感じだぞっ」

隣とその後ろまでこそそこそと内緒話だ。思わず顔をしかめると、まるでそれが見えているかのようなタイミングで後ろを歩くヨミがクスクスと笑い出す。

「シランさんは怖くなんかないですよ？　ちょっと表情が固いだけです」

「悪かったな、仏頂面で」

「怒ってますか？　シランさんの素敵なチャームポイントじゃないですか、不器用さが滲み出ているその顔も」

それもまた答え難く、俺は眉を潜めた。チャームポイントってなんだ、チャームポイントとは。

「……笑うな、シン」

「だって、だってよ、チャームっ、あははは、くふふっ」

しかも何故かシンが笑い出す。わかっているさ、そもそも俺に『チャーム』となる点がない。笑われても否定出来やしない。ふん、とふて腐れたようにそっぽを向く俺。それが余計おかしかったのか、ヨミは笑いを堪えきれていなかった。

「ふふふ、シン君シン君。誤解がないように言っておきますとね、『チャーム』とは魅力という意味なんです。別に可愛いところだけに対して言うものでもない、思うのですよ」

「え、そうなのか？ ヨミは物知りだなー。でもシランの魅力……ぷっ」

「笑うなと何度言えば良いんだ」

シンとヨミにうんざりした俺はもう前だけを見ることにした。しかし真っ先に目に入っただのは昴さんのすぐるような視線。

「……まだ、気にしていたのか？ 怒らせたことを」

「え？ あ、いややや、あはは、んな訳ねえですよ、俺はこれでも年長者だからな、そんなお客だからってそんな反応窺ってびくびく行動するなんて、そんな訳ありませんよー」

「酷く目が泳いでいる上に、発言もかなり乱れているが？」

昴さんの挙動不審ぶりに半眼になる俺だったが、その隣で。

「リーダーったらあんなにおどしちゃって可愛いですー」

と変な嗜好を持った女性が至福の笑みを浮かべていたので、何だかどうでも良くなりため息を吐き捨てると前進を提案したのだった。

「はあ！？　ちょっと待ってくれよ、そんな話は聞いていない！」

昴さんが怒りに任せてダン、と机を叩く。しかしどうも思ったより痛かったようで、手をブンブンと振っていた。相変わらず何となく締まらない人だ。

そんな昴さんと対峙するのは、丸太さんとサイズ以外はお揃いな若草色の制服を着ている細身の若い男だ。胸には『片桐』と書かれた名札がぶら下がっていた。

男、片桐さんは困ったように眉尻を落とすと、落ち着いた調子で昴さんを諭すように言った。

「しかし部隊長には次の仕事があるので至急そちらへ行くようにとの指令書が」

「ボスは鬼かあ……」

新日本政府自治区。その境界の柵に挟まるようにしてあった詰所に来ていた。ここで手続きをすれば直ぐに本拠地に着くらしいが、何やら揉めている模様。苛々と机を鬱陶しく叩く昴さんを俺達は後ろの方から黙って見ていた。

「じゃあ丸太、紫蘭殿らを」

「えーとですね、補佐を残すようにとのお達しが……ありまして」「あーもー、閑歌！　絶対紫蘭殿とヨミさんに不利になるようなことはするなさせるな！　いいな、頼んだぞ！」

今にも地団駄を踏みだしてしまいそうな昴さんの叫びに、どこ吹

く風な閑歌さんのはのんびりと「では今度甘蜜堂のババロア奢ってくださいね？」なんてことを言って微笑んでいた。昴さんは信用していいか不安に思ったようで、しばらく視線を上の方に彷徨わせていたが、やがて諦念混じりに嘆息した。

「わかったよ。おい丸太行くぞ。……すみません、ここまで連れてきた責任は俺が持たなきゃいけなかったのに……」

昴さんが申し訳なさそう振り返って頭を下げた。それにいち早く反応したのはシンだった。

「だいじょーぶっ、シランにはオレがついてるからな！ それにシランは別にスバルが来てくれって言ったから来たんじゃないくて、自分の意志で行ってみたいと思えたから来たんだから、そんなに責任感じなくていいと思うよ」

それは「昴さんは全く関係ない」と言っているわけで「無関係なのに責任感してるの？」のようにも取れて……とにかく無邪気に結構グサリと来ることを言っているな、シンは。昴さんも同じことを思ったのか、胸を押さえていた。シンには理解不能な行動だったように首を傾げている。

続けてロウがぴょんと跳ねるように昴さんの前へ進み出た。ロウだって察しているだろうからフォローの言葉だろう、とそれを横目で追った。

ロウは太陽の笑顔を見せると口を開く。

「大丈夫だぞっ。他に仕事があるなら仕方ないし、スバルさん達を頼るつもりは全然ないから安心していいぞ！」

……ただの追い討ちだった。

昴さんはもう何も言わず、哀愁漂う丸まった背中を向けて出て行ってしまった。丸太さんは引きつった愛想笑いを顔面に張り付けて会釈だけすると昴さんを追い掛けていった。

凍り付く部屋の空気。理由が今一わかっていないのが二名。わかっていて尚呑気な笑みを浮かべているのが一名。俺は片桐さんと目を合わせ、渴いた笑い声を溢すのだった。

検問所を出た先にあつたのは市場だった。大人四人程度なら悠々と寝転べそうな幅の広い道を挟み、様々な店が並んでいる。天幕を張って店を開いている者がいれば、ただ風呂敷を広げただけのような店まであった。

「ここが南市通りです。入口の方は主に露店、奥は自治区に住む方々の住居兼店舗となっているものが多いですね」

誰に頼まれたでもなく勝手に閑歌さんが解説を口にする。

しかし口ウはあまり興味なさそうに、それどころか縮こまるようにして俺の後ろを歩いていった。俺を守ると息巻いていたシンですらちよつと不安そうに忙しなく視線を動かす。人が多いせいだろう。しかもここは特区と違い知り合いが全くいない。挟み撃ちされてると思っていそうだ。

斜め後ろへ目を向けてみると、これまた違った反応のヨミがいた。やっぱり忙しなくキョロキョロとしているのだが、その赤目は輝き、時たま足が止まり食い入るように陳列物を凝視していた。

俺はそんな姿に目をしばたかせる。

「何か気になるものがあるのか？」

何気ない問い掛けだった。しかし予想に反した食い付きの良さを見せたヨミは、獲物を見付けた肉食獣のような勢いで俺に迫る。

「はいはいはい！」

「な、なんだ？」

パタパタと振られる尻尾を幻視する程嬉しそうに顔を綻ばせると、ヨミはあちこちを指差し始めた。

「あれとこれとあちらにありました丸い物とそちらと、あ、あとあと、あの良い匂いがするものと！」

「待てヨミ、そんなに言われても俺は把握しかねる」

「ふはっ！ す、すみません、つい興奮してしまいましたっ。反省です」

我に返ったヨミが途端に真っ赤になる。頬に手をあて、あたふたあたふた。

「お気に召した物がありましたか？ 少し戻りましょうか、買ったいものがありましたら言うてくだされば立ち止まりますよ」

話を聞いていた閑歌さんが微笑と共に問うと、ヨミは慌てて手を振る。両手を突き出してぶんぶんと。

「い、いえ、買うお金もないので見るだけです。お気になさらず……」

恥ずかしそうに、口ウ達のようにヨミまで縮こまってしまっ。俺

は顎に手をやると黙考。遠慮の塊になっても気になるものは気になつてしまつよう、そわそわと目を行ったり来たりさせているヨミが視界の隅に映り、迷うのはやめることにした。

「ヨミ、程々の値段のものなら買つてやる。それに様々なものに興味を持つのは悪いことではないんだから、そう恐縮するな」
「ほほほ本当ですか！」

耳のように跳ねた癖毛を揺らし、グツと拳を握り締めたヨミが瞳に再び輝きを宿して俺に詰め寄つた。どうして良いかわからず顔を背けると、思わず不機嫌そうな声が飛び出す。

「嘘は言わん」

しかしテンションが急上昇中のヨミにとっては些細なことだったのか、満面の笑みを顔に広げると雪のような肌を赤く染め、「ありがとうございます！」と叫びながら俺の手を掴んだ。今にも一緒に踊りましようとか言い出しそうな舞い上がりぶりだったが、流石に分別はあつたようで俺の手を三度程力強く振るとパツと放し、一人で万歳をしていた。怪しい。

「ヨミのことだし遠慮するかと思つたけど、杞憂だつたね」

とロウが囁くように言つた。まるでヨミが断つたらどう説得するかを考えていたかのような物言いだ。

「それは俺がこう提案すると予測していたということか？」

俺が眉を潜めて問うと、ロウは「さてどうでしょう」と誤魔化すように言つて小さく笑つた。納得が行かなかつたが、隣を歩くシン

が。

「やっぱりシランは優しいな」

にへらと笑って何だか嬉しそうに言い出したので更に眉間に力が入る。どうしてこいつらはそういうことに繋げるのか。

俺が嘆息していると、肩をつつかれた。さつきから俺は何度振り返っているんだと思いつつも素直に後ろを見ると、ヨミがもうぐにやぐにやな浮かれ顔をして立っていた。

「あのですね、さつき通り過ぎたものが……欲しいんです」

「わかった。わかったからその顔、何とか出来ないのか？」

「うーん、さつきから直そうとしているんですが無理みたいです。暫くは我慢してくださいシランさん」

締めりのない笑顔のヨミ。完璧なアホ面だ。でも図書館で初めて会った時よりも全然いい顔をしている。生き生きとした、今を楽しんでいる表情。そのためなら金は勿体無いと思わないし、まあ、アホ面でも良いだろう。

「少し待っていてくれないか？ 直ぐに戻る」

三人は快諾し、俺はヨミを伴って来た道に戻ることにした。

「にしても人が多いな」

「ですね。政府自治区という扱いになっている街も割と多いようですし、安定した、信頼性のある場所なので人が集まりやすいんでしょうね」

「そうなのか」

「そうですね」

へにやつとした笑顔で応えるヨミには悪いが、ロウやシンに次ぐ人混みを苦手とする人間なのでつい不機嫌そうになってしまふ。早く済まそうと早足になると、急にぐいっとヨミに腕を引かれる。

「シランさん通り過ぎてしまいます。これなんですこれっ」
「ああ悪い。これ……これか」

ヨミが指をぴんと伸ばして示したのはぬいぐるみだった。カラフルな……いやもう毒々しいの域に入っている、やたら色の種類の多い人形だ。ゾウ、だろっか。大き過ぎる耳が体の大半を覆ってしまい、耳の合間から覗く黒い目が正直怖い。しかも継ぎ接ぎだらけで歪だ。だからグラデーションがおかしなバランスになって毒々しく感じるのだろっ。

しかしヨミが元氣よくこう評した。

「虹色で可愛いウサギです！」
「ウサギ、か……」

しかも可愛いと……駄目だ、わからない。ヨミの可愛いと判断する根拠がまずわからない。怪物と呼んでも間違いないならなそうだというのに。

「……他は」
「はい？」
「他にまと 欲しいものは、ないのか？」
「ありますけど……どうしてですか？」

他にまともなものはないのか、と訊くのは流石にまずいだろっなとは思った。……しかし本人が満足ならこのぬいぐるみで良いので

は……しかし。

そんな堂々巡りをしている傍ら、ヨミは首を傾け何やら思案する素振り。そして。

「そうですね、わざわざシランさんにお金を出して貰うんですもんね。わかりました。実的なものにします！」

と宣言するとまた俺の腕を取り、ぐいぐいと引っ張った。抵抗する理由も、抵抗する余地もなかったので大人しく連行されていく。少しまだごちゃごちゃした思いはあったが。

次に連れて行かれたのは馬車を店代わりにしたところだった。積み降ろしの口に物を並べ、その脇に初老の店主が座布団を敷いて座り込んでいた。置かれた商品は大体が小さな箱の形をしていたが、たまに人形や剥き出しの機械も並んでいる。

「オルゴール、か？」

「ですよねですよ！　はあ、実物初めて見ました」

うつとりと、細かな細工がされた木箱やオルゴール本体を眺めるヨミ。実的なかと疑問に思うが、夢中なヨミに無粋な言葉は言えず沈黙する。

座布団の上でうとうととしていた無用心な店主が目を開いた。白くなつた眉を重たげに押し上げると、オルゴールに夢中なヨミに目をやり、立っているだけの俺を見る。

「なんだい、何台か欲しいんかい？」

「……一台、だが」

「ケツ、ツツコミも出来んただの馬鹿正直木偶の坊かいな。ヘドが出るわ」

何故かボロクソ言われた。店主は本気で侮蔑の目をしているようだった。確かに詰まらない返答だったが、何故初対面の相手から笑いを求められなきゃならない。何か言い返そうと口を開く前にヨミがぴこんと跳ねるように立ち上がった。

その時ちようど俺の真後ろでも足音が止まった。そして誰かがひよいと顔を覗かせてヨミと同時に喋り出す。

「喧嘩は良くないのです!」

「喧嘩はあかんで」

前後から挟まれた俺は呆気に取られた。誰だヨミと微妙にデュエツトしたのは?

「あらら、余計なお世話だったっばいね。すまんー」

全く謝罪する気のない謝罪の言葉を口にしながら背後の人物が並び立つ。

シンより背が低く、俺よりは悠々高い。茶色のふんわりとした髪を後ろで長い一本の三編みにしている女だ。細くつり上がった狐目の奥は悪戯好きそうな光が隠す気もなく灯っているのが見えた。

枯れ葉色のコートの下に、薄桃色のセーターが覗く。頭にはアルファベットが模されたキャップ。何だかちぐはぐな、妙な人だと思った。年は多分俺より少し上程度だろう。

「何や揉めとる雰囲気やと思ったけどちやうんか?」

「こんなワラジムシ兄ちゃんと揉めるわけねえやろ。嬢ちゃん頭大丈夫かいな」

「あつははは、ワラジムシなー、お客さんにそりやないわ爺ちゃん。そんなんだから物が良くて売れないんだよー」

「あほ抜かせ。客の見る目がないだけや。嬢ちゃんの余計なお世話

はいらんちゅうてるやろ」

腕を組み、尊大な態度で三編み女を鼻で笑う店主。だが女は一切気にしていないようで今もケラケラ笑っていた。そんな二人を見ているだけの俺の横。

「ヨミ、笑い上戸なのか？」

「だってシランさんがワラジム　っぷ」

「……はあ」

ヨミにまで笑われると流石に無視出来なくなってくる『ワラジムシ』発言。深々とため息を吐き出していたらいきなり背中をバシバシと叩かれた。

「まあまあ、そう落ち込まんといてえな兄ちゃん。爺ちゃんの粹なジョークや、笑っとけ笑っとけ。本気にしたら負けやで？」

「……痛いのだが」

「あはは、悪い悪い。そうやな、兄ちゃん細っこいもんな。力加減間違えてもった。すまへんな」

もう俺は完全に沈黙した。細っこい……まあ自覚している。しかし割とスレンダーな女性にまで言われるとショックが大きいのだが。しかしやはり三編み女は頓着しない。今度はヨミに顔を向けた。

「そや、何か欲しかったんやないの？　どないなオルゴール探してんや？　ここ店長は性格悪いけど、腕はええし種類はあるで」

「性格は余計や」

ぼそりと抗議の声が上がったが、女は聞いちゃいなかった。耳が良いはずのヨミまで華麗にスルーすると、頬を赤らめ、手をバタバ

タさせてぎこちなく口を開く。

「あ、あのですね、これが欲しいというのは……実はないのです。でも本で見て実物見てみたいな、聴いてみたいなって、憧れていたんです！」

えへへ、と照れ臭そうに笑うヨミ。かわええなあ、と何故かでれでれしている三編み女。もしや危ないやつなのか、と一応警戒する。

「そうやな、小さいのが良いかねえ。大きいのは嵩張るし、馬鹿みたいな値段やから」

「あ、因みに小さいものはいくらなんですか？」

すると三編み女はにたり、と怪しげな笑みを浮かべるとおどけたように。

「ありや聞く？ 聞いちゃう？」

「訊いてはいけないことだったのですか？」

「いんや、訊いても大丈夫やで。ただ買えなくなっちゃうかもなあ。それは嫌やろ？」

「やです、けど……」

「なら黙つとくが吉やで。な、兄ちゃん？」

「……………そうか」

何となく読めた。相当高いのだろう、オルゴールというものは。

ヨミが冷や水を浴びたように我に返って遠慮を思い出してしまふ程。てか何故俺が金を出すことを知っているような口振りなんだ？

いぶかしげな視線を送るがどこ吹く風。女は上機嫌にヨミを見て、あの曲好きそうやな、あれが似合うんじゃないか、と提案しては老店主に持って来させていた。人使いが荒いやつだ、と呆れて見ていた

が、店主も嫌々という雰囲気はない。きっとヨミが本当にオルゴールを楽しんでいるからだろう。職人冥利に尽きる、というのはわかる気がする。

そんな感じにしばらく取っ替え引っ替えやっている、とうとう「ならとっておき見せたるで！」と店主が言い出した。ヨミを相当気に入ったようで、馬車の奥の梱包の山の更に奥。何だか大規模な発掘作業の末、店主は目当ての『とっておき』を掘り出すと自慢げにそれをヨミの手にちよんと置いた。

「わしが作ったもんやないけどな、かなりの上物や。爺さんから貰ったがまだまだ死なん、ごつつもんよ」

それは手のひら大の、塔のような形をした箱の上に青い兎が座ったオルゴールだった。脇にネジがある。促されるままヨミが丁寧に巻くと、奇妙な曲が流れ出した。俺に音楽はわからないが、しかしリズムがでたらめじゃないかと思った。

「壊れていないか？」

「いんや、壊れとらん。確かに三拍子四拍子、三拍子三拍子、かと思えば二拍子と、聞き慣れんとおかしく聴こえちまうかもしれへんけどな、これがこいつの歌や」

ふん、と腕を組んで睨む店主。一方ヨミは惚れ惚れとした表情で聞き入っていたが、隣でヨミの手を覗き込んでいた三編み女は何か引っ掛かったように唸ると。

「爺ちゃん、これ曲になつとるん？　なんか伴奏だけ、てな風に聴こえるんやけど」

「そや。相変わらず鋭いの、嬢ちゃん」

にやつ、と愉しげに笑って応えた店主は、動きを止めた兎のオルゴールを手に取り、語り出した。

「こいつはな、二つで一つの曲を奏でるオルゴールなんや。曲名は『蒼い兎と玄い兎の詩』。蒼が伴奏、玄が旋律だと伝わっちゃう。それ以外は全くわからんがな」

「たった一人、メロディを歌える相手を待ち続けとる兎、なあ……ロマンチックやんか。ええやん、これにしたらどや？」

三編み女がヨミの肩をぽんと叩く。ヨミは迷っているようだった。目線は兎のオルゴールに釘付けなため、ヨミが気に入ったことは誰の目にも明らかだったが、恐らく私なんかが持っていていいものなのかとかとごちゃごちゃ考えているようだ。しかし俺は別のところが気になったいた。

「爺さん、これは売り物なのか？」

『とっておき』だ。それに話を聴く限り一つしかないのだろう。大事そうな物だし、果たして売る気があるのか。

「なに辛気臭い顔しとるんや。売る気はあらへんで」

「そ、そつですよね、あはは」

それを聞いた途端にヨミはしゅん、と頂垂れて空笑いしだす。どうしたものか思っていたら「ちやうちやう、ちやうでお嬢さん」と店主が言うので二人揃って首を傾げた。

「お金貰つ気はあらへんつうことや。やる。貰つとくれ」

「うえええ！ い、いいんですか？」

「ええ、ええ。貰ってくれるやつ搜してたことや。ごつつう気に入

つてくれたようやし、男に二言はねえ！」

目を真ん丸にして驚くヨミ。言い切った店主に、さすが店長男前くと三編み女が囁す。

何だかよくわからない内にヨミは蒼い兎のオルゴールを手に入れたのだった。

「はあ、良かったんでしょうか？」

「ええんやええんや。店長の言質も取ってるしなっ」

何度そのやり取りをする気だ、と尋ねたくなる程繰り返された問答にちよつとうんざりする。しかも親切なんだかただの物臭なのか、ご丁寧にも三編み女が全く同じ台詞を返すのだからもう頭が痛くなる。そもそも、だ。

「お前、いつまでついて来る気だ？」

「おやおや、お邪魔虫やったかな、うちは」

「……別にそういう訳ではないが」

「なら暫くはおるで。なんてったってこんな可愛い子がおるんやもん。親しくならんと嘘やでえ」

上機嫌にヨミの隣を歩く女はにへらと相好を崩した。女のはずだが……なんか無性に親父臭いのは何故だろう。

「そや、まだ名乗つとらんかったな！　うち、さかきばら榊原陽いつんや。よろしくー」

ぱたぱたと手を振る動作付きでやつと自己紹介してきた限りなく怪しい謎の三編み女、改め榊原は、やはりへらへらと笑っていた。しかし挨拶されたら返すが礼儀。渋々といった感じに俺も名乗る。

「観月紫蘭だ。第八特区から来た」

「私は夢見黄泉と申します」

ぺこりと丁寧に頭を下げたヨミとは大違いだったが自己紹介は済ませたので俺は視線を彷徨わせ、目的のものを探し出した。

「ほうほう、ヨミちゃんにシラン君やね。うんうん。で、シランは何探してはるん？」

……何故フルネームで名乗ったにも拘わらずいきなり下の名前で更に『君』付けで呼んでおきながら次の瞬間で呼び捨てになる。

「あれ、何か気に障った？ ものごつつう仏頂面なんやけど」

「……、……………」

「あ、無視決めたやろ！ 全く意地悪でツンデレなんだからしょうがないねえシランは」

「……誰がツンデレだ」

つい言い返すと、勝ち誇ったような顔で指を差された。

「意味知ってるんや。あはは、おもしろ。やっぱりツンデレなんやなシランは」

とりあえず無視することにする。顔を背け、榊原の言葉は左から右へと受け流すことにし、目だけ探し物続行だ。

そしてやつと見つけた。一応確認のため、ヨミの手を掴むと「ちよつと」と店先まで連れていく。

「これ、まだ欲しいか？」

「あわわわって、はい？ あ、はい！ 欲しいですっ、けど？」

混乱しているヨミ。だが欲しいのは本当のようなので、そこで店番をしていた子供に買う意思を伝えた。

「まいどー」

高くよく通る少年の声に背を押され、再び通りを歩き出す。
呆けた顔のヨミの腕には鬼のぬいぐるみがあった。

「やるやん彼氏さん」

榊原のおちよくるような台詞。

俺とヨミは息もぴったりに叫んだ。

「付き合ってない！」

029 天邪鬼な彼女と【真】（前書き）

だれかが本当の笑顔で代わりに笑ってくれるはずだから。
自分は今日も道化でいよう。偽物な笑顔の仮面を被ろう。

素直になれない怖がりな彼女と一緒に、二十九話をどうぞ。

灰色の空の下、流れていく人の波。

噎せ返るような様々な匂いに音に揺れる空気に、景色が歪んでいるかのように錯覚させられる。そんな途方もない数の生き物がひたすら右往左往する通りは呼吸すら難しく思えた。

シランとヨミを待つオレ達は南市通りを横切る道へと避難し、建物に張り付くように座り込んでいた。

「はいどうぞシンさん」

「ありがとう」

陶器のコップを受け取る。中身はうつすらと黄色が透けた水だった。水面を舐めてみると甘い。あとちょっぴり酸っぱかった。

「レモンジュースですよ」

もう一方に持ったコップをオレの隣で脱力した口ウにも差し出しながら、シズ力が教えてくれた。ふうん、と何気なくまた液体を口に含むとすっきりとした甘味が広がり、ちよつと落ち着いた。口ウもコップを小さな両の手で包み、ちびちびと飲みだす。

「あ」

「どうかしましたか？」

「お金。いくらだった？」

ふと思いついてジュース代を尋ねると、何故かシズ力は目元を和ませ、ゆったりと押し留めるように言った。

「これくらい奢りますよ」

「でも」

「いいんです。それに、子供は大人に甘えるものですよ？」

キョトン、とした。

瞬きをして、また瞬きをパチパチと繰り返す。逆にシズカがそんなオレを不思議そうに見ていた。

「私、何かおかしいなと言いましたか？」

「や、その……はじめて子供扱いされたかも。あ、でもハンダも子供扱いしてくるか……むう」

でもここまでストレートに言われたのは初めてかもしれない。実年齢はオレだって知らないが、見た目だけなら十八とか二十くらいに見えるらしい。だから滅多に子供と認識する人はいない。まあどれもこれも過保護な知り合いばかりなので、いろいろ言われて来たが、それについては年はそこまで関係なかったと思う。

とにかく……なんか、いつもと違う感じ。

「……意外だね。シズカさんって結構子供好きなんだ」

隣で背中を丸めて黙々と飲んでいたロウがぽつりと言った。シズカが切れ長の瞳をずっとロウへ向けた。

「って、それじゃオレが子供みたいじゃん！　ロウまでオレを子供扱いすんのかよ」

すると直ぐ様シズカがまたオレを見て、ロウまでこっちに顔を向けると、二人は神妙な表情で頷いてみせた。変なところで無駄に息ぴったりだなあんなら。

「だってシンの精神年齢はきつとすごく低いもの」

「ロウさんと違ってシンさんって割と子供っぽくて可愛いですね。あ、シンくんとお呼びしても？」

「ぐはっ」

ひでえ。しかもシズ力は超真面目。こんな時に笑顔引つ込めて真顔にしないでくれよ。

「ふふ、冗談です。本当、可愛げのない誰かさんとは大違いですね」
「あはは、ロウに喧嘩売ってるなら買っちゃうぞ？ シズ力さんってやっぱり性格悪いなっ」

「ロウさんに言われる程ではないですよ？」

空気がピリピリと肌に突き刺さるよう。なんでこの二人はこんなに喧嘩腰なんだ？ 仲悪かったのか？

でも確かにこの二人が二人きりで話しているところはあまり見たことがないかもしれない。と言うか、なるべく離れたところに居たような気がする。

どうしようどうしようと焦っていたら聞き慣れた声がして、ハッと立ち上がった。ロウもシズ力から視線を外し、耳を澄ませる。シズ力が何か言って首を傾げたが、全く頭に入ってこなかった。慌てたオレはロウにコップを預け、直ぐに駆け出していた。

人混みの中でもわかる。たくさん匂いに音に吞まれていようが、それは唯一輝くようだから。無駄に利く鼻も耳も目も、それを見付けるためにあると言われれば、簡単に納得できてしまう。

オレは満面の笑みで叫んだ。駆け寄るや否や、その細く長い割に硬い、働き者の手を掴んで。

「おかえりシラン！」

「た、ただいま」

少しいつもより大きく目を開いて、驚いたようにシランは頷いた。

「ヨミもおかえりつ。良いもの買ってもらえたか？」

「はい。後でお話聞いてもらえますか、シン君？」

「むむ、自慢かよヨミ。でもいいよー」

にしし、とにやけた顔を誤魔化すように笑う。ヨミは照れたようにぎゅっと持っているカラフルな人形を抱き締めた。どうもそれが買ってもらった物らしい。ヨミは幸せそうに、大事そうにそれを抱えていた。

「ところでロウと閑歌さんはどこだ？」

無粋な声を出す相変わらぬの仏頂面。辺りを見渡しながら、いぶかしげにシランが尋ねてくるので、とりあえずぐいぐいとロウ達の待つ脇道へと引っ張っていくことにした。

「あ、おかえりー」

ロウが手を少し挙げて迎えると、シランはちよつとホッとしたように胸に手を当てた。しかし直ぐに肩を落とす。

「すまない。随分待たせただろう……」

「ううん。たつぷり休めたし、ヨミも嬉しそうだから、逆に一石二鳥で良かったくらいだぞ」

落ち着いたのか、ようやくいつもの柔らかな笑みをシランに向けるロウ。それを見てシランも納得したようで、表情も和らいだ。

「なら良かった。しかし待たせたのはすまなかった」

「ごめんなさい皆さん。つい夢中になってしまいました」

ヨミがシランの隣で深々と頭を下げる。それを気にしないでいいよとそれぞれの言い方で宥めていると。

「仕方あらへんて。女の子やもん、買い物に夢中になるんは可愛いもんや。なあお二方？ ニイニちゃんもわかるやろ？」

ヨミの隣にいつの間にか居た知らない女の人が、妙な言葉遣いで口を挟んだ。誰だこの人？ 特徴は長い髪を編んで尻尾のように垂らしている三編みだろつか。背も高くスタイルも良いお姉さんだが、言動がそれを打ち消しているおかげで近寄り難さはない。けど、逆に怪しくも見える。

しかしそれよりも気になったのはその人がシズカを見て言ったことだ。

「ニイニちゃん？」

オレとロウが首を傾げると、ロウの左隣で佇んでいたシズカが苛立ったように口を開いた。

「新見ですと何度言わせるおつもりですか？」

「ニイニちゃんって可愛いやないの」

「可愛くありません。それにセミみたいじゃありませんか」

「ニイニイゼミ？ よく見るとなかなか可愛いんやでー」

「訊いていません。そんなことより」

何が何だかわからなくなってきたぞ？ ロウもシランもヨミも困

惑顔だ。

シランが「ちょっと待て」とでも言いたげに手を出しかけたが、その浮いた手は次のシズカの言葉に遮られた。

「何故私服姿で客人と接触をはかっているのですか大将殿？」

空気が凍えた気がした。

誰よりも何よりも、シランの空気が変わったのがわかった。

「シラ」

「騙っていたのか？」

低い低い声。

シランはオレの手を引いて後ろにやると、代わりに一歩前に出た。まるでヨミとオレを庇うように。そして出来るだけロウの近くにいくように。

「え？ ええ！？」

言われた当人、三編みの女性は最初自分のことだとは思わなかったように、数拍遅れて声をあげた。

「そんなつもりあらへんよ！」

「なら何故所属を明らかにしなかった？ 俺達のこととは知っていたのだろう？」

「そうやけど、うちはそういう階級とか苦手やねん。せーやーかーらっ！」

女の人は困ったように手をぶんぶんと振ったりぱたぱたさせたりと忙しい。でも傍目から見たところ、別に騙すつもりなんてなさそ

うだけどなあ、と思いつつシランの顔を覗いてみるが、その表情はまだ険しい。

「だからなんだ？」

「せやから！　うちはそういう肩書きつちゅう面倒なもん関係なしに笑ったりお喋りしたかったの！　こういう感じになるのが嫌だったんや！」

拳を握りしめ、懸命に訴える三編みの人。それでようやくシランの表情が変わった。何と言つか、あれだ……オレが変なことを言った時の呆れ顔。

「はあ……」

「なにい、ため息！？」

「……なら最初からそう言って正直に接触すれば良かっただろう」

「それだとはなっから警戒されてまうやん！」

「誠意があればこちらも素直に受け取る。俺は嘘と隠し事が大嫌いだ」

「ご立腹なシランは腕を組み、至極不機嫌な顔で顎を突き出した。と言つか三編みの人を見上げた。三編みの人はと言うと何だか決まり悪そうに俯いて絡めた指を見詰めていた。

「ほんに鐵の旦那くろがねによつ似とるわ」

「鐵おやじのことを知っていたならもつと予測できただろう？　とにかく俺はお前を信用できなくなった」

「信用して欲しけりや誠意を見せろつて？」

「ああ」

すると三編みの人はニタァ、といやらしく笑うとシランに一步近

付いた。既に相当近かったのだからもう距離はないも同然。
ぴったりと、くつついた？

「じゃあ身体で払っちゃおうか」

ガツ、とシランが三編みの人の肩を掴んだ。

「へ？」

そしてシランが勢いよく一步下がった。いや、よろけたとも呼べるような動きだった。

そんな誰も予想しなかった動きに当然ヨミだつてついて行けるはずもなく、その背中に押されてよろけた。それをオレは慌てて支える。

シランは肩を震わせ、地面を怒鳴りつけるように下を向いていた。垂れた髪に隠れ表情は読めないが……。

「ばああつ、かつかあお前！」

「……照れてる？」

「違う！」

否定するシランの顔はそれはもう真っ赤だった。でも照れてるといふよりは恥ずかしいとか怒りとか。

「おっ前は何を考えているんだ！ 誠意だ？ お前にとっての誠意はそのっ！ ん、うう、そ、その！ 色仕掛けだともっ、言うつもりかあ！」

「うぶやなあ、シランは」

「うるさい！ 大体っ、お前は一体何をしたいんだ！」

「そうですよ大将。お客様をからかつてはいけませんよ」

飄々と涼しい顔で口を出すシズカに半目を向けるシラン。シズカは本当に怖いもの知らずだなあ。しかしちよつとシランが落ち着いたみたいだ。

オレはヨミを支える手を離すと、シランの肩をトンと叩いた。

「落ち着こうよシラン。えつとタイショウさん？ シランは女の人苦手だからあんまり変なことしないでくれよ」

「違っ！」

「はいはい落ち着く。深呼吸深呼吸」

眉間に壮大な山脈を作るシランをこっちに向けさせる。熊でも殺せそうな黒い瞳が睨んで来るが、慣れているので気にせず、お手本のように大きく息を吸って見せる。そうするとシランも不満そうながらも素直に吸い、深々と吐き出した。それはもう大量の苛立ちを吐き捨てるかのように。

「流石シンだなあ」

シランはそう呟くように言った口ウへ視線をやったが、もう険しさは大分抜けていた。そしてまた嘆息を一つ。

「とにかくちゃんと名乗れ。次ふざけた時は切り捨てるからな」

その台詞の時だけは剣呑さを帯びた、研ぎ澄まされた刀のような光が瞳を過ったが、その後はただ顔を背けただけだった。

「悪気はなかったんや。ついつい……なあ？」

「……大将？」

「すまんて！ 閑歌さんまで睨まんといてえな。ちゃあんと名乗る

からカンニンしてやあ」

「……どうぞ」

最後には何だか投げやりな口調でシズカが促した。しかし女の人
は全く気にした風もなく、ふふん、と上機嫌に胸を張ってオレや口
ウを一人一人見る。

「じゃあ仕切り直して自己紹介するでえ。うちは榊原陽。新日本政
府、実働部部長や。んでもって総司令代理の親友で、肩っ苦しい
のがだーい嫌いなぴっちぴちの二十三歳やで！ ハルハルとでも呼
んでえな。宜しゅう頼みます！」

パチパチパチと一人で拍手してる変な人、じゃなかった、サカキ
バラハル……ハルでいつか。何か緩そうな人だし。ハルハルとか自
分で言ってたし。……うん。

「つまり、スバルさんと同じ位、なのかな？」

ロウが首を傾げて問うと、大当たり〜と言ってハルが跳び跳ねた。
忙しい人だなあ、と妙な感心と共にオレはそれを眺めていた。

「そんなことより大将」

「まあた『そんなことより』。大事やでえ、質問タイム。ほらほら、
お姉さんに訊きたいことあるなら今の内よ？ 今なら大サービスし
ちゃうで〜。スリーサイズまで教えちゃうかも！ どや？」

催促するように耳に手を当て、にじり寄ってくる。ちょっと怖く
なったのでシランの背中に避難だ。また嘆息が漏れた。

「いい加減にしてくれ。用件があるならさっさと見え。なければ帰

れ、お偉いさん」

「シー君ひつどーい。それにあんまり偉くないで？ 実権は頭と管理部の上が持つてるようなもんやし。実働部で二番目に偉いってつてもなあ」

「誰が『シー君』だ。鳥肌が立つ。やめろ。それに俺はお前らの組織図などに興味はない」

シランは不機嫌全開だ。ハルは上機嫌全開だけど。しかしハルにとっての「やめろ」は「やれ」と同義なようで、超笑顔で続けた。シランの不機嫌は大無視で。

「総司令の下に部が二つあってこちらは実働部。そこで実働部のまとめ役の下に秋峰君やうちらがいて、その補佐が閑歌ちゃん達やでー」

わかったぞ。オレは今ようやく理解した。説明しなくていいと言われた説明をわざわざ実行し、恐らく嫌がるだろうと察していることをやる。わかったぞ。

あまのじゃくってまさにハルみたいな人のことなんだな！ と。シランの肩がこれ以上ない程震えている。オレはすかさずシランの腰にぶら下がっている刀を奪い取った。あ、という顔をしたシランの視線が突き刺さるが我慢だ。

「人斬りはだめっ！ シランは余計にだめなの！」

うーうーと唸って抗議の目攻撃。そんなオレにシランは簡単に折れると肩を落とした。

「……もう嫌だ、こいつと話すの」

心の底からの言葉。もうこの辺りの空気はぐちゃぐちゃだ。ちょっと泣きたくなってきた。

そこでようやくロウが重い腰を上げる。

「どっこいしょ」

「ロウお爺さん大丈夫ですか？」と茶々を入れるシズカ。

「うん、大丈夫」なんか怖いくらい輝く笑顔で応えたロウ。

些細な動作すら一触即発の空気を作り出す二人。やめてくれよこれ以上の混沌は！

でも暗黙の了解でもあるのか、二人は和やかに微笑み合うと直ぐに視線を外し、ロウはシランとハルの間に割り込んだ。

「はいはい仲良くが一番だぞー。ハルさんは思い付いたまま言わない動かない。シランも簡単に乗らない。ちょっとは忍耐強く生きてよ」

まあまあというように掌を上下に振って宥めるロウ。ハルは苦笑しながら頬を掻いて、シランは気まず気に視線を反らした。

「大人げない大人がいたら示しつかないぞ？ いいかな？」

目配せに渋々頷いたシランを見てロウはにっこりと笑った。

「じゃあハルさんの用件を訊くぞ？ 言っとくけど、女の人でもロウは遠慮しないからな？ 戦える人には。だからふざけちゃダメだぞ？」

ハルに向けた笑顔は見えなかったが……背筋が何故か寒くなったとだけ言っておこつ。

「わかったで〜」

それに曇りない笑顔で応えるハルもなかなか怖かったけど。ようやく真面目な顔になったハルはこほん、と咳払いをすると話し始めた。

「うちはあんたらを案内しよう思て来たんや」

「それは私の仕事なのですが」

「堅いこといわへんでえ。それにボスさんの注文やしな」

「……聞いていませんが」

眉を潜めたシズカがうるんげな目をハルに向けた。しかしハルはにこーとしたままだ。左右に体を揺すって、楽しそう。

「さっき頼まれたんやもん。うち、丁度今さっき帰ってきたとこやったしな。んでな、閑^{しず}ちゃんはお付きの二人の許可証発行を頼みたいんや」

「確かに必要ですが後でも良いはずです。それに」

「でも早く手続きせんとあかんやろ？」

ゆらゆら揺れていた体をぴたりと止め、首をコトンと傾ける。下から覗くように首を伸ばしてくるハルを、不可解だと言いたげにシズカは見下ろしていた。

「貴女はそれでいいのですか？」

「それこそうちはその言葉、あんたに返すで？ そんな問いをする気持ちでいいん？」

ぱたぱたと三編みが浮いては落ち、浮いては落ちを繰り返す。で

も何だか自分で揺れているハルではなく、シズ力が揺らされているように見えた。

そしてシズ力は俯くとぼつりと。

「私は、あの人が曇りない表情でいられれば、いいんです。……それだけ」

小さくて風に紛れてしまいそうな呟きだった。でもそれを塞ぎ止めるような、受け止めるようなため息が聴こえた。それはハルだった。

「新見ちゃんもほんに難儀な位置に居るなあ。意地悪言つてごめんな。でもまあ……うちは新見ちゃんにない可能性を見付けられたらな、」と思ったから来たんや。なあ、バトン渡してみいひん？」

ぴたりと止まったハルは真剣な顔をしていた。オレ達はよくわからないなりに息を詰めて見守っていた。

のだが。

ぷふ、とシズ力が吹き出した。口元に上品に手を当て、ハルを見返す。

「甘い甘い砂糖を振り掛けた上に砂糖だけを積み重ねたパフェのよいうな貴女に。甘いもののしか食べない食わず嫌いな貴女に。そんなことが出来るのですか？」

「それパフェやないやん！ 最早ただの砂糖の塔やん！ せめてクリーム！ それにうちやつて流石にフレークやらフルーツも盛り付けるわ！」

「本当に？ 本当に、貴女は苦い苦い毒薬ですら、一緒に飲めますか？」

「ぐぬつ。てか毒は流石に避けような？」

しかしクスツとシズ力は笑って二歩、歩いてハルから離れると、振り向いた。

「それが甘いと言つのですよ、大将殿」

妖艶な笑みをそつと形作ると、シズ力は背を向け歩き出し、雑踏に溶け込むように消えてしまった。残されたメンバーは啞然とするしかない。

「大将に任せた、ということかな」

ロウの場違いに明るいい声に、皆何だか疲れたように肩を落とすのだった。

「ところでなんで『大将』？」

「あ、私も気になってました。どうしてなんですか？」

「え、聞きたい聞きたい？　しょうがない子らやなあ。可愛さに免じてお姉さん教えちゃうでえ」

なんか。

益々《ますます》良くわからないことになった、と思う。

最後尾を歩くオレとシランはとぼとぼという感じ。対してロウとヨミは図太いんだか鈍感なんだか、普通にハルと並んで歩いていた。ハル、ロウ、ヨミの順番だ。何だかロウは、おっさんばいことを喋りでれでれとヨミを見てる怪しい人とヨミとの緩衝材の役目を負

っている気がする。だって時折見えるロウの目、全然笑ってない。

「……そう怯えるな」

「だっていろいろな意味で前が怖いんだよ……」

「……場所換わるか？」

因みに後列はオレ、シランだ。ハル側にいるオレはたまにロウの顔も見えるし会話も聴きやすい、特等席だ。……嫌だな。

「でもシランだって、その……苦手だろ？」

「隣のやつが怯えている方が落ち着かんだろっが」

「ごもつともな意見。でも断った。シランと話していれば平気だしな。」

しかし会話はやっぱり聴こえてくる。

「でもなー、いつの間にか大将になってたんよ。うーん、あれかな、先陣切って突撃してたからかね。だから部隊長なんつう面倒な役職に放りこまれてしもたんやし」

「嫌、なんですか？」

「そうやねー。面倒な事務仕事がなけりゃ好きなんやけどね、リーダーみたいなんも。慕ってくれる部下とか可愛いや〜ん」

「下心たつぷりだねっ」

「そないにおだてても何も出えへんで？」

「あはは、全く誉めてないぞ？」

無心。そう、無心になればいい。

そうすれば何故かさつきから寒々しい笑顔のロウとか、ポジティブシンキングにも程がある謎の人とか、そんな諸々を綺麗にスルーしてるヨミとかも気にならなくなるさ。うん、大丈夫だぞ。オレは

大丈夫だぞ！

ポン、と肩にシランの手が置かれた。

「あの露店の耳栓、買ってみるか」

オレはちよっぴり涙目で頷いた、その次の瞬間、何故かハルが残像を残す勢いで振り返り、腕をふりかぶった。

「なんでやねーん！」

や、なんでやねん？

勢いの割には叩かれた肩は痛くなかった。どうしよう、あんまりこの人と上手くやっていける気がしないんだけど。

オレは密かにこの不安が速く雑踏に紛れて消えてくれることを祈るのだった。

道のりはまだまだ長い……。

「はあ……」

「着いて早々にため息で出迎えかい！」

「……私は寄り道厳禁と言いましたよね？」

「うん、そうやね」

「ではあれは何かしら？」

「うん、お土産やな！」

「……………そう」

絶望のような沈黙だった。

りんご飴とやらをしゃぶりながらその気まづさをどうにか流せないかと試行錯誤していたらシランに小突かれた。

「今は食べるな」

「「ええー」」

同時に声を上げたロウの手にはもくもくとした真っ白い雲のような砂糖の山が巻かれた割り箸が。綿菓子というらしいそれを上機嫌にはむはむと食べていたロウも不満たらたらの様子。オレだってりんご飴を食べたい。

「客にもマナーはあるだろう。お前らは食い意地張りすぎだ」

口を尖らせ、抗議したい気持ちはあったが、シランの言葉に利があるので渋々りんご飴を手を持った。ロウも綿菓子から口を離す。そんなオレらの様子を横目に見ていた冷ややかな雰囲気の中の人は、疲れたように息を吐いた。

ここは新日本政府の本部、最上階突き当たりの司令室とかいう部屋だ。随分広く、入ってきたドア以外の方位全てに窓があり、部屋を朱に染めていた。いつの間になら夕方だ。随分長い間、市場でうろろろしていたようだ。

部屋には正面に木製の立派な机があり、窓以外の壁は全て本棚に埋め尽くされている。しかも窓の下までラックがある作りだ。生活感はずゼロ。本当に仕事のためだけの部屋なんだと驚嘆した。

そんな神経質そうな部屋の主は姿勢正しく机に着き、書類を手にかけていたが、ハルがノックもせず扉を開け放つと深々と嘆息し、立ち上がったのだった。

肩を覆うくらいの長さの黒髪を真っ直ぐに垂らしている。つり上がった瞳は深い黒。凛々しく綺麗だが、突き刺すような鋭い視線がちょっと怖く見える。でも凄い美人だ。年はシランよりちょっと上

だろうか。

服はスバルらと同じ緑色の制服だが、肩に白い飾りがあり、ひだが垂れ下がっていた。左胸にも何か鳥のようなものを模した銀色のバッチがついていた。そう言えばスバルのにも、シズ力達にもさりげなく付いていたが、一方は灰色、一方はアツプリケみたいなものだった。偉さの度合いを表してるのかな、とちよつと興味を持つ。司令室とやらにいた女性の胸のそれは夕日を弾き、自慢するように光輝いていた。

彼女の胸はあまりなかったが。

「つい、な？　せつかく遠くから来て貰ったんやし、楽しい思い出をと思ったんや」

ハルが「な、な？」と首を傾け女性に近付く。部屋の主は鬱陶しげに首元にかかる髪を払い、鋭い黒瞳をハルに向け、槍を突き立てるような容赦ない言葉を放った。

「私は彼らに思い出作りをして貰うつもりはないわ。この地に留まって頂きたいのよ。貴女はどうして余計なことをしようとするの？」

痛い。

思わず顔をしかめる。チクリと刺されたように感じる。
なのに。

「だってうちは美智乃が悪役になんのは嫌やもん。美智乃かてそうやる？　楽しかったってちよびつとでも思っ貰えたら、どっちも後腐れなくハッピーやんか！　なあ？　それに――」

どうしてハルは笑顔なの？
どうしてさっきよりも嬉しそうに話すの？　どうしてあんな冷た

い、突き放すような、あるいは貫くような、そんな冷やかな視線を向けられているのに。

どうしてハルは笑っていられるんだ？

しかも止めのように。

「勝手な同意を求めないで。わかったようなこと言わないでくださる？ 榊原、下がって結構よ」

氷点下の視線、と呼ぶに相応しい。最早攻撃だった。人を殺すような言葉。

それでも。

「あはは、ごめんなあ」

彼女の答えは笑顔だった。

ハルは力尽きたように後ろに下がって来たが、部屋の外には行かなかった。ただへらへらと笑って立ち尽くすだけ。笑っているのに泣いてるように見えるのは何故なんだろう。

そんなことを考えていると早速シランが進み出た。正義感が強いと言うよりは単に、お節介が過ぎるお人好し人間だから当然と言えば当然だろう。通り過ぎた横顔は厳しかった。

オレもそれに付き添うように前へ出る。ヨミはシランの隣。ロウはオレの隣。ハルの顔は見えなくなった。

「では改めまして。私の我が儘のため、遠路遙々お越し頂き、誠に有難う御座います。私は須原美智乃と申します」

部屋の主はそう名乗った。ちょっとさっきの会話でムカついたのでスハラと呼ぼう。名前で呼びたくない。

スハラは長い黒髪を揺らし、机を迂回するとシランとヨミの前に

立った。

「お前が喚んだ観月紫蘭だ。ここに来るまでに何となくわかったことがある」

「何が、でしょうか？」

「賛否が分かれているのだろう？ 俺達を強引に引き込むことについて。秋峰昂に榊原陽が否定派。あんたが無理矢理推し進めていた強硬派、とても呼ぶか？ そしてお前の息がかかった新見閑歌、といったところか」

シランの台詞にギョツとする。シズカが何だつて？ しかし口ウまでそれを受けて喋り出す。

「シズカさんはスバルさんを大事に思っていることくらい知ってたよね？ なのに何で中途半端なスパイみたいなことさせるの？」

怒りのこもった黄玉の瞳は、夕焼けに照らされ、燃えているみたいだった。

「……いいわ。器用だからよ。秋峰では出来ないことをして貰うために必要だったから。今回はあまり機能しなかったようだけれどね」

「スバルさん情報？」

「ええ」

スハラは涼やかに答えた。でも何だかオレは嫌な気分になって、変な顔になった。とにかく我慢ならなくて口が勝手に動く。

「よく、わからないけど、あんたはシズカとかスバルを傷付けるようなことしたんだよな。それにハルにもひどいこと言ったんだ」
「そうね」

その、短い、簡潔過ぎる答えがとてつもなく悲しい気分させる。虚しくて、切なくて、泣きたい。

「お前は人を、仲間を、何だと思っているんだ？」

震える声が、俯いたオレにのし掛かるように響いた。シランの声だ。足まで震えているのが見えた。

「駒よ。たくさんの住人^{キング}を守るための歩兵^{ポーン}。効率良く動かさなければ死^{チェックメイト}が待っている。それくらい知っているでしょう？」

ぴたりとシランの震えが止まった。思わずオレは顔を上げた。

目に入るのは信じられないという驚愕。怒りを通り越した表情だった。口は何を言っているかわからず半開きだ。

「貴女は世界をチェスの盤面にするおつもりですか？」

春風のようにそつと、柔らかな声が差し込まれた。

「例えよ」

「貴女が動かせるのはゲームの駒ではなく、生身の人間です」

「ええ」

「なら何故彼らの心を、汲み取って下さらないのですか？」

「……………」

スハラは口をつぐんだ。ヨミは一步前に出て、しん、とした空気を背負うように立った。

「どうしてわかっていて無下に扱うのですか？ 貴女の思いまで圧

し殺して」

風船が割れた。ような音が鋭く響いた。

「なん、で？……違う」

スハラは振り切った手は掲げられたまま止まった。ヨミはよろけて屍餅をついた。

「かつ、勝手なことを言わないでと言ったでしょう！」と静まり返った世界を破るように、迷いながらもスハラは叫んだ。

「そうやったそうやった。すまんかったな美智乃」と背中からもわかるへらへら笑いのハルがそれに応えた。

ヨミを庇ってビンタを受けた自分の頬を押さえて。

「ハ、ハルさん！？ 大丈夫ですか！」

「んー平気平気。こんなナイフでグサーに比べたら虫に刺されたようなもんよ。気にしなーい気にしなーい。な、美智乃？」

能天気過ぎるハルに、スハラは唇を強く噛み締め、固く目を瞑った。

「美智乃？」

「客室が、用意されているわ。疲れているでしょう。ゆっくり休んでください。本題は明日にしましょう」

それだけを早口に告げると、机上に設置されていたベルを乱暴に二度押した。すると入るのに使った扉が外から開けられ、制服の女の人が顔を覗かせた。

「ご案内致しますね」

「頼むわ」

「はい。では皆様こちらへ」

案内を任されたその人はずっと指を伸ばし、手のひらを上に向けて扉を示すと、笑顔と共に小さく首を傾けた。

「客室へご案内致します」

困惑顔のオレ達はハルに背を押され、案内に先導され、司令室を出たのだった。

「こちらが観月様のお部屋となります」

にっこりと紹介されたその部屋は無茶苦茶広かった。もしかして百人くらい住めるんじゃないかねえ？

「いや、それは無理だろう」

と冷静なシランに突っ込まれながら、オレ達は部屋に踏み込む。床はなんか焦げ茶色の絨毯が敷かれているし、大きな窓にはクリーム色の分厚いカーテンが備えられている。左手にはベッドが四つ並んでいるし、右手には木製の丸テーブルと四脚の椅子まであって。なんだこれ？ これ部屋なのか？ 施設とか店じゃなくて？

「と、こちらに点灯スイッチがありますのでご自由にお使いください。では失礼致します」

簡単に何か説明のようなことを口にする案内人はヨミを伴って行ってしまった。

ハルはいつの間にか居なくなっていた。

「『転倒する位置』がある、ってどういう意味だあ？」

「シン、多分『点灯スイッチ』、つまり灯りを点けるためのボタンだぞ」

「点灯、ああなるほどー」

ふむふむ、とロウの解説に納得しているとシランが壁をしげしげと眺めていた。

「これがスイッチか」

「どれどれ？」

シランのしている箇所を見ると、小さな棒みたいなものが壁から生えていた。

「……なにこれ？」

「だからスイッチだろ？」

「どこの？」

「……あれかな」

シランが指差したのは天井の大きな花の飾り。よく見れば確かに電球がある。

「でもならなんでスイッチってのがこんなところにあるのさ？」

「……さあ？」

「ほんとに点くの？」

疑うようにただのつまみにしか見えない『スイッチ』とやらを見る。そんな問答をしていたらロウが覗き込んできた。

「なら使ってみればいいじゃない」

「どうやって？」

「多分ー、こうやつ、て！」

ロウがつまみを人差し指と親指で挟むと、くいつと押し上げた。

「うわっ、ロウ壊した！」

「ロウ壊してない！ ほら、ほら！」

「え？」

ロウに促され天井を見ると、なんと光っている。花のようなデザインの中にあつた電球が黄色みを帯びた白い光を放っているではないか。

「す、すっげえ！　なんで！　こんな遠いの点いたあ！　うそみてえ。マンガみてえだ！」

「ほらロウ壊してない！。ロウ凄いいー」

「うんスゴいスゴい！　ロウスゴい！」

有頂天になって跳び跳ねていたらシランにばかりと殴られた。

「静かにしろ」

「うー、はあい」

「ごめんなさいシラン」

スイッチはわかったので消し、窓辺に駆け寄る。夕焼けも紺色に呑まれつつあるようだ。でも今は一際赤く太陽が輝いて見えた。

「雲と地平線の間にあるこの瞬間が一番太陽が見えるなあ。しかもこの四階からの眺めは格別やで。沈んでいく太陽がよう見えるんや」「確かに。スゲー……て、あれ？」

窓から目を離し、隣を見たら。

「や、少年」

「うああああ！」

いつの間にかまたハルがいた。すごいフレンドリーに手を上げて笑い掛けられる。

「いつ入ってきたんだよ！」

「今や今。ちゃんとノックしたし挨拶もしたでえ」

「うそだあ」

「嘘やない。どないしてそないしようもない嘘吐く必要があるんや」「そうだけどさ」

でも本気で気付かなかった。自然過ぎる。何この人。気配ないのか？　しかし対峙すればこの人程自己主張が激しい人も滅多にいないというくらい存在感を振り撒く人なのだが。

やっぱり謎な人だ、ハルは。

につこり笑って首を傾げるようにして瞳を覗き込んでくる。どうも揺れたり首を傾げるのはハルの癖みたいだ。ちよつと下から見上げるように真っ直ぐな視線。嫌いじゃないけど苦手かもなあ、と苦笑する。

「夕焼けもええけどな、シンもこっち来てみい。おもしろいことになつてるで」

「おもしろいこと？」

ハルに促されるまま部屋の中、ドア付近でシランとロウとヨミが何だか揉めているようだった。ヨミもいつの間にか戻っていたようだ。オレはなんだなんだと輪に入っていく。

「どうかしたの？」

「一緒に寝たいんです！」

「断固として反対する」

「……はい？」

両拳を握り締め、それをブンブンと振って主張するヨミ。肘を張り、仁王立ちでしかめっ面なシラン。二人の間で乾いた笑みを浮かべて取り成そうと頑張っているロウ、の図。

「あのな、ヨミは一人で寝るより皆で固まっていた方が安心だからここで寝るって言うてるの。それに知らない場所で一人は寂しいからな。でもシランが駄目だの一点張りなんだぞ」とロウが親切に教えてくれてようやく把握だ。

シランは堅物だからあんまり融通が利かないんだよなあ。と不安を胸に二人を見守る。

「とにかく年頃的女子を男子三人と一緒にする訳にはいかないだろう」

「私は気にしませんよ？」

「俺は気にする」

睨み合いの膠着状態。なんか今日はこんなんばつかだ、と嘆息した。ロウも眉をへの字にして助けて光線を目から出している、気がする。仕方ないのでオレははずかずかと二人に割って入った。

「待てよ二人とも。一緒に買い物して仲良くなったんじゃないのか？」

「私はもつと仲良くなりたいですっ」

「買ってやつただけだろう。これとそれとは話が別だ」

「シランさんの分からず屋！」

「分別を弁えろ、子供じゃないんだから」

「まだ私は子供ですっ！　だって十六歳ですもの！」

それにシランは虚を突かれた顔をした。オレも多分似たような顔になっているだろう。ヨミは細く白い眉を落とし、桜色の唇をツンと突き出して不満そうな声で言った。

「何か文句でもおありですか？　言つときますが、私は三歳くらいにはもうこの姿でサイズでしたよ。今はたまたま実年齢と一致しているのであまり違和感がありませんが」

「……十八かそこらに見えたが」

「そうですか？　我ながらまだまだ子供っぽいと自認しているのですが」

とぼけた顔でシランの言葉に相槌を打つヨミ。

「おいおい、そんなこと言ったらロウは何歳だよ？」

「さあ？　ロウも知らないぞ」

とこちらの疑問など解さず、涼しい顔のロウ。そんなロウにオレ

は力が抜けてしまった。ロウはそういうの、全く気にしていないみたいだなあ。

「そう言うお前だって年齢わからず、やはり気にしていないじゃないか」

何故かシランに白い目で見られた……なんでだ？

ぎゃいぎゃいわいのわいのとしている内に本題はどこかへ流れていく。それを。

パンパン、と。

まるで仕切り直すように柏手が二度打たれ、一斉に皆の視線が一所へ集められる。ハルはにたあと笑ってそれを迎えた。

「解決策を教えてたるで？」

「こいつらの生きてきた年数がわかるのか？」

「ちゃうわ！ お前さんらマジでさっきの話題忘れとらん？」

「……ああ、ヨミが一人で寝られないという話か」

「そうです！ 私子供なので一人じゃ寝れませんっ！」

開き直ったのか、ピシッと背筋まで伸ばして拳手するヨミ。見ない振りをするシランに対抗するようにぴょんぴょんと跳ねながらシランにまわりついている。

「ああもう……解決策とはなんだ榊原？」

「ふっふっふー、よくぞ訊いてくれたね観月くん！」

ハルは自慢気に目を細めて笑い、人差し指をチツチツ、と振る。明らかにシランの頬が引き吊っていたが、何とか堪えたようだった。

「ズバリッ、うちの部屋にヨミが泊まる！」

「却下。信用ならん」

「ならうちがヨミの客室に泊まる！」

「却下。以下同文」

「ならなら添い寝を　！」

「何故そうなる！　却下と言ったら却下だ」

「シランさん、私は気にしませんよ？」

「頼むから少しは気にしてくれ……」

シランは疲れたようにふらふらと椅子の方へ行くとどっかりと腰を落とした。シランは本当に心配性だなあと思いつつ、ベッドの間に置かれた台にあった水差しを手に取り、少し注ぐとシランに出した。オレはシランの隣に控えることにする。

「ありがとう。……ふう。とにかくお前は何を考えて動いているかわからない。そんな底の知れない相手にヨミを預けられるか」

「でもシランさんも私にとってはまだ数日の付き合いでどこいどっこいですよ？　まあシランさん達はともわかりやすく、裏表がないので助かりますが」

「……………そりゃあ、良かったな」

複雑な心境はまるで苦いものでも食べたみたいに変な顔で表されていた。

「シランさんってやつぱり過保護ですよね」

「せやろせやろ？　こんな面倒人間よりうちののが楽やで」

ハルが粘っこい笑顔をヨミに向けて誘う。それにヨミはニコニコ微笑み、机の方へ一歩進んだ。

「それは素敵なお誘いですねえ」

「面倒な人間でわかったな」

言って口を真一文字にするシラン。しかしヨミは静かに首を左右に振った。

「いえ、私はそんな自他共に面倒臭いと思うような感情でも捨てずに胸を張って生きている、シランさんのそんな不器用なところが好きなんですよ」

あ、誉めてるんですよ？ と付け足しながらヨミはまた一歩近寄る。シランはやけくそ気味に水を煽った。ヨミはそれに微笑み、また一歩進むと純白な毛系の束のような髪を浮かせ、くるとオレたち背を向けた。

「でもシランさんの言う通り、釈然としない部分があるんです。ハルさん、どうか貴女が誤魔化す大事な欠片を一つでいいからお見せいただけませんか？」

ハルを真っ直ぐに見詰めてヨミは問い掛けた。ハルはまるで撃ち抜かれたようなハッとした顔で固まった。迷っているのか、はたまた単に驚いているのか。

沈黙の間にロウがオレたちテーブル組のところへやって来ると、シランのコップから勝手に水を飲んだ。それに「ロウはマイペースだな」と言う「お互い様だぞ」と返された。うーん何でだろ、と内心唸りつつも水を注ぎ足すオレ。

そんなことを外野でやっているとは唐突にハルが叫んだ。

「よっしわかったで！」

何か吹っ切れたのか、ハルは迷いなくずんずんとヨミに近付くと

意気揚々と雪のような白い手を掴んだ。

「お前さんらに遠回しは逆効果！　ならうちはド直球で行くしかあらへんやろ！　つつ訳でヨミ！」

「は、はい」

「友達になってください！」

ハルは大真面目に言い切った。

「……………はい？」

「ダチ、フレンド、親友、悪友、腐れ縁、友人、友。自由に呼べばええよ。な、うちと友達になってくれやヨミ」

ハルはヨミの手を両手で握り、目線をがっちり合わせると真剣な面持ちでそう頼んだ。

オレは思わずシランにどういうこと？　とばかりに顔を向けたが、シランは口ウに似たような視線を送っており、口ウは肩をすくめて困惑顔で応えた。

言われた当人はと言うと、俯いてぶるぶると武者震いみたいになっている。まあ武者震いではないだろうとは思っけどな。

「ヨ、ヨミ？」

「わ、わ私！」

「ふあい！」

ヨミは急に顔をあげるとハルにグイッ、と顔を近付けた。肉薄したと表現した方が良さそうだ。唐突なヨミの勢いに、ハルが裏返った声で応える。

「私、そんなこと言われたの初めてです！」

「そんなつて」

「友達のお誘いです！ 私はとっても嬉しいんです！」

「あ、ありがとう」

ハルが押されてるよ、と啞然とするオレたち。しかしヨミも我に返ったようで、すっと身を引くと唇に指を当て、不思議そうに言った。

「あの、でもどうしてそう思っただんですか？」

ようやくヨミが落ち着いて、ハルはふうと息を吐くことが出来たようだ。そして早速水を得た魚のように意気揚々と話し始めるが、心なしかさつきよりも声が大きい気がした。

「そつやな！ 理由も明白にしなきゃあかんもんな。ま、一つ目はヨミが可愛いからに決まっとるわー」

「お前はそれしか言えないのか？」

シランが呆れる程、本当にハルはヨミを大プッシュだ。調子が戻ってきたハルは、仕方あらへんやろ、とにやけた顔でぱたとシランに向かっておざなりに手を振った。シランも諦めたように嘆息だ。

「他にもあるんでしょ、理由？」

「おう、わかっとるなロウ君は。二つ目はな、あんさんらの味方になりたいからや。なら仲良くなつときたいやろ？」

「じゃあどうして味方になりたいの？」

ロウの素朴な疑問に、ハルは軽妙な顔で答える。

「いやあ、あんまり印象よろしくあらへんやろつが、でも正直に言えば美智乃のため、やなあ」

「それで好転するとはあまり思わないけど？」

淡々と、容赦ない問いをするロウは顔色一つ変えない。でもハルはやっぱりへらへら笑うだけ。見てるこっちが何だかもやもやする。シランも心なしか不機嫌度が上がってるし。

「ま、いろいろあるんよ。三つ目もあるけどこれはプライバシーの問題になるからな、言わへん」

「ふうん。強要はしないぞ。まあ、良いんじゃない？」

「おーおーおおきにな、ロウ」

締まらない笑顔をロウに向けるハルに嘘はないように見える。

まあなあ。

「うさんくさい人だけど、悪い人じゃあなさそうだな」

ここに来るまでもいろんな店を教えてくれて、楽しい話を絶えずしてくれて、しかもロウやオレが人混み苦手なのも察して人通りの少ない道を選んでくれたり、気をまぎらわせてくれたり。

凄い気遣ってくれた。さりげなさすぎるし、こういうキャラだと言われたら信じてしまいそうになるが、本当は物凄い人なんじゃないかな、と思う。でもちよつと損な役回りの人、でもあるようだ。司令室然り、ここでのやり取り然り。

何だかオレは思う。

「ほんと、ハルってシランみたいに不器用な人だよなっ。な、シラン？」

自然と笑っていた。シランはオレの言葉に苦い顔だが、否定はない。シランの沈黙は概ね肯定だ。シランはただただ二人を見ている。主にヨミを。ロウも同じ真っ直ぐな視線を送っている。待っているのだ。

だって最後に決めるのはヨミだから。

「私で、いいんですか？」

「我が儘言つとるんはうちやで？　ヨミ自身を気にすることはあらへんやろ」

「でも、ですね……」

と言いながらヨミは何故かロウをチラチラと気にしている。ロウもそれに気付いたようでにっこり微笑んだ。

「ヨミ。心配しなくてもロウは嫌なことがあればちゃんと言っし、間違っていれば訂正するぞ。だからヨミは思ったことを素直に言葉にして」

優しい声に背を押され、ヨミはキュッと小さな拳を握り締め、ハルに挑む。きよとしたハルに。

「ハルさん！　貴女は知ってらっしゃるかもしれませんが、私は人間ではないんです。変異したウサギと人間を掛け合わせた生物の中でも、異様な力を持って生まれてしまった私は……私は！」

ヨミは目をつむり、絞り出すように叫んだ。

「化物なんで」

「ふざけるなっ！！！」

「化物やあらへん！」

「何言ってんだよ！」

化物なんです、なんて、言わせる訳がなかった。

ヨミは立ち尽くす。

その肩をハルは掴んだ。シランは椅子を蹴り飛ばすように立ち上がった。オレは一步踏み出すのが精一杯で、泣きそうだった。そしてロウは。

「お前もお前だロウ！ どうして怒らない、どうして否定し訂正しない！」

「ったあ……」

シランの逆鱗がゲンコツになってロウの頭に落つこちた。ロウは殴られたところを痛そうに擦りながら、迷いなく言い返す。

「間違つてない、ロウに関しては」

但し夜色の瞳から目を反らして。

ガタン、とテーブルが揺らされた。

「この、アホがつ。俺は絶対に肯定してやらん。何が私は化物だ、自分もそうだと？ 言語を解し、誰かを慮り、弱々しい笑顔が精一杯なお前らが、お前らごときが『化物』だと？ 笑わせるな。お前らは弱い弱い人間の一人だ。俺の定義に何か文句がある奴はいるか？」

日本刀のように鋭く澄んだ瞳が炉で燃え盛る火のごとき怒りを湛えていた。力任せにテーブルを叩いた右拳は解かれず、ギリギリと

苛立ちを表すように強く握られていた。

「……不満はある。けど」

「あるなら言え」

「……ロウは弱くなんかない」

「そういつところが弱いと言ったんだ」

浴びせられた言葉に、ロウは何も言えなかった。俯くロウは見てられない。

「シラン言い過ぎ!」

思わず非難するような声を上げてしまう。シランは一瞬オレを横目に見ると背を向けた。ロウもオレもヨミもハルもない、ただの淡いシンプルな縦縞模様の壁を見詰めて言った。

「……とにかく、お前らが思ってる程、お前らは人間離れしじゃないんだ……」

それが自分に言い聞かせるような台詞に聞こえて、何だか居たたまれない気持ちになった。でも確かにロウとヨミは、オレなんかよりはずっと人間に近い。だってオレは……。

パンパン、と気の抜けるような音がぐちゃぐちゃもやもやした空気を払うように打ち鳴らされた。何だかデジャヴだ。

「まあまあ。うちは人間やけど化物や呼ばれるからな。そんな気にしちゃあかんでヨミ。何と呼ばれようが榊原陽は榊原陽やし、何と思おうが夢見黄泉は夢見黄泉やで。何も違わへんやろ。ならポジティブに考えようやないの」

ハルは打ち合わせた手を合わせ、な？ とヨミに笑い掛ける。ヨミはぱかんとそれを見ていたが、直に肩を揺らし、小さな笑顔を溢し出した。

ハルと向かい合っている小さな背中が、ほっとした空気を漂わせているようにオレには見えた。

「随分と大雑把な考えですね」

「ええやん。難しく考えたって能天気な捉え方って、生きてることには変わらへん。大事なんはスマイルやで！ 可愛い子が笑顔なら皆幸せ、素敵やろ、世界平和も夢やないでえ」

なあヨミ、と言ってヨミの手を取ったハルに。

また馬鹿なことを、と呆れるシランがいて。ハルさんの夢は大きくて本当に素敵ですね、と日溜まりのような笑顔のヨミがいた。ハルの根っこはやっぱりそれなんだな、と苦笑いの口ウもいるし。うんハルらしいな！ とオレは笑顔で言えた。

ハルはすごいと思う。

刺々しかったシランも、寂しそうだっただヨミも、俯いてた口ウだって顔を上げてた。ハルの言葉が優しい空気を作ったんだ。

だから今のハルはとっても良い笑顔だ。

ハルはすごい。

だってもう皆と友達になっちゃったから。明日がどうなるかなんてわからないけど、とりあえず今は平和だ。ハルの願った世界はこの瞬間、現実になった。皆、それぞれの笑顔でいられてる。

でも。

ハルが本当にそう在って欲しいと願う未来は、世界はなんだろう。一生懸命なハルの声が虚しく響いた冷たい部屋。

それを思い出し、オレは心の隅っこでハルの笑顔が全部本物になれる未来になりますようにと願った。

030 脇目も振らず【紫蘭】（前書き）

どこまでも真つすぐに。

大切な人のために。

そんなシランの第三十話です。

030 脇目も振らず【紫蘭】

滞在二日目。

……長い。

灰色の憂鬱な廊下は延々と続き、カッカツというブーツが床を蹴る音が響くだけだ。

また曲がり角。しかしその先はまた灰色灰色灰色。

「壁くらい白か他の色にしろよ」

苛々と無駄な悪態が思わず口をついた。無限にループしてるのではないかと疑いたくなる程不可解な建物だった。とにかく切れ目なくひたすら廊下が続く。

「……どこだここは」

と呟きながらも足は止めず、灰色の世界を闊歩していた。

扉はたくさん見掛けるが、しかし昨日訪ねた司令室とやらがなかなか見付からなかった。一応昨日の道を遡っていたはずなのだが、どこかで記憶違いがあったのか、いつの間にか全く見覚えのない場所に来てしまった。扉の間隔はやけに広い。会議室とかそういう大部屋の区画なのか？

しかし、だ。

「何故朝の六時だというのにここまで人気がないのだ……」

珍しくシンが寝坊していたので単独行動が可能になったのは良いが、本当に誰にも会わない。安全面として大丈夫なのかと疑心を抱いてしまう。

因みにロウは熟睡だった。早起きなシンに対して、ロウは空腹が誰かが動き出さないと起きない。ほっといたら二日三日は寝ていそうだ。寝る子は育つと言うが、あれは寝過ぎだろう。今までどんな生活を送っていたんだか、とちよつと不安になったものだ。危険が迫れば飛び起きるのだろうか。

とにかくだ。早々に話し合いに決着をつけて帰る。それだけが俺の為すべきこと。ここまで来てしまったことへのけじめだ。早くもここに来たことを後悔し始めていた。妙な対立や人間関係。何やらきな臭い空気が漂う、危なっかしい組織。長く居てもろくなことにならないだろうし、最悪あの司令官様の作った落とし穴にでもはまって帰られない状況になってしまいそうだ。そんなのそれこそ詰みだ。俺は帰らなくてはならない。あいつの日常は、平穏な幸せは、あそこでなければならぬ。第八特区の住人がいる、あの場所ではない。あいつの家にはならない。

「……帰らなくては」

そう、強く思った。

何だか見覚えのある雰囲気だな、と思っていると目当ての扉を見付けられたようだった。急に狭まった一直線な廊下の突き当たりの、小鳥のレリーフがある扉だ。小さく息を吐き出すと早速戸を叩いてみる。

「観月だ」

コンコン。

「須原美智乃、昨日の続きを話したい」

コンコンコンコン。

「開けてくれないか？」

手を止める。しかし鎖まり返るだけで全く反応がない。これは留守なのか。それとも滞在期間を引き延ばしたいがために話し合いをしたくない、という理由で居留守を使っている、とか。

「おい須原さん、観月紫蘭だ、話し合いに来た」

しかし沈黙。

仕方ないので次のアクションだ。俺はドアノブを握った。もしかしたら開いているかもしれない、という可能性があるからだ。あまり良い気分ではないが物は試し。いつまでもここに引き留められているわけにはいかない。

ガチャッ。ガチャッ。

「……………」

やはり鍵がかかっているようだ。どんなにノブを回そうとも、引っ掛かったような音しか返らない

。ならば、としゃがみこんだ。これこそ邪道だが、やろうと思えば鍵程度上手く行けば解錠、上手く

行かずとも破壊程度は軽いものだ。……流石に破壊はしないが。

とにかく一条の光にすぎるようにノブの下を覗き込んだ。

「……………なんだこれは」

ノブの下には鍵穴がありそうなスペースはあった。しかし、ない。鍵穴がない。

俺は腕を組む。これは内側からしか鍵がかけられない作りなのだ

ろう。だがもし部屋の者が全員退室した場合、鍵は誰がかけると言うのか。密室か。な訳がないだろうが。こんなところでミステリーしていてどうする。普通に考えて他に出入口があるんだ。例えば上か下の階に続く階段があつて、私室に繋がっているだとか。あるいは。

「みっしー、おっはよお！」

「……………はあ」

ツッコむ気も起きなかった。多分名字と名前から一字ずつ取ったんだろう。もうどうでもいい。

「お前は一体何がした」

背中にかけられた謎の挨拶にため息を吐きつつ、後ろを見て言葉をなくした。

ピョコピョコと明るい茶色の三編み尻尾が、女の割に広い背中を見せ付けるように跳ね回る。とても、良く見える。何故なら。

「……………わざわざ後ろ歩きをしている理由を、訊こうか……………」

「なんで、って、三編みがうちの特徴やん。早く覚えて貰うためにはやっぱり特徴をアピールしなあかんやと思つてなー」

背中をこちらに向けて喋る不審者は、器用にそのまま兎跳びで進んでくる。跳ぶ度に三編みがピョンと跳ねた。

「昨日のあれでもう十分だからこれ以上の奇行はよしてくれ……………」

「えー、何やつまらへんなあ」

これ程インパクトのある人間も珍しいだろうに、こんなに濃い人

間を直ぐに忘れられるやつなんているのか？　そしてこいつは敢えてやっているのか？　それとも無自覚なのか、このキャラの鬱陶しさは。

榊原は何故か渋々といった体で体の向きを修正した。すたすたと近寄ってくる。

「で、お前もここに用か？」と扉を目で示す。「生憎留守のようだが」

「そうみたいやな！。でもうちの用は美智乃やなくて紫蘭くんやで？」

「は？」

予想だにしない回答に思わず柄の悪い訊き方になってしまふ。だが榊原は朝から相変わらずの半笑いでへなへな笑っているだけだった。

「うち仕事やから制服着なあかなー思て早起きして、男子部屋覗いたら紫蘭くんだけおらへん。なら美智乃でも脅しに行ったんかなーと思つたんや。どや、名推理やろ！」

「……………まあ、そだな」

「適当やなあ！」

何がツボだったのか、ガハガハ大笑いする三編みの変人。付き合い切れないので強引に話題を戻す。

「おい。この扉、外からは鍵の開け閉めが出来ないようだがどうしているんだ？」

榊原は目尻に涙を浮かべながらも普通に答えた。

「そら別の出入口があるからに決まっとるやろ。それよか紫蘭くん、
ようここまで辿り着けたなあ。この辺り、特別複雑になっとって、
一度通ったくらいじゃ道がわからへんようなるもんなんやけど」
「別に……昨日の道を辿っただけだ」
「てつきり迷子になってる思て来たんやけどな」
「……………」

否定出来ないが肯定するのも癪で無言で榊原から目を反らす。素
直やなあ、と笑って言うてくるもんだから面白くない。

「あは、ふて腐れとる」

「うるさい」

「うん紫蘭くんもかわええな。うちの二つ下やったか。やっぱり年
下はええなあ」

こいつが言うとしても変態発言にしか聞こえないのは何故だ
ろっ……。灰色を背景に、落ち着きなく爪先立ちをしたり戻したり
と伸び縮みを繰り返す榊原はしまりのない笑み。

「まそれは置いといて。ほな行こか」

「行くつてどこに」

「紫蘭くんらの部屋や。一人で戻るんは大変やろ？」

「俺はまだ用が済んでいない」

「どうせ強行突破でもない限りあの扉は開かへんし、そうしたつ
て美智乃が不機嫌になるだけで話し合いになんて持っていけへんよ。
うち、仕事の報告まだやから、そんな時に訊いとくで」

動きを止め、わざわざ下から覗き込んでくる榊原。真剣な眼差し
であるし、ふざけることがあっても嘘は吐かないだろうと思う。下
手そうだし。

「な、ダメ？」

しかしこのおどけたような言い方がどうにも苦手だ。ここはすっぱり真っ向から堂々と行けばいいだろうに、どうして下から目線なのだ。

「およ？　なんかシーくん、不機嫌？」

「お前の、な」

「ん？」

「お前のその逃げの姿勢がオレは大嫌いだ」

「ぐああーん！」

「……は？」

「シヨック！　シヨック受けとんのや、ガーンて！」

手を振り回して説明してくる榊原に、何だか白けさせられる。こいつは真面目にやると死ぬ、不治の病にかかっているとかいふ事実でもないだろうか。その方が納得できるんだが。

「紫蘭くん！　うちのこと嫌いなの！」

「まあ、どちらかと言つと」

「ガガガガーン！」

グレードアップしたらしい。

「なんでそういうとこ素直なんや！　しかもツンデレ解釈もできひんような微妙に生々しいアンサーやなんて。そんな酷い人だったやなんてー！」

「もう勝手に喚いてろ」

付き合いきれないとばかりに踵を返した。こいつと話してると非常に疲れる。すたすた歩き出すと、待ってえな、と榊原が追い縋ってきた。粘るな。

「なあなあ、また迷子になるで？　そうやってどんどん紫蘭くんが迷子になったことが広がって、最後には『観月鐵の息子は方向音痴で、本部棟で迷子になったんだってー』てな噂で持ちきりになり、密かに連綿と語り継がれる伝説になるんやで？」

「……それは脅しか？」
「ん？　なんで？」

自分がその噂を流布するぞ、という脅しだ。しかし本気で全く考えていなかったのか、ぱつちりとした明るい瞳を瞬かせる。天然、なのか……。

「これはこれでまた質が悪い……」

ぼそりと呟くと、やはりしっかり聴こえていたようで、半目になった榊原が低い声で問い返した。

「なんやてえ？」

面倒なことになりそうなので早足になる。突き当たりにある窓から見えるケヤキの木を見て確か右だったかと思い出し右折した。

「シラーン、左やで？　マジで方向音痴だったりする？」
「……………」

沈黙は雄弁に語る。それは何だか嫌なので俺は悪あがきのように口を開いた。

「残念ながら否定する材料は、ない」

寒い風が、この長大な廊下を吹き渡った気がした。

暫く気まずい沈黙に包まれる。しかし榊原は果敢にも口を開いた。

「訊いてもええか？」

「却下だ」

「……本当に嫌いなんやな、うちのこと」
「まあまあな」

しょぼくれる榊原を先導に、ゆっくりと歩く俺。灰色の廊下は相変わらずだが、時間の経過に伴い、ちらほらと住人と呼ぶか職員と呼ぶか。若草色の制服にワッペンを付けた人間がせかせかと歩く姿を見掛けるようになってきた。

「おはようございます!」

「おう、はよー」

とひらひらと手を振って応える榊原に急ぎながらも勢いよく頭を下げ、ハキハキと挨拶をしていく制服姿の女性。なんと言うか。

「案外慕われているんだな、お前」

部下が可愛いとか言っていたのもそれなりのことはしているからこそその台詞だったか。

「いんやあゝ、それほどでもー、あるでえ?」でれでれと、えへえへと、締まりのない笑顔で頭を掻く榊原。「頑張ってるからなつ。こんくらいちやほやされるんわ、まあ、普通やなあ。でも特に女の

子は……ええなあ」

「お前は絶対に女の分類に入る人間ではないどころか、人類の枠にすらいれたくなくなるな……」

「うちは人間やで！」

プンスカという効果音でも付きそうな怒り方だった。自称人間の榊原は、肩を怒らせて、不満そうに歩く。三編みが随分と景気良く揺れていた。

「そう言えば……」

「ん、なんや？」

思い出し、つい口をついたが、言うのは憚れることだった。しかし榊原はきよとした顔で首を傾げるだけだ。

「別にうち、『お前は既に死んでいる！』とか言われてもちゃんと受け切る自信あるで！」グツ、と親指を立てる。「どんと来ーい！」

誰かの台詞なのか、『お前は』の下りだけ無理矢理な低い声で言っていたが、とにかく無駄にテンション高め。何を受け切るだのどんと来いなのやらさっぱりわからない。

「ひああ。そんな冷たい目で見ないでえな。うち、そういう『ふうん』みたいな冷めた対応がごつつう苦手なんや！」

「なら対応に困る発言は自粛しろ」

「なんやって！ そんなんつまらへんやないの！ 当たって碎けるんや！」

「もう勝手に碎けてろよ……」

「ほらあ！ ほらほらまたその目え！ ランランのドサー！」

また呼び方が増えてるよ。『ランラン』ってなんだよ。

じと目で淡々と視線を送っていると、榊原は「いやー」とか言
って顔を手で覆い、いやいやと全身で表現していた。こいつ揺れる
のが好きなのか……？

しかし唐突にぴたりと動きを止めるとそつと指の間からあのぱつ
ちりとした目を覗かせた。ちよつと怖いぞ、見た目。

「さっきの『そう言えば』の続き、きいちゃあかん？」

「……そんなに気になるのか？」

「うん」

真つ直ぐで澄み切った、まるで小さな子供のような純真な眼差し
に面食らった。俺より年上で、ちゃらんぽらんなイメージで、言っ
てることは大抵滅茶苦茶、やってることも無茶苦茶。なのに急にそ
んな目をするのかと。

掴み所のない女だとほとほと思う。

「お前が嫌な気分になる話だぞ？」

「そんな聞かなわからへんで。それにうち、気にせえへんし」

「……それが気になるんだ」

「あはは、シランってばやっさしー」

笑ってるはずなのにどうしても笑ってるように見えない榊原の顔
が、悲しい。どうしてこいつはいつもそんな感じなのだ。何だか榊
原がヨミにいの一番に友達になろうと言った理由がわかる気がする。
似ているんだ、二人は。

でも似てない。何故なら片方は怖がり、片や強がりだから。でも、
生き方が似ていると思う。彼女らは悲しい時も、苦しい時も、怖い
時も、寂しい時も。

全部笑うのだ。

どんな時でも笑うんだ。

それしか知らないかのように。まるで自分を殺すように。俺には出来ない生き方だ。シンも悲しかったら泣き喚くし、ロウは噓つきが嫌いだから無理に笑ったりしない。

「お前のそういうところが……嫌いだ」

「うええ！　なんでこの流れでまた嫌い宣言出るん！？　はっ！　もしやツン　げふっ」

腹を小突いた。美崎以上に鬱陶しいわ質^{たち}が悪いわでもうこいつ、嫌。

「し、し紫蘭がぶった！　あのフェミニスト紫蘭が！　略してフェランが！」

「略すな」

「ええやーん。でもただ略してもつまらへんよな！　なんかええ略あらへんかな？」

「はあああああああゝ」

「うわっ、超特大ため息！」

もう胃に穴が開きそう。きつと相性の問題なんだ。ヨミやロウなら全く問題にしないのだろう、やたらと話を脱線させたり相手の嫌がることを繰り返すこいつの相手をしてる。

でも俺は無理だ。こういうやつは大の苦手だ。

自分もろくなこと口にしない気がする。幸い見覚えのある景色になってきた。

「あとはこの右手にある階段を下り、その先の角を曲がって暫く歩けば俺達が借りてる客間。合ってるか？」

「合ってるけど、なんでや？」

「もう道はわかる。だからお前はもう仕事に行け」目を合わせようとしてくる榊原から逃げるように顔を背けながら。「もう俺は大丈夫だから。流石に方向音痴でもそれだけわかっていれば大丈夫だろう?」

「……………」

返事がない。怪訝に思い前に顔を戻すと。
ぼろぼろ泣く榊原がいた。

「さ、榊原?」

「それ、それも、嫌やねん、名前で呼んでえな、ハルハル呼んでえなあ」

なんで泣いているんだ? 訳がわからない。音もなく、ただただボタボタと涙を落としていた。

「うちはウザいって知ってるけど、でも笑ってるしかあらへんし、楽しそうにしてなきゃ挫けてまうような気がするし、本当に弱虫なんやけど」それでも真っ直ぐ俺の目を見詰めて。「でもシラン君に嫌って欲しくない。うちのことは別にええけど、こことか美智乃のこと、嫌って欲しくないんや。うち、我が儘で嫌な奴や。だからうちだけにしてな。帰りたいって思うなら、うちが帰すから、何とかするから。だからあ」

ああ、こいつ以上の馬鹿はいるのか、と思った。だから「お前は阿呆だな、真性の」と言った。そして本当に天の邪鬼だ。

「お前、言っていることが間違っているぞ」

「な、なん?」

「一点だけ、間違っている。お前は嫌われたくないんだろう? 組

織や友人だけでなく、自分も好きになつて欲しいのだろう？　なにどうして自分を傷付けるようなことを言う？　そんなお前は阿呆としか表現しようがないだろうが」

呆然とした榊原の間抜け面を見上げる。情けないくらい涙でぐちゃぐちゃな顔だ。

「お前が我慢したり想いを押し殺す必要はどこにもない。もっと素直に生きろよ」

「……あはっ。シラン君に言われたか、ないわぁ」涙に震える声、でも喜色も混じり、ちゃんと笑顔だった。「ツンデレ王子がよく言うわ」

「俺はツンデレでも王子でもない。それに……お前、自分で言っておいて自分はそうしないなんて不公平だぞ？」

「な、何が？」

「シラン『君』ってなんだよ。呼び捨てにしろ。でなけりゃ俺は延々と榊原と呼ぶが？」

もう、泣いていなかった。我慢出来ない笑みが溢れていた。

「ほんまシランはツンデレやな！」

榊原は、ハルは笑っていた。夏の太陽のように。

訊きたかったのは何故化物と呼ばれたことがあるのか、だった。しかし訊くのは憚られ、結局口にせず、部屋前に辿り着いた。窓も

ない灰色の殺風景な廊下。等間隔に並ぶ無機質な乳白色の扉。その前に赤銅色の髪をした少年が一人俯き、座り込んでいた。

「シン……？」

俺は慌てて駆け寄る。パツと見た限り怪我はないようだし、服も汚れていない。一体何があったのか、と考えているといきなり抱き着かれた。

「どおおこ行つてたんだよおおおお……」

ぎゅう、とベストが掴まれ、顔が強く肩に押し付けられる。冷たかった。シンの目元は濡れていた。

「……………悪い」

「居なくならないでよ、消えないでよ、心配するだろおお」

ひつくひつくと泣きじゃくるシンに、何を言っているかわからず、沈黙する。情けない。俺は情けなさ過ぎる。一体俺に何が出来るといいのか。慰め方なんて知らない。今も昔も。

シンが落ち着くまで、俺はただ彫像のように手を垂らしていただけた。

「う、めん、なさい……」

目元を乱暴に拭おうとするシンを止め、カバンから手拭いを出し、拭いてやる。

「何故謝る。お前に非はないだろう」

「うん、シラン悪い……」

お前なあ、と苦笑したがシンは思い詰めたような固い表情のままだった。自然、眉尻は落ちる。

「どうしたんだ、何があったんだ？」

「シランが置いてった」

「で？」

「……それだけ」

「それだけ？ 本当にそれだけか？」いぶかしむように皺を寄せて顔を近付けた。「何かあったんじゃないのか？ 無理して隠し事するな。言いたいことはちゃんとさええ」

「じゃあ、言うけど」

「ああ」

「シランの鈍感！ バカ！ あほおおお！」

いきなり叫び出したかと思うとシンはダダッと駆け出して行ってしまった。ボタンという音が廊下の奥から響く。ヨミの部屋に駆け込んだようだった。

「……何なんだ？」

「いやあ、流石にうちでもわかったんやけどなあ」

ハルまで呆れ顔だ。一体何だと言うんだ。つい無然とした顔になるが、俺は仮に自室になっている部屋の戸に手をかけた。

「あれ、追い掛けんでええの？」

「そうだな」やっぱり覗き込みようとしてくるハルから視線を反らし、鬱々とした気分のまま言った。「しかし俺はこれ以上ろくなことを言わないだろう。だからそつとしとくのが最善だ」

「まあ、ええけどさ、きつとシンはシランに声かけて欲しいと思う

で？」

「……仕事行け」

「それもそうやな。ま、頑張れやシラン」

ずっと離れたハルを目で追うと、歯を見せてにっこり笑っていた。

「ほな、またな」

ぱたぱたと手を振ると、ハルは小走りで行って行った。本当に大丈夫なのか、と思う。須原の次の次に偉いんじゃないのかと。か。

「慌ただしいやつだな」

「賑やかで、楽しい人だよね」

「っ！」

のほほんとした顔でいつの間にか背後にロウが立っていた。手には何故かお盆と食器四セットで作ったタワーがある。

「全くもう。シラン、勝手にどこか行っちゃダメだぞ。シンがすぐく心配するし、ロウもそこそこ不安に思っただぞ？」器用にバランスを取りながらロウはすたすたと近寄ってくる。「で、スハラさん見付かった？ 話出来たか？」

「……いや」

ここでもお見通しなのか、と苦く思う。そんなに俺は馬鹿で阿呆で単細胞なのか。どうしようもない人間なのか。いや、わかっていたと言えはわかっていたが……改めて突き付けられるのも結構心に来るものがある。

「とにかくシラン、ご飯食べよ。まだでしょ？ 折角四人分、頑張

ってもらって来たんだからね。食べないなら勿論もらうけど」

「いや……ありがとう、頂こう」

「うん」につこりと満足げな笑顔で頷くと。「じゃあこっちな」とナチュラルに鉄槌、いや、判決だろうか、それをロウは下した。

判決は隣の部屋を示していた。

「……気まずいんだが」

「ちゃんと謝ったか？」

「……………いち」

「はいじゃあ行こうな」

「まだ全部言ってないだろう」

「ロウが『一応』を認めると思ってるのか？」

振り返った黄玉の瞳は怪しい光を湛え、一瞬金色にすら見えた。

蛇に睨まれた蛙。

そんな言葉が頭に過る。俺は気が付けば素直に頷いていた。するとロウはへにや、いつもの癒しな笑顔に戻ると、ヨミの部屋へと足を向けた。

俺は気を抜くと溢れてしまいそうなため息を呑み込み、何と謝罪するかに頭を悩ませることにした。

031 傍に居ただけ【真】（前書き）

何にもわからずただ生きてる。

すぎる思い出も持たず、目指すものもなく。

何のために生きているかわからない世界は灰色だったんだ。

泣き虫真太郎の第三十一話です。

031 傍に居ただけ【真】

今日もシランがいなかった。

泣き喚いたってシランは戻ってこないし、慰めにもならない。

もう泣き疲れた。

それが滞在三日目の朝のこと。

「元気出してシン。シランはほつといても大丈夫だろうし、シンにはロウがついてるぞ？」

「……ありがとう」

でもオレは笑い返すことも出来ず、ただ俯いて、うつすら笑おうとしたように顔面がひきつただけだった。嬉しいはずの言葉さえ素直に受け取れない、喜べない。オレ嫌なやつだなあ、と余計に落ち込む。

「……ロウ居ても、何にも出来ないのかな？」

「……ごめん、わかんない」

膝頭に顔を押し付け、くぐもった声でオレは答えた。ロウが心配して隣にいてくれていることを感じる。でも顔を上げる気力はないし、ずぶずぶと沈み込むだけだ。

どうしてシランはわかってくれないんだろう。

昨日だつてちゃんと謝ってくれたんだ。申し訳なさそうに、いつもは無駄にピンと跳ねている眉をへなつとさせて、頑張つて言葉を選んで。

なのにシランは今日も、昨日なんて何にもなかったかのように行つてしまった。オレを置いて行つてしまったのだ。もし目の届かないところでシランが危ない目に遇つたらどうしよう。もしもシランが……いなくなつちゃったらどうしよう、なんて。

考えたくないよ。

考えさせないでよ。

やだよ。

シランはどうして一緒にいてくれないの？

「……あ、れ？」

ふと顔を上げるといつの間にか口ウの姿がなかった。隣の部屋も、人の気配はない。シランも勿論いない。

オレ、独り？

サアと血の気が退いた。鏡を見るまでもなく顔は真っ青だろう。もしかしたら土気色かもしれなかった。

「シラン！」

返事がないとわかつていても呼ばずにはいらなかった。オレは堪らずシランの客室を飛び出した。大嫌いな灰色一色の廊下が出迎え、ギョツとして思わず一歩後ずさったが、直ぐにまた走り出した。

「シラン！ シラアアン！」

廊下を行き交う草色のお揃いの格好をした人たちが変な目を向けてくるのが、意識の隅っこでまだ膝を抱えてる冷静なオレは認識出

来ていた気がする。

でもダメだ。普段の感覚は全部へそ曲げて仕事を放棄している。今仕事をしているのはろくでもないのばかりだ。いつもは宥めて諭しておやつをあげて、無理矢理心のどこかにある箱の中に押し込んでいたやつら。そいつらが総出で孤独の看板を振りかぶり、オレを内側から壊そうとしているんだ。

だからオレはたった一つの名前にするしかない。だって世界を変えて、オレの目を覚ませて、手を引いてくれたのはその人だから。独りの虚無から掬いあげて、平穏をくれたのは誰でもない、シランだったから。

だから。

「シラアアアアンンン！」

頼むから。

「シラアアアアアン！」

お願いだから。

「シラアン！」

応えてよ。助けてよ。

「シ、ラン……」

傍にいてよ。

安心させてよ。

また呼んでよ。

名前、呼んでよ。

それだけで良いんだ。それだけを望むんだ。だって。

もう独りは、いやだよお……。

叫び疲れてとぼとぼ歩いている時だった。

「どうかしたの？ 泣いてる？」

「……ふえ？」

のろのろと顔を上げると、針金みたいにピンと長細い男の人がいた。

真っ黒いコートに身を包むその人は本当に細く、背はオレを優に越していた。しかし顔は何だかやたらと幼い印象で、顔だけなら口ウと並べても違和感ないだろう。夜が溶け込んだような黒い瞳はすうっと細く澄んでいた。

不審者だ。そう思った。制服を着ていない人をここで見たのは初めてだった。

大男と呼んでいくくらいの長身だが、顔がそんな印象を打ち消すので何だかちぐはぐ。針金みたいだからとりあえず針金男としとこう。なんか長細くて簡単に曲がりそうだから。それでいて簡単には折れそうにない固さみたいなものを感じるから。

針金男、は。

暗雲みたいに垂らしたちよつと伸ばし気味の闇色の髪に封をするような、焦げ茶色の地味な鰐付き帽子を深く被り直すと、鰐の陰の

下から覗く、細めた瞳を下へ向けた。つまりオレを見下ろした。

「ねえ、どうしたの？」

マイペースな、おっとりと間延びした声で再度尋ねられる。オレは急に恥ずかしくなつて俯いた。

「な、何でもない！」

目眩がして、今にも崩れ落ちそうなくらい疲れていることに急に気づき、オレはよろよろと廊下の端へ寄ると、膝を抱えて座り込んだ。ちよつとだけ落ち着く。少なくとも世界はぐらぐらもくるくるもしない。ただ。

何故か針金男までよろよろ歩いてきて、オレの隣にぼてつと腰を下ろしたのは想定外だった。

オレは目を丸くしてそいつを見上げる。真似なのか同じように膝を抱えている針金男は、それでもオレより頭の位置はずっと上だったし、膝の高さも勝っていた。

長い、長すぎる。

「なんだよお前……」

「僕は怪しいけど、君に危害を加えたりはしないよ」

「普通自分で自分が怪しいこと、認めるか？」

「怪しくないって言う方が怪しいよ」

「怪しいって自称する方が怪しいじゃん」

「そうかな？」

「……どっちみち怪しい！」

「そっか」

針金男は細めた瞳をぱち、ぱち、とゆっくり瞬かせた。

「とにかく話すだけで何もしないから、安心してよ」
「……うん。わかった」

あんまりこの問答は意味がないだろうなと思い、こくんと頷いた。針金男はにこりとせず、淡々と視線を送ってくるだけだったが、何故だか目の奥の黒は深いのに温かく、怖さはなかった。真っ黒い炎か光が灯されているみたいだ。

不思議な闇を湛える不審者を、不思議そうに赤銅色の濁った瞳でオレは見上げた。

「何かあったの？」

三度目だ。

見掛けによらず相当なお人好しなのかなと思いつつ、何と答えようかと困った。上手く整理出来ず、ぼつぼつと話し出す。

「シランに、置いて、かれて……」

「置いていかれた、ね。『シラン』って人名だよ。それは大切な人？」

「うん、大切な人」

迷いなく肯定すると、少しだけ針金男の口元が緩んだ。大切な人があることは良いことだ、と大きく頷いてくれた。その動作はコックン、という感じで何だか人形っぽく、人間味が薄くてほんの少し怖い気がしたけど、本心からの同意なのは真っ直ぐに伝わってきて、ちよつと嬉しかった。

「じゃあ、どうして泣いていたの？」

小さく首を傾けて、ぼくとつとした調子でまた訊かれたのでびつくりした。

「え？ だから、シランが……」

「それは原因で、泣いていたのは結果だよ。原因でどうだったからその結果に行き着いたの？ つまり、何が“理由”だったの？」

濡れたような黒瞳の奥にある不思議な光がちらちらと揺れている、気がした。

「置いてかれて、悲しかったのか寂しかったのか怖かったのか怒りたかったのか嬉しかったのか苦しかったのか、とか。理由はいろいろあるでしょう？」

「置いてかれて嬉しくて泣くわけないだろ！」

「そうかな？ 一概には言えないし、可能性はどんなに確率が低くても、その可能性を捨て去れる要素がない限りは無視すべきでないよ」

「そ、そう……」

ちよつとだけ高めの針金男の声はよく通り、耳にずっと入って来るには来るのだが……なんか面倒臭そうなことを言ってる気がする。

「ほら、置いていかれた君は何を思ってたんだい？」

「そりゃ、悲しかったから、泣いてたんだよ」

「そう？ 別に涙は悲しい時にしか出ないものではないよ。演技ですら出すことは可能だしね。楽しくて笑っても、涙は出ることはあるよ。頭ごなしの否定や決めつけは、あまり良くない。それに、理由は一つとは限らないどころか、たった一つの純粋な理由であることの方が難しい」

「何が言いたいんだよ、お前……」

当惑したオレの顔を見て、針金男はちょっと考えるように視線を上にした。その横顔はほんの少しだけ申し訳なさそうな、決まりの悪い表情にも見えた。

「そうだね。つまり僕は疑問を抱いてるんだ。確かに君は悲しんだかもしれないし、純粹にそれだけの理由だったかもしれないけど、他の理由もあるんじゃない？ それに悲しいにもいろいろあるよ」

……それは気のせいだったかもしれないけど。

なんなんだ？ こいつ何者なんだ？ それにどうしてこんなに詳しく訊いてくるんだ？ 訳がわからない。

針金男は退き気味なオレの反応に、小さく首を傾げた。

「ごめん、嫌だったかな？ ただね、理由ははっきりさせておいた方がいい。口に出せる形にしておくのも大事だけど、せめて自分の中に答えがあった方がいい」

「どうしてさ」

「勘違いや間違いがあつたら、悲しいし、後悔は少ないに越したことはないでしょう？ 自分の感情を知り、相手の考えを知ることが、とても大事なことだよ」

とても、大事。知ることは。

そんな言葉に、視線は自然と下へゆく。ツルツルとした妙な質感の床を見詰めながら、考える。

自分が何を思ったか？ それを知る。

でもそんなこと、決まっている。悲しかった、悲しかったさ。シランがいなくて、ロウもヨミもいなくて。

また、独りになったみたいで。

「怖かったんだ……寂しかったんだ、本当は」

透明な雫がぼたぼたと落ちていくように。澄んだ思いがぼつぼつと口から溢れていく。

「シランがいないと世界がまた大嫌いな灰色になっちゃいそうで……もういや。独りぼっちはやだよ。シランいなきゃ、オレ、だめだ……『シン』って呼んでくれないと」

また戻ってしまいそうで。

何もなかったことになってしまいそうで。世界が色褪せて消えてしまいそうになる。

それが怖くて怖くて仕方ない。恐ろしくて仕方ないんだ。

「なら、そう言わなきゃ。伝えなきゃ、伝わらないんだよ」

不思議だけどこの人の言葉は本当にすんなりと心に染み渡る。飾り気なんてない。けどその分純粹で、温かさが真っ直ぐに伝わってくる。

気負うことなく、しかし透明ではない、芯のある瞳がオレを映した。

「だから君はその人に今度会ったら訊くんだよ、『どうして僕を置いて行ったの?』って」

その言葉も染み渡る、のだが……。

「……オレ、『僕』じゃない」

どうも素直になれない自分が変なところで挙げ足をとる。それで

も針金男は変わらず続けるだけだ。空気に揺らぎすらない。嫌な顔一つせずに訂正する。

「じゃあ『どうしてオレを置いて行っただの?』だね。そしてちゃんと理由を尋ねるんだ」

「……もしも、納得出来ない答えだったら?」

「そう素直に言えばいい。納得いくまで、いくらでも、何度でも。脱線した話も、くだらない話でも、いっぱいするといい。仲違いをしてしまうことを恐れちゃだめだよ」

彼は闇が棲む、細い黒い瞳を遠くに向け、優しい声音で懐かしむように、やんわりと噛み締めるように言った。

「大切な人と大切な時間を過ごすためには、必要なことだよ」

夜の湖のような瞳がまたオレを映す。

「君はまだ大きくなれるんだから、あんまり怖がらなくていいよ。いろんなことがあつて、人生だから」

「じいちゃんみたいなこと言うな」

そんなことを口にすると、針金男は小さく微笑んだ、と思う。和らいだ目元はひどく優しくかった。

「僕は見た目に反して結構長生きだからね。お爺さんみたいなことを言ってしまうんだ」

つい。

「……きかなきゃ、だめかな」

ぼつりと溢れた言葉に、彼は真摯に答えた。

「一方通行じゃ、だめなんだ。ちゃんと相手の思いも受け取らないとね。それはやっぱり、とてもとても、大事なことだよ」

「でも……」

「怖い？」

「怖いよ」

「でも逃げるのは許さないよ？」

急に獵犬のような怪しげな煌めきが黒い瞳に灯り、オレはギョツとした。まるで怒った口ウみたいだった。

「大切な人は大切にしなきゃだめなんだよ。だからちゃんと向き合って、知って、君も彼の望みを知らなきゃいけない。どうしても」

しん、と再び静まり返った湖は、朝日を浴びてキラキラと輝くようにうで。

「君はそれを望んでいるはずだよ。それは一緒にいるための一つのルールだ」

大切な人の思いは、絶対に守られなきゃいけないんだ。

どこか自分に言い聞かせるような台詞だった。落ち着いた瞳も、その一瞬だけは激しく燃え立った。

彼の雰囲気は本当に森の主のように、泰然とそこに在る湖のようだ。しかしその奥には決して譲れない激しいものが秘められている。絶対という言葉を使ってまで、自分に言い聞かせるように口にする、揺るぎない決意。

オレはそれを知っている。
当たり前だ。

だってそれはオレの意志だから。

「オレ、シラン守りたい」

けど、そう。それだけじゃ守れてない。だめなんだよ、独り善がりじゃ、自分勝手な正義じゃ、だめなんだ。

だから、だから。

平淡な色の薄い唇がそつと笑んだ。真っ黒な瞳は漆黒の鏡だ。焦るオレが映し出されているのが見えた。

「まあ、ゆつくりで良いと思うよ」

柔らかな声が、優しく頭を撫でるように耳に届く。

「君はまだまだ子供だから。でも、ね」

彼は急に目を閉じた。いや、きつとただでさえ細い目を細めただけだ。うつすらと覗く黒がオレを射る。

「君らの時間が永遠ではないことは、知らなくてはならないよ。それは子供でも大人でも、無条件に、無情に、時には理不尽に、襲ってくる化け物だから。逃げる術は」

誰にもないから。

その言葉は心臓を貫くようで。無意識の内に胸元をギュツと握り締めていた。服に皺が寄るだけで済まず、気を抜くと破ってしまいそうだった。

シランがいないなんてこと、考えられない。シランがいない世界

なんて。そんな未来、信じたくない。想像したくもない。

でも。知っている。

永遠はないってこと。

どんなに強いシカだって死ぬしクマも死ぬ。花は散るし草木も萎れ、やがて死ぬ。いつかは死ぬ。どんなに自由に空を飛べる鳥だって、永遠には飛べない。遠くない未来に墜ちるのだ。そう決まっているから。

運命ってやつなんだ。

だからシランだっていつかは時間の闇に、運命に吞まれてしまうんだ。

抗いようもなく。

必然という理由を押し付けられて。

そんなの、いやだ。信じたくない。いやだ。言うな、教えるな、そんな優しさいらない！ やめる！

なんて。

叫べるはずもなく。その優しさを踏みにじる勇気もなく。

ただただ膝を抱えて、懸命に堪えるオレを針金男は切なげに見ていた。

「難しいことだけど、悔いなく、一瞬一瞬を大事にしなければなら
ないんだよ。特に君は、きつとそうなんだよ」

「なんで、オレは違うみたいに、言うんだよ……」

ギリギリと引き締められる内臓の痛みに喘ぎながら、けれどそれは幻想なんだと理解しながら、無理矢理針金男を下から睨むように見た。

答えなんてわかっているのに。

それでも確認したかったんだ。

「推測だけど、君は人間でも僕らでもないでしょう？ だから」

彼は秋風のように飄々と、何でもないように言う。

オレは苦しくて痛くて悲しくて哀しくて、行き場のない幻痛に涙をこぼした。受け流すことも誤魔化すことも出来なくて、胸が張り裂けそう、いっそそうなってしまえば楽だろうに、そんなこともなくて。

ただうずくまり、自分にしがみつくことしか出来なかった。

彼はオレが落ち着くまで傍にいて、オレがやっと普通に息が出来るようになるまで静かに立ち上がり言った。

「どんなに辛くても、苦しくても、怖くても。逃げちゃだめだよ。絶対に後悔するから」

オレは顔を上げられず、膝頭に押し付けるだけだったけれど、きつと彼はやっぱり笑わなかった。ただ淡々と、けれどどこか力強い光を秘めた無表情で、言ったのだろう。

「でも大丈夫だよ。君の強さを信じてあげて。誰だって大事なものがあんだ。誰でも、大事なものは大事にしたいと、素直に願っていいんだよ」

頑張つて。

そんな言葉を残して去っていく彼の背中に、オレは小さく「うん」と応えた。

「シン！ やつと見つけたあ」

声がしてゆるゆる顔を上げると、へにやりとした安堵の笑みを浮かべたロウがいた。少し疲れているみたいだ。それでもちつとも速度は緩めず、結構なスピードでオレの前までやってくると急ブレーキをかけて停まり、ロウは膝についてオレの目の高さに合わせた。錆びたような黒い髪の下に、虚ろに濁った赤い玉がはまっているのが映し出されているのが見える。

心配そうな黄玉の瞳が微かに歪んだ。でも直ぐにいつものしゃんとした、お兄ちゃんのようなしっかり者の顔になるとオレの目元に触れた。

「もう、涙でぐちゃぐちゃじゃないか。部屋で顔を洗おう。腫れるぞ」

「すぐ、治るよ」

モゴモゴとふて腐れたように言うところ、ロウは腰に手を当て、ちよつと怒ったように眉間に小さなしわを寄せた。

「だーめっ。確かに直ぐ治るものだけど、ちゃんと顔洗って冷やした方がすつきりするよ。そのままじゃ、だめだよ」

それに、と続けるロウを見て、母ちゃんみてえでもあるなー、とか呆けた思考が呟いていた。

「いくらシンが丈夫だって言っても、今日は真冬の寒さだよ、雪降るかもつてくらいだぞ？ こんな寒いところにずっと居たら動けなくなつて、寝ちゃつて、風邪ひいちゃうかもしれないよ」

「このくらいで風邪なんかひかねえよ、シランじゃないし」

そう自分で言ってから、はっと気付き飛び起きた。近くで覗き込むようにしていたロウは驚いて尻餅をつく。けれどオレの頭は今気付いたことではいっばいだった。

「そうだよ！ シランどこ行ってんだよ！ 本当にカゼひいちゃうじゃんか！」

どうしようどうしよう、とあたふたしているとロウが嘆息しながら起き上がった。呆れたような、でも優しげで、悲しげでもある月色の瞳が諭すようにオレを映していた。

「大丈夫だよ。シランだって馬鹿じゃな」

「バカだよ！ 何かに夢中になると周りが見えなくなっただけで自分も見えなくなっただけ、一つのことに全力注いじゃうバカだから充分ありえる！」

やばい早く捜さなきゃ、と焦る。しかし太く小さな、コンパクトな感じの手に、がっしりと肩を掴まれた。ロウはオレ以上に焦ったような、怖い顔をしていた。

「待って！ ねえ、気付いてる？ シン、すっごく顔色悪いよ。死にそうなくらい調子悪そうな顔してるんだぞ？」

「だからなに！？」

思わずまた叫ぶと、ロウは酷く脅えた顔をして、オレは呆気にとられた。それでも無理矢理言葉を続けた。

「オレはそんなんじゃないけどっ、シランは簡単に　っ！！」
自分の言おうとしたことに気付いて一瞬息が詰まった。「　　だか

「らっ、オレが守んなきゃ！」

「本気で、そう思ってるの？」

「え……？」

泣きそうな顔で見上げる満月は、見間違ひのような哀しみを湛えていた。ロウはそれを隠すように顔を伏せると、オレの手をギュツと握った。

小さな小さな手だった。

「シンだつて生きてるんだぞ？ 簡単に死んじゃうんだ、生きているものは皆……だから、皆頑張んなきゃいけないんだ」

何かを吐き出すように、ロウは弱々しくオレの手を掴んで言った。

「生きることを」

それは途方もない、きつとロウ自身にも理由のわからない重みがあった。さっきの針金男の話と被るものがあつて、どこかがキリキリと痛む。そんなやり場のない痛みを適当に胃のせいにして噛み殺すと、無理矢理ロウに笑いかけた。

ロウは顔を上げない。でもその方がいい。きつとろくな笑顔になつてないから。慣れないことはするもんじゃない。それでもそうしたかった。

それでもしなきゃ一緒にこの寒さに押し潰されてしまいそうだったから。

「オレはいつも一生懸命だよ。生きること、頑張ってるよ。だから大丈夫。そうだろ？」

しばらく沈黙が続いて、何かが切り替わった気がした。ロウはゆ

つくりと顔を上げた。そこにあるのは明らか過ぎる作り物。貼り付けたような、取って付けたような笑顔だった。

ひゅお、という変な音がして数瞬後、それが自分の呼吸音だったと気が付いた。

完璧過ぎる笑顔の仮面が怖かった。

「そうだな。シンは頑張り屋さんだからな」

ニコニコと口にする言葉と、ロウの奥の方にある心の温度との酷い落差にクラクラした。

「ロウ、笑うなよ……無理して、笑うなよ」

「シンが言わないでよ。シンだって無理して笑ったじゃない」
「違う」

オレはそんな完璧じゃない。感情を押し殺したわけじゃない。ただ面を取り繕って、ただロウに笑えるだけの力をあげたくて。それだけだったのに、どうして。

「どうしてそんなウソで笑うの？ オ、オレ、そういうのいやだ。ロウも、知ってるだろう？ だって、いつも」

「笑顔は得意だぞ？ いつもはもうちょっと上手なだけ。それにな」

絶対零度の笑顔なんてのがあるだなんて、オレは知らなかった。瞳だけ全く笑わないのに、きれいな笑顔だった。

「ロウ、シン達が思ってるほど、いい子じゃないんだぞ？ 嘘つき狼でも、あるんだぞ？」

そんな言葉が、告白が突き刺さるようで我慢出来なかった。だっ

てこれはきつとロウにも返る痛みだから。

オレはロウの肩を掴もうとしてするりとかわされ、逆に手を掴まれるといきなりずんずんと歩き出したロウに引きずられた。

「ちょ、ちよつと待って、待ってったら！」

足で突っ張ろうとするがロウの手は容赦なく引っ張ってくる。もう声で、言葉で抵抗するしかない。

「ねえ、どうしてそんな顔するの！ 泣きたいなら泣けばいいじゃんか！ ねえやめてよ、お願いだから……」

「シンって我が儘だ。でも、ロウの方がずっと、我が儘だ」「え？」

呆けた顔でロウの背中を見詰める。でもロウは振り向かないし力も緩めなかった。オレは話を聞きながら引き摺られていくしかない。

「ロウ、シンに泣いて欲しくないんだ。ロウが泣いたら、やっと泣き止んだシンが泣いちゃうから、泣かない。ロウは泣かないよ」

「なんでそんなつ、やめろよそんなの！ 強がりやめろよ！」

「やだ」

「泣かない、もう泣かない！ オレ泣かないから、約束するから、ねえ！」

「無理だよ。シンは凄い泣き虫さんだもの」

知ってる。そんなの自分がよく知ってる。

手を引く背中を遠くに感じながら、思いを遠くに感じながら、オレは自分を省みる。

わがままでどうしようもない上に堪えるのが下手くそ過ぎて直ぐに泣いてしまう。情けないくらいに心が弱い……ドラゴンだ。体が

丈夫なだけ。

シランにすがってようやく居ることが出来る。ロウやヨミがいるからやっと立っていられる。

そんな弱々しい、情けないやつだ。オレはそんな頼りないやつだ。でも。

「変わりたい」

そう思ったんだ。

「ロウが思ってる程オレは弱くない！」

オレは引つ張ってくるロウの手を逆に引つ張ってロウの動きを一瞬间止めると、ロウに迫ってその腕を掴んだ。

もう逃がさない。

手を繋いでいたけど心なんてちっとも繋がってなかった。人の話を聞かないロウは、勝手にオレから逃げようとしていた。

でももう逃がさないんだ。

「ロウ！ オレ、強いよ。ロウが思ってる程弱くない！」

「……なんで？ 弱虫の泣き虫が、何を言ってるの？」

俯いて発された言葉は床に当たって跳ね返る力もなく、溶けてしまっ
まいそうだった。それがいやで、オレはロウの腕を強く引いた。

こっち向けよとばかりに。

「弱虫の泣き虫だよ！ 知ってる、知ってるに決まってる！ だからだからだから！」

わがままだ。わがままだけどオレの望みだ。

腕を引っ張られて振り返るロウを見ながら、オレは叫んだ。
どこかへ届けと。

ロウに伝われと願いながら。

「信じてよ！」

呆けたロウの目を口を、赤銅色に焼き付けるように、目を大きく見開いた。

「今は弱虫で泣き虫だけどっ、強くなるから！ 強くなるから信じてよ！ なるって、なれるって信じて！」

「今、泣いてる癖に？」

「そうだよっ、悪いか！」

なんでまだ涙は渴れていないのだろう。

散々泣いたのに、まだ残ってる。ぼたぼたぼたと、情けないったらありやしない。

でももういい。今はそれでいい。

これからも、それでいい！

「弱さでは泣かないやつになる。甘えて泣かないやつにつ、泣いても負けない、ドラゴンになるよ！ だから！」

弱っちいオレを、まだ見放さないでくれるなら。

「見ていて。信じていてよ」

「そしたら、どうなるの……？」

恐々と、震える声は真っ直ぐ斜め上に、オレに向けられていて。
真ん丸なお月さまは今にも雫が溢れそうな、不思議な色をしていて。

オレは涙を溢して笑って答えた。

「そしたら、強くなれる」

「ほんとうに？」

「ほんとに！」

「単純……ほんと、シンは単純だあ」

「シンプルは良いことだ！ シンプルが一番だって言うだろう？」

「なんか、違うよ」

「そうかな？ 別にいいだろう、笑えればさ」

ロウの泣き笑いの顔を見て、オレはお揃いの顔で微笑んで言うと、ロウの手を掴んだ。今度は横に並んで、お互いの顔を見て歩く。元氣になってと願って、ぎゅっと握っていた。

もう片方の手は、あの人のために。

そんなことが頭を過ってまた痛みが少しだけ戻ってくる。でもオレはロウの手を離さない。離したくない。

ロウが離さない限り、ずっと、一緒に歩こう。手を繋いで、オレたちらしい速さで。

どこまでもどこまでも。
限りある時間の中で。

032 馬鹿馬鹿しくて【狼】（前書き）

不器用な彼らの思いはどこへ辿り着けば救われるのか。
彷徨う口ウの第三十二話です。

032 馬鹿馬鹿しくて【狼】

「オレ、シランと話さなきゃ。シランにきかなきゃいけないんだ。
『どうして一人で行っちゃうの？』って」

その言葉を口にする時だけ、シンの朝焼け色の瞳は力強い光を秘めていた。

だからロウは。

「じゃあシランが帰ってきたら起こしてあげるから、ちゃんと休むんだぞ」

って言った。

言った、のに。

ロウは約束を破った。

部屋の四つのベッドは、奥の左手がシラン、その右がシン、シンの手前がロウで使っている。因みにロウの左隣は空いていて、ヨミヤハルがやってくるに使っていた。

昨日はシンが寝付いた後、本を読んでも全く落ち着かず、内容が頭に入って来ないので自分のベッドに腰掛けてぼーっとしていたら、そこへシランが帰ってきたのだ。

シランは部屋に入ると、シンのベッドをちらりと見てからロウに向かって小さな声で「ただいま」と短く言った。ロウは上手く舌が回らなくて「おかあり」、とぼそぼそと返した。

シランは気にした様子もなく、ロウを通り過ぎてシンとシランの

ベッドの間で立ち止まった。荷物をラック前に置くと、シンに目をやった。

その時の顔だ。

今思い出しても　むかつく。

シンの寝顔を覗いたシランは、顔面の筋肉の制御を全部放棄したみたいな、そんなふやけた顔で微笑んだんだ。

叫ぼうかと思った。

怒鳴り付けてやろうかと思った。

シンがいなきゃ、寝てなきゃ、きつと実行しただろう。それほど腹が立った。だって今シンが寝てるのはお前のせいなんだ。シランを捜して、彷徨って、叫んで泣いて、疲れきって。叫べないし泣けなくなっても、まだ叫んでいるような、泣いているような顔で。

それでもたった一人。

観月紫蘭を捜していたんだ。

なのにお前が、そんな顔するのか。

「ずるいよ」

「ん、なん」

音もなく口ウはシランに飛び掛かった。シランは驚きのあまり、いや、単に時間がなかったただけかもしれないが、声も出せずに押し倒された。肩に爪を立て、腹の上に膝を揃え、正座をするようにのしかかった。抑え込んだ。

「なん、だ。何をしているんだ口ウ？」

落ち着き払った、いつも通り過ぎる声音に気持ちを逆撫でられる。真っ黒い瞳は真っ直ぐ過ぎてムナクソ悪くなるから見ない。目から視線を反らすと首が目に入った。キメの細かい、しかし小さな傷が混じる、薄茶と白に近い肌色の斑な肌。

噛み付いてやるのか？

口を突き出す。

牙を剥く。

きつとシンだってシランが居なくなれば気付くはずだ。……どんなに時間がかかろうとも。

「俺を喰うのか、狼^{ロウ}？」

シランのせいでシンは盲目になる。シランが居なければシンは自由だ。囚われる理由はなくなる。

ガブリで、終わる。オワル。
なんて。

「出来るかあ……ばかあ」

だってそんなことしたら、シランが居なくなってしまう。シランが居なくなればシンは支えを失って、崩れてしまう。縛る理由はなくなるだろう。けど、生きる理由までなくなってしまうかもしれない。

それはダメだよ。誰も救われないよ。

口を閉じ、瞳からも首からも逃げるようにコッソ、とシランの胸板に額を押し付けた。

「どうしたんだロウ。何か、あったのか？」

訊くなよ。お前のせいだよ。

聞いてよ。シンを助けてよ。

そう思つのに嘘はないはずなのに、狼の口は勝手に動く。

「シランには、わからないよ……」

貴方が脇目も振らず、ただ突き進む限り。きっとわからない、気付かないんだろ。シンの懸命な眼差しに。切なくなるような必死な思いに。

シランは残酷だ。

でもロウは、最低で最悪、なんだぞ……。

「わからない、よ、きっと」

シランの口が開きかかるが、ロウはその前に飛び退き、自分のベツドへと逃げた。布団に潜り込み、耳を塞ぐ。

言いたくないんじゃない。シランに苛ついてるから意地悪したい、嫌な気分させたい、というのはあるかもしれない。

でも違った。

聞きたくないんだ。

優しい声とか、生温い上にズレた台詞とか、シンを大事にしてるってわかってしまう言葉とか。シンの一番はシランで、シランの一番がシンであること、とか。

つまりロウは、ロウが独りであることが浮き彫りになってしまうのが、怖いのだ。

シンが泣いてるのは嫌だし、シランが空回りしてシンを傷付けたら、シラン自身の思いを否定する形になっているのも嫌だった。

でもロウは最悪だ。我が儘でもう何をしたいのかわからない。

誰かの一番になって、大切にしたい。ずっと見ていて欲しい。いなくならないで。ずっとずっと、最後までロウの傍にいてよ。もう独りにしないで。彷徨うのはいやだ、ロウを見て、好きだと言って、一番大切なんだと言って安心させて。どこにも行かないで！

……そう思う癖に、そう願う癖に、心の奥底で叫び続けているの

に。ロウは知っている。微かに漂う記憶の残滓の鎖すら振り解けない、臆病な狼は知っている。

きつと誰かの一番になったら、ロウは逃げるんだろつなということ。

また失うのが怖いから。

だからこれは最悪の我が儘だ。

そしてロウは最低だ。シンとの約束を破った。シランに八つ当たりをした。仲立ちになるべきなのに、放棄した。

三人一緒にいるのが居心地良くて、ずっと居たい癖に。二人が見ているのがロウじゃないからとふて腐れて、ひねくれたことしか出来ない。

最っ低だよ、ロウ。

ごめんなさい、なんて、おこがましいよね。

ロウは布団を被って丸くなって、いつの間にか眠りに就いていた。シランは何か言おうとしていたはずなのに、ロウを起こすことはなかった。

そんな優しさ、いらないのに。

それが昨日のこと。

今日は滞在四日目。

シランはいなかった。

シンは泣きそうな顔で、小さく微笑んで「おはよう」と言ったんだ。

ああ！ ロウの馬鹿！

お前のせいじゃない！

……ロウのせい、じゃないかあ。

シランはシンに助けを求めるべきなんだ。

それがシランの助けになるし、シンの支えになる。それをわかってないシランが巻き込むわけには行かないとか思っただけで動くから、シンが泣いて捜し回る。

そんな馬鹿馬鹿しくすらある悪循環。

シランは本当にわかってないし、シンは不器用すぎる。と言うか二人共不器用過ぎるよ、本当に。なんで少しの付き合いしかない口ウがこんなにわかって心配してるんだ。

しかも多分ヨミもわかってる。わかってないのは当事者二人。

あほか、って話だ。

どんだけ一直線ばかなんだ。

そんなことをロウがうだうだ考えていると、ある呟きが耳に飛び込んできた。

「シラン、何してるのかな……」

朝食のため食堂へ向かう道中だ。ポツリとシンが呟いた。何故か手を繋がれているのでシンが保護者みたいだが、どっちもどちな心境なので、客観的に見てどう思われるのかは少し気になるところじゃなくて。

ロウは変な、明後日な方向へ流れていく思考を止めるように頭を振ってからシンを見上げた。何だかぼんやりしている。瞼がゆっくり落ちて、ゆっくり上がった。瞬きすら億劫そうである。

シラン、か。

シンの頭の中にはそれしかないんじゃないかとさえ思う。溢れそうなため息を飲み下し、答えを探す。

「……多分、探してるんだぞ」

「何を？」

「希望」

「へ？」

「つまり、ここから出ていく手立て。シランはシンを早く家に帰してあげたいんだぞ……ばかだから、それしか考えて、ないんだぞ……」

ちよつとは周り見ろよ、とか、あほでばかで猪突猛進なんて表現をしたら猪に失礼なくらいの愚か者だぞ、とか。もごもごと口の中で文句を転がす。

小さな笑い声がして顔を上げると、シンがおかしそうに口元を緩めていた。

「何かおかしいか？」

「いやさ、むくれるロウが面白かっただけっ」

くふふ、と堪えられない笑いが溢れる。むくれるって……ロウは普通に怒ってるんだぞ？　むくれるって、なんかちがくないか？

「ほら、ほつぺた膨れてる」

「これはシンの表現が不適切で不満だからだぞ！」

しかし今一伝わっていないのか、ロウの言葉に首を傾げるシン。まったく。わかってない。シランとずっと暮らしてたせいだ。空気読めない病だっ。

「まあ、いいや」

「何が！」

「いや、ちよつとだけ……元氣そうに見えるから」

……むう。

頬を搔いて、照れ笑いのような顔をするシン。やっぱりシラン似だ。もしかしたらシンにシランが似た可能性もあるけど。

ずるい顔。

不満とか悲しいとか嫌だとか馬鹿シランとか。どうでも良くなっちゃうじゃないか。

「なあ、シンは良いのか？ 放蕩馬鹿シランが、どっか行っちゃってても」

「よくは、ないよ」

寂しそくに目を伏せて、でもどこかに優しさを秘めた横顔。口は緩く引き結ばれていて、朝焼けのような瞳はほんのりと輝くように瞬いた。

「でも、今度シランに会った時にちゃんと訊くって決めたから、いい。それに」

一転して大きく見開いた赤銅色の瞳は、太陽が溢れてもおかしくなくくらい力強い温かな光に満ちて。

ロウに向けられていた。

「ロウが独りなのも、だめだよ。だから、いい。ちょっとだけ、ガマンする。オレはロウの傍にいるよ」

救われたみたいに、思った。

目ん玉が転がり落ちそうなくらい不意打ちで、驚いた。そして感心した。

強くなる、って言った。

泣くけど弱さで泣かない、て言った。

ああ凄い。そして思う。ああ、強いな、って。本当だ。本当に言

った通りだ。シンは全然弱くなんてなかったよ。
シンには、ちゃんと強さがあつたよ。

「はは、ごめんな」

「な、なにが？」

「ガマンする、じゃなくて、へっちゃらだーって言えばいいのに、
カッコ悪いなオレ」

あは、はは、と空笑いをするシンの手をグイッと引っ張った。口
ウは真剣な顔で大真面目に叫んだ。

「そんなことないぞ！」

シンがまた違う意味で目を見開いた。真ん丸なシンの瞳は本当に
太陽みたいで綺麗だなとかいう考えが頭を過る。

「シンは凄い！ 胸張って大丈夫だぞ！ ロウ、嬉しかった、ほん
とに、ほんとに！ ありがとう！」

「お、おう」

どうもやっぱりわかってない感じがするが、いい。これでいいよ。
確かに救われたから。

「シランもちよつとは気付いてくれたらいいのに」

そんなことをぼやくとシンは乾いた笑いの後、仕方ない、と言っ
た。そんな諦めがロウは嫌だった。でも、シンほどシランを尊重し
たいと願う人はいないだろう。

隣に居て欲しいと切望するのも、シンだけ、だろうけど。
ばかだな、シランは。

それと同時に。
ほとんどばかだ、シンは。
そうも思う。

客室から出て、長い長い曲がりくねった廊下に階段を進んだ。灰色の無機質な壁はコンクリートだろう。床は何か違うツルツルとした素材が板状に敷き詰められている。壁には時折案内の札がかかっている以外、扉が点々とあるだけだった。

ロウ達はそんな殺風景で、コツコツと二人の靴音が響き渡る廊下を黙々と歩いていった。この辺りはあまり使われていないのか、往来はほとんど皆無だ。客以外には使われないのではないかと思う程。だから、ある意味必然だったかもしれない。ここを通る人が限定されるなら、数少ない鉢合わせする可能性のある人間は限られる。でもすれ違うことすら稀だと、思っていたのに。

「あ」

角を曲がると。

「シ」

ランがいた。心構えが出来てないというような顔をしたシンは。

最悪なことに。

「ラ……」

背を向けた。

「あ」と、微かな声があった気がする。違う。もっと確かに聞こえた別の音がある。それは。

「う、あ、あ……」

何か大事なものが崩れ墜ちる音。

「あんで、な、で……や、いあ」

意味を為さない音が口から流れ出る。それを止める術をロウは知らず、持ち合わせていない。

手が離された。

シンはしゃがみこんだ。何かを堪えるように、ぎゅっと押し込めるように頭を抱えて。

「シイイイイラアアアンツ！」

何かが破裂した。

腹の底から、心の奥底の方から響く声。気が付いたらロウは叫んで走り出していた。

我慢ならなかった。

どうしてシンのことを一ミリもわかってくれないのか。ナノでもマイクロでもいい。何でも良いから。

ちよっとは気付いてよ！

「はいストップ」

「ぐえっ」

飛び掛かろうとした首、襟首を掴まれ、ロウは床に引き摺り降ろされた。意識は一瞬だけ吹っ飛び、次の瞬間は天井がよく見えた。はい？

「一体何をやっているのですか？ よりにもよってシン君の目の前でなんて、浅慮とは思いませんか？」

そう言われて見れば、シンは殺気に気付いたからだろう。口を止めた人の後ろで、駆け出そうとしたような中途半端な体勢で固まっていた。

でもどちらかというと、今見てしまった信じがたい出来事に固まっているように見えるが。

「だ、だからってヨミ、何も首締めなくなっていていいじゃないか」

引き吊った声で抗議をするが、首を締めた当人、今現在も口ウの襟首をしっかりと握ったヨミはにっこり笑ってさらりと抗議の言葉を流した。代わりに口にした言葉は向こうにいる人へだ。

「シランさんどこ行こうとしているのですか？ シン君も口ウ君もここにいますよ？」

シランは気まずそうな顔で振り返った。口を開こうとして失敗し、もごもご何か言うように口を動かすが、声にはならない。ヨミは腰に手を当て、全くもう、という顔をしている。

「逃げるのですか？」

「ちがう」

「じゃあこちらに来てください」

「……だめだ」

「何故ですか？」

シランは俯く。

ヨミは静かに待つ。

ロウは体を素早く捻り、ヨミの拘束を外すと飛び起きた。首が締まったのなんてほんの一瞬。何の問題もない。だから早速思いつき
り息を吸い込んだ。

「ばつつつかじゃないのー！」

全ての空気を吐き出すように叫ぶ。頭にカァーッと血が昇る感覚に襲われるが、気にしない。周りの視線ももちろんだった。

「勝手にしよいこんでっ！ 勝手に暴走してっ！ 勝手にだめだと
か決め付けて！」

一つ怒鳴っては一步踏み出す。一つ叫んではは一步踏み出す。
情けない顔のシランにドシン、ドシン、と大腿で歩み寄った。そ
して顔を近付けて真正面から怒鳴り付けた。

「ばかじゃないか！」

「ばかとは、なんだ……」

「そのままの意味だぞばかあほシラン！」

憤懣やるたかなロウは肩を怒らせ、シランを睨み上げる。

気に入らないな。なんで怒ってるロウが見上げなきゃなんないん
だ？

「えいつ」

「ぬあっ！？」

足払いで油断していたシランをすっ転ばす。尻餅をついたシラン
をロウは悠々と見下ろして、人差し指をピシッ、と突き付けた。

「謝れ」

「……」

「シンに謝れ！ シンがどんな思いでお前を待っていると思っているんだ！」

「それ、は……」

浮かんだのは困惑。どういう意味だと訊きたげな視線。

ロウは愕然とした。

違う。ロウが欲しかったのはそんなんじゃない。申し訳なさそうで、眉根が高く上げられた、情けない顔だ。謝るのが下手くそな、でも馬鹿正直で隠し事が苦手なシランだ。なのに。

「本当に、わからないって、言うのかあ？」

やめろよ。わからないんだ、教えてくれみたいな、曇りない夜色の瞳を、見せるな。

泣きそうだよ。

泣いちゃうぞ、って脅したくなる。でもシランは既に困った顔をしていた。わかってないんだ。本当にわからないんだ。

シンの悲しみも。

ロウのやるせなさも。

「……どうしてシランは、頼らないし相談しないの……どうしてわかってとしない……どうして」

シンを見ようとしないのさ。

「もう知らない……」

何か言いたげなシランに背を向けた。肩を大きく揺らし、歩く。
シンの手を強引に掴むと更に歩いた。

「待つて……きくんだ……」

背中に投げ掛けられた台詞に、昨日の、意志の込められた朝焼け色を思い出して、直ぐに打ち消した。他ならないあの真っ黒い愚直な瞳が、打ち碎いたんだ。

「今のシランに訊いて、何か変わるのか？」

シンの手をぐいぐいと引き続ける。足は止めない。シンは足を止めようとするが、直ぐに引つ張られてたたらを踏む。

ほら。シンだって信じられないんだ、シランを。シンなら簡単に振りほどけるのに、何もしない。結局はされるがままだ。

シランはだめだ。

シランは応えない。

ロウはぎゅっとシンの手を強く握った。シンまでもがシランを信じられないなら、もういいよな。

もう、シンはロウが連れてく。

シランはいらない。

「必要ない」

あんな、揺らいだ夜色の瞳は、ロウ達にはいらなんだぞ……。

033 貴女の笑顔が【黄泉】（前書き）

初めての友達。

優しくて強くて面白くて温かくてかつこいい、でも弱くてお人好しな人。

だから直ぐに大好きになってしまいました。

不穏な雲行きの中、笑い合う二人に和めたらいいなー、な第三十三話。

033 貴女の笑顔が【黄泉】

「ということがあったんですよ」

「いやー、なかなかに纏^{もっ}れてんなー。シランも鈍い鈍い。ひひひ」
「笑い事じゃありませんよお」

カラカラと笑うハルさんに、私は膨れた。

ここは食堂だ。私達は建物の外に出るのを禁じられているため、ここで食事を貰うしかない。部屋で食べても良いが、運ぶには遠いし、一人部屋だから寂しいし隣の部屋は……あんな状態だし。

でも元々大抵ここでいろんな人と話しながらこの数日は食事を摂っていた。情報収集と力になってくれそうな味方集めが目的だ。それなりにここの状況はわかったつもりだが……わからないこともある。それを知りたいがハルさんに訊くのも……ちょっと躊躇してしまふ。それに何だかそれどころではない状況になってしまったし……。

私は力なく食堂のテーブルに突っ伏す。するとハルさんが小さく首を傾けた。

「なんや、そないに困つとるんか？」

「そうですね。このままじゃシランさん達が帰られたとしても、崩壊しちゃいます」

「家庭崩壊やなあ」

「ですよー」

はあ、とため息を吐くと、ハルさんがにゅつと首を伸ばして下から私の顔を覗き込んできた。ふわりと前髪がひっくり返る。

「なんですか？」

前髪を戻してあげながら、太い眉だなあ、とぼんやり思う。茶色がかった色だからあまり気にならないし、それはハルさんぽい気がした。そんな眉をひそめたハルさんが、心配そうな目で私を見上げる。

「疲れとるみたいやん。ちゃんと寝とる？」

「寝てますよ、しつかり七時間」

「ああ、ほなら大丈夫やな。でもなんか手伝えることあつたらちゃんと云うんやで？」

歯を見せた底抜けの笑顔。何だかほつとした。

気が付けば周りにはぐらぐらのぼろぼろになっていて、でも彼らなら大丈夫だろうと小さな手助けしかないでいたら、どんどん暗雲垂れ込めるムードになってきてしまった。

私のせいじゃないけれど。

私のせいだよな、って思う。

とうとうロウ君まで放り出してしまったし、どうしていいのやらと途方に暮れている状況だ。まあ、無理もないだろう。多分、ロウ君も私と同じようなイメージをシランさんに持っていただろうから、でもきつと、私よりも前から一緒にいたロウ君の方がショックが大きかったのだろうなとも思う。

シランさんはただひたすら前を見て、突き進む人だ。そしてその方向は、彼が信じる正義に向いている。お人好しとか、馬鹿みたいに見えるようなことも、自分を曲げられないから、自分が正しいと思う信念のまま突き進むのだ。

だから信じられると思った。

親しい人にしか関心がない癖に、困っている人、苦しんでいる人はほっとけなくて。大切な人に良かれと思うことをいつも考えて、行動する。不器用で上手く行かなくても、思いは確かに伝わる。ど

んなに真っ直ぐ進んでも、彼ならどこに居ても大切だという気持ちは忘れない。

そんな愚直だけど温かさのある彼の道には人が集まってくる。それはそんな彼の信念が好きだから。生き様が好ましいからだ。なのに。

今のシランさんは周りが見えていない。誰かのためなのに、その誰かが見えていないなんて。ほったらかすなんて。

本末転倒じゃないですか、シランさん。

貴方の光に集まった人の中には、貴方が傍にいないと迷子になって泣いてしまう人もいますよ？

「『わかってよ』……ロウ君の気持ち、痛い程わかります」

「シンが可哀想やもん。裏で泣いてるような顔して笑ってんやもん。しかも笑ってんの、素やろな。美智乃やロウんとはちゃうなあ、重いなあ……」

「ロウ君も笑うの得意ですけど滅多にやりませんよ？ 受け流すよな、誤魔化すような本心では笑ってない笑顔は。相当堪えているんだと思います。ちゃんと隠せないくらい」

「やなあ」

ふは、とハルさんまで突っ伏した。長く並べられた食堂のテーブルを横断するように二人は真ん中で顔を見合せ手を伸ばす。

ちよつと届かないな。

そんなことを考えていたら。

「とうっ」

と掛け声と共にハルさんが伸びてきて私の手を握った。完全にテーブルの上に腹這い状態だ。

「ハルさんお行儀が悪いですよ」

と言いながらもつい笑ってしまう。ハルさんも笑うけど、テーブルに腹這いになっているため笑いにくそうだ。そんな自分までおかしかったのか、更に笑ってガタガタテーブルを揺らしていた。私はそつと手を自分の顎の下に引っ込めて枕の代わりにした。

「ハルさんは横着者ですね」

「あはは、そういう性分なんや」

「……ありがとうございます」

私は居住まいを正すと、丁寧に頭を下げた。ハルさんが慌てる。

「ななななんやあ？」

「笑わせたかったんでしよう？ 私を元気づけるために。でも嘘は吐かなくていいですよ」

「嘘？ 嘘やないでヨミ」

「だってハルさんって、案外よく考えて、結論出してからじゃないと動けないタイプでしょう？ だから本当は横着者じゃないんですよ、不器用さんなんです」

「……それ笑いの説明させられる並みに恥ずかしいんやけど」

突っ伏したまま、顔を真っ赤にするハルさんは何だか可愛かった。

「頭なでなでしてもいいですか？」

「この流れで！？ まあ、ええけどお」

「じゃあ失礼して」

私はそつと手を伸ばした。丁寧に慎重に、柔らかいハルさんの髪の上に手を置く。

「ふわふわですね」

「そういう毛質なんや。ほんまぼわわして結ばんと収集つかんし、困った頭なんやあ。……嘘やないで！」

「そうですねー」

優しくゆつくりとハルさんの頭を撫でて微笑んだ。ハルさんはふう、と息を吐き出すと目を閉じた。されるがままなハルさんは何だか犬みたいだった。

「犬好きですか？」

「ほえー？ んー、動物全般が好きやで。特に鳥が好きやけど」

「鳥ですかあ。ハゲタカとかコンドルですか？」

「そうやな、って、どないして猛禽、しかもごついのはつか並べるんや！？ うちがいつとう好きなんはカナリアやで！」

「小鳥、ですか？ ハルさんは可愛いカナリアがお好き……」

「なにその信じられないみたいな反応！ 似合わない、意外ね、みたいないな！ うち女の子！ 一応女子やで！ カナリア好きでもええやないかあ！」

バシバシテーブルを叩いて猛抗議なハルさん。私はにっこり笑った。

「はい。カナリア好きなハルさん、可愛いと思います」

するとまた分かりやすく真っ赤になるハルさん。あまり耐性が無い模様だ。

「そんな直ぐに顔が赤くなってしまうハルさんとっても可愛いですよ」

「お世辞はやめてえなあ」

「お世辞は言いませんよ。ハルさんと話してるととてもとても楽しいです。ずっと声を聴いていたいし、顔を見ていたいです。落ち着きます」

「うちにそないな便利機能、ついてへんで……？」

警戒したような顔で、おどおどしたような変な顔で自分を指すハルさん。

「ハルさんってちょっとシランさんに似てますよね」

「ふえい！？」

一応驚きの声らしい。

目を真ん丸にしたハルさんがまじまじと私を見た。

「似とるか？ 全然似とらんように思うけど」

「そうですか？ 不器用で空回りしやすいところや、自分よりもまず自分にとって大事なものを優先させようとするところ、似てますよ？」

「うああ、不吉やあ」

とハルさんは頭を抱えてうめいた。確かに今のシランさんを見ていると、そして似てるなんて言われたら明日は我が身が、なんてことを考えてしまいそうだ。でも。

「反面教師という言葉もありますよ？ ハルさんはちゃんと手段と目的を混同せず、広い視野を保つよう、気を付ければいいということわかります」

「でもうちも割と一点集中型なんやけど……」

不安そうに人差し指と人差し指をくつつけたり離したりと、何か小さな子供みたいな仕草をしながら上目遣いで私を見るハルさん。だから私は安心させるように笑った。

「大丈夫です。もしハルさんが道を逸れそうになった時は、私が教えますから。遠く離れてしまったら難しいと思いますが、でも今は私がいます」

だから。

「だから大丈夫ですよ」

頭を撫でて、優しく微笑んでそう告げた。まあ私じゃ頼りないでしょうけど、いないよりはマシですよきっと、なんて茶化してみる。ハルさんはへにや、と相好を崩した。何だか無駄な力が全部抜けた、ほっとした顔に見えた。

「マシなんてもんやない。百人力、いや、百万人力や！」

「やっぱりハルさんは笑顔が素敵です」

「ヨミイ！ 脈絡なく誉めんといてえな！ 心臓に悪いわあ」

「そんなに刺激的ですか？」

「うちの心はガラス製やからなっ」

胸を張って、というか海老になって腹這いのまま胸を張る、器用なハルさん。うーん、これも似てるかもしれない。手先とかは器用だけど、対人関係は不器用。……違うかな？

「やっぱりハルさんといると楽しくて癒されますねえ」

「大袈裟やなあ、ヨミは」

ふと思った。

「そう言えばシランさんのことは割とあだ名、ですか？　不思議な呼び方をいろいろしてるみたいですけど、私やシン君には普通ですよ？　どうしてですか？」

「つい。ほら、嫌がる人には意地悪したくならへん？」

「……ハルさん、最低です」

「すまんっ！　でもこれこそ性分なんや！」

「それは……わかる気がします」

「あ、納得された」

ちよつとシヨックだったらしく、テーブルに倒れ伏した。やつぱりハルさんは本当のことを普通の冗談としてはあまり使わないようだ。じゃあ微妙に無自覚だった？　……シランさん、御愁傷様です。

「まあ、ええけどな。あ、あとシランの方が何となく弄りやすいかな。名前もシ・ラ・ン、で三文字やし」

「でもシン君は真太郎君なので六文字、二倍弄りやすいのでは？」

固まった。ハルさんが顔を上げたかと思ったら口をあぐり開けて固まってしまった。

「どうかしました？」

「シンが名前やないの！？」

「フルネームは巽真太郎ですよ、シン君」

「うああああ！」

友達の名前すらちゃんと把握しとらんなんてうち最悪やあああああ、と本気で頭を抱えて苦悩し始めてしまった。私は慌ててフォローの声を挟む。

「シン君は！ シン君はですね、あまり自己紹介が得意ではないよ
うで、シンとしか名乗らないことがよくあるようなので、えと」
「それでもちゃんと訊かんかったうちが悪いんやあああ！」

何だかほつとくと頭でも打ち付けそうな勢いだったので、その顔を両手で挟み込み、こちらに向けさせた。

「ハルさん。今知りました、それで良いじゃないですか。気が済まなければ後でまたちゃんと自己紹介すればいいですよ。だからあんまり自己嫌悪しないでください」

真剣な瞳でハルさんの明るい茶色の瞳を見た。ハルさんは呆けた顔で私を見上げた。

「それでええんかな？」

「それでええんです」

大真面目な顔で繰り返したら、何故かハルさんが吹き出した。

「な、なんで笑うんですかあ」

「だってヨミ、かわええ！ 全く、もう、あは、あはは」

大きく開いた口から大きな笑い声が生み出される。テーブルの上で転げ回るハルさんに、私は苦笑した。

なんだか、和んだ。

ハルさんが笑って、皆も釣られて笑って、それで平和は具現化される。現実になる。

ならそれで良いじゃないか。なんて、思う。
現実的ではないのだろうけど。

「そや！　ずっと言おう思ってたんやけど」
「はい？」

ハルさんはくるりと一転して起き上がるとずりずり膝でテーブルを歩き、私の隣の席に降りてきた。にひひ、と上機嫌な笑顔を向けて口を開く。

「『ハルさん』ってなんつか、他人行儀っぽくあらへん？　なんか可愛く呼んでえな」
「可愛く……例えば？」

首を傾げて問うと、ハルさんはくねくね揺れながら楽しげに答えた。

「そつやなそつやな。ハルっち、ハルハル、ハルルー、さかちゃん　　なんや恥ずかしくなってきたんやけど……」

「恥ずかしくないですよ。可愛いかがよくわかりませんが」

「そつかあ……まあ、とにかくさん付け以外がええな、つう我が儘。仲ようになりたいし、なあ？」

「そうですね、では……」
「ウンウン」

何だか期待の眼差しを受けて、私は発表した。

「ハル……ちゃん、とお呼びしても、よろしいでしょうか？」

「『ハル……ちゃん』ねえ」

「うわあああ、その不自然な間は除いてくださいっ！」

顔がカァーと熱くなる。呼び捨てにしようかと一瞬思ったけど無

理だったので苦し紛れに「ちゃん」を付けてしまった。恥ずかしい。中途半端で情けない、臆病な自分が壮絶に、恥ずかしい。

「じゃあそうしょか」

ハルさんにはにつこり笑って頷いた。

「ハルちゃんね、なんかかわええなあ」

「そう、ですか？」

「今までそんな呼ばれ方されたことあらへんし、新鮮やわ。是非呼んで欲しいな」

嬉しそうに細められた、温かな視線に、私は急に気が引き締まるような気持ちになって、慌てて背筋をぴんと伸ばした。

「は、はい、は、ハルちゃん……さん」

「『さん』は取って!？」

「はい! す、すみません!」

ああ恥ずかしい。何故だろう。年上の方だから、なのか。つい『さん』を付けてしまう。ううつ、と私がうめいているとハルさん、じゃなくてハル、ちゃんがくすりと笑った。

「まあ、頑張つて慣れてえな。待つとるで」

「ううつ、はい……ハル、ちゃん」

「ああもう可愛い過ぎるでヨミ、抱き着いちゃうで?」

締めりのない顔でハルちゃんがにへへと笑う。でもその言葉に急に冷めてしまった。

「抱き着くのは、NGです」

「なんでや〜」

「駄目なものは、駄目なのです。危ないのでハルさ……ちゃんは、駄目なのです。私にはそれに応える術が、ありませんから……」

私は逃げるように下を向いて、突っぱねた。ハルさんの困り顔が見えなくても見える気がした。でもハルさんは苦笑混じりに、柔らかな雰囲気です、でもちよつとおどおどと慎重な感じに言った。

「うち、割と丈夫やから、ちよつと気を付ければ平気やと思うんで？ 簡単にはぺつちゃんこにや、ならへんよ？ まあ、うちも気をつけるし、なあ？」

「あ、お見通し、ですか」

また顔面が沸騰した。さっきよりももっと顔が熱くなる。

私は怖い。自分の瞬間的な怪力が。もしつい力を入れてしまったら？ 卵でも握り潰すように……してしまったら？

私は力の調節が苦手だ。何故なら普段はそんなに力が強くないのだ。本気を出さなければ、多分シランさん並みに弱い。でも、本気を出せば多分ロウ君にも勝てる。純粋な力比べで。

瞬間瞬間に出せる力の上限が半端ないのだ。だから私は気を付けなくてはいけない。身近な人を傷けないように。

人が怖い理由の一つがこれでもある。人は弱くて柔^{やわ}だ。近くににいることすら怖い。

はずなのに、なんでだろう。さっきなんて頭を撫でてしまった。自然に出た欲求で、とても自然な行動に思えた。その後も顔を両手で挟んで、いやでもあれはハルさんが頭を打ち付けたりしないようにと必死で、つい……。

だめだ。ハルさんに対しての防衛線、ぼろぼろだ。きっとハルさんが……近いからだ。

「ハルさんって、確信犯だったんですね」

割とよく近付いてくる。正直いつも……怖かった。なのに数日で馴染んでしまったらしい。自分から手を伸ばしてしまうくらい。

「う、すまん。でも、ほつとくとヨミってどんどん逃げよるから、近づこうとせえへんと、ダメやる?」

まさしくその通り。

私は大切に思うほど適度な距離を測る。物理的に、精神的にも。そのはずだった。

「……そうですね。すみません。でも、ハルさんも少しは知っているでしょう? 私の存在は凶器みたいなものです。そもそも、そういう風に使うための物でしたから」

「凶器やない。ヨミは凶器でもバケモンでもない。道具でももちろんあらへんのや」

ちゃんと私の言葉を最後まで聞いてから言ってくれた台詞は、噛み締めるようで、丁寧に認められた手紙のよう^{したた}で。

「だからもう言わんでえな。悲しいやないの。切ないやないの……」「すみません……ありがとうございます。つい、言ってしまうんです。嘘を吐きたくない人に対しては、思ったまま、言ってしまうんです」

嬉しかったから、私もちゃんと答える。不安そうに私を覗き込むハルさんの視線を受け止めるように、胸に手を当て、目を閉じた。

「簡単には考え方は変わらないと思います。でも、変わりたいとも、思っています。だから」

目を開ける。明るい茶色の大きな瞳を真っ直ぐに見た。

「私の変化をゆっくり、見守ってくださいると、嬉しいです。悲しませるようなことを出来るだけ言わなくて済む、強い人に少しずつなりますから。だからこれからも」

恐る恐る。情けないくらい震える手で、ハルさんの、ハルちゃんの手を握った。割れ物を扱うようにそっと、怖くてほとんど力を入れられなかったけど、温かさが伝わる手を取って口を動かす。

「友達になつていてください」

「当たり前やないの」

ハルちゃんは唇を緩く笑みの形にして、目元を和ませた。

「それに変な言い方やな。『友達でいよう』でええやん。それに友達はずっと友達や。友達やーめた言ってもな、そう簡単に消えたりせえへん。脆いかもしれんけどな、繋がった縁はきつと見えへんとかで繋がってる。だから『なつていて』なんて、言わんでええよ」

力強く握り返してくれたハルちゃんの手が、何かを補ってくれている気がして、ほっとした。

「ハル、ちゃん」

明日も明後日も。いつか、ずっとずっと遠い未来の日も。そんな笑顔が、私を癒すでしょう。そんな笑顔が、私の支えとな

るでしょう。

「ありがとう」

「おう！」

向日葵のような、あなたの温かな笑顔が。

033 貴女の笑顔が【黄泉】（後書き）

久々に『蒼天の真竜』のことを考えたら予定がまた変わってしまいました。ちよつと順番やらが替わっただけですがね。この方が三章の前半終了、って感じになりそうだったので。次で三章前編が終わり、後半戦スタートになります。てか一気に話が進む、かな？ その勢いのまま四章に突撃し、終幕、の予定です。まだ長いなー。話が進むと言っても更新スピードはきつと変わらないでしょう、すみませんorz 展開的に勢いが出るかなって意味です。終幕に向かってガンガン行きますよー。

さて次話は……ちよつと部屋の片付けしたいのと、合宿のためと落とす予定の科目拾いのための勉強（ ）のために、恐らく9月後半になる予定です。まあ息抜きとか行つて更新する可能性もなきにしもあらず。まあ書けたつちや書けたので直せば更新出来ますが……出来ればパソコンで確認してから更新したいんですね。たまにルビが変なことになるので。とにかくお待ちください。

それから漸くWeb拍手のお礼短編を更新しました。今回は口ウの昔話と夏。はいもう終わりますね夏。でも私の夏休みはこれからなんですよ（ノ T T） まあ9月になったらまた考えて変えますよ。押してくれる方滅多にいませんがね……コメントくださると大変嬉しいです。ありがとうございます！ 一応コメントに対するお礼文も短編と一緒にちよつと変わつてるので（後書き的なもの）、くだらないコメントでも良いので気が向いたら見てみてください。こちらの文章も適当ですがね

では次回更新でお会いしましょう。

2011.8.25（木）10:37 電車で揺られながら

P・S・

この後書きは更新の度に消しているのですが、ブログに残しています。そしてここに書きづらかったりする裏話やどうでもいい話をぶつぶつ言ったりするのでHPからブログに行ってみても面白い、かも？ 汚い絵もあるよー

034 ただそれだけを願って【陽】（前書き）

三章前半戦がこれにて終了します。
ハルの思いを詰め込んだ三十四話です。

034 ただそれだけを願って【陽】

『大丈夫です。もしハルさんが道を逸れそうになった時は、私が教えますから。遠く離れてしまったら難しいと思いますが、でも今は私がいいます』

ああ。

『だから大丈夫ですよ』

うちが言った言葉や。

美智乃に、うちが……。

懐かしい記憶はいつも鮮やかな緑の翼と共に　。

「本当について来るつもりなの？」

九年前。

短く切ってしまった髪をなびかせ、振り返る美智乃。凜とした表情になかなかそのショートは似合っていた。切ったと聞いた時はショックだったが……結構、いやかなり似合つとるなあ。

そんなことを考えていたら酷く嫌そうな顔をされた。

「私は真面目に話しているつもりよ。……その顔やめなさい」

「だあって美智乃の可愛さがもう尋常じゃないんやもん。にやけるしかないやん！ ああこれがギャップ萌えつつうやつかいな」

「だらしないし、気持ち悪いわストーリーカー」

「ちやうちやう、ボディーガードやボディーガード！」

どうしてもニヤニヤしてしまううちに嫌気が差したらしく背を向けられてしまった。でも髪が短くなって見えるようになったうなじがたまらなく、とか考えてたら何故か振り向き様に殴られた。

「なんでや!？」

「……変質的な視線を感じたわ」

「変質的やない! まっとうな性癖、あるいは趣味による視線や!」
「……変態ね」

「別にええやないか減るもんでもあらへんし」

「汚されるわ」

「汚れへんわ! むしろ浄化してみせる!」

「……はあ。バイバイ」

「せやからうちも行くつてば!」

慌てて美智乃をとおせんぼするように前に立つと、美智乃はくすり笑った。

「変な顔ね。さっきよりは一千倍くらいマシだわ」

「うちどんだけ変な顔やったの!？」

「そうね、まさに犯罪を犯している真つ最中の犯罪者の顔だったわ」
「うち犯罪者!？」

ガーンとショックを受けていたらまた笑われた。

「冗談。娘をイヤらしい目で見る父親くらいよ」

「十分最低やん!？」

「これで懲りたらもうだらしのない顔はしないで。出来ないなら連れて行けないわ」

「んなアホな！」

美智乃を見てデレデレしないなんて難しい……丸一日動くなと言われる倍くらい難しいでえ……命題かもしれへんぞ。でも……うちは行かなあかんのや。

美智乃の爺ちゃんが四日前に倒れた。

その翌日、爺ちゃんの遣いの人に来て、万が一の時に渡せと言われていたという手紙を置いていった。中身は簡潔で、要する必要もなく、自分の居ない間の新日本政府を頼むというもの。

美智乃の爺ちゃんは新日本政府の総司令官だ。同封されていたのは美智乃への総司令官代理の辞令書だった。

美智乃は全く迷わなかった。うちも迷わなかった。だって約束していたから。ずっとずっと昔から。

「そうやな。頑張るわうち。だから連れてってや、美智乃。美智乃は約束破ったりせえへんやろ？」

「貴女が一方的に押し付けたようなものじゃない」

「イシシ、そうやったつけ？ まあええやないの。護衛がおった方が気が楽やろ？ うち約束守るで！」

「約束、ね……」

「そうや。うちが美智乃の代わりにズバーって突っ込んでって、ザッパーンとビュンビュンボコボコやりまくってな、それで美智乃がやりたいのはこういうことなんやー！ って皆に伝えるんや。皆守るんや！ な！」

にひひ、と笑うと何故か美智乃にため息を吐かれた。な、なんでや？

「変わらないわね……流石にの擬音語連呼からは卒業しなさいよ。

四年も前のをそのまま言わなくても……」

「あれ、五年前やなかったつけ？ ……まあとにかく昔やな、昔」

「まあ貴女も大分マシにはなったわ。あの時は連れていくなんて考

えられなかったし。不眠症の人なんて連れていけないと思ったわ」

昔のことをほじくり返されて顔が真っ赤になる。あれは人生最大の汚点やわぁ……あれや。まさに若気の至り。結果オーライっちゃオーライなんやけどなぁ。

「もう無理はせえへんからさぁ……その話題は出さんといてえな」

「貴女の行い次第かしらね」

「そんなぁ……」

クスクスと笑う美智乃が楽しそうなのはいいが、軽くトラウマを掘り返されて、うちは傷心ですよ？

しかし直ぐに笑いを引つ込めると、美智乃は意味深な笑みを浮かべた。

「でもそうね、そうなんでしょうね……」

「へ？」

「きつと私独りで挑んでも無駄ってことよ」

「そんなことあらへんやろ。美智乃やし、それに孫娘やしな」

「でも祖父の人望で集まった人は多い。そこに孫娘つてだけの私が行って納得してくれるのは極一部よ。まずは信用を得なければならぬ」

「美智乃になるより『うちがなつた方がマシ！』って思うやつが居るかもしれないってことか？」

「居るでしょうね当然」

薄く笑みを浮かべる美智乃にちよつと釈然としないものを感じた。まあ美智乃らしいっちゃ美智乃らしいが……。

「そんなケンカしに行く訳やないんだし、そう構えんでもええやん。

な？」

すると美智乃は仕方ないとばかりにため息を吐いた。しかしどこか楽しげで嬉しそうに見える。うちが首を傾げると更に笑みが深まった。

「なんやなんや？」

「やっぱり私だけ行ってもダメね、って思っただけよ。ケンカはしないわ。大丈夫だから情けない顔もしない」

「えー、そないに情けない顔になっとる？」

顔をぺたぺたと触って確認をしていたら、美智乃に眉間を押された。

「ひゃあ」

とたたらを踏むうちに、また笑い出した美智乃が諭すように言う。

「眉はピンと元気良く跳ねさせてなさいな。こんな風に落としちゃダメよ」

「ふえーい」

「返事は伸ばさない」

「イエスッ、ママ！」

「日本語で」

「はいっす！」

「……まったく。相変わらずね、貴女は」

困っちゃうわ、と言いながらも楽しそうに柔らかく笑んでいるのを見て、うちはほっとする。

やっぱり笑っていて欲しい。怒ったり、困ったり、はにかんだり、

呆れたり、泣いたり、疲れたり、照れたり、しかめたり。そんなた
くさんの表情は大事だ。でも最後には笑っていて欲しい。辛いこと
があっても最後に嘘なく笑えるのが、一番のハッピーだとうちは思
っている。

でもやっぱり笑っていて欲しい。大切な人は尚更、ずっと笑って
いて、笑顔でいて欲しいんや。これはうちの我が儘やけど……うち
はそう在って欲しい。

美智乃に笑っていて欲しいよ。

「貴女が本気で着いてくるつもりなら、言っておかなければならな
いことがあるわ。貴女には知っていて欲しいの」

しかしちよつとだけ笑顔が陰る。心の中では気になって気になっ
てしょうがなく眉を潜めたいくらいだけど、うちまでそんな顔を
してたらいつまで経っても美智乃は笑顔になれないから。

だからうちは笑顔で応える。

「当たり前やろ！　うちは本気や！　なんや、何でも聞くで？」

「ありがと……あのね」

美智乃は空を見上げた。釣られてうちも顔を上げる。けれど黄昏
時の空は曇っていて。

「何にも見えないわね」

「そつやな……って、何が言いたいんや！？」

あんまりにも普通の調子で言われたのでついツツコンでしまった。
美智乃はおかしそうにクスクス笑っているが意味がわからない。う
ちがクエスチョンマークだらけになっていると美智乃がごめんなさ
いと言うとすつ、と腕を伸ばし、あるものを指差した。それは。

「夕陽？」

「太陽よ」

「まあ、そつやけど……えーと」

困惑顔で美智乃を見ると、うつすら微笑んで彼女は答えた。どこか寂しげに。

「例えるなら貴女は『太陽』なの」

「……まあうち、陽はるやしなあ」

「名前は関係ないわ。ただ貴女が太陽のようだというだけ。そして私はね」

今度は空に腕を伸ばし、ピンと人差し指を立てた。例えるなら、つて話なんだよな。なら……。

「北極星とか？」

「私はそんな人を導けるような、どんな人でも道を指し示してあげられるような大層な人間じゃないわ」

澄んだ声、淀みない答え。けれど何だか寂しく思った。

誰も迷子にならないように。勉強した人もしてない人も。得意なことがある人もない人も。どんな人でも。ちゃんと導ける人に私はなりたいの。そのためにたくさんの本を読んで勉強しなければなら
ないのよ。

そう言った美智乃を見て、うちは本で読んだ北極星みたいだと思
ったんや。だけどそれじゃあ。

「前に言ってたこととちやうやんか……」

「人は変わるし成長するわ。昔の発言は自分を知らなかっただけ。」

私が言いたいのはね」

「……うん」

「私は月だと言うことよ」

うちにはその答えは意外で、目をぱくりさせた。……月なあ。

「どういう意味や」

「月はね、太陽の光を反射してるだけなのよ。ただ、それだけのこと」

見えない月を探すように空を見詰める美智乃はそんなことを言った。どういう意味なんや？ と再度首を傾げる。

月はいつも雲に隠れている。在ることは知っているし、滅多にながが雲の切れ間から見えたりする。しかしそうして知る月のイメージは儚い。うつすらと白く光っていたり、鈍い金色に輝いていたりするが、やはり薄い雲越しなのでぼんやりとしか見えず、何だかあやふやで不安定なもの、という感じた。探さなければ見付からないような、弱々しく儚いもの。

それが美智乃やって？

なんか……ちゃう。んー。

「なんやようわからんからうちなりな解釈で言うとな」

「え？」

答えとか意見なんて期待していなかった、みたいな驚きの顔で見られてちよつとショック。しかし確かにあれだけじゃわからないし、もう説明する気配がない。だから勝手解釈で言いたいことを言うまです。

開き直ると少し軽くなる。自然とニシシと笑っていた。

「月だろぅが太陽だろぅが北極星だろぅが、うちは美智乃を見てるよ。もし隠れて見えなくなってもうてもちゃんと探すからな。だから安心してええで！」

そう、そう解釈したのね。

小さく美智乃が嬉しそうに、どこか満足気に呟いた。それからうちを見て言った。

「……なら、私が間違えないように見ていてくれないかしら」

「おう見てるで。大丈夫。独りだったら不安でも、二人だったら安心やで。美智乃が美智乃らしくなかったらちゃんと教えるから、美智乃は胸張って皆に言いたいこと言いまくるんやで」

大丈夫。

「うちがついてるんやからな！」

「じゃあ……頼らせていただきましょうか」

その時の美智乃のはにかみ顔が最高だったことを記憶の奥の奥に今でも大事にしまっている。
でも。

『貴女には知っていて欲しいの』

そう言った癖にその後はいくら訊いても『月』である理由は答えはくれなかった。その意味を知ったのは入隊して随分経った頃だった。

わかって
理解して欲しくはなかったの、美智乃……？

ぼんやりと明るくなつていく視界を薄く細く、開いているかすら怪しい瞳で見送る。瞼が重い。

「大將さん大將さん。朝のミーティングに遅れちゃいますよ？」

「あう……あと一分」

「本当ですか？　じゃああと一分で実力行使に移りますよ？　良いですか？」

「ういゝ」

明るくなつてくるのが嫌で寝返りを打つ。誰かの悪態が聞こえた気がした。暫しの微睡みの時間。

しかしそれも長くは続かない。

「参りますですよゝ」

空気が一刀両断された。

「うおお！？」

一瞬、殺気でささくれ立った空気に叩き起こされるようにうちは転がった。さつきまで頭があつた場所には薙刀が置かれている。てか振り下ろされている。因みにベッドは無傷だ。何故なら現在、うちが安眠を貪っていたベッドは最早ベッドではなくただの鉄板が敷いてあるだけになっていたから。

特注品なんやって、凄いやろ？　一枚板を抜くだけでただの鉄板の台になるんやで。これなら薙刀を振り下ろしても安心安心ゝ。

って、何の需要があるやあ！

まあ答えはうちを起こすためなんだけどな。ようこんなもん引き

受けてくれたなあ職人はん。そう思った。

まあとにかく今寝惚けていたうちは殺されかけた訳で。

「なあ、もうちつとばかり手加減せえへん？ 今の避けなきゃもろうちの頭が真つ二つコースやったやんけ、ちづちゃん」

「でも大將さん、手加減すると適当にいなしてまた寝ちやうじやないですかあ。仕方ないのです」

ウンウン、と可愛らしく小さい丸っこい顎をコクコク上下させる小柄な女の子がいた。手には物騒な薙刀。身に付けているのは若草色の新日本政府の制服。胸には鳥の紋章のワッペン。右腕には黄色い腕章があり、「第二部隊長補佐官」の文字。柔らかに波打つ明るい栗色の髪の上には、制服と同色のベレー帽がちょこんと乗っていた。

「朝なのですよ。早く支度してください」

腰に手を当て、少し膨れた顔をしてみせる彼女はちづちゃん、五辻千鶴子さん、という。何だか生まれつきの明るい髪色と名前の和風色の強さの食い違いで妙なことになっているが、可愛いから良いと思う。うん。

二十五歳にはとうてい見えない、コンパクトでキュートな彼女をばへー、と見ていたら薙刀を向けられた。

「またわたしがボス様からお怒りを頂いてしまうじゃないですか。しゃきしゃき動いてくださいよ、お願いしますよ大將さん」

「……いつの間にボス『様』と呼ぶようになったんや？」

「大將さんのせいですー」

ちよっと泣きそうに目を潤ませて訴えられる。申し訳なさでいっ

ばいになったのでもぞもぞと動き出した。

毎朝毎朝ミーティングって面倒やなあ、と思いながら欠伸を噛み殺す。でも部隊長なので渋々出る。とことん朝に弱いので大抵遅刻気味だが。

「悪いとは思つとるんやで?」

「態度で示してくださいー」

「ごもつともやなあ」

「も」

怒っているちづちゃん可愛いのでつい顔が緩む。可愛いを愛でるのに年上だとかは関係ないんや。

「デレデレしないでください。はいこれで最後です」

「さんきゅっ」

制服をきっちり纏い、ちづちゃんから受け取った制帽をぽんと頭に置けば終了だ。まあミーティングん時しか被らへんけどな、帽子。

三編みよし、着替えよし、えーと。

「これが今日の資料です。あとこれ、チェックの付いているところが多分今日必要なところですよ。着くまでに軽く目を通してください」

「ありがとうございます」

薄手の冊子二冊を受け取る。有能な部下を持ててうちは幸せやなあ、と思いながら自室を後にした。

そう言えばあの後、ヨミと友達になった後の話だけ。

ヨミはさすが三人に「友達になってください」宣言をした。

多分今まで『友達』というものを知っていても実感のある理解にはなっていなかったのだろう。明確に『友達』という存在が生まれただから、それに近い存在であった三人にも『友達』という自分にとって嬉しい、好きな存在であるという認識に入れたかった。だから、今になっていきなりシンらにも言い出したんだろっなあ、とうちは勝手に解釈した。

それに対する三人の反応はと言うと。

「うん、いいよ」

「えあ、うん！ 喜んで、なんだぞ！」

「得はないが」「損得なんて関係ありません！」「……好きにしろ」

「ありがとうございます！」

なんてやり取りがあった。

続いてうちが「友達になってや！」と三人に突撃すると。

「もちろんだぞ！」

「まあ、怪しいけど悪い人ではなさそうだし……いいよ？」

「……本気か？」

「なんでそないにヨミン時と反応がちゃうの！？ シンだけやかまともに対応してくれてはるの！」

えへへ、と照れたシンが幼げでちょっと可愛かったが、顔立ちからしてまだ幼いはずの口ウはちよつと偉そうで全く可愛くなかった。うろんげにうちを見てきたシランは論外やな。

「シラン！ うちの本気やで！」

ズン、と迫るとシランは仰け反った。これは面白いし少しだけ可愛いがあっていい。しかし直ぐに落ち着きを取り戻すとシランは咳払いをした……なんかシランって若さ足りん感じするな、拳動からして。とにかくシランは咳払いと言った。

「俺と友達になってどうするんだ」

「友達するだけや。仲良うして、助け合って、笑い合う仲になりたいんや！」

「……どうして俺なんだ。ヨミだけで良いじゃないか」

「全員や！」

うちは迷わずピシツと人差し指をシランに突き付けた。てか額にぴったり付けた。

「は？」

「ヨミ、シン、ロウ、シラン！ 全員うちが何とかする！ やから繋がりを作るんや。信用して貰うために必要なんや！」

「……指差すな、くつつけるな」

椅子に座るシランが下から睨んでくる。普段の目付きの悪さと今の不機嫌オーラと相俟ってかなり怖い。

でもシランは払ったりしなかった。じっと待つだけ。

面倒なのかもしれないが、嫌なことは嫌だとはつきり言ってどけそうなものだが何もしない。多分相手が女だからもあるんだろう。でもそれをシランの不器用な優しさだと思った。

「何を笑っている、どけるよな」

「ひひ。やっぱり友達になりたいよ、紫蘭君とはな」

シランは無然とした顔で、もう睨むと言つより呆れたような顔で、半眼を向けていた。

「一応言っておくが……ろくなことにならないと思うが？」
「ろくなこと？」

おうむ返しに訊くと、シランは俯いてモゴモゴと何か言った。相性がどうのこうの、何々だから堪えられる気がしな……とか。それを打ち切るようにバンバンとうちがテーブルを叩くとシランは目を丸くした。

「細かいことはっ、氣にーしーなーいーんーやー！」

グイツと身を乗り出すとシランがまた仰け反るが気にせず迫る。

「問題あったとしても何とかなるもんや。それに下手の考え休むに似たり、つうやん？」

「おい」

「あはは、怒つとるー」

「……はあ」

それでも。

どんなに呆れた顔していても、それでもたくさん考えてくれたんだろう。一瞬の気の迷いなんかで彼は決めないし口にしない。何かを決意して覚悟して。

その答えを口にするんだ。
きつと、そういう人なんだ。

「勝手にしろ」

「じゃあ勝手にさせて貰うな！」

握った白く細い手。握り返す優しい手。

その意味もわからずあの時はとにかく嬉しくてしょうがなく握手したけど、今思えばシランは本気で考えて友達と認めてくれたんだってわかる。

あんたとの繋がりはうちの誇りなんやで、シラン。

だからそれに胸張れるようにうちは頑張らなあかんのや。ヨミにも……呆れられたかあらへんしな。

頑張るよ、うち。

ミーティングは長く険しかった。

「眠かったね」

「眠かったで済まさないください！　て言うかですね、何のために冊子を大将さんに渡したと思っっているのですか？　寝ないでくださいよお！　結局わたしが発言することになってしまったではないですか。情けないです恥ずかしいです……」

おいおいと泣く振りをしてみせてくれるちづちゃん。うちはウンウンと頷いて。

「じゃあ今の言葉をちづちゃんが本気で号泣して言った時は真面目に起きている方法考えようか」

「今！　この瞬間から考えてみてください！」

肩をいからせずんずん歩くちづちゃん。でも身長差が三十センチ

近いので当然歩幅も大差が出来ている。なので普段よりちよつと歩調を上げるだけでちづちゃんには追いついてしまう。それに彼女も気付いたようで、疲れたように肩を落とし、いつもの速さに戻したようだった。

「理不尽なのです」

「そつやなあ、うちの世話をやれって言われたら絶対イヤやもん、うち」

「自分の世話を放棄しないでくださいっ！」

「例えばの話や、例えば。いやあ、ちづちゃんは頑張ってくれてるで？ いつも有り難うな」

「感謝されたくてやっているではありませんー。わたしはわたしのために働いているのです。そしてその仕事がたまたま大將さんなのです。そして割に合うか微妙な、でも中隊長補佐より給与がいいから渋々やっているのですー」

可愛い顔を悪そうに歪ませて、唾でも吐くようにちづちゃんが文句を垂れ流す。

そつなんだよなあ。

何故かうちの周りに寄越される子って、有能だけど何か黒いといつか、何か腹の中に潜んでいるような、癖のある子ばかりなのだ。特に補佐官なんてその筆頭だ。給料が悪かったら寝首でも掻かれ兼ねないような、野良猫みたいな子が多い、気がする。

何だか素直で良い子は秋峰君。ひねくれてるけど仕事は出来る子はうち。淡々と仕事をこなす子は永海^{ながみ}さん。という感じで大雑把に分けられている気がする。

因みに永海さんは三人目の部隊長だ。実働部部隊長内では最古参で、年齢不詳。てか何にも教えてくれず、とにかく美智乃の爺ちゃんが大好きな人だ。崇めていると言つべきか。

中性的な顔立ちに真っ直ぐな黒髪、黒目。腰には観月鐵が鍛えた

「十刀一」^{じゅうとういち}。十本の刀が一本に収束したような重さ、長さ。そこから繰り出される凄まじい斬れ味は最早伝説だ。それもあつてここでは観月鐵がやたら有名で、観月紫蘭召集がある程度支持されている理由である。

でも父は父、息子は息子だと思うがねえ。シランだって生業として成り立っているからには腕は良いのだろうが、父が駄目だから息子だとか、別の人間への期待をその人に押し付けるのはあまり感心しないし、うちは嫌だ。

「話は変わりますが大将さん」

「なんや？」

ちづちゃんに神妙な顔になった。うちはきよとんとしながら促す。

「大将さんはどうするつもりなのですか、ボス様　美智乃さんの対立を」

「別に対立とかケンカする気はあらへんで。……ただ美智乃が全く話を聞いてくれへんのや。報告すらうちには書面だけで良いとか言つて、いつの間にかちづちゃんに報告させて終わらせよつたし。うちと会ってくれないんじゃどうしようもあらへん」

「大将さんがそのつもりでも、周りは黙ってないのですよ。この状況、大将さんが思ってる以上にかなりやばいのです」

「や、やばいつて……？」

視線を彷徨わすうちにため息を吐くちづちゃん。そして当たり前のように言つた。

「だって人気のある大将さんが美智乃さんを熱烈に支持し、その大将さんを上手いタイミングで昇進させて来たからこそこの組織は総司令官代理になつてもなんとか回つていたのです。その二人が仲違

いしたら勿論組織は真つ二つ。下手すると真つ二つどころか美智乃さんの孤立、という形で決着が付き兼ねないので」

「そんなアホなあ」

なんでうちと美智乃が上手く行っていないと組織が成り立たなくなつてまうんや？ おかしいやろ。

そんな呆れ顔をしていたらちづちゃんもまたやれやれと頭を振る。

「大将さんは全く正しく自分を評価出来ていないのでとても困つてしまいます」

「だって部隊長になったのやって、美智乃が勝手にうちを昇進^あげただけやん。うちに何の力があるっていうんや」

「良いですかー」

困惑するうちに呆れきつたちづちゃんが、じとーとした目で見ながらコツコツと床を爪先で叩いた。いつの間にかうちらは立ち止まっていた。

「突然入ってきた子供。でも何故かとんでもなく強くて、入ってきたばかりなのに平気で戦いの最前線に出てくるし、周りにフオローを入れる余裕すらある。普段はアホっぽい陽気で気が利き、ムードメーカー。あなたは直ぐに誰からも信頼され、支持され、好かれる人になりました」

わたしは見てましたから。

そう言うちづちゃんはその頃副班長だろうか。正式には『副班長の役職はないが、大抵の班で決まっている。小隊長を班長が補佐し、班長を副班長と隊員が補佐する、みたいな形だ。ちづちゃんはあまり前線に出るタイプではないから、多分良く見てたんだろうなあと思う。隣の班だったから、同じ任務になる機会も多かったし。

羨望でも嫉妬でもない、真っ直ぐにうちを見る眼差しは何を思っているのだろう。

「そんなあなたが美智乃さんのことばかり話すんです。良いところだけじゃなく悪いところも含めて、楽しそうに散々語ってましたよね。誰もがそんな姿に納得しましたよ、ああこの人は美智乃さんが大好きなんだなあと。だから皆、総司令官（下）の孫が代理になった、という見方だけでなく、須原美智乃という一個人としてちゃんと見てくれたんです。そうでなければ皆は頭ごなしの否定しきしませんでしたよ。そういう空気でしたから」

「なんでや。だって爺ちゃんは人気あつたんやろ？」

「でも所属してなかった十六歳の女がいきなり組織のトップなんて簡単には受け入れられませんよ。しかも実績がありませんから」

「でも美智乃はたまに仕事手伝ってたんや！ それに勉強もぎょうさんやってたんやで！」

「そうなんですか。しかし表にはそういった情報は出てきていません。それは実績がないとイコールです」

「そんな……」

あんなに頑張ってたのに。

遊びもせずにと本ばかり読んでたのに。

好きでも……なかったのに。

「そないなアホなことがあって、ええんかあ？」

頑張つて溜め込んだものを噛み砕いて咀嚼して飲み込んで、それを皆がわかりやすい形にして出す。必要な時、必要な形にして使う。そんな風にして九年の時間を経てきたのに、その頑張りは何一つ報われてないって言うんか？ しかも適当に生きてきた榊原陽なんて人間に負けてまうんか？

……ちやうやろ。

そんな訳あらへんやろ。

なあ、美智乃。

「あなたはわかっていなさ過ぎます」

「違う、皆が間違ってるんや。誤解してるんや……」

「どうしてそこまで頑なに美智乃さんを持ち上げるのですか？ 実は演技だったんですか、あの楽しそうに美智乃さんのことを話す姿は」

冷たい瞳を振り払うように「ちやう！」と叫ぶ。

「ただうちは美智乃を助けたくて、皆に知って欲しくて、美智乃の努力が報われて欲しくて……それで美智乃の願いを叶えてやりたかったんや……」

たくさんの人を守りたいっていう、願いを……。それだけだったのに。

俯き、泣きそうになるのを我慢してギツと握り締めた手を見詰めた。

「……あなたが盲目的に美智乃さんを支持しているだけだったら皆着いて来てませんでした。でもあなたは様々な人と話し、意見を聞き、美智乃にわかってもらってから大丈夫だと笑って、実際にそれを実現して来ました。わかりませんか？ あなたが居なければ回らない歯車なんですよ、美智乃さんという総司令官代理の存在は」

その言葉にハツとする。蘇る美智乃の言葉。

「月はね、太陽の光を反射してるだけなのよ。ただ、それだけのこ

と」

月は太陽の光がなければ地上から見えない、光らない星。いや、衛星。地球が在って、太陽が照らし出して、漸く存在出来るもの。うちが太陽で、美智乃が月。

つまりそういうことだ。美智乃はずっと前からわかっていて。月は太陽がいなければ輝けないと。それをうちに当て嵌められることを。

だから知っていて欲しかった。

「んな訳あるかあああああ！」

ビクツ、とちづちゃんに肩を震わすが、承知出来る訳がない。手加減出来る訳がない。承服なんて、出来るかあ！

「美智乃はずっと好きでもない本とにらめっこばかりしよったんや！ 今も頑張つとるんや！ 美智乃は何とか出来る人や、一人でもきつと皆を守るために頑張った！ 走り回った！ うちが保障するで！ それでも言うんか？ 美智乃は一人じゃ何にも出来ない人間だなんて！」

鼻息荒く、ちづちゃんに詰め寄るとぽかんとした顔で見返されてしまった。

「美智乃は凄いいんや！ うちはまだ美智乃の代わりにやっただけや、うちは手伝っただけー！ はい返事！」

「はい！ って、ええそんな……」

むちゃくちゃ過ぎる、と口の中で呟く気配があったのでギロリと睨むと直ぐに「すみません」と消え入りそうな声でちづちゃんは謝

った。

「わ、わかりました。確かにボス様は凄い人です。それに異論ありませんが……しかし最近の不信感はまだ別じゃないですか？」

「それは……」

言葉に詰まる。

そんなうちを悲しそうな目で見るちづちゃんほぼと続けた。

「わたし達はですね、怖いのです……」

「怖い？」

「……陽さん^{はる}が泣く結末になることが、です」
「ええ？」

ちづちゃんは言いにくそうに俯いていたが、思い切ったように顔を上げると言った。

「陽さんには笑っていて欲しいのです。皆そう思っています。でもだからこそ陽さんを苦しめている美智乃さんが……憎いのです、怨めしいのです」

うちは今度は啞然として言葉が出なかった。なのにちづちゃんは怖い顔をして続けるんだ。見たこともない本気の顔で、うちを見るんだ。

「……もしもあなたが望むなら……わたし達はいつでも待っています、あなたの言葉を」

「何、の……？」

震える声には彼女の強張った声が応える。

「総司令官代理降ろしです」^{ボス}

「そんなこと言う訳！」

「ないんですか？ このまま、納得出来ないまま、ボスの判断に唯々諾々と従うのですか？」

「従うんやない！ けど美智乃を降ろすなんてことうちは言わん！」

「でもあなたが鼻肩している客人、今の美智乃さんでは彼らに何をし出すかわかりませんよ？」

「止める！ 守る！ 今までそうして来たし、これからもそうするまでや」

「……陽さんらしい台詞なのです」

寂しそくに呟くちづちゃんに、何だか切なくなってしまう。

どないしてこんなことになったんや？ いつの間にか、美智乃と話を通じなくなっていた。何かを一心に見詰める瞳に、間違っていると言えなくなってしまった。

約束したのに。

うちの、せいやるか……。

「でもお願いです、陽さん……客人をこれ以上構わないでください。これ以上、対立を深めないでください……」

「せやけど……」

「余所者の好感度なんかを気にする前にこの組織の中を気にしてください。ここにはあなたが必要なんです。美智乃さんと対立しているだけなら良いんですよ。正しい答えを二人が見つけて仲直りすれば、それでハッピーエンドなんです。だけど具体的な対立の要因なんてものがあつたら拗れてどうしようもなくなってしまう」

お願いですからもうこれ以上傷付かないでください、と懇願するちづちゃん。

そんなこと。

「新日本政府が大事ではないのですか？」

そんなことを言われても。

「うちは選ばへん」

「陽さん！」

「いやや！」

「そんな我が儘を言っている間に最悪の事態になってしまっ
よう！」

「嫌なものは嫌なんや、順番やなんてつけたくない！」

「いつ抑えが利かなくなるかわからないんです！ 暴走した彼らの
矛先は必ずボスに向きます！ それで傷付くのは陽さんなんですよ

……？ 嫌なんですよ……でも陽さんが迷う限りわたし達は何も出
来ない。だからもう美智乃さんを消す以外にあなたを助ける方法が
…… 思い付かない」

「助けて欲しいやなんて言つとらんわ！」

「苦しむ陽さんは見たくないんです！」

「そっちこそ我が儘や！」

「そうです我が儘です、でも他にわたし達に何が出来るって言うん
ですか！ わたしはあなたの力になりたいのに！」

必死過ぎる叫びが急に怖くなった。

「なんでや……だってうち仕事せえへん嫌な上司やろ？ なのにと
ないしてそんなこと言うんや……」

脅えたように問ううちに、ちづちゃんの眉尻が下がる。

「あな、たは、本当にバカ、です……」

吐き出すように言った言葉は今にも泣き出しそうだったが、急にガバツと顔を上げると突進された。見事に不意打ちだったせいであちは綺麗に仰向けに転がされた。ちづちゃんのしかかりながら叫ぶ。

「あなたはバカ過ぎます！ 確かにそうです、あなたは上司としては最悪なまでに自由奔放で大人しく仕事なんてしてくれません。でもですね、あなたを一個人として見たら、友人のためにあれだけ奔走する、懸命に語るあなたの背中をずっと見ていたら 嫌いになんてなれるはずがないじゃないですか」

こんなこと言わせないでくださいよ……。

拭っても拭っても尽きない雫に困りながらちづちゃんは震える声で言った。うちは何と言っていていいかわからなかった。

嫌われてもいいから。

美智乃を守ろう。美智乃を助けよう。

そう思って今までやってきたのに。現実とは全く違った、ということなのか？

「なんでや」

嬉しくない訳じゃない。でも……そうするとどうして美智乃が悪役になってまうんや？ ちやうやろ。間違ってるやろ……。

「どないして皆美智乃のこと信じてくれへんのや。うちのことなんてどうだっていい」

「良くないです！ それに信じてない訳じゃないですよ」

涙を拭うのを諦めたちづちゃんは、小さく笑った。楽しそうに苦笑した。

「だって誰よりもあなたが美智乃さんを見限れずにいる。まだあなたは信じている。そんなのわかりますよ。それでもあなたが迷っていることも確かだから……わたし達もどうすべきか迷っています。けれど……あなたはそれでいいんです」

真っ直ぐうちの目を見据えて、ちづちゃん言う。

「皆が美智乃さんに不信感を抱いている今、あなたが対立していることで『何とかしてくれるんじゃないか』という期待が生まれます。だから何とかもっているんです、この組織は。……だからこそ」

「ヨミ達に関わるな、てか？」

「ええ……」

わかった。

カチリと何かが嵌まった気がした。馬乗りになっていたちづちゃんをひよいとどけるとうちは立ち上がった。呆けた顔で正座してうちを見上げるちづちゃん。

「……五辻千鶴子」

「は、はい！」

「何やようわからんけど暴拳に走りそうなうちのこと好いてくれる奴ら、暫く宥めといてや」

「良いですが……どうするつもりなのですか？」

「話つけてくる」

「……短期決戦はあまり勧められませんが」

「でもやらなあかん。うちの大切なもんを守るためには、逃げたらあかんのや……すまん」

今まで逃げてたこと。問題を抱え込ませてしまったこと。頼みを聞いてくれたこと。いろいろな意味を込めた謝罪に、ちづちゃんは笑った。

「あなたが臆病なのは今に始まったことじゃありません。それでも立ち向かうあなたの強さに、皆は憧れ、信頼を寄せ、助けたいって思ってしまうのですよ」

行つてらっしゃい大将さん。
行つてくるで、ちづちゃん。

うちらは背を向け、歩き出した。

ヨミ。

うち、人のこと言えんよな。やっぱりヨミの言つ通りシランにうち、似てるみたいや。

けどな、負けたくないんや。ようわからん大きな流れに吞まれて終わリやなんて赦さない。

きつと満場一致のハッピーエンドにしてやる。

だから。

一緒に戦いに行こうや。

って、言いたかったのに。

不自然に倒れている椅子。

足跡のある袋。

転がっている誰かのおにぎり。

もぬけの殻となった客室。

「ヨ、ミ……？」

まだ始まってすらいなかった物語がキシキシと音を発てて動き始めたのが聴こえたような気がした。

034 ただそれだけを願って【陽】（後書き）

そろそろ前書きが鬱陶しくなってきましたね

次回からはテンポ重視ということで前書きなしで行きます。そして10月はイベントだらけ過ぎて更新できそうにありません。平日は授業で埋まってしまいますし、パソコン開く時間が今以上になくなってしまう。なのでいつそ宣言してしまいます。

次回更新は11月にします！

その間になるべく貯めるつもりです。出来たら。

終りまでの道筋を補強したりもするのでどうかお待ちください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6335j/>

蒼天の真竜

2011年10月6日17時15分発行